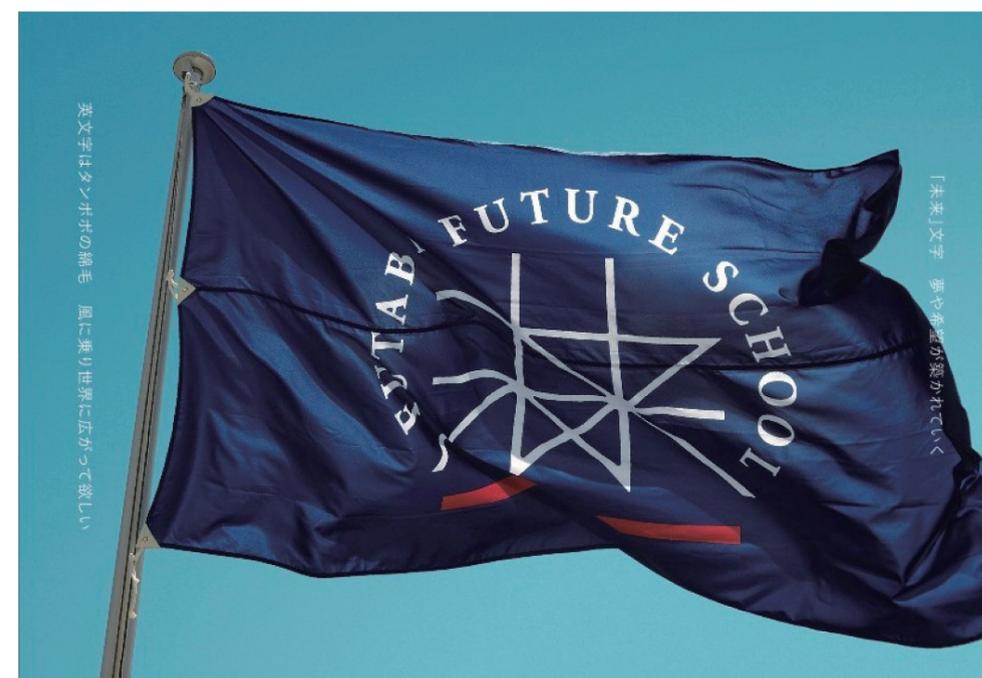


令和2年度指定 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 【グローバル型】 研究開発実施報告書

第2年次



令和2年度指定 地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）研究開発実施報告書 第2年次



福島県立
ふたば未来学園中学校・高等学校

福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
<https://futabamiraigakuen-h.fcs.ed.jp/>

ふたば未来学園中学校・高等学校



巻 頭 言

福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校 校長 柳沼英樹

東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故から11年が過ぎた。この未曾有の複合災害直後の壊滅的とも言える状況に比べれば、私たちを取り巻く環境は、避難指示が徐々に解除されたり、学校が元の場所で再開したり、食べ物を安心して食べることができたり、町にも賑わいが見られるようになっていたり、一步一步着実に復興の歩みを進めているように思える。その一方で、未だにふるさとを離れた生活を余儀なくされている方々が3万人を超える状況であり、双葉郡をはじめ福島で生きる私たちは、否応なく次のような課題に向き合っていかなければならない。

第一に、全国の地域が直面する課題である。双葉郡、福島県では、日本のあらゆる地域が直面している、少子高齢化、過疎化の急激な進行などの課題が、震災と原発事故により先鋭化しており、いわば「課題先進地域」となっている。第二に、原発事故特有の課題である。故郷を汚染され、帰りたくても帰ることができないという現実。長期にわたる避難生活。差別と偏見。コミュニティ内での対立と分断。第三に、以上の課題は、同時にグローバルな課題として私たちの前にある。例えば、2030年に向け国際社会が合意して取り組んでいる『持続可能な開発のための目標』である、「貧困をなくそう」「すべての人に健康と福祉を」「安全な水を」「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」「住み続けられるまちづくり」「海や陸の豊かさを守ろう」「平和と公正をすべての人に」など、これらのグローバルな課題は、この双葉郡、福島県においては、今、目の前にある危機に他ならない。

このような中、私たちは、これまでの価値観、社会のあり方を根本から見直し、持続可能な循環型社会の実現、自立した新たなコミュニティ・まちづくり、再生可能なエネルギー社会の実現など、新しい生き方、社会の建設を目指し、変革を起こしていくことが求められている。

このミッションに応えるチャレンジが、昨年度から文部科学省より「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の指定を受けて取り組んできた研究開発である。これは、本校がSGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定を受け行ってきた研究の成果を分析しつつ、さらに取組を発展させることを目的としている。特に、県・学校・双葉郡8町村・高等教育機関・地域関係者によるコンソーシアム協議会を組織し、様々な意見をいただきながら、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を推進してきた。生徒たちは、コロナ禍の中、人との接触が制限されたり、今までに無かった配慮が求められる状況にあっても、たくましく、前向きに探究を深め、役場や商店、病院、企業などを訪問して出会った、解が見えないような困難な課題を題材とした対話劇を創作し上演することにより、演者や聴衆など、多面的な視点から物事を見つめ、協働性、寛容性などコミュニケーション力や本質をつかむ力を身につけた。

さらに、海外研修に代えて実施した、ブリティッシュヒルズでの合宿研修、留学生向けの双葉郡スタディツアーの企画・実践及びYouth Delegatesとのオンライン対話などを通して、現代の世界が直面している抜き差しならない課題と向き合い、OECD諸国を

はじめとした国々で共通して重要と認められている普遍的な「共通価値」と邂逅し、否応なく、これまでの価値観、社会のあり方を根本から見直し、持続可能な循環型社会の実現に向けた課題意識を深めた。加えて、地域の課題を解決する100を超えるプロジェクトを自分たちの力で立ち上げ、地域の様々な主体と協働しながら実践を積み重ねてきた。

このような、企業、行政、NPO、研究機関など多様な主体との「対話と協働」を通して、生徒たちは、失われた故郷を取り戻し自分たちで新たに創造していこうとする意志、困難な状況にあるからこそ可能なことを構想する力を身につけ、困難を乗り越え、夢に向かって着実に前進している。

これまでの取組を継承するだけでなく、学校と地域がさらに連携を深め、生徒の探究が、学びと地域復興の相乗効果の創出につながるとともに、探究を通じて地域住民主体のウエルビーイング実現を後押しできるよう、今後も取組を推進していきたい。

結びに、私たちの挑戦を支えていただいたすべての方々に深く感謝申し上げるとともに、多くの困難を乗り越えてきた生徒たちと彼らを導いてくれた教職員に敬意を表する。

目 次

巻頭言	
第 1 章	研究開発概要 1
第 2 章	研究開発の内容・活動実績
2.1	地域創造と人間生活（1 年次） 19
2.2	未来創造探究（2 年次） 29
2.3	未来創造探究（3 年次） 44
2.4	海外研修・国内研修 62
2.5	発表・交流 70
2.6	社会起業部の活動 75
第 3 章	カリキュラム・マネジメント
3.1	探究活動の指導方Ⅰ 79
3.2	探究活動の指導方Ⅱ 83
3.3	外部連携 89
3.4	外部連携実績 92
3.5	未来研究会 98
第 4 章	ICT の活用
4.1	経緯 101
4.2	内容 101
4.3	考察 104
4.4	今後の展望 104
第 5 章	実施の効果とその評価
5.1	ルーブリック評価 105
5.2	ルーブリック評価の定量的分析 （アクセンチュア株式会社） 110
5.3	5 期生の個別評価 112
5.4	3 年間を通じた各取組に関する評価 116
5.5	進路や在り方生き方への影響に関する評価 117
5.6	学校アンケートによる評価 118
5.7	設定した目標の達成度 119
第 6 章	研究開発の成果と課題
6.1	研究開発の成果 123
6.2	課題と今後の方向 125
関係資料	資料 1 教育課程表 127
	資料 2 ルーブリック表 129
	資料 3 令和 3 年度 コンソーシアム協議会記録 130
	資料 4 令和 3 年度 グローカル型運営指導委員会記録 132
	資料 5 5 期生未来創造探研究生徒研究発表会テーマ一覧 136
	資料 6 6 期生プレ発表会テーマ一覧 141
	資料 7 その他 報道抜粋 147

第 1 章

研究開発概要

1. 1 研究開発概要（事業構想）

1 教育目標

① 管理機関における教育目標

ふたば未来学園中学校・高等学校は東日本大震災、福島第一原子力発電所の事故を受け、福島県双葉郡に平成 27 年に高等学校、平成 31 年に中学校が開校した。現在、双葉郡では原発の廃炉、地域コミュニティの再生、風評との闘いなど地域を分断する困難な課題が山積している。世界と協働しながらこれからの復興・地方創生を進めていく人材の育成が、この地域にとって喫緊の課題である。このため、グローバルな課題である原子力災害からの復興をテーマとして設定し、地域との協働による地域の課題解決に向けた探究・実践と海外研修を体系的に位置づけたカリキュラムを開発する。

② 学校の教育目標

本校は震災と原発事故により休校となった 5 校の伝統を引き継ぎ開校した。世界が経験したことのない困難な課題に直面した本地域の課題は、極端な少子高齢化や人口減少が進行する未来の全国の地域や、異なる立場や価値観を排斥する世界の分断と重なり合っている。本校は、こうした地域と世界の課題解決に貢献する人材を育成し、全国の学校や地域の変革を牽引する強い決意のもと、「新しい生き方、新しい社会の建設を目指し、地域や社会を舞台にして、これまでの価値観、社会のあり方と根本から見直し、自らを変革し、地域を変革し、社会を変革する『変革者』を育成する。」 【補足 1】

【補足 1】学校概要

東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故は、福島県、特に双葉郡とその近隣市町村に深刻な影響をもたらした。地域住民の避難が長期化するなか、教育環境の整備と震災を踏まえた諸課題に対応できる人材育成のため、「福島県双葉郡教育復興ビジョン」のもと、本校は平成 27 年 4 月に新設された。

本校は、募集停止となった双葉郡内の 5 つの高等学校の歴史と伝統、教育内容や特色を踏まえた幅広い学びを可能とした総合学科高校として、以下の 3 つの系列の科目群を設けている。

◇「アカデミック」系列：大学等上級学校に進学するために必要とされる主要教科を中心とした科目群

◇「トップアスリート」系列： トップアスリートや生涯スポーツ社会のリーダーとして活躍することを目指し、バドミントン、サッカー、野球、レスリングで高度な技術・理論を習得することを目的とした科目群

◇「スペシャリスト」系列：農業、工業、商業、福祉の分野において地域を支える職業人として将来活躍するために必要な知識・技能を習得することを目的とした科目群

本校はふたば未来学園中学校も併設している。中学校は 6 年間を通した最先端のカリキュラムの中で、主体的・対話的で深い学び、グローバル教育、シティズンシップ教育の 3 つを中高一貫教育の柱に掲げ平成 31 年 4 月に開校した。

平成 27 年の開校当初、校舎は、広野町の本校舎、猪苗代町の猪苗代校舎（「トップアスリート」系列バドミントン生徒が在籍）、静岡県三島市の三島長陵校舎（JFA（日本サッカー協会）アカデミー福島生徒が在籍）の 3 つに分かれていた。平成 31 年 4 月に中学校が併設されると同時に広野町に新校舎が完成し、猪苗代校舎は閉鎖となった。現在は本校舎と三島長陵校舎の 2 校舎に生徒が在籍している。

在籍生徒数 (令和 4 年 1 月)	中学 1 年	中学 2 年	中学 3 年	中学 合計	高校 1 年	高校 2 年	高校 3 年	高校 合計
本校舎（広野町）	60	60	57	177	98	125	118	341
三島長陵校舎	-	-	-	-	22	20	20	62

2 構想の目的等

① 構想の目的

「原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成」として、これまで SGH で行ってきた研究成果の分析を生かしつつ発展させ、目的として以下を設定する。【補足 2】

- A 地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、自己の在り方生き方を見出すカリキュラムの開発
- B 原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成
- C 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及

【補足 2】 構想の目的と背景、求める地域人材

本校は平成 27 年の開校と同時にスーパーグローバルハイスクール (SGH) に指定され、「原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成」という構想のもと、これまで 5 年間研究開発を行ってきた。東日本大震災、福島第一原子力発電所事故が起きた地域に立地していることから、原子力災害からの地域復興に関する様々な活動を行ってきた。また通常教科・科目においてはアクティブラーニングの手法を積極的に導入し、グループワークやディスカッションなど生徒の主体的な取組を導入してきた。開校当初から SGH 指定となり、学校文化を作りながら研究開発も同時に進め、これまで以下のような成果が得られた。

- 「総合的な学習の時間」において地域の課題に向き合う活動を行い、課題の発見、課題の解決に向けた取組を学校全体で推進するような学校文化が形成された。
 - 本校の教育活動全体で育成すべき資質能力をまとめたルーブリックを作成し、これに基づいて評価を行うシステムの礎ができた。
 - 海外との連携先として、ドイツ、ニューヨークを選定し、現地の同世代の生徒と交流する場の形成、世界の課題を捉える取組づくりをすることができた。
- 一方で、以下の点が課題として明らかになってきた。
- 「総合的な学習の時間」は 2 年生から始まり、探究活動という視点からは 1 年生での取組が手薄となっている。1 年生では、関連する教科・科目として「地域創造と人間生活」を履修している。ここでは学習指導要領に基づき職業観の育成や進路選択等を行い、さらに表現力育成のための演劇等を取り入れているものの、探究的な視点が欠けており、課題があった。
 - 探究活動における教員の指導方法について整理されておらず、教員個人の力量に任される部分が多かった。研究開発校として汎用的な指導法の開発を目指してきたところであるが、現在も道半ばである。
 - 海外研修について試行錯誤をしながら実りのある研修先や研修方法について検討してきたが、地域と世界の関係を深く考察するまでには至らなかった。
 - 福島県双葉郡復興ビジョンのもと、地域との緊密な連携を行いながら教育を行ってきたが、これまでには学校の開校が重視され、広域の地域連携については課題があった。

上記のような課題も踏まえ、また地域課題の解決に向けてさらに発展的な取組を加え、今回、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」(グローバル型)に申請することとした。構想の目的として、以降に示す達成目標と紐づけて、以下の 3 点を設定した。

- A 地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、在り方生き方を見出すカリキュラムの開発 (3 年間を通して切れ目なく地域探究活動に取り組むカリキュラム、また地域課題とグローバル課題を効果的に往還するカリキュラムに関する研究開発)
- B 原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成 (調査研究ではなく、真の意味で

の課題解決に向けた実践を行うことのできる人材の育成を特に重視。また定量的評価に基づいた目標の設定を実施。）

- C 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及（学校と地域の協働による、学びと地域活性化の相乗効果を創出、高校での探究活動を核とした学校文化と新たな地域の創造、探究活動における生徒と教員の関わり方に関する提案などを実施。）

② 求める地域人材像

本校は双葉地区教育長会が中心となってまとめた「福島県双葉郡教育復興ビジョン（25年7月）」が建学の礎となっており、同ビジョンにおいて地域が提起した求める人材像を踏まえつつ、本校開校後にルーブリックで人材像を具体化してきた。今後本ルーブリックを地域とのコンソーシアムにおいて主に下記の視点を重視し改訂していく。 【巻末のルーブリック参照】

- 地域や世界の課題と自己の将来の夢とを重ね合わせ、当事者として行動する市民性
- 立場・価値観の違いによる深刻な分断や対立を止揚する、協働的ネットワーク構築力
- 地域の資源を見出した上で、知識や想像力を発揮し、地域に新たな価値を創造する力

3 達成目標（関連資料：「目標設定シート」）

① 定量的目標 ※卒業までに生徒に習得させる具体的能力を含む。

本構想の目的B、Cに関する達成の判断材料として、以下の定量的な目標を設定する。

- 本校では育成したい具体的な知識・スキル・人間性等をルーブリックにまとめ、10項目0（低）～5（高）のレベルで規定している。目標の最重要項目として「3年生最後のルーブリックレベル平均値で3.5以上」を掲げる。これまでレベル平均値は上がっているが、3.5という値は、挑戦的なレベルである。 【巻末のルーブリック参照】
- 地域社会への還流を見据え、地域に貢献していく在り方生き方の目標として「卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上」という項目を掲げる。
- その他、最終年度で「地域と協働した課題探究プロジェクト50件以上」「協働する地域の方延べ200件以上」「来校する教育関係者等250名以上」を目標とする。【補足3】

② 定性的目標 ※卒業までに生徒に習得させる具体的能力を含む。

本構想の目的Bに関する、生徒に習得させる具体的能力は①定量的目標記載の通り。

目的A、Cに関する達成の判断材料としては、以下の目標を設定する。 【補足3】

- 総合学科の入学年次必修科目「産業社会と人間」を学校設定科目「地域創造と人間生活（令和3年度より）」に代替し、困難な地域社会の現状とSociety5.0時代の変化を踏まえた能力と態度を養い自己の在り方生き方を見出すカリキュラムを開発する。
- 地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルを構築する。
- 地域復興・創生における高校の役割と、「教育と復興の相乗効果創出」の必要性を踏まえ、双葉郡8町村との広域的・組織的・実働的な協働体制をコンソーシアムで確立し8町村を面的にカバーするとともに、地域協働の場・機会として校舎や探究発表会を活用し、生徒の探究を通じて地域住民主体のウェルビーイング実現を後押しする。

【補足3】 本構想の目的A、B、Cに紐づけて達成目標を以下の通り設定した。目的の内容を踏まえて、目的Aについては定性的目標を、目的Bについては定量的目標を、目標Cについては定量的目標と定性的目標を設定した。また定量的目標については関連資料：「目標設定シート」に記載した。

目的A「地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、在り方生き方を見出すカリキュラムの開発」に対する目標

総合学科の入学年次必履修科目「産業社会と人間」を学校設定科目「地域創造と人間生活（令和3年度より）」に代替し、困難な地域社会の現状と Society5.0 時代の変化を踏まえた能力と態度を養い、在り方生き方を見出すカリキュラムを開発する。また、2，3年次に履修する「総合的な探究の時間」において地域課題に向けた探究活動を行い、探究活動の効果的な進め方について整理する。探究活動を効果的に進めるための方策、例えば、探究活動ルーブリックの開発、探究段階に応じた教員の関わり方についての整理、探究段階に応じた発表会の設定等についてモデルを構築する。

また、地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルを構築する。海外研修などを通じて生徒による地域探究活動と世界の課題事例との共通点を探り、本質的な課題解決に向けた取組を行う。また最近特に注目されている SDGs を紐付けたマップやエッセイの蓄積、海外来校者やアジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生の視点を生かした新たなアイデア創出等を行う。なお、アジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生について、本校は平成30年度から受入れを行っており、令和3年度は2名の留学生が滞在している。

目的B「原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成」に対する目標

本校では教育活動を通じて育成したい具体的な資質能力をルーブリック（添付資料3）にまとめている。本校のルーブリックは知識、技能、人格、メタ認知といった学力概念のもと10項目あり、定性的に表現しているが、それをレベル0（低い）～5（高い）の数値で規定している。「0」は全く達成できていないレベル、「3」は教員が求める学校で達成してほしいレベル、「5」は「変革者」を達成できることが想定される極めて高いレベルである。ルーブリック評価は入学直後から卒業まで数回実施し、生徒の資質能力の伸長度合いを測定している。今回、定量的目標の最も重要な項目として、「3年生最後のルーブリック10項目のレベル平均値で3.5以上」を掲げることとした。これまでの推移では年を経るごとにレベル平均値は上がっている（一期生（平成29年度卒業生）：1.99、二期生：2.63）が、3.5という値は実現できておらず、挑戦的なレベルである。なお、ルーブリック評価は自己評価であるが、客観性を高めるため、生徒同士によるピアレビューや教員との面談を試験的に実施しつつあり、本事業ではこの評価システムを確立する。

また地域社会への貢献についての目標として、「卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上」という項目を掲げる。本校では、高校卒業後、就職希望が30%程度、進学希望が70%程度である。就職希望の生徒はほとんどが地元就職するのに対し、進学希望の生徒のほとんどは地域外の大学等へ進学する。これはこの地域に高等教育機関がほぼないことが大きく影響している。そこで地域への貢献の指標として将来的な地域貢献への期待度を示すアンケートを取り上げることとした。地域に根差した探究活動を行うことにより地域の魅力を発掘し、将来、この地元に関わりたいと感じる生徒の割合は高くなることを確信している。

目的C「双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及」に対する目標

本校は、「福島県双葉郡教育復興ビジョン」のもと、地域との連携を重視して開校したが、これまでのネットワークを一層拡充し、教育と復興の相乗効果の創出のための地域協働体制を確立する。そのためにコンソーシアムを組織的かつ実働的なネットワークとして機能させる仕組みを構築する。コンソーシ

アムでは8町村という広域での連携をカバーし、行政、民間、教育界といった幅広い業種による連携を目指す。本校が行う活動に協力をいただくだけでなく、連携側も本校の校舎を積極的に活用する等、学校を核とした多方向の連携、ネットワークの構築を目指す。

また、モデル校としての高等学校教育改革推進への波及に対する達成目標としては、多面的な定量的目標として、「保護者アンケートによる本事業への70%以上の肯定的評価」、事業への外部からの関心の度合いとして「視察、研修、発表会、聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数 250人以上」等を掲げることとした。さらに地域と連携を測る指標として「地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数 50件以上」、「本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数 200件以上」を掲げることとした。

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を図るものとして、管理機関において設定した成果目標) 本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値					単位： なし
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	3.5
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：ルーブリック評価は年に2回程度定期的実施する。生徒の自己評価であるが、生徒同士のピアレビューや教員との面談などで客観性を高める。途中経過のチェックも可能であり、定量的評価として好適である。						
b	(高校卒業後の地元への定着状況を図るものとして、管理機関において設定した成果目標) 卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上					単位： %
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	70
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：アンケートは生徒の自己評価であるが、理由も書かせるため信頼性は高い。進学する生徒もおり、定着状況は長期的な視点で地元への還流を見据えた指標として取り上げることとする。						
c	(その他本構想における取組の達成目標) 本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合					単位： %
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	70
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：保護者を対象とした学校評価アンケートの中に本事業に関する項目を加えて、保護者による本事業に対する意識調査を行う。						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を図るものとして、管理機関において設定した活動指標) 地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数					単位： 件
	22	31	40	45	50	50
	目標設定の考え方：本件数は、地域の方々との連携の度合いを示す指標として好適である。全校生の1年間を対象とする					
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を図るものとして、管理機関において設定した活動指標) 視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数					単位： 人
	調査なし	200(見込み)	200	230	250	250
	目標設定の考え方：来校者数は本校の注目度を表す指標となる。					
c	(その他本構想における取組の具体的指標) 生徒の外部発表、コンテスト応募件数					単位： 件
	調査なし	30(見込み)	35	40	45	45
	目標設定の考え方：外部発表、コンテスト応募件数は、本校の完成度の高いプロジェクト数の指標となる。					

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(年度)
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間の件数					単位： 件
	133	150 (見込み)	165	180	200	200
目標設定の考え方：関わっていただく地域の団体の数はそのまま活動状況を表す指標となる。						
d	(その他本構想における取組の具体的指標)					単位：
目標設定の考え方：						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
全校生徒数(人)		421	440	463	480
本事業対象生徒数			381	403	420
本事業対象外生徒数			59	60	60

4 実施体制

(1) 管理機関及びコンソーシアムの実施体制

① 管理機関における実施体制や事業の管理方法

双葉地区の未来を創造するリーダーの育成を具現化するために、双葉郡8町村、高等教育機関、地域、産業界、NPO等がコンソーシアムを構築し、協働して双葉郡ならではの教育を推進するとともに、子どもたちの実践的な学びで地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を生み出すことで、地域ならではの新しい価値を創造できる人材を育成する。また、管理機関独自の予算措置を行うとともに、事業をきめ細かく実施できるように教員の配置等の人的支援を行い、定期的に学校を訪問し事業の進捗を確認し、必要に応じ指導助言を行う。

② 運営指導委員会の構成（令和2年度より継続）

氏名	所属・職	備考
飯盛 義徳 氏	慶應義塾大学総合政策学部教授	プラットフォームデザイン、地域イノベーション
田熊 美保 氏	経済開発協力機構(OECD) 教育局教育訓練政策課シニア政策アナリスト	教育政策国際比較、教育政策評価、Education2030
田村 学 氏	國學院大學人間開発学部初等教育学科教授	総合的な探究の時間の指導、カリキュラム研究

③ コンソーシアムの体制（令和3年度の体制）

機関名	機関の代表者名
双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（双葉郡浪江町教育長、双葉郡教育復興ビジョン推進協議会及び双葉地区教育長会 代表）	笠井 淳一 氏
福島大学人間発達文化学類教授	中田 スウラ 氏
公益社団法人福島相双復興推進機構（福島相双復興官民合同チーム） 専務理事	桜町 道雄 氏

公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構 教育・人材育成部長	山内 正之 氏
認定 NPO 法人カタリバ 双葉みらいラボ拠点長	横山 和毅 氏
福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校長	柳沼 英樹 氏
福島県教育委員会 教育次長	丹野 純一 氏

④ コンソーシアムにおける実施体制や事業の管理方法

本校建学の礎である「福島県双葉郡教育復興ビジョン」推進のための「福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会」がこれまで定期的開催され、管理機関及びふたば未来学園も参画している。同会議における全体ビジョンの検討と、学校における地域協働による個別の探究実践との間をつなぐ実働的な枠組みが求められており、コンソーシアムはこの役割を果たす。コンソーシアムは管理機関が統括し、本事業の方向性や人材育成要件の確認、カリキュラムへの助言、参画各機関の特性を活かした生徒の探究活動の支援を行う。

⑤ カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の配置や活用に関する計画

カリキュラム開発等専門家：長谷川勇紀氏（NPO 法人カタリバ双葉みらいラボ拠点長） 探究活動のカリキュラム策定や地域探究活動の効果的な進め方について助言をいただく。
 海外交流アドバイザー：島田智里氏（ニューヨーク市役所公園局都市計画&GIS スペシャリスト） 海外との連携について国際協働と地域開発の専門的観点から助言をいただく。
 地域協働学習支援員：平山勉氏（双葉郡未来会議 代表） 双葉郡 8 町村の住民主体の復興活動のハブとしての立場から、地域探究活動における連携先について助言をいただく。

⑥ 管理機関及びコンソーシアムにおける活動計画

	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
管理機関	○活動計画の実施や教育課程特例取得に向けた指導助言	○第 1 回コンソーシアム協議会の開催（事業の進捗確認） ○第 1 回運営指導委員会の開催 ○教育課程特例の申請	○学校訪問による指導助言	○第 2 回コンソーシアム協議会の開催（成果の検証） ○第 2 回運営指導委員会の開催
コンソーシアム	○事業構想、人材育成要件、役割等の確認、共有 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援	○生徒探究発表会への参加、広報、助言等 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援	○フィールドワーク・探究活動への人的支援 ○地域協働における学校校舎の活用	○生徒中間発表会への参加、広報、助言等 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援 ○地域協働における学校校舎の活用 ○1年間の総括

⑦ 事業終了後の取組計画（カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の配置・活用計画やコンソーシアムのコミュニティスクール化等を含む。）

本事業終了後についても、地域参画でカリキュラムの改善や地域協働の深化を継続するため、コンソーシアムの枠組みを維持することを検討する。また、カリキュラム開発等専門家や地域協働学習支援

員の協力を仰ぎながら、同様の事業を継続するとともに、両者の役割を一部でも教員が担えるよう、本事業実施期間内にノウハウの伝達を行い、地域協働の取組の持続可能性を高める。費用については引き続きの事業継続が可能となるよう管理機関において支援するとともに、地域から持続可能な体制の構築について助言をいただき、各種団体の助成金等を活用し自走できるようにしていく。

⑧ 学校と地域団体・大学等との連携協定の概要

- 双葉地区教育長会（双葉郡8町村）がまとめた「双葉郡教育復興ビジョン（25年）」に教育復興の方向性と本校開校の方向性が示され、現在も同会と継続的に協働している。
- ふたば未来学園と関係機関による協働コンソーシアム連携協定（令和2年度締結予定）

（2）学校の実施体制

① 学校における研究体制、教職員の役割、事業実施への支援体制等

- 本事業の企画運営を専門的に行う校務分掌として「企画研究開発部」を設置し、本校高校教員の1割程度を配置する。同部では、探究カリキュラム全体の企画立案および運営、地域との接続、国内研修、海外研修、外部講師との交渉、教員研修等を所管する。
- 地域との協働による探究活動は「全教員が担当」しつつ「数名のチーム」体制で指導にあたる。学校全体の探究活動の指導力を向上し教員意識を変革していくため、チーム内での週次会や、担当教員同士が課題を共有し解決策を検討する月次会を設定するとともに、全教員参加の研修会「未来研究会」を年間10回程度開催し、組織的な研究開発を進める。

② カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付け・役割、活用方法

- 各専門家・支援員を教職員の重要なパートナーとして位置づけ、校内にも専用の机を確保し、いつでも来校して担当教員と密接な連携・議論ができる環境を整える。
- カリキュラム開発専門家は企画研究開発部と週次の会合を行い、学校設定科目「地域創造と人間生活」、「総合的な探究の時間」、各教科における指導法等について検討する。
- 地域協働学習実施支援員は年間フィールドワーク計画や生徒の探究課題の方向性を共有し、地域の団体等との協働計画を協議するとともにコーディネートする。
- 海外交流アドバイザーは海外との連携に関して教員、生徒共に助言を行う。

③ 定期的な確認や成果の検証・評価等を通じた、究開発の進捗管理や改善の仕組み

- 各取組の際には生徒の「振り返り」を設定し、記述内容から成果・効果を検証する。
- 各学年で年2回、資質・能力のレベルを自己評価する「ルーブリック評価」を行い、能力伸長を測る。評価では自己評価の他に、生徒同士のピアレビューや教員とのルーブリック面談を実施する。これにより多面的な評価を実現するとともに、形成的評価として生徒自身が次の目標設定に向かう成長の機会とする。面談は全教員が担当する。
- 卒業時に「将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）」のアンケートを行い、地域社会への還流を見据えたカリキュラムの効果と課題を検証する。R2年度入学生以降は入学時にもアンケートを行い、卒業時との意識変化も測定する。
- 全体の検証、評価は「企画研究開発部」が中心となって進め、全職員への報告・協議の機会を設けるとともに、コンソーシアム、運営指導委員会に報告し助言を頂く。

④ 学校における外部有識者等の支援・活用体制

○運営指導委員：定期的に本事業に対する意見交換や指導をいただく。委員の専門性を活かして、カリキュラムの方向性、地域との協働における指導方法、有効な評価方法など、多面的な視点からの指導を仰ぐ。特に、世界的な教育の方向性、日本における探究活動やその評価方法等について議論を深める。

○アクセンチュア（株）：人材育成に関する豊富なデータを必要に応じて提供いただきながら、ルーブリックをはじめとする本校の評価について、評価軸の立て方、データの見方考え方、評価のフィードバックと形成的評価への活用の在り方等について支援いただく。

○発表会審査員：生徒の発表について大学、企業、NPO等の視点から意見をいただく。結果に対する意見やアドバイスだけでなく、その先の活動の進め方についても伴走者的な立場で協力をいただく。

⑤ これまでの教育課程等の研究開発の実績

年度	研究開発実績
平成 27～31 年度	スーパーグローバルハイスクール

5 研究開発計画及び内容

※関連資料：別紙様式 3（前掲：ビジュアル資料）

① 研究開発構想名

原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバル・リーダーの育成

② 研究開発の概要

○カリキュラム開発：全体の柱として学校設定科目「地域創造と人間生活」と「未来創造探究（総合的な探究の時間）」で 3 年間を貫き、地域課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成するとともに地域に貢献する人材としての在り方生き方を涵養するカリキュラムを開発する。

○地域課題解決に貢献する人材育成：地域・世界が直面する困難な課題を理解し、自らの在り方生き方を考え、また実践を重視した地域課題解決の探究を行い、その解決に貢献できる人材を育成する。

○双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果を創出し、全国へ発信する。【補足 5】

③ 研究開発計画に対する仮説の分析及び事業実施より期待される効果

○3年間を通じた「地域課題解決の探究カリキュラム」を構築することで、資質・能力の育成と、地域に根ざした在り方生き方の涵養をより深化することができる。これを一般化し、全国の高校の探究活動の活性化に繋げることが期待できる。

○地域の課題と自らの在り方生き方を重ね合わせて思考しつつ、世界の課題に向き合う経験により、地域と世界の課題の共通性を見出し本質的な解決策を見出すことに繋がる。その上で課題解決の実践を行うことで、地域で新たな価値を創造する力が育成される。

○高校と地域の広域連携モデルによって、生徒の姿が住民にも影響を与え、地域全体の課題意識や行動力が喚起され、創造的な地域を実現することが期待できる。 【補足 5】

【補足 5】 研究開発の内容、仮説の分析、期待される効果

○カリキュラム開発の内容

地域課題解決の探究活動を本校の教育活動の核とする。そのため教育課程の特例により「産業社会と人間」（1 年次 2 単位）を新たな学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」に代替した上で、「総合的

な探究の時間」(2・3年次各3単位)と3年間を貫き、地域課題解決の探究活動を実施する。その際、探究と各教科を意図的に往還させ、教科で身に付いたものの見方・考え方、知識・技能等が発揮され、汎用的な能力に高まっていくようカリキュラムを構造化する。

○カリキュラム開発における仮説の分析、期待される効果

・学校設定教科・科目の設置と教育課程の特例の活用

本校では現在、1年生で「地域創造と人間生活」(学校設定科目)(2単位)、2・3年生で「総合的な探究(学習)の時間」(各学年3単位)を実施している。これまで地域探究活動は主に「総合的な探究(学習)の時間」において実施しており、探究活動も年を経るごとに活発になっている。しかしながら1年次と2・3年次の間の接続に課題があった。具体的には、1年生で履修する「産業社会と人間」においては「高等学校教育の改革の推進に関する会議の第四次報告(H5)」に示された通り「職業と生活」「我が国の産業と社会の変化」「進路と自己実現」の3項目で構成し、特に「職業と生活」の指導事項として求められる「各種企業等の見学及び職業人等との対話を通して、職業の種類や特徴、職業生活などについて理解するとともに必要とされる能力・態度、望ましい勤労観、職業観を養うための学習」も実施してきた。一方で、2年次からの「総合的な探究の時間」では時代の変化を踏まえ、地域社会の課題解決に取り組む中から自らの在り方生き方を見出していく学習を行っている。H5年の報告ではある面で職業の種類や特徴は所与の固定的なものとして捉えられている一方、地域課題解決の探究においては産業や職業も自らが地域において創造していく対象の一部である。そのため、「産業社会と人間」では職業について学ぶ他に、新たな地域創造の活動を行っている先人に学ぶ単元を別途設定するなど重複も生じている上、実施してきたものが2・3年生の地域探究活動にあまり活かされていないという課題がある。この課題を解決するために時代の変化に適合させた形で「産業社会と人間」を再編成して「地域創造と人間生活」に代替することとし、地域での活動をより重視することとした。このようなカリキュラム編成にすることにより、3年間を通して地域課題に切れ目なく取り組むことができ、地域探究活動を現状以上に活性化させることができる(仮説)。さらに探究活動が活性化することにより、生徒の地域や実社会の課題に向かう意欲や行動力が喚起され、地域に根差した在り方生き方が涵養されることが期待できる(期待効果)。

・探究プロセスの確立

一般に探究活動は「調査」「課題発見」「テーマ設定」「課題解決」の各プロセスが挙げられ、これらを、PDCAサイクルを回して進めていくことが言われている。多くの探究プロセスで活用できるものの、実践しようとするとう漠然としているあまり、指導教員は戸惑うことが多かった。また「課題解決」の段階においては単なる調査研究で終わってしまうケースが多く、真に解決に至るケースは少なかった。また探究活動のステージに応じた生徒と教員の関わり方についても、これまでそれほど多くの関心を持たれてこなかった。そこで本事業では下表に示すような本校独自の探究プロセスや指導方法を構築する。

表 本事業で構築していく探究プロセスの概要(◎はその時期における主要な姿勢、関わり)

時期	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期
探究段階	系列選択、職業観育成(産業社会と人間の内容)	調査のためのアクション 地域の現状分析		解決のためのアクションと考察 アクションー考察サイクル		まとめ 論文作成
生徒の探究姿勢	守(受容的)	◎守(受容的) 破(生成的)	守(受容的) ◎破(生成的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)
教員の関わり方	インストラクター	インストラクター	インストラクター ◎ファシリテーター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター

具体的には探究の大枠として「調査のためのアクション」と「解決のためのアクション」を明確に分けるプロセスである。いずれの段階も重要であるが、特に本事業では「解決のためのアクション」を重点化していく。また、これらの段階を明確に生徒に意識させるため、区切りとなる時期に発表会を実施し、対象生徒全員がそのステージをクリアしながら探究活動を進めていくようにする。また、生徒と教員の関わり方について、上記のステージに応じて、インストラクター的、ファシリテーター的、メンターの役割を担うことができるよう、整理をしていく。このような探究プロセスの明確化、特に「解決のためのアクションの重視」により、生徒が地域の課題としっかり向き合い課題解決にむけて着実に取り組むことができるようになる。また教員の関わり方を明確にすることにより教員の指導力向上や生徒の主体的な探究活動の質的な向上につながることを確信している（仮説）。さらにこの取組を一般化することにより、地域探究活動の進め方の先駆的事例として広く活用していただくことができれば、全国の地域探究活動の活性化につながることを期待できる（期待効果）。

○地域課題解決の探究の内容

1年生の学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」では、「産業社会と人間」としての内容を実施しながら地域課題解決の探究の導入を行う。「産業社会と人間」の内容として具体的にフューチャーマップによるライフプラン作成、系列選択等を行い、職業観の育成、進路意識の高揚を図る。また地域課題解決の探究活動の導入として双葉郡の現状を知るフィールドワーク、マインドマップ等によるスキル学習、地域調査と演劇、グローバル課題に関するワーク等を実施する。

2、3年生では「総合的な探究（学習）の時間」において地域に関する課題探究活動を行う。地域の特性や特に重視すべき領域に焦点をあて、以下に示す6つのゼミを設置し、生徒の希望により振り分ける。その際、本校の系列（アカデミック系列、トップアスリート系列、スペシャリスト系列）についても考慮する。

原子力防災探究ゼミ	メディア・コミュニケーション探究ゼミ	再生可能エネルギー探究ゼミ
原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究する。廃炉の進め方や汚染水の処理方法等、事故後の様々な処理について地域がどのように関わらなければならないか、避難や帰還の過程で生じた対立や分断をどのように解決するのか、避難により断絶してしまった地域コミュニティをどう復活させるべきか、といった課題に取り組み、解決に向けて実践する。	地域におけるメディア・コミュニケーションのあり方について探究する。誤解或いは意図的に加速させられている分断・対立を止揚する情報発信やコミュニケーション、災害時のメディアの効果的な活用方法、災害と厄災の教訓の発信と伝承などに向けて、メディアが果たす役割等について課題を設定し、その解決に向けて実践を行う。	歴史的に全国のエネルギー供給地であり、原発事故以降、特に再生可能エネルギーの研究開発拠点が集中する本地域の特性を活かし、再生可能エネルギーを中心としてエネルギー全般について探究する。科学的なアプローチのみならず社会的なアプローチでも考察し、望ましい人間社会と、地球環境やエネルギーの関係性について探究し、実践を行う。
アグリ・ビジネス探究ゼミ	スポーツと健康探究ゼミ	健康と福祉探究ゼミ
地域の復興を農業、商業の観点から探究する。地域資源を活用した新たな産業の創出、農山漁村の6次産業化など、ビジネスや生業の観点から探究し、実践を行う。特に地域の農水産物や商品について、風評の実態調査、その解決策、地域の食を活用したコミュニティ形成等について課題を設定し、その解決に向けて実践を行う。	Jビレッジが所在しスポーツが身近な環境を活かし、スポーツを通じて地域を豊かにする方策を探究する。総合型地域クラブによる地域活性化、健康増進、子供のスポーツ環境支援、五輪を契機とした復興、スポーツビジネスによる持続可能で豊かな地域の実現や、アスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行う。	少子高齢化や人口減少が一段と加速した福島の地域を全国の課題先進地域として捉え、健康長寿の実現の方策を探究する。中核病院・地域医療・介護・福祉が結びついた地域包括ケア、地域の高齢者・大人・子供などの多様な世代の共助による生きがいのある生活の創造等の課題を設定し、解決に向けて探究と実践を行う。

これらのゼミで扱う課題は双葉郡で特に重視すべき課題であるが、同時に世界的にも共通する課題である。地域に焦点をあてる一方で、世界でこれらの課題にどう向き合っているかという視点も加えながら、実践を進める。

ゼミでは生徒の探究ステージに応じて柔軟に指導し、生徒の主体性や行動力を育む。また探究ステージを明示し、調査研究に留まらず、課題解決のための実践を重視した取組を行う。

地域課題解決の探究活動については、本校舎（福島県広野町）の生徒全員を対象とする。本校には系列が3つあり、多様な生徒がいるが、それぞれの系列の特徴を生かした活動が可能になるように工夫する。系列と関連したゼミを選択する場合、自分の専門分野を地域の課題と関連させ深く学ぶことができる。一方、系列に縛られず自由な発想でゼミを選択した場合においても、系列とゼミテーマを関連させながら、多様な見方考え方を獲得することが期待される。

○地域課題解決の探究における仮説の分析、期待される効果

震災、原発事故に見舞われた福島県双葉郡には復興に向けた意欲の高い方々や団体が多く、探究活動においてもこれらの方々と連携して取り組むことが多かった。また連携先は本校の位置する広野町が中心であった。しかし連携の在り方についてはいくつか課題が残った。具体的には、双葉郡8町村とは「双葉郡教育復興ビジョン推進協議会」における年複数回の協議の場でビジョンについては共有しているものの、具体的な地域協働については本校に委ねられており、連携の糸口が教員個人の繋がりに依存してきた点、連携が単発で一方的な依頼になりがちな点、連携先との意思疎通が低い点（学校教育についての理解不足）、地域が近隣町村に偏りがちである点等である。これらを解決するために本事業ではコンソーシアムや地域協働学習実施支援員の活用、連携先の特性に応じた連携の在り方の整理をしていく。コンソーシアムは、連携の在り方についての議論を深めることを主目的とする。またコンソーシアムには双葉郡8町村に関わるメンバーにも加わっていただき、これまで以上に広域での活動を促進する。地域協働学習実施支援員については個々の取組についての適切な連携先についての情報提供をしていた。これにより学校と連携先の組織的な繋がりが可能となり、また双方向の意思疎通がよりスムーズに運ぶようになり連携事業をより深化させることができる（仮説）。さらに地域連携が進展することにより、本校が目指している地域と学校の一体化が実現できると期待される（期待効果）。また、広域市町村を「地元＝立地」と捉えた高校を核とした地域活性化のモデルは、今後学校統廃合が進む全国の地域にとって、統廃合を契機として地域の活性化に繋げるモデルともなることが期待される（期待効果）。

○海外研修等の内容

原子力災害からの復興や持続可能な地域づくりを主要テーマとしたドイツ研修、ニューヨーク研修を行う。ドイツ研修では地域住民のまちづくりへの参画やエネルギーに対する考え方、ニューヨーク研修では持続可能な社会づくりと若者の役割について学ぶ。これらのテーマは地域的にも国際的にも共通する課題であり、同年代の生徒と深く議論する機会を設定する。なお、これらの研修は希望者を対象とするが、研修の成果は全生徒に波及するように工夫する。具体的には発表会の開催、SNSを通じた海外高校生との連携企画、地域課題解決の探究活動のテーマによる意見交換の機会の設定などが挙げられる。

また本校で受け入れている「アジア高校生架け橋プロジェクト」留学生やALTも活用し、異なる価値観の人たちと日常的に協働して探究活動を進めていく。

○海外研修等における仮説の分析、期待される効果

本校ではこれまでいくつかの海外研修を実施し、グローバルな視点を持ち行動力の高い生徒の育成に繋げてきた。海外研修にあたり、従来の位置づけ（グローバルな視点の獲得、外国語コミュニケーション力の育成、福島の現状報告）をより具体化、深化させ、以下のように位置付ける。

- ・地域課題と世界的な課題との共通性の発見から本質的な課題解決へ

本校で実施する地域課題解決の探究活動は6つのゼミに分かれて実施する。各テーマは地域に根差したものであるが、本質的には世界でも共通する課題である。例えば原子力防災探究ゼミでは原子力災害からの復興課題を掲げているが、天災人災を問わず、災害に対する適切な対応は、東日本大震災以降、特に注目されているところである。またメディアコミュニケーション探究ゼミで実施する課題には教訓

を次世代に活かすことが大きなテーマとなっている。世界を揺るがす多くの事案の後には必ずこの課題が伴っており、世界から学ぶところも大きい。生徒自身が自身のテーマを持って海外研修を行うことにより、自身のテーマの普遍性を学び、本質的な解決策への足がかりを得ることができる。また、単発の研修に終わらず、海外研修後の継続的な実践や議論に接続することが可能である。

・社会の構造的な課題

双葉郡は震災、原発事故により避難を余儀なくされ、一時は住民が誰もいなくなった地域であり、地域を初めから構築し直す経験をしてきた。この経験から住民のまちづくりへの参画の在り方については特に注目すべき点がある。ここには日本が抱える「少子高齢化」はもちろんのこと、多くの課題が山積している。一方で「一から」地域社会をつくるという観点からは、従来の施策に縛られない創造性豊かな未来を描くことも可能である。このような観点から世界の先進的な地域社会を学ぶことは非常に意味が大きい。海外では、住民と行政が一体でまちづくりを進めている事例が多く、これを学ぶことで自分たちが住む地においても、住民と行政が深く関わりながら課題に向かう取組に発展させることができる。

・異質からの学び

福島県は健康被害、食、観光等において未だに風評被害や差別に苦しんでいる。これらの本質の一つは、異質なものに対する違和感やイメージ先行の見方考え方にある。多民族が共存する海外は異質なものの宝庫であり、偏見・差別等の共通の課題をどう乗り越えていくのか多くを学ぶことができる。

・主体性の育成

これまでの海外研修経験者の様子から、研修実施後には主体性が大きく育まれていることが伺えた。この能力をさらに育成するために海外研修の在り方を再検討する。これまで教員側が様々な指示を与えながら実施してきたが、教員が担ってきた役割を極力生徒側に委譲し、生徒中心の研修運営を促進する。具体的には研修先の選定、事前研修、事後研修といった計画策定等が挙げられる。教員はファシリテーターとして生徒の運営をサポートする。また海外研修アドバイザーに生徒と積極的に関わっていただく。

④ 研究開発のスケジュール

ア 3か年の計画

年度	1年目	2年目	3年目
内容	【本事業の整備、運用】 ○コンソーシアムの立上と運営 ○カリキュラム整備 ○人材育成ループリック改定 ○探究ループリックの新たな策定と運用	【本事業の本格運用】 ○カリキュラムの確立 ○探究活動の定常化 ○ループリックを活用した評価方法の確立 ○本事業の普及拡大	【本事業の総括と継承】 ○本事業の課題の抽出と対策の検討 ○継続的、発展的な活動に向けての環境整備 ○本事業の普及拡大

イ 令和3年度の計画

	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
内容	1年：進路、職業選択、人間関係形成に関する活動 2年：地域探究の導入、ゼミ、テーマ探索 3年：地域探究（解決アクション） 《全学年ループリック評価》	1年：地域を知るためのフィールドワーク 2年：地域探究（ゼミ配属、テーマ探索） 3年：地域探究（まとめ、発表）、ループリック評価	1年：演劇による地域の表現 2年：地域探究（テーマ決定、調査アクション）、ループリック評価 3年：地域探究（論文作成） 《全学年学校評価》	1年：国際理解活動、ドイツ研修（希望者）、ループリック評価 2年：地域探究（解決アクション）、ニューヨーク研修（希望者） 3年：論文完成

⑤ 地域との協働により実施する学習内容と教科・科目における位置付け、相互の関係

学校設定科目「地域創造と人間生活」と「総合的な探究の時間」で地域との協働による探究活動を行う際、探究と各教科を意図的に往還させ、教科で身に付いたものの見方・考え方、知識・技能等が発揮され、汎用的な能力に高まっていくことを目指し、教科の視点から知識を学ぶ単元も設ける。一方、各教科においても下記のように探究と接続した内容を取り扱い、教科を学ぶ意欲を喚起し発展的な知識の学習に繋げていく。【補足7】

例) 理科、数学：一次エネルギーのとらえ方、放射線とその減衰、地球温暖化、廃炉技術
 地歴公民：エネルギー供給地としての地域の歴史と背景、原子力災害と地域の未来

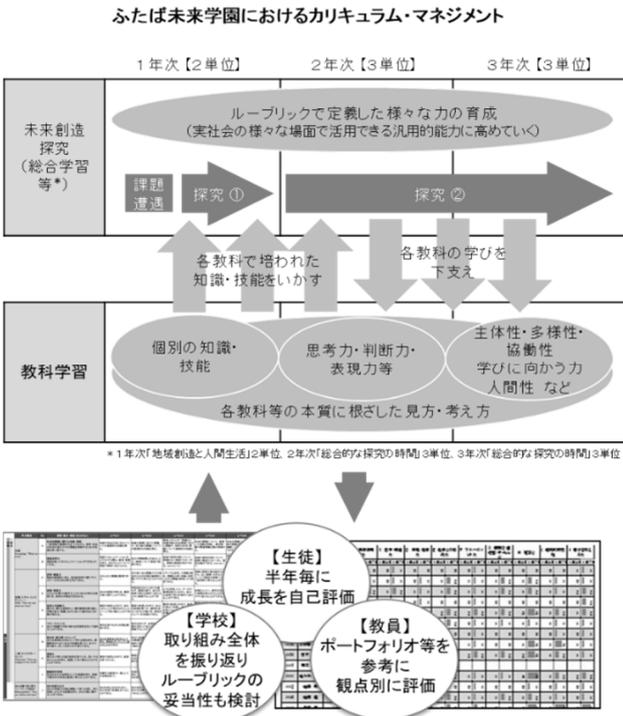
【補足7】 地域との協働により実施する学習は主に学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」と「総合的な探究（学習）の時間」の探究活動で実施する。その際、学校全体の意識を統一するルーブリックの設定を始点としたカリキュラムマネジメントを重視していく。

いずれの探究においても、各教科で身に付いた、ものの見方・考え方、知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性、学びに向かう力や人間性などが発揮され、本校がルーブリックで定義した汎用的な能力に高まっていくことを目指す。逆に、カリキュラム全体の軸となる探究があるからこそ、実社会での探究を通じて知識の必要性を痛感する体験等から各教科の学習の意欲が喚起され、各教科の学習活動が確かに下支えされていく。また、内容面に関する知識も、各教科において発展的に学習し、深められていく。

同時に、下記のように本校の全教科においても、地域と関連したテーマを扱っていく。

「地域創造と人間生活」と「総合的な探究（学習）の時間」における探究と各教科のつながりを意図的に生み出し、通常の各教科・科目を探究活動と組み合わせることにより、各教科の学習も表面的な知識や技能の習得にとどまらない、より深い学習となる相互作用が期待できる。

また通常教科・科目において地域のテーマを扱う場合、複数の教科が連携して行う教科連携がより効果的である。教科連携を本校の教員研修「未来研究会」の重点的な取組の一つとして位置づけ、また強化期間を設定することにより、その推進を図る。



国語	レポート、論文の書き方、論理的な考え方
地歴公民	エネルギー供給地としての福島県の歴史とその背景、原子力災害と地域の未来（福島学 社会編）
英語	英語×演劇×地域
数学	データから分析する少子高齢化
理科	一次エネルギーのとらえ方、放射線とその減衰、廃炉技術（福島学 理科編） 日常生活と地球温暖化、福島県の地形と再生可能エネルギー
体育	J ビレッジの地域における役割、スポーツの地域に与える力、
情報	地域の情報発掘とプレゼンテーション
家庭科、福祉	健康と地域活性化
工業	地域エネルギー（学校設定科目）
農業、商業	地元の食材を用いた商品開発

⑥ 他校や他地域への事業成果の普及方策

- 管理機関主催で全県立学校の教員が本校で研修を行い、各校への取組の普及を図る。
- 学校公開日を毎月設定し、本校への視察を積極的に受け入れ発信する。
- 学校ホームページに事業に関する報告や成果を掲載する。
- 生徒の地域課題解決の探究発表会を公開し、成果を発信する。
- 最終年度には教員による成果報告会を実施し、成果を総括し、その普及を図る。

6 学校設定教科・科目，教育課程の特例を活用した取組

① 学校設定教科・科目を設定	○
② 教育課程の特例を活用	○

学校設定教科・科目の設定に関する説明資料

学校設定教科・科目を適用する学校の管理機関	福島県教育委員会
学校設定教科・科目を設定する学校	福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

設定する学校設定教科・科目の内容

教科・科目名	地域創造と人間生活
単位数	2単位
対象学科・学年	1年次
必修修・選択の別	必修修
設定する教科・科目の内容	<p>1 目標</p> <p>地域や社会の変化を見通しながら、自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造するための資質・能力を次の通り育成することを目指す。</p> <p>ア 社会の変化の中で、主体的に新たな地域社会の創造に参画していく自覚と態度を養う。</p> <p>イ 地域や世界における産業の発展とそれがもたらした社会の変化を理解するとともに、多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく能力を養う。</p> <p>ウ 自己の能力・適性、興味・関心等と地域や社会の未来を創造する上で求められる資質・能力を踏まえ、自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、将来の生き方や進路について考察し、主体的に学び続ける能力と態度を養う。</p> <p>2 内容</p> <p>(1) 地域社会の創造へ参画していく自覚と態度の涵養</p> <p>地域を知る学習（双葉郡フィールドワーク）、地域人材インタビュー、国際理解講座等を通して、地域や世界で困難な課題解決に取り組んできた先人の生き方に触れる。</p> <p>(2) 地域社会を創造する力</p> <p>コミュニケーションワークショップ、スキル学習、地域課題の取材と演劇表現の創造を通して、複雑な地域課題を多面的に理解し、新たな地域を創造していく協働力や想像力等の基本的な技能や態度を養う。</p> <p>(3) 生き方と進路</p> <p>自己理解から職業人インタビューを通して、自己・地域・世界の未来を重ね合わせたライフプランを作成し、次年度の系列選択に繋げる。</p>
その他 特記事項	教育課程の特例を活用して本科目を設定し、総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされている「産業社会と人間」を代替する。

教育課程の特例に関する説明資料

教育課程の特例を適用する学校の管理機関	福島県教育委員会
教育課程の特例を活用する学校	福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

教育課程の特例を活用して設定する科目の内容

科目名	地域創造と人間生活
単位数	2
対象学科・学年	総合学科・1年次
必履修・選択の別	必履修
特例を活用して設定する科目の内容	<p>(1) 目標 地域や社会の変化を見通しながら、自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造するための資質・能力を育成することを目指す。</p> <p>(2) 内容</p> <p>ア 地域でのフィールドワークやインタビュー等を通して、困難な課題解決に取り組んできた先人の生き方に触れ、社会の変化の中で主体的に新たな地域社会の創造に参画する自覚と態度を養う。</p> <p>イ 各種スキル学習や地域課題の取材と演劇表現の創造を通して、地域や世界における産業の発展とそれがもたらした社会の変化を理解するとともに、多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく能力を養う。</p> <p>ウ 自己の能力・適性、興味・関心等と、地域や社会の未来を創造する上で求められる資質・能力を踏まえ、自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、自己の将来の生き方や進路について考察し、主体的に学び続ける能力と態度を養う。</p>
代替措置	総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされている「産業社会と人間」を本科目に代替する。
特例が必要な理由	<p>○「産業社会と人間」は総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされ、高等学校教育の改革の推進に関する会議の第四次報告（H5）において具体的指導内容が提言され、各校にはこの内容に十分配慮した指導が求められているが、職業の種類や特徴、職業生活の理解等において、固定的な産業や職業が想定されている。</p> <p>○一方本校では Society5.0 の社会像と求められる人材像を踏まえ、地域社会において新たな価値を創造する人材の育成を構想しており、産業や職業は創造の対象の一部である。時代の変化に適合させた形で「産業社会と人間」を再編成することで、狙いを損なうことなく人材の育成がより確かになるため、代替が適当であると判断する。</p>
特例の適用範囲	令和3年度入学生から適用する。

原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造する グローバル・リーダーの育成

研究
開発
構想名

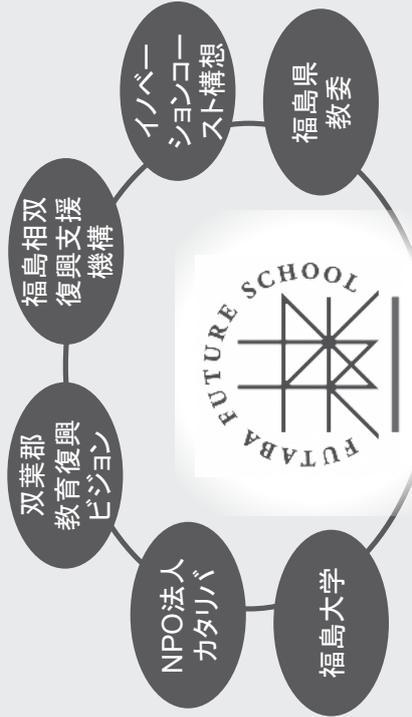
- 目的
- 地域探究と海外研修を体系的に位置づけたカリキュラム開発
 - 地域や世界の課題解決に挑戦する人材の育成
 - 教育と復興の相乗効果の創出、全国の高校への波及

育成
人材像

- 地域や世界の課題と自己の夢とを重ね合わせ、当事者として行動する市民性
- 立場・価値観の違いによる分断や対立を止揚する協働的ネットワーク構築力
- 地域の資源を見出し、地域に新たな価値を創造する力

ふたば未来学園と双葉郡による広域協働コンソーシアム

- ◆ 県、ふたば未来学園中学校・高等学校と双葉郡8町村を中心とする広域コンソーシアムを構築。
- ◆ 生徒の実践的な学びで地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を創出。



福島県立ふたば未来学園高等学校

- ✓ 将来の地域ビジョン、ふたば未来学園で育成していく人材像の共有
- ✓ 上記に基づきふたば未来学園で展開する教育活動の企画・立案 等

3年間を通じた「地域課題解決の探究カリキュラム」の構築

- ✓ 学校設定科目「地域創造と人間生活」の設置。
- ✓ 課題解決のためのアクションを重視。
- ✓ 教員の関わりを含めた、汎用性のある探究活動指導方法の確立。
- ✓ 地域の特性を考慮した6つの探究ゼミでの実践。

- 原子力防災探究ゼミ**
原子力発電所事故後の地域社会のあり方、廃炉と住民の関わり、地域コミュニティの復活について探究する。
- マイ・17・コミュニケーション探究ゼミ**
地域におけるメディア・コミュニケーションの効果的な活用方法、教訓を継承していくための方策について探究する。
- 再生可能エネルギー探究ゼミ**
エネルギー供給地としての福島県の特徴を踏まえ、エネルギーについて科学的、社会的なアプローチで探究する。
- アグリ・ビジネス探究ゼミ**
地域の現状をビジネスや生業の観点から調査し、風評払拭や新たな地域活性化の方策について探究する。
- スポーツと健康探究ゼミ**
Jリーグの近隣という立地を活かし、スポーツを通じた地域活性化や地域の健康増進策等について探究する。
- 福祉と健康探究ゼミ**
少子高齢化の先進地域となっている双葉郡の地域性を活かし、地域の方が生きがいのある人生を送る方策について探究する。

海外研修等による地域と世界の課題解決

- ✓ 自身が取り組む地域課題解決の探究内容について、海外の同世代と議論。
- ✓ 地域課題とグローバル課題の往還による本質的な課題解決策の模索。
- ✓ 事前、事後研修も含めて、生徒が主体となった海外研修構築プロセスの確立。

1年次：ドイツ研修
フライブルク・ミュンヘン

住民の積極的な参画・関与によるまちづくりや再生可能エネルギーの活用について学び、今後の地域の在り方について考察する。演劇やプレゼンによる福島の実状報告を行い、地域理解を促進する。

2年次：米国研修
ニューヨーク、国連本部

「持続可能な社会づくり」をテーマに地球規模での課題について国際機関や世界の同世代と意見交換、議論を行う。差別や対立・分断について米国の現状を学び乗り越える方策を探る。

第2章

研究開発の内容・活動実績

2. 1 地域創造と人間生活

本校の地域創造と人間生活は、①自分を知る、②地域を知る、③世界を知るという3つの柱でカリキュラム開発を行ってきた。①については自分史やマインドマップを用いた自己理解を通して、将来を見据えてありたい自分を考え、②では演劇を通して地域の課題を知る学習を行い、③では世界の様々な困難を肌で感じてきた方からの協力で、世界の課題を知り、自分、地域、世界をつなげ、2年次からの未来創造探究に繋げてきた。今年度は新型コロナウイルス感染拡大による休校措置で、当初の予定通りにプログラムを実施できないこともあったが、Zoomを使ったオンラインでの授業や、Google ClassroomやFlipgridを使用した課題の提出・共有などに素早く切り替え、チームで代替企画を考え、コロナ禍だからこそできる学びのバージョンアップを追求した。

2. 1. 1 課題を知る学習

(1) 実施内容

① オリエンテーション / アイスブレイク

昨年度は新型コロナウイルス感染拡大によりオンラインでの実施となったが、今年度は対面での実施が叶った。初めて出会う「地域創造と人間生活」という授業に対し不安を抱えている生徒と目線合わせを行い、仲間がしゲームや地域クイズなどを通し、生徒同士の関係作りを行った。



② コミュニケーションWS / 演劇WS

生徒同士で対話のしやすい雰囲気を作るために、ワークショップを二週にかけて行った。コミュニケーションWSでは体を動かし楽しみながら、生徒同士で、あるいは教員・講師の方々と交流を深める様子が見られた。また、このWSは、教員が生徒の性格や関係性の把握にも効果があったと考えられる。

演劇WSでは、NPO法人PAVLICの方々とオンラインでつながり、これまでの人生について振り返り人生グラフを作成した。震災を直接的に体験している生徒の多くは、5歳のときにグラフがガクッと下降しており、震災による影響の強さがうかがえた。



③ 双葉郡8町村バスツアー事前調べ学習

双葉郡の現状と課題を実際に自分の目で見て、この地で学ぶ意味を考えるとともに今後の演劇及び探究活動につなげることを目的として、双葉郡8町村バスツアーを毎年実施している。今年度は5月末に実施予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大により7月に延期せざるを得なかった。

「地域創造と人間生活」を履修する高校1年生には、東日本大震災を知らない・体験していない生徒もいるということを踏まえ、まずは地域を知るために調べ学習を

行った。マンガラートを活用して地域の魅力を知るだけでなく、震災前と震災後の地域の比較も行った。震災後の8町村に対し、「人口が少ない」「寂しい」といったネガティブなイメージをもっている生徒も見られたが、調査を進めていく中で、地域を盛り上げるために行動している方が沢山いるということを学んだ。

④ 双葉郡8町村バスツアー

日時：7月7日(水)

講師：

1号車	浪江町	木村正信(浪江町役場) 鈴木知洋(本校教員)
	檜葉町	森雄一朗(一般社団法人ならはみらい) 松本 淳(株式会社FiveStar)
2号車	葛尾村	堺 亮裕さん(一般社団法人葛力創造舎)
	双葉町	松本佳充(元双葉高校教員)
3号車	広野町	磯辺吉彦(広野わいわいプロジェクト)
	大熊町	佐藤亜紀(大熊町復興支援員)
4号車	富岡町	青木淑子(3.11 富岡町を語る会)
		平山 勉(双葉郡未来会議事務局代表)
	川内村	井出寿一(一般社団法人かわうちラボ)

行程：

1号車 浪江町・檜葉町

学校 ~ 浪江高校 ~ 国道114号で沿岸部方面へ道の駅なみえ ~ 請戸漁港・請戸小学校 ~ 大平山霊園 ~ 展望の宿天神 ~ 檜葉周辺ツアー(みるーる天神、木戸川漁協、J ヴィレッジ 檜葉遠隔開発技術センター、道の駅ならば みんなの交流館ならば CANvas) ~ 学校

2号車 葛尾村・双葉町

学校 ~ 葛尾村(かつらおやぎ広場がらがらどん) ~ 落合集会所 ~ 双葉町へ移動 ~ 双葉高校 ~ 双葉駅周辺ツアー ~ 東日本大震災・原子力災害伝承館 ~ 学校

3号車 広野町・大熊町

学校 ~ 広野町内散策(防災緑地、新妻有機農園、広野復興公社(バナナ園)) ~ 大熊食堂 ~ 大熊町内散策(大熊町役場、商業施設、災害公営住宅) ~ 大野駅 ~ 大野小学校・ネクサスファームおおくま・酒米田んぼ等車窓より視察 ~ 学校

4号車 富岡町・川内村

学校 ～ 富岡高校 ～ 富岡町内散策 ～ ふたばいんふお ～ 川内村へ移動 ～ 高田島ヴィンヤード(ワイン畑)・サラブレッド馬牧場・川内小中学園・かわうち保育園 ～ 天山文庫 ～ 学校



概要：

クラスごとに、1日かけて双葉郡内8町村のうち2町村をめぐった。浪江高校、双葉高校、富岡高校を訪問した生徒達の中には、大震災から10年以上経つ現在でも、時がとまったままの校舎を見て言葉を失っている生徒もいた。



また、地域で生きる方々や、地域を盛り上げるために活動している方々とも直接交流ができたことで、今後の演劇創作や未来創造探究につながる学びとなった。本校には、福島県外出身者も多数在学している。事前に調べ学習を行い、地域についての知識をインプットした状態で、バスツアーを実施できたことも大きい。それにより、実際に自分の足でその地を訪れた際に得る学びが深化したと考えられる。また、双葉郡出身者で、震災後避難して以来初めて故郷を訪れる生徒も一定数おり、バスの中から自分の家のあたりを必死で探す様子もみられた。震災以前とは様子の変わった町に驚く生徒もいたが、10年振りに故郷を見て様々なことを感じたようだ。バスツアー振り返りでは、こちらが想像したよりも生徒は多くの学びを得ていたようだ。

バスツアーの感想より	
実際に見て、話を聞いて、少しずつ復興が進んでいることがわかった。	人口も少ないけど、小さい村でも資料よりたくさん面白いことや食べ物があった。
行ってみたいとわからなかった。	ふたば未来ができた意味を考えた。
結構復興してる・・・のかな？	実際に休校になった校舎を見て衝撃だった。
津波で流された土地、自分だったら考えると辛いなと思った。	みんな多くのものを失ったんだと思った。自分はそんな人達のために何が出来るだろう。
もっと地域の人たちと関わりたい。	イベントとか参加してみたい。
同じ双葉郡にいても知らないことが多い。じゃあ県外は？海外は？どうやったら伝わるだろう。	時間が止まったまま。
	いつでも遊びにきてね、と言ってもらった。夏休みにもう一度行ってみたい。

⑤ 夏休みプチ探究

夏休みの宿題として、プチ探究を実施した。双葉郡バスツアーを経て、自分の気になるものに対して何かしらアクションを起こすことを目的とした。右上の3つのコースから自分に合ったものを選んでもらった。成果物として、アクション結果をGoogle Formに入力することと、短い動画にまとめて提出してもらった。提出先は、生徒

達でも携帯電話から簡単にアップできるよう、Flipgridを使用した。生徒達はバスツアーで双葉郡に興味を持ち、自分たちの興味・関心をベースに自由にアクションを行った。生徒達の得意とする動画を使った表現にしたことで、生徒達も楽しみながら取り組むことができたようである。生徒が提出した動画はどれもクオリティが高く、双葉郡の魅力がより伝わるものとなった。

3つから1つ選んでアクションプランを作ろう

[A] 背伸びしてチャレンジ!
「未来創造探究」先取りコース

[B] コレってどうなってるの?
「疑問をタネに探究」コース

[C] とにかく動け!
「ひたすらアクション」コース



「ひまわり迷路」(広野町)



浅見川の水質調査(広野町)



「木戸川ゴミ拾い」(楡葉町)



(2) 成果

昨年度と比較すれば、今年度はコロナによる影響はうけながらも対面での実施が叶った授業が多数あった。予定通りに進めることができない部分も、Zoomを使ったオンラインでの授業や、Google Classroom、Flipgridなどを用いて柔軟に対応できたことが、生徒の学びをとめただけでなく ICT 能力の向上にも寄与した。

また、実際に双葉郡を自分の目で見たり、直接地域の方々と触れ合ったりするということの大切さを改めて再認識することもできた。

(3) 課題と展望

昨年度から1日かけてバスツアーを実施することで、双葉郡8町村全てに足を運ぶことができるようになった。しかしその一方で、時間的な制約も多く、じっくりとツアーすることができないという点が課題である。関わってくださる方も増えると共に、震災を直接的に体験していなかったり、体験していても記憶が定かではなかったりといった生徒も増えてきた。来年度以降はさらにコースを増やし、それぞれの地域をより深く学ぶ機会としていきたい。

2. 1. 2 演劇

本授業は、劇作家・演出家、芸術文化観光専門職大学学長 平田オリザ先生をはじめ、NPO 法人 PAVLIC より、劇作家・演出家のわたなべなおこ氏他多くの演出家、舞台俳優を講師として招聘し、「地域創造と人間生活」の課題発見・解決学習 Project Based Learning (PBL)として実施した。演劇を通して「多様な価値観を多様なまま理解する力」と「多様な価値観の共存」に向けて自分達が思考を深めることをねらいとしている。生徒全員が16班に分かれて演劇を創作し、演じた。

生徒達は課題を知る学習における双葉郡8町村バスツアーを通して、震災前と後の双葉郡の変容について話を聞き、地域の復興に向き合う。また、演劇の題材となる地域の課題を発見するために、事前に調べ学習をした後、地域の公共機関や商店、企業などを訪問し、フィールドワーク(FW)を行う。生徒たちは復興に携わる地域住民の内面に焦点を当ててインタビューを行い、学んだ内容を演劇創作につなげていく。演劇創作の中では、訪問先における復興に向けたありのままの姿や悩みを持ち帰り、議論しながら双葉郡の復興のための核心的な課題を見つけ出す。それぞれが置かれる立場の違いから生じる葛藤や対立など、複雑に絡み合う事象から、解決できない課題があることを認識する。生徒は発見した課題や学びを、その後2年次から展開される未来創造探究(探究活動)を通じて探究することになる。

(1) 目的

- ① 出身中学校を問わず、学校の所在する広野町の特色や課題の理解を深めるために、自分たちが設定した具体的な課題に基づき、地域住民や企業、公的機関、施設等への取材(FW)を実践し、地域についての正しい知識を身につける。
- ② 対話劇を創作することで、地域の様々な立場の方々の視点で物事多面的に見つめ、そこで出てきた課題と向き合い、2年次以降の未来創造探究での活動に繋げる。
- ③ 自分達の学習の成果について、特に伝えたい内容や相手を踏まえた有効な方法を確立し、校内外での発表を通して正しく伝える。

(2) 授業概要

		時間割	学習活動	講師来校
1	9月15日(水)	5・6	取材先を決める	
2	9月22日(水)	5・6	演劇オリエンテーション① / 取材準備	
3	9月29日(水)	5・6	演劇コミュニケーション② / 取材準備	
4	10月6日(水)	5・6	演劇創作のための取材	
5	10月13日(水)	5・6	演劇創作のためのFW	
6	10月20日(水)	5・6	演劇創作WS ①	○
7	10月27日(水)	5・6	演劇創作WS ②	○
8	10月28日(木)	終日	演劇創作WS ③	○
9	10月29日(金)	終日	演劇創作WS ④・中間発表会	○
10	11月17日(水)	5・6	演劇創作WS ⑤ ブラッシュアップ	○
11	12月8日(水)	5・6	演劇創作WS ⑥ ブラッシュアップ	○
12	12月14日(火)	終日	演劇成果発表会	○
13	12月16日(木)	5・6	演劇振り返り	

(3) 講師

平田オリザ(青年団主宰 劇作家・演出家)

わたなべなおこ(劇団あなざーわーくす主宰・劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC 代表理事)

森内美由紀(青年団・俳優、NPO 法人 PAVLIC)

宮崎 悠理(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、河野 悟(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

石本 径代(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、有吉 宣人(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

宮崎 悠里(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、植浦菜保子(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

北村 耕治(俳優、劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC)

(4) 対象生徒

1 学年生徒 96名 16 班編成

(5) 授業内容 (抜粋)

1 取材先を決める

演劇の班ごとに希望を取り、地域で様々な分野で復興に携わる方々の中から生徒達自身が取材希望先を選んだ。これまでお世話になった方々に加え、毎年地域との新たな繋がりも増えており、今年度は震災当時中学生だった方で、震災後に復興に携わる仕事に就いた方など、初めて取材を依頼した方もいた。

	FW先
1 班	鷲 周作さん(檜葉町・株式会社 J-Village)
2 班	松本佳充さん(双葉町・双葉高校元教員)
3 班	青木知里さん(東京電力福島復興本社)
4 班	下枝浩徳さん(葛尾村・葛力創造舎)
5 班	菅原文宏さん(富岡町・ホテルリーブス)
6 班	西村正夫さん、脇田伸吾さん (鹿島建設・中間貯蔵施設)
7 班	青木淑子さん(富岡町 3.11 を語る会)
8 班	鈴木謙太郎さん(木戸川漁協)
9 班	藤田 大さん(富岡町・鳥藤本店)
10 班	森雄一朗さん(檜葉町・ならはみらい) 森 亮太さん(檜葉町・喫茶ヤドリギ)
11 班	花井真里奈さん、大須賀勝之さん (東京電力福島復興本社)
12 班	清田彰一さん、水野静雄さん (鹿島建設・中間貯蔵施設)
13 班	平山 勉さん(富岡町・ふたばいんふお)
14 班	加井佑佳さん (東日本大震災・原子力災害伝承館)
15 班	秋元菜々美さん(富岡町役場)
16 班	木村紀夫さん(大熊町)

2・3 演劇オリエンテーション

まず4月に、チームビルディングのためのコミュニケーションWSを丁寧に行った(2.1.1 課題を知る学習)。演劇オリエンテーションでは、演劇を通して地域課題を知ることの意義について体験を通して学んでいった。身体を使ったゲームや、台本を使った短い演劇体験を通して、イメージを共有することの難しさや、人それぞれに価値観が違うことを楽しみながら学び、そこから福島の問題にも結びつけて考えた。震災後これだけふくしまに対するイメージが多様化してしまった今、正しいことを伝えようとしても言葉だけではイメージの共有は難しく、風評被害と闘うためには、伝え方を工夫しなければならない。その伝え方の一つとして「演劇」があるということ学んだ。



4・5 演劇創作のための取材・FW

演劇の題材を探す(地域の課題を発見する)ために、2回インタビューを行った。1回目は学校に来校いただき、時間をかけてインタビューを行った。そして2回目はFWとして生徒達が現地に赴き、インタビューで伺った場所を実際に見ることで、イメージの共有をするという形式をとった。



今年度で7回目となるこの取り組みだが、地域の方々の協力がなしには成立しない企画である。今回も様々な資料等を用意していただき、FWの際には生徒達により伝わるようにツアーを組んでくださるなど、伝え方を工夫してくださった。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。生徒たちは、事前に調べ学習の中で考えた質問内容を演劇コミュニケーションWSにて更に掘り下げたのちにインタビューを行った。ただ用意した質問をするだけでなく、相手が答えた内容からさらにストーリーを引き出すことができた。さらに、2回目に実際に現地を訪れ、語られた言葉とその場所を重ねて震災当時に思いを馳せることができたことは、その後の演劇創作に真摯に打ち込む生徒達の姿勢に繋がったと感じる。

6～11 演劇創作WS

昨年度に引き続き、NPO 法人 PAVLIC わたなべなおこ氏をはじめとする講師陣と共に、生徒の状況を見ながら授業を組み立てた。取材内容を基に少しずつ演劇を通してイメージを形にしていく工程を丁寧に行った。演劇創作においては、脚本を書かずグループで話し合いながらその場でシーンを創りあげていくエチュード方式を取り入れた。書かれた言葉に頼るのではなく、その場で生まれる表現を大切に、全員で合意形成を図りながら創作をすることで他者と協働する力を伸ばすことをねらいとした。実際に、どの班も全員で協力しなければならず、班の中でも様々な対立や分断が見られたが、どの班もそれらを乗り越え、誰一人取り残さない姿勢が見られた。

「演劇を通して地域の課題を表現する」という正解のない問いに対してグループで一定時間内に答えをだす過程では、自分自身、班のメンバー、地域の課題とも徹底的に向き合うことを意味している。粘り強く向き合い続けた生徒達にはこの一週間で大きな成長が見られた。何よりも、チームビルディングから丁寧にWSを行ってきた成果か、生徒達が協働作業を楽しんでいた。



中間発表会では教員が審査員として入り、地域課題がより多角的・多面的に見えてくるよう、作品の中で足り

ないところをアドバイスした。視点は以下の3つである。

- ① 取材対象の心理描写だけでなく、地域課題がきちんと描かれているか。
- ② 取材対象に寄り添いすぎて、物事を一方向から見ているか。きちんと相手の背景も描けているか。
- ③ 取材相手が何者で、どのような仕事をしているのかが劇を見て分かるようになっているか。

中間発表会でのアドバイスを受けて、多くの班が追加取材をした。例えば、ある班は休校になってしまった双葉高校の元教員にインタビューをした。震災後各地にできたサテライト校を1箇所集約する際のやり取りと葛藤を演劇にした。すでに避難先で生活を立て直した家族からは、また家族がバラバラになってしまうと責められ、県教委には保護者への連絡を急ぐように言われ、先生自らも被災者であり避難者でありながら、板挟みに苦しむ様子を演劇にした。中間発表会でのアドバイスを受けて、当時の県教委にも葛藤があったはずだと、追加取材をすることにした。取材には、震災当時、県の学校経営支援課にいた方が応じてくださった。当時の県庁の混乱の様子や、サテライト校を作る際の思いや葛藤を聞くことができた。どちらにも立場があり、大切にしなければならぬものが違うからこそ対立が起きてしまうということを知り、生徒たちはとても悩みながら成果発表会に向けて作品をブラッシュアップしていった。この作品については、TBS ラジオの取材でこの班の作品と創作過程について取り上げていただいた。

参考 TBS ラジオ「アシタのカレッジ」
澤田大樹記者による取材報告
2022/03/11 放送(2:10:00～の部分)



中間発表の最後には、プロの講師の皆さんによる演劇を鑑賞した。演劇プログラムを始めて7年目になるが、これまで生徒たちは講師が舞台上に立つ姿を見たことがなかった。これは演劇プログラムが成熟し、我々大人に余裕ができたことにより実現したものであった。最後の教室のシーンでは、担任をはじめとする有志の教員が、生徒役で舞台上に立つというサプライズを行った。演劇が学校全体の文化として浸透した成果である。何も知らされていない生徒たちは教員の登場に大いに湧き、最後まで集中して観劇を楽しんだ。生徒の感想には「演劇は恥ずかしいと思っていたけど、先生たちの本気の演技は格好良かった。」「伝えたいことが観客に正確に伝わるように、私も恥ずかしながら堂々と演じたい。」といった感想が多く、これから成果発表会に向けて大きな後押しとなったと思う。



1 2 成果発表会

本校みらいシアターにて、成果発表会を行った。16班

16 作品を4グループに分け、グループごとに生徒達による投票を行った。評価の観点は以下のとおりである。

- ①テーマ (広く見てもらいたいと思う内容だった)
- ②発想力 (オリジナリティがあり、ユニークだった)
- ③セリフ (心に響く、印象に残る台詞があった)
- ④構成 (話の流れ、組み立て方が良かった)
- ⑤演技 (迫真の演技、役になりきっていて引き込まれた)

また、FW先をはじめ今年度お世話になった方々にも案内を出し、発表をご覧いただき、フィードバックをいただいた。今年度はイラクで人道支援をしている高遠菜穂子氏にも来校いただき、最優秀賞、平田オリザ賞、校長賞、副校長賞の他に、高遠菜穂子賞を選出し、表彰を行った。

	班	タイトル	FW先
A	3	トリチウム	東京電力
	11	出発点	東京電力
	14	加井物語	大熊町
	5	ホテルリーブスができるまでの道のり	広野町
B	1	人生なんとかなる！	J-Village
	8	Suzuki 物語	木戸川漁協
	7	語り部	富岡町
	15	1 0	富岡町
C	9	大さんの過去と休日	富岡町
	10	覚悟	東京電力(略)
	6	福島の裏側	中間貯蔵施設
D	12	清田' s life with 水野	中間貯蔵施設
	13	富岡は負けん！	富岡町
	4	かづろうへ行こう！	葛尾村
	2	MANABU	双葉高校
	16	Don' t Forget	大熊町

特に衣装や舞台セットなどはなく、全員がジャージ姿で演じるのだが、それでも情景が伝わるのは、演劇が様々なものを受け手が補完して鑑賞する表現であるからだ。生徒たちは、椅子や机などの少ない小道具を上手に使って防波堤や瓦礫、家、会社などを表現していた。演劇は、舞台上に立つ演者同士のコミュニケーションだけでなく、舞台と観客の間のコミュニケーションも成立しないと上手くいかない。4月からの演劇WSを通して、生徒たちの中に、受け手を想像し伝え方を工夫するという能力が積み上がっていると感じた。この力は次年度の未来創造探究でも活かされるだろう。

なお、今年度は記録映像を撮影した。本校の演劇プログラムが時間をかけて形になり、形に残すことができた。今後、様々な場面で本校の取り組みを伝える上で重要な資料となった。東日本大震災時に4、5歳だった生徒達が、当時の大人達と丁寧に対話し、取材した内容を演劇にすることで経験を自分事として表現した16作品は、後世に残る貴重な記録となるはずだ。

各発表の後、観劇いただいた取材対象の方一人一人からコメントをいただいた。

「東電が抱える課題を大変分かりやすく表現いただいた。

我々の今後の活動においても意義のある時間だった。今後
も一緒に考えていきたい。」

「インタビューの中で皆さんと話した、震災直後の入社時
の『被害者から加害者になってしまう』という葛藤を丁寧に
描いてくれた。当時はかなり悩んだが、この演劇を見たこと
が1つの答えになった。」

「震災を経験して10年、自分がどんな道を歩んできたのか、
皆さんの作品を通して振り返ることができた。現在の仕事
に就いて2年目だが頑張ろうと背中を押された。」

「取材を受けながら、自分の語り部としての仕事を振り返
った。語り部をしていることに対する町民の受け止め方も
違う。クレームの電話が来ると身構えてしまうと話したが、
そういった方々の声を聴き、一緒に考えたら良かった。とい
う気づきもあった。」

「私の家は帰還困難区域で除染もしてもらっていない。生
きている間に帰れるかわからない。この学校は、色々な思い
を抱えながら休校せざるを得なかった5校の生まれ変わり。
それを是非覚えてほしい。」

地域の方々も、演劇を通して自身のこれまでを客観的
に見つめる貴重な機会となっている。更に、震災直後で
は考えられなかった、立場を越えた対話の場が生まれて
いる。震災から10年経ったからこそ話せることがある
と感じた。このプログラムが、生徒達だけでなく地域の
の方々にとっても有意義な時間となっている。

1.3 演劇振り返り

成果発表会を終えて、これまでのプロジェクト全体を
振り返り、個人として・チームとして自分達がどのよう
に成長したのかを言語化するWSを行った。生徒の感想
は以下の通り。

・人前に立つこと、意見を言うことが苦手で、私一人が頑張
らなくても何とかかなと思ってた。演劇はそれではダメ
だと気付かせてくれた。自分の知らなかった物事、人の一面
を見ることでたくさんの発見をした。地域も人ももっと知
りたいと思った。

・震災で大きく生活が変わってしまった人の人生や、想い
を、演劇を通して深く理解することができた。この演劇があ
ったことで、町ですれ違う人に「あの人はどんな人生を送
ってきたんだろう」と、人の生き方に興味を持つようになり
ました。そこが成長したところかなと思います。

・震災のことを沢山学びました。自分が思っていた以上に被
害が大きく、目に見える被害だけではなかったのだとここ
に来て学びました。私は県外から福島に来て、福島のため
に何が出来るだろうと考えたときに、スポーツの力で双葉郡
に勇気・元気を届けることだと思っています。福島で学ぶ以
上、震災のことを正しく伝えられる人になりたいです。

(6) 振り返りと評価

昨年度と同様に、合意形成のトレーニングとして、全
員で話し合いながらの作品創作を行った。台本を使用し
ないことで演技は自然になり、より観客に伝わる伝え方
ができた一方で、昨年度は生徒達の興味・関心が取材対
象の個人的な葛藤に集中してしまうという課題があった。
その外側を取り囲む複雑な構造や対立・分断を描くため、

今年度は中間発表でのアドバイスを意識的に行った。地
域課題をより多面的に捉えるため、相対する側の話も聞
きたいと、追加取材を希望する班も多く、それによって
作品が深まった。

演劇創作は探究に必要な論理的思考と批判的思考の
トレーニングの場である。論理的思考は、演劇を作るこ
と自体が論理的に情報を出していかないと相手に伝わら
ない。批判的思考は、時にはフィクションの力を使って
地域が抱える課題を掘り下げることだ。審査員の平田オ
リザ氏の言葉を借りれば、「探究」とは課題を探究するの
ではなく、「人間」と人間が作っている「社会」について
探究するものだ。人間の複雑さを深掘りすることが重要
である。取材をすると、どうしても取材対象に共感して
しまい、そのままに伝えたい！という気持ちが起るが、
そこで踏ん張って、その周りを取り巻く複雑な構造を深
掘りしてもらいたい。

福島で学び、原発事故、復興、トリチウム海洋放出問
題、様々なものをこれから背負わざるを得ない彼らが、
この不条理と闘うためには、大人の言うことを全て真に
受けるのではなく、批判的思考を持ってほしい。それが
演劇をつくる意味である。この経験を活かして2・3年
次の探究活動に生かしてほしい。

(7) 次年度実施への課題

地域で働く様々な方々の気持ちに寄り添うことができ
たことは大きな一歩ではあるが、やはり共感だけでは地
域の課題解決には至らない。震災時の年齢が低年齢化し
ている中、生徒達自身が地域の課題の本質に気付き、時
間を掛けてそれらを深掘りする中で基本的な知識をイン
プットしていく仕掛けが必要である。

※参考資料 「成果発表会の映像」

【平田オリザ賞】
15班「10」



【高遠菜穂子賞】
7班「語り部」



【学校長賞】
3班「トリチウム」



【副校長賞】
2班「MANABU」



【生徒投票最優秀賞】
16班「Don't Forget」



2. 1. 3 国際理解教育

本年の「地域創造と人間生活」は、キャリア学習を意識し、コミュニケーション力向上のためのスキル学習を土台として「自分を知る」、「地域を知る」、「世界を知る」の3本柱を軸として授業を構成している。「自分を知る」では、スタディサプリの活用やしくじり先生を通して、働くことの意義を考え、自己理解を図る。「地域を知る」では、フィールドワークを通して、双葉郡の現状と課題について知る・学ぶ授業を展開する。そして、「世界を知る」では、世界で活躍する外部講師を招聘し、世界における様々な課題を知り、生徒自身がグローバル社会の一員である自覚をもたせる (Global Citizenship Education)。

(1) 高遠菜穂子氏による国際理解講演会～概要～

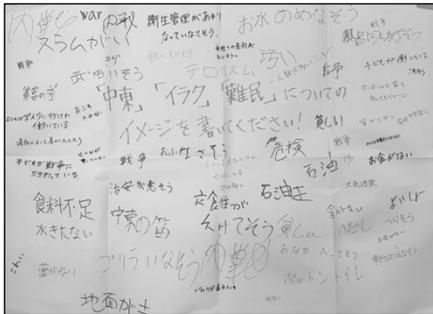
イラクで教育支援ボランティアに取り組んでいる高遠菜穂子氏に、『紛争地で起きていること～イラクが抱える課題事例から～』という演題で講話いただいた。

高遠氏の体験談を通して、地域が抱える課題を地域だけのものとして考えるのではなく、世界の平和や国際理解の意義を理解させることを目的としている。

- ① 日時 令和3年12月15日(水) 5, 6校時
- ② 講師 イラク支援ボランティア
エイドワーカー (フリーランス)
高遠菜穂子 (たかとお なほこ) 氏
- ③ 対象 本校1年次生徒、教職員

(2) 実施内容

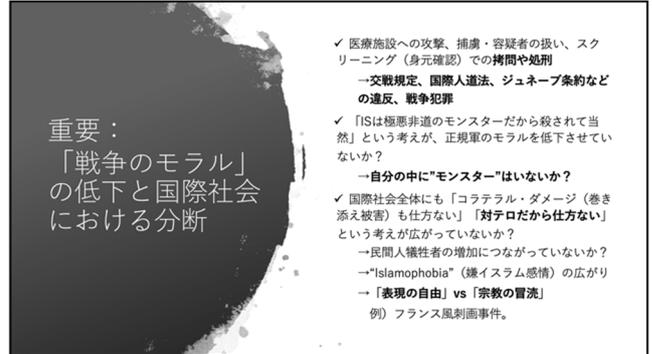
高遠氏には、前日の演劇成果発表会から参加していただき、審査員もしていただいた。発表会の際に、高遠氏から「中東、イラク、難民と聞いて、あなたが抱くイメージ」について自由に紙に書いてほしいという宿題があった。生徒達は壁に張り出された模造紙に自由にそのイメージを書いて



生徒達が演劇を通して学んだ地域課題の中に、分断や対立、福島に対する差別などがあり、それらの出来事に苦しむ地域の方々へ心を寄せてきた。そんな生徒たち自身の中にも少ない知識と偏った情報により、中東・イラク・難民に対する差別を作り上げてしまっているということを知った。「物事は多面的である。少ない情報から得るイメージが全てとは限らない。偏見や差別はそこから始まってしまいがち。そして、それらは戦争の素なのです。」という高遠氏の言葉は、生徒達に深く刺さったはずである。

イラク支援を事例に、復興の現状と課題についてお話いただいた。戦争と難民の問題について、「人道危機」と報じられる時には大抵事態は泥沼化していることや、報道は「点」でしかなく、時々しか出てこない点と点を繋げて結論を出すのはとても危険であること。大切なのは点と点の間にある経過を知ることだということを知った。世界で起きていることをなるべく自分の力で知ろうとすることや、そのためには日本のメディアだけでは情報は圧倒的に足りず、海外のメディアに頼るしかなく、それ

には英語が絶対が必要であることなどを生徒達に訴えた。



また、広い国際社会の中で平和に共存していくためにはお互いをもっと知らなければならないことや、非暴力の解決方法は対話によってしか生まれないという結論から生まれた高遠氏の現在の活動 (絵本の読み聞かせや演劇WSなど) にも触れ、本校で行っている演劇プログラムの感想も交えながら、一緒に世界を平和にしていきたいと思いますとお互いの活動を称え合った。



(3) 生徒の感想

- ・日本は平和だ、戦争に関わりはないと心のどこかで思っている節があった。海外に目を向けるのは勿論、日本についても知るべきだと思った。
- ・事前に高遠さんがイラクで拘束された時の記事を読んだ。日本国民の激しいバッシングがあったと知った。今回お話を聞いて、それが無知ゆえの行動だと思った。もっと自ら世界の問題に目を向け、批判するにもしっかりと知識を身につけた上で行動したい。
- ・自分がどれだけ世界に対して無知なのか思い知らされました。日本、そして福島への偏見があるように、中東やイスラム圏への偏見・差別が少しでもなくなるように、世界の現状を自分事として理解することはとても必要なことだと思いました。

(4) まとめと今後の展望

最初に行った宿題は、偏った知識によって生まれる偏見を自分事に捉えるという、若干荒っぽいやり方ではあったが、生徒達は自分達の中にある偏見に気付くことができ、衝撃的な体験となった。その後の講話は、イラク復興と双葉郡の復興を重ねながら聴くことができた。ここで感じたことを受けて、まずは身近な社会から変えていけるよう、生徒の能動的市民性を育てていきたい。

2. 1. 4 探究接続

二年次から始まる未来創造探究とのスムーズな接続を図るためのプログラムを年度後半に実施した。昨年同様、コロナによる影響は大きく、講師を招聘しての講義やワークショップ、対面による活動はできず、オンラインによる対談や、探究への導入段階となるような夏季休業中の課題に取り組みせるといった機会を通し、探究への意識づけを図った。

(1) はじめに

1年次で履修する地域創造と人間生活は、二年次以降の未来創造探究への準備として位置づけられる。地域課題等を未来創造探究につなげ、より深い学びを可能にすることができる。一方、年々、先輩方が行ってきた探究活動がより多様化、発展化していることから、探究活動自体への不安を持つ生徒も少なくない。この実態を踏まえ、次のようなプログラムを実施した。

(2) 実施内容

① 2月2日（水）テーマ検討ワークショップ

探究テーマとは何か、という確認をしたうえで、前述のとおり、探究への不安や疑問を少しでも解消し、1年次での取り組みを円滑に探究に生かせるよう設定した。

事前にアンケートを実施、探究について思っていること、印象をあげさせた。多くの生徒が、何をしてよいかわからない、先輩方のような探究ができるのかどうか自信がない、双葉郡に限定したテーマでないといけないのか、といった不安をあげていた。そのような生徒の声をもとに、探究の意義の再確認と、卒業生、カタリバスタッフとのオンラインによる対話を行ったのが本事業である。

■みんなと考えたい問い

そもそも「探究」とは？

探究をして良いことあるの？

未来創造探究って何？
地域って何？

探究を進めるにあたって大切なことは？



初めに担当教員より探究活動の意義や、2年次・3年次へのつながり（深化）について確認した。その後、担当教員、卒業生（4期生 M・K さん）、カタリバ横山氏の三者対談へと進み、M・K さんの探究へのきっかけやその後の取り組み、その中で自分がどう変わっていったかという内面の変化までを語っていただいた。まとめとして、M・K さんは後輩たちに「身近なところから始めてよい」「そこで生まれた興味と地域の課題が最終的に結びつくこともある」など、経験に基づいた道筋を示していただいた。

(3) 成果

生徒からは「探究活動が身近に感じられ、不安が軽減された」、という旨の意見があがり、非常に前向きなかたちで終えることができた。授業後にはさらに質疑の時間を設け、多くの生徒が、具体的に自分のやりたい探究に関するアドバイスを求めるなど、制限時間いっぱいまで質問をしていた。これから探究へと進むこの時期に、より具体的な流れを示せた、という点で有意義であったと思う。

(4) 課題と展望

新型コロナにより、開催時期の調整が難航する事態もあるが、対面・オンライン問わず、具体的な指針を生徒に示し、適切な時期に開催できることが、本事業の大きなポイントとなると目される。

2. 1. 5 キャリア教育

本校の地域創造と人間生活（産業社会と人間）の3つの柱「自分を知る」「地域を知る」「世界を知る」は、生徒が自らのキャリアを考えるために重要な要素となっている。3本柱を通じて、年間を通して生徒には自らのキャリアについて考えられるようにしている。特に年度後半の時期に、高校卒業後の進路のみならず、将来どのような生き方をしたいのかを考えるきっかけとなる機会を設定した。

(1) はじめに

演劇のためのWSと重なる部分もあるが、オンラインでのPAVLIC講師の講話、並びに生徒同士での対話を通し、自らのキャリアについて考えさせるプログラムを実施した。「人生グラフ」作成のプログラムにおいては、生徒自身が自らの人生を振り返り、他者に自らの人生を話し、また他者の「これまで」と「これから」を聞くことで、自分のキャリアプランニングのきっかけとなる機会となった。

(2) 実施内容

① 2月3日（水）しくじり先生

昨年度に引き続き、本校教員による講話、対話を行った。対話に参加してもらった教員には、人生の転機、苦しかった・辛かった時期などを具体的なエピソードとともに語ってもらった。これからのキャリアに向けて一歩を踏み出せないでいる生徒が、自分から一歩を踏み出せるよう、教員には失敗を含めた踏み込んだ自己開示をしてもらった。その結果、生徒は教員が経験した失敗や挫折から奮起に勇気をもったり、同じような悩みを抱えていたことに共感したりしていた。



② 2月2日（水）マインドマップ講座

内山雅人氏による、実技を交えた講話をオンラインで行った。マインドマップの具体的な活用方法、それをもとにどのような効果が得られるのか、などを教授いただいた。探究活動に向けた、各自の思考の整理、視覚化を目指したものであるが、日ごろの学習方法といったところにも活用できる、という点でも、生徒たちは興味を持ち、また熱心に取り組んでいた。



(3) 成果

教員への印象の変化、同じ悩み、似た性格を感じ取り親しみやすさを感じたほか、これからの動き出し（カタリバの活用や進路意識の具体化）が見られた。特に、自らが失敗を恐れず、挑戦を続ける姿勢を感じられたことは、成果として大きいと思われる。

(4) 課題と展望

キャリアへの取り組みは、3年間継続して行われるものであり、適切な時期に行われなければならない。進路指導部や探究活動とのつながり、将来への見通し、今後の社会変化なども踏まえ、教員、スタッフが柔軟に対応できるか、という点が課題といえる。

2. 1. 6 「未来創造探究への接続」の観点から見る「地域創造と人間生活」

本校では本事業の指定を踏まえて、令和3年度より学校設定科目「地域創造と人間生活」を開講した。これまでは「産業社会と人間」が開講されていたが、時代背景に合わせた刷新、また2年次への接続強化を目的として、より3年間のカリキュラムを有機的に繋げていく意図を込めて新たに開講した。

各プログラムの詳細は各頁に任せ、本頁では2年次から始まる「未来創造探究への接続」という観点から見た際の要素を記述する。

(1) 「地域創造と人間生活」について

「産業社会と人間」は総合学科の課程では入学年次の必須科目となっているが、指導要領上では「勤労観、職業観の育成」や「各教科・科目の履修計画の作成」が大きな目的となっていた。これまでの本校における課題として、2年次から始まる「未来創造探究」への接続の弱さが挙げられていたこともあり、科目の目的を再整理する意味も込めて、本科目を新たに開講した。

(2) 複眼的視点から課題の本質を掴む「クリティカル・シンキング」

今年度の演劇プログラムでは、追加インタビューを行った班もあった。特に最初にインタビューした人とは異なる立場にいる人の話を聞いた班もあり、複眼的視点から地域の有り様を観察している様子が見られた。2年次の未来創造探究で地域課題解決の実践を行っていく上で同様の観点は重要であると言える。地域や社会で起きている問題の原因の多くは、多様な立場の人が関わっており複雑である。その中から課題の本質を掴もうとする思考（クリティカル・シンキング）を育むことに繋がっていると考える。

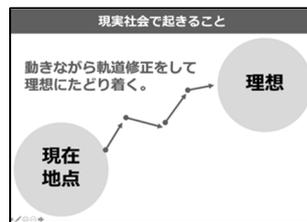
(3) 解のない問いに向き合うための学習姿勢「AAR サイクル」を育む

2年次に控える未来創造探究ではいわゆる「解のない問い」に向き合うこととなる。机上の空論で終わらせず、複雑な地域社会での実体験を通して学ぶこととなるため、想定外のことが起こる。その際に求められる学習姿勢が「AAR サイクル」である。AAR サイクルとは「Anticipation＝見通し」「Action＝行動」「Reflection＝振り返り」の略で、「OECD ラーニング・コンパス 2030」で提唱されている学習姿勢である。精緻な計画を作成・実行していきながら、仮説を持ちながら試行錯誤や軌道修正していきながら、目標へ近づいていく。

ただ、生徒はこの学習姿勢に慣れていないことが多く、

2年次では例年、「うまくいくか分からないから実践できない」といったような様子が一定数見られた。

「地域創造と人間生活」では、AAR サイクルを定着させるため、「プチ探究」や「しくじり先生」を実施し、「まずは実践に移すこと」や「思い通りにいかなかった経験から学ぶこと」という体験を図っている。

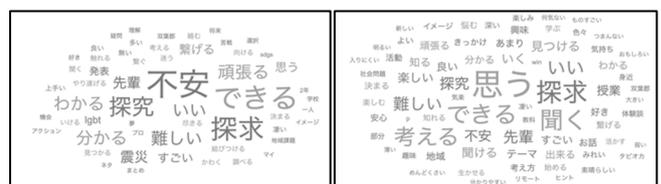


プチ探究において、
失敗は存在しない

(4) 年次横断化によるシームレスな探究テーマ設定

これまでは年次で区切りとなるため、本来繋がるはずの1年次で取り組んだ学習内容が繋がりがづかった実情があった。そこで昨年度より、2年次から始める探究テーマ設定を数ヶ月前倒しして、1年次から「プレオリエンテーション」を開始している。自身の気になる Will/Need キーワード（マイキーワード）の洗い出し、初期調査の基となる「小さな問いづくり」までを行い、あえて学習内容を年次で区切らないことで、シームレスに接続させようとしている。

また探究テーマ設定までの過程を丁寧に踏めることにより、2年次に臨む上での不安や疑問が解消される様子も見受けられる。



※左：プレオリエン前の感想／右：後の感想

右の方が好意的なワードが増えている

2. 2 未来創造探究（2年次）

2～3年次の「総合的な探究の時間」では、地域の問題の解決に向けた実践プロジェクトを創出する。本校で「未来創造探究」と呼ぶその授業において、生徒は自らの興味関心に従い、「原子力防災探究ゼミ」、「メディア・コミュニケーション探究ゼミ」、「再生可能エネルギー探究ゼミ」、「アグリ・ビジネス探究ゼミ」、「健康と福祉探究ゼミ」、「スポーツと健康探究ゼミ」の6つからひとつのゼミに所属して探究活動を行う。オリエンテーションでは自分の興味・関心（Will）や地域の課題（Need）について考えたうえで、ゼミ選択を行った。

2. 2. 1 探究オリエンテーション

（1）はじめに

本年度は「問いの設定」と「調査方法」を年度当初の主な目標とした。まず、探究を進める上で大変重要な「問いを立てる」練習に重きを置きながら、自立して調査を進めることができるように、学校図書室での文献の検索方法やインターネット検索時の注意点等について情報提供を行った。

（2）実施内容

まずは問いのワークから始めた。前年度担当者からのアドバイスにより、探究を進めるにあたって一番必要となるのが、「問いの設定」ということであった。高1年次の後半から、少しずつ自分のテーマについて考えてはいるが、それを問いの形で整理しないことには、探究が進まない。「問い作りブラッシュアップ」と称し、まずは「閉じた問い」と「開いた問い」を行ったり来たりしながら、できるだけ多くの問いを作る練習を行った。題材としては、高1年次の最後に行った「ヒューマン・ライブラリー」という地域で活躍する人のお話を聞いた際に残してあったワークシートを元に、自分が興味ある内容に絞り、それを別の生徒と議論を重ねながら、問い作りを行った。

次に行ったのは、「調査の方法」についてである。「問いの設定」の次に大事になってくるのが、調査アクションである。これも前年度担当者からアドバイスがあり、「調査する」というと生徒は安易にインターネットに頼る傾向があり、書籍等の文献を参考にすることが少ないという指摘があった。そこで、今年度は「問いの設定」がある程度できた生徒から、学校図書室での文献検索の方法や、インターネット（特にGoogle検索）検索時の注意点について話をした。特に強調した内容としては、文献調査とインターネット調査それぞれのメリット・デメリットである。安易にインターネットに頼る危険性と文献調査の信頼性の両面を伝え、合理的な調査方法の使用を推奨した。ちなみに、この時期はちょうどゴールデン

ウィーク直前で、休暇中の課題として自分の探究テーマに合った文献を1冊選び、その報告をするというのを課題とした。

ちなみに、この「問いの設定」と「調査方法」のワークが終了したのち、自分の興味関心に基づき、6ゼミ（「原子力防災探究ゼミ」、「メディア・コミュニケーション探究ゼミ」、「再生可能エネルギー探究ゼミ」、「アグリ・ビジネス探究ゼミ」、「健康と福祉探究ゼミ」、「スポーツと健康探究ゼミ」）の担当者と面談し、所属ゼミを決定していくという流れになる。

（3）成果

オリエンテーションとして問いのワークをすることで、探究テーマについて深く考えるきっかけを作ることができ、その後のゼミ選択への円滑な移行に繋がった。また、調査方法特に文献調査の薦めにより、本を読もうという意識が少し向上したようである。

（4）課題と展望

この年の12月に宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校に視察をした際、担当者の方から「探究が進むのは問いのワークの際の逡巡の後に爆発した時です」という言葉が脳裏を離れない。本校では問いのワークをそこまで突き詰めてやらなかったが、とことん問いと向き合うことの大切さを、後から感じている。本校と連携している早稲田大学の研究員の方も「良い研究ができるかどうかは、納得いく問いが立てられるかどうかです」という話に通じるところがあり、改めて問いの大切さを感じた。これは生徒だけでなく、生徒の伴走者となる各ゼミの担当者についても同様に、問いの大切さをいかに共有し、各ゼミ担当者も生徒の探究に関連する問いを磨くために伴奏できる仕組みや環境を整えることが大切だと感じている。

2. 2. 2 進路探究 キャリア学習

本校の「未来創造探究」は、水曜日の5・6校時と木曜日の3校時に設定されている。木曜日の授業は、探究に関する知識のインプット学習と進路に関する学習の2つの側面で行われた。インプット学習については、主に福島の抱える課題を社会科学的及び自然科学的な観点から捉えた。また、進路に関する学習については、小論文や志望理由書、セルフエッセイ作成を通じ、自分の進路について深く考える時間とした。

(1) はじめに

今年度は水曜探究2時間と木曜探究1時間の連携・往還を深め、探究と進路については教科学習の意欲が高まるよう、関係部署による連携を綿密に行った。

(2) 実施内容

前期（4月～9月）の前半は、まだゼミの所属や探究内容も明確ではないため、地域の課題として福島や日本が抱えている課題を取り上げ、水曜日5・6時間目で各自が行う探究活動における、テーマ設定・問い設定の助けとなるよう、授業内容を設定した。

例えば、社会科学的な視点からは、処理水の問題、メディア報道のあり方、過疎化・高齢化問題、自然科学的な視点からは主に放射線について理解を深め、それについて簡単な議論も行った。

また、前期の後半においては、探究に行き詰まる生徒も散見されたタイミングを見計らい、SDGs という観点で、全世界的な課題を復習しつつ、日本の課題の特徴を捉え、また、課題は独立して存在するのではなく、様々な問題と関連を持ちながら存在することに目を向けることで、視野を広く持たせ、より自分の興味関心のある課題について理解を深めるきっかけを作った。

後期（10月～）になると、生徒の探究テーマ・問いもある程度決まり始め、解決のためのアクションも少しずつ実践されるようになり、各生徒が自分なりの目標・方針を定めて進み始めた。そこで進路探究では、生徒の進路意識の向上を目指し、まずは小論文および志望理由書作成の講座受講、模試受験およびリライトによる文書作成を行った。四年制大学・専門学校進学希望者には小論文を、就職希望者には志望理由書の作成をしてもらい、まずは実際の文書作成の練習を、数週間に渡って行った。

志望理由書の作成においては、業者が提供する自己診断適性検査の結果も参考にし、自分の適性（コンピテンシー）・長所等を客観的に見つめることで、深い自己理解に努めさせた。

また、年が明けた後期の後半（1・2月）においては、

年度末に近づいていることを踏まえ、進路意識をより明確にしていくために、セルフエッセイの執筆に取り掛かった。セルフエッセイとは主に探究活動を通じた自分なりの生き方・在り方について、「書き手自身の個人的な知識や体験を基にし、読み手を説得するような、自分なりの意見を所定の書式に従って書くもの」である。セルフエッセイは昨年度まで3年次で書いていたが、進路意識の向上と、3年次4月における中間発表会に向けた準備の一環に位置付けたため、今回は2年次で実施した。

(3) 成果

水曜日5・6校時との連動を毎回意識したカリキュラム・マネージメントができた。生徒の学習の様子や学期・行事を十分に考慮しつつ、単発あるいはその場限りの内容ではなく、探究活動を深め、進路意識を高めるのに資する内容を提供できた。

特に、セルフエッセイの作成においては、偶然ではあったが、後期の期末考査（学年末考査）が終了し、毎年本校で行われる3.11 東日本大震災追悼式の時期に近い時に実施したため、想いを新たにして書く各生徒も少なくなかった。

(4) 課題と展望

木曜日3校時のゼミ担当者の意識がやや低くなってしまっているのが問題である。水曜日5・6校時は各ゼミ主導なので、主体的な運営がなされる一方で、木曜日3校時は年次（学年）主体になるため、ゼミ担当者の意識が薄れる傾向が出てしまう。進路希望を把握している担任と、専門的な観点から探究内容を把握しているゼミ担当者とは、縦と横で紡ぐ網の目のように生徒理解に努めていくことは、大きな化学変化をもたらす可能性に満ちているため、このつながりを多く作ることができるような戦略を様々な場面で考えていくことが重要であろう。

2. 2. 3 ① 原子力防災探究ゼミ

今年度の2年次は23名の生徒が原子力防災探究ゼミとして活動を行なった。例年に比べ、グループで同じテーマに取り組むという形態が減り、個人で設定したテーマに取り組む者の割合が多くなっている。地域コミュニティの再生を中心とした、原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究するというのがゼミ全体のテーマであるが、ゼミを選択してきた生徒の興味・関心、課題の捉え方は必ずしもそれとは合致しなくなってきている。

(1) はじめに

今年度、原子力防災探究ゼミでは、生徒個々の興味・関心を出発点としたテーマ設定を重視した。一般的に地域の課題だと認識されているものを、半ば自らの興味・関心が地域の抱える課題の解決にどのように生かせるのかという視点で、多くの生徒がテーマ設定を行なっている。例年以上に、テーマは細かく分かれ、23名で18プロジェクトが進行している。複数で取り組んでいるプロジェクトも2名がほとんどで、それ以外は個人でテーマを設定して活動を行なっている。

(2) 実施内容

生徒個々の興味関心に基づくテーマということもあり、教員側からの一斉講義形式でのインプットはあまり行なわず、基本的に生徒の活動に対する教員のフォローは個別に行なっている。生徒ごとの担当教員も設定していない。生徒は毎回、その日の自らの活動を振り返る時間をとっている。それにより、時間の経過とともに自らの探究活動がどのような経過をたどってきたかを後に確認できるようにしている。また、振り返りにより、次の活動でこういった取り組みを行うかの見通しを立てる。

生徒相互が地域の課題や自ら設定した課題についてゼミ内で意見を交換する機会を確保したいと考え、テーマ設定の時期には、自らの理解が不足しているキーワードを自覚する機会を設けたり、テーマ設定後にはお互いのテーマやプロジェクトについて共有したりする機会を設けている。

(3) 成果

テーマ設定はお互い異なるが、お互いのプロジェクトに協力しあう生徒の姿も見られる。個々で設定したテーマはぶらさずに、仲間の助けが必要なときや、情報収集として有益な機会には、テーマを超えて協働している。具体的には、地域の子どもたちを集めたイベントを開催する際に、ゼミ内の別のテーマで探究を行なっている生徒が当日の運営に協力をしたり、地域の方へのインタビ

ューを行う際に一緒にアポイントメントをとり、同じ機会にそれぞれのテーマに関する情報収集を行ったりという動きである。

また、調査のために学校の外へ積極的に出ていく姿や、継続的に地域の方々の協力を得る姿は例年以上に多く見られた。学校外での活動については、コロナの影響でやりにくかった時期もあるが、そうした時期においてもオンライン等を積極的に活用し、地域の方々と繋がろうと努めていた。地域内でもやや遠方の方とのコミュニケーションについてもうまくオンラインを活用できている。

他のゼミの知見を生かして地域課題の解決にあたりと、ゼミをまたいだ協働も見られている。

【主なテーマ・プロジェクト】

①子どもたちが自信を持って自分の気持ちを表現できる地域づくりを目指し、チアを活用した居場所づくりの探究を行っている。地域の小学生向けの5回シリーズのチアスクールといわきFCホームゲームでの披露の場を組み合わせた「地域チアアップチャレンジ」を企画・実践した。双葉郡内の小学生14名が参加し、女子児童の習い事が少ないという双葉郡の潜在的ニーズも明らかとなった。子どもたちが自信をもって表現する力の育成や、チアを通じた地域のつながりの創出を目的として活動しており、その効果もアンケートで測定し、有効性を確認している。現在、次なる取り組みを検討している。

イベント日程 /

第1回 10月9日(土) 9:30~11:30 練習会ふたば未来学園 地域共同スペース
 第2回 10月17日(日) 9:30~11:30 練習会みんなの交流館ならはCanvas
 第3回 10月24日(日) 9:30~11:30 練習会@富岡町文化交流センター学びの森
 第4回 10月31日(日) 時間未定 11月8日にあけのりハーサル予定
 第5回 11月3日(水・夜) Jヴィレッジで行われる「いわきFCvs東京蹴球」の試合前パフォーマンスに参加!

【申し込みについて】

①右のQRコードを読み込む
 ②フォームに必要事項を記入
 ③申し込み完了! (後日確認メールをごちから返信します)

プロジェクトについて

「Let's cheer up futaba project」とは、ふたば未来学園中学校の生徒がよりよくなるために、ふたば未来学園の内外で、地域の子どもたちを集めて、地域の子どもたちを応援したいという気持ちを持ってきてね〜

新型コロナウイルス 対策実施!

チアダンスが楽しくなるみんなへ
 WEBで見るのオススメ!!
 申込みと参加の両方見られるよ!

練習の持ち物

動きやすい服装・水分
 ・運動靴(中履き) ・タオル
 ・筆記用具
 ・チアを楽しみたい方の気持ち!!

その他

この練習会にごいざなわれ、お楽しみに
 "cheer futaba@gmail.com"に
 ご連絡ください
 皆様のご参加お待ちしております。

主催 Let's cheer up futaba project
 責任者 ふたば未来学園中学校2年 松岡優希君(cheer.futaba@gmail.com)



「Let's cheer up ふたば!!」プロジェクト活動における方針



②原子力防災探究ゼミと再生可能エネルギー探究ゼミのメンバーが協働でプロジェクトを行なっている。再生可能エネルギーを用いたイルミネーションの設置により、地域の安全や安心をはじめとした、地域の明るさを取り戻す探究を行っている。原子力防災探究ゼミに所属する生徒が1年生の時に、学校を明るくしたいと学校敷地内のクリスマスイルミネーションを提案して、実行したことがきっかけとなっている。昨年の3月11日には、広野町の『3.11 復興 10周年を心に刻むライトアップ&祈りのスカイランタン』に参加してライトアップによるまちづくりの可能性を感じるとともに、ボタン電池等使い捨ての電源ではなく、持続可能な社会に適した、電源の工夫も出来ないか考えていた。

一方で再生可能エネルギー探究ゼミに所属している生徒3名は、地元広野の川を生かした小水力発電の可能性に関心を持ったり、浪江町の水素ステーションを見学したりして、再生可能エネルギーを生かした社会づくりを考えていた。

この両者が出会い、再生可能エネルギーによるライトアップで町の明るさを創出しようと取り組んでいる。取り組みに際しては、地域の方々から現在家庭で使っていないイルミネーションの寄付を受け付けるとともに、広野町、いわき市のNPOと連携して、それらの団体が主催するイルミネーションイベントへも協力するなど、お互いに共同する関係を築きながら着々と実践を重ねている。



(4) 課題と展望

本ゼミでは、原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究することがゼミ全体としての大きなテーマとなっている。具体的には、廃炉の進め方や汚染水の処理方法等、事故後の様々な処理について地域がどのように関わるべきなのか、避難や期間の過程で生じた対立や分断をどのように解決するのか、避難により断絶してしまった地域コミュニティをどう復活させるべきかといった課題に取り組み、解決に向けて実践することを想定していた。

実際には、地域の分断や地域コミュニティの再生に向けた取り組みは見られるが、廃炉や事故後の処理についてテーマにする者は現在ほとんど見られない。生徒の興味・関心を出発点としてテーマを設定しているため、仕方がない面もあるが、この地域が今後数十年と向き合っていく廃炉や事故後の処理について生徒らが関心のない現状については、危機感を抱くところでもある。一方で、各種団体のワークショップ等で廃炉等について学んだり、同世代の仲間と対話したりした生徒には、「これまで知らなかったり、避けてきただけで、廃炉や事故後の処理はこの地域の課題であり、自分たちの声も届けなくてはならない」といった感想を持つ者も少なくない。これらについて生徒らが学ぶ機会が乏しいという現状を改善していく必要がある。

また、「活動」したことで満足することなく、その活動が、理想の地域や、地域の課題解決にどのように資するのかを常に確認することはゼミ全体として徹底したい。

2. 2. 3 ② メディア・コミュニケーション探求ゼミ

メディア・コミュニケーション探求ゼミ（以下MCゼミ）は、双葉郡を中心とした地域が抱える課題に対し、情報の発信（デジタルマーケティング）や過去の記録（アーカイブ）といった手法を通して、その解決に寄与することを目的としている。その取り組みには、地域の魅力や特徴を効果的に発信して興味を抱いてもらうという外的視座、震災等のつらい経験を教訓として地域で共有し同じ苦しみを繰り返すまいという内的視座の両面が想定される。

MCゼミを構成するメンバーは30名で、その内訳はアカデミック系列生20名（女16、男4）、スペシャリスト系列生10名（女9、男1）となっている。一人で活動に取り組む者も多いが、テーマの近いもの同士、またはテーマの方向性が違うもののその手法に類似点があるもの同士でグループを形成し、各々のペースで探究活動に励んでいる。

（1）はじめに

震災について「ほとんど覚えていない」と本ゼミ生の大半が語る。これは、震災当時彼らが未就学児であったことに起因する。これまでの探求では、自身の経験した「ストーリー」に基づいたテーマ設定が主であったが、これまで家庭や学校で得た学び・双葉郡の地域課題について考察した高校1年次での活動などによる、客観的知識に基づいたテーマ設定が顕著となる。伴って、彼らに寄り添う我々アドバイザーの関わり方も、柔軟な変容が求められる。



前述のことに由来して、本年は、震災・原発事故からの復興や風評被害の払拭といったテーマが減少し、双葉郡の魅力の開発・発信や、他地域も抱える課題に対し双葉郡を活用して解決に取り組むなど、多様なテーマが設定されている。一見立派なテーマであっても、考察が表面的である可能性に留意し活動を進めた。

最後に、今年も続いた新型コロナウイルスによる制限は、本ゼミにとって非常に悩ましい課題である。現場に足を運び、様々な人間と関わりあうことが必要条件であるため、我々をはじめ彼らも機会の確保に非常に苦慮している。その制限の中で得た貴重な機会に、細かい分析と深い考察を加え、活動を進めているところである。

（2）実施内容

【Ⅰ：ゼミ選択期】

年次全体で取り組んだ「問いづくり」によって、ある程度テーマの構想が見えている状態でのゼミ活動スタートとなった。構想はあるものの、迷いのある学生も多数いたため、一人一人と丁寧に対話しゼミとの適切なマッ

チングを模索した。その結果、当初40名弱集まった本ゼミであったが、他ゼミへの異動により、現在の30名体制となった。

【Ⅱ：導入期 ～指定課題の調査アクション】

集まった彼らの想定しているテーマは幅広く、双葉郡の魅力発信という本ゼミらしいものがある一方で、商品開発や楽器演奏・古着活用など、必ずしも震災というテーマと直接結びつかないものが散見された。そのため、まずは本ゼミが想定している活動に目を向けてもらうべく、こちらが指定した課題についての調査アクションに取り組ませた。指定課題と選択した人数は下記である。

- | | |
|----------------|------|
| ① 「メディア」とは | 6名選択 |
| ② 「コミュニティ」とは | 3名選択 |
| ③ 「アーカイブ」とは | 8名選択 |
| ④ 「風評」とは | 7名選択 |
| ⑤ 「双葉郡の食品」について | 6名選択 |

調査結果は、パワーポイントなどのスライドを用いた「プレゼンテーション形式」で発表することとした。これは、収集した情報を他者に伝えることで、知識を根本的に理解してほしいという願いと、探究発表会に向けた練習もかねての取り組みである。発表はグループで行ったが、模範的であった生徒1名を選出し、全員の前で発表させて共有した。



【Ⅲ：テーマ決定期 ～自由課題の調査アクション】

前述の活動を踏まえ、テーマ決定に当たっては「双葉郡」というキーワードに触れるように指示をしたうえで改めてテーマを再構成するよう求めた。各々の設定したそれらのテーマに基づいて、自由課題の調査アクション

に取り組ませ、指定課題同様にプレゼンテーション形式での発表により、お互いの学びを共有した。この場面で発表させた背景には、調査アクションの推進はもちろんであるが、科学的エビデンスに基づいた説得力ある

論を構成する経験値を高めるという目的も内包している。分科会形式での発表の後、各分科会で代表者を選出し、代表者のみ全体の前で発表させて共有した。

＜テーマの決定＞

例年取り上げられる風評の払拭や後世への東日本大震災の伝承に加え、地域の魅力をアニメや動画で発信する活動、さらには女性の生理問題やフードロス問題・ゴミ問題などについて双葉郡を舞台に解決していく活動など、彼らの個性が顕れる幅広いものとなった。

【IV：活動前期 ～解決アクション】

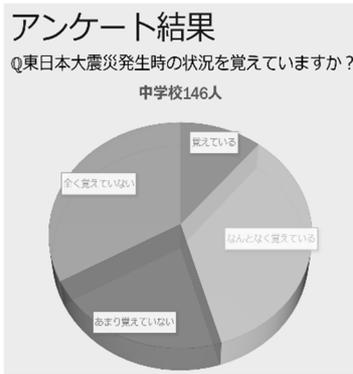


ここから、各々の探究活動が本格化する。効果的な解決方法を模索するためアンケート調査を行う者、発信するための絵本製作や調理を行う者、地域の魅力を見つけるために様々な

地域施設を訪問する者、自身のテーマに関するスペシャリストとの繋がりを得る者など、テーマの解決仮説を得る活動が多く見られた。また、テーマの類似性などからグループの解体・離脱なども積極的に行われた。

【東日本大震災・原子力災害伝承館 訪問】

本ゼミ生全員で、東日本大震災・原子力災害伝承館を訪問する機会をいただいた。そこでは、語り部さんの体験談の聴講と館内視察を行った。多様な展示物を網羅するには時間の制約が大きかったため、事前に館内の情報を共有し、自身のテーマに沿った観覧コースを予め絞ったことで、各々が有意義な時間を過ごすことができた。これをきっかけに、テーマの再構築を行う学生もいた。



(3) 成果

【A：地域課題への理解】

自ら調べ、外部の方とコミュニケーションをとり、考察を続ける中で、これまで得てきた地域課題に関する知識が表面的であったことに気づくことができたようだ。特に、双葉郡8町村が震災からの復興や風評の払拭、地域の魅力発信のために様々な取り組みをすでに行っていること、他方では自分のテーマに関して先行的に実践している方がたくさんいることなど、驚きであったようだ。

【B：課題解決への実践】

活動前期である今年度でも、積極的に解決アクションを行う学生が見られた。例えば、生理問題について取り組む学生は、校内のトイレに生理用品を設置して意見を集めた。アニメで聖地巡礼と題したチームは、作成したキャラクターをSNSで広く一般に拡散し、名前の公募を行った。ここまでの進捗がなくとも、テーマに関するプロフェッショナルと繋がり、先方の活動に参画するなどして解決への道を歩み続けている。

【C：学生の資質】

数回行った発表を通し、得た知見について論を整えアウトプットする能力が身についた。また、活動が進むにつれて、意見等の反応を得た生徒は、他者に何らかの影響を及ぼすことができたことに喜び、社会の一員としての市民性の獲得と社会貢献への意欲の喚起が見られた。



(4) 課題と展望

夏季休業中の蔓延防止等重点措置、冬季休業中のオミクロン株の発生等により、今年度は彼ら自身が思い描いた活動ができずに苦慮している。一方、来年度の前期は

【活動後期】である、探究テーマの結論を得るべく、活動による材料収集を終えなければならない。この制限が解除される明確な基準がない以上、この制限の中で活動を進めることを想定することが必要となる。

探究を深めるにあたっては、他者との関わりは必須であるため、活動の在り方や方法を工夫して行動制限下でも実践できるよう運びたい。また、数少ない活動機会をより有効に活用できるよう、広い分析と深い考察ができるよう、生徒に寄り添いながら今後進めていきたい。

2. 2. 3 ③ 再生可能エネルギー探究ゼミ

東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故による災害から10年が経過し、再生可能エネルギーを取り巻く環境は大きく変化している。2050年に向けたカーボンニュートラル、コロナ感染拡大に伴うエネルギー消費の分散化など、脱炭素実現のために再生可能エネルギーが果たす役割は尚一層着目され、導入拡大への具体的取組みが求められている。また、福島県では2040年頃を目途に県内エネルギー需要の100%に相当するエネルギーを再生可能エネルギーから生み出す目標を掲げている。

本探究ゼミでは、相双地区の復興状況や地域課題を調査し、原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会づくりを目指すため、より身近なエネルギーとして理解を深めるため探究活動を進めている。

(1) はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒12名が、5つのグループに分かれ探究活動を実践している。除染除去土壌から双葉郡の環境再生に取り組む『除去土壌班』、次世代の新エネルギー社会を考える『水素エネルギー班』、地域に流れる川や水路を利用し実験を行う『小水力発電班』、再エネの中での風力発電の現状を調べる『風力発電班』、二酸化炭素の排出量削減の視点から再エネ普及を目指す『CO₂削減班』。各班ごとに課題を設定し、地域再建するための再エネの役割について考えていく。

(2) 実施内容

① 除去土壌班

震災後から現在まで汚染された土壌がいたるところにたくさん保管されており、現在も除去作業は継続中である。それによって、保管場所の確保や管理のため多くの土地や人が必要となる。汚染土そのものを減少させるための方法の一つとして、除去土壌の再生利用というテーマがある。

このテーマで探究を始めようと考えたきっかけは双葉郡の飯館村長泥地区や富岡町にあるリプルン福島において、双葉郡の環境再生事業が実施され、そこでは汚染土壌に関する研究や外部から訪れた方への震災前、震災後、現在から未来についての情報提供の場を設けており、研修という形で様々な高校の生徒とディスカッションや学習が行われている。特に飯館村長泥地区では、環境省が環境再生事業等を行っていることを見学し、汚染土壌活用研究の最前線を見学させてもらい、新たな視点を得ることができた。また、福島高専の原田正光教授にご講演をいただき、より深く土壌利活用について見識を深めることができた。

【飯館村長泥地区の見学】



以上のことから、「除去土壌の再生利用」を探究のメインテーマとし、私たちができることを考えることとした。今後、並行して本格的に再生可能エネルギーの利用を目指し波力発電に関する研究を進め、具体的に発電構想を行いプロトタイプの発電モデルの製作に取り掛かりたい。

② 水素エネルギー班

FH2Rを見学したのをきっかけに、水素に興味を持ち「水素を知る・伝えること」を目的にしています。最終的には水素を活用した様々な機器について学び、水素によって動かすことのできる機器を製作したいと考えている。

本研究テーマは、CO₂排出ZEROを可能にできる「水素」をどのように活用し、普及させることができるのかに挑戦するプロジェクトである。水素を燃料にした「fuel cell」という燃料電池自動車のキットで、模型自動車を走らせたり、ソーラーパネルを使って純水を電気分解し水素を得る実験を行った。燃料電池で水素を使って酸素と結び付け、起電力が得られることを実験で証明でき、模型自動車を走らせることができたが、今後、実用的にするにはどうしたらいいかが課題である。

燃料電池の数を増やしてみることや、純水のタンクの大きさを変更することを実験で試したい。また、今後安定的に高い起電力を発生させるために燃料電池の構造を研究し、自作できるか、レンタルできるかなどを試行錯誤し前に進めていきたい。その後、水素のメリット、デメリットを伝える予定である。

【FH2R 見学の様子】



③ 小水力発電班

広野町は、駅からの登下校の道が、夕方暗くなり危ないと思っていた。地元の人たちはどう思っているのかをアンケートで確認したところ、88%の方

が同じような思いを持っていることがわかった。その現状を再生可能エネルギーの力で変えたいと考えた。ただ明かりをとすのではなく、広野町全体をイルミネーションで飾ることで、震災後人口減少で寂しい感じがする広野町の人々の心にも元気を届けたいと思った。実際に暗がりや比較的明かりの少ない地点を絞り込み具体的に計画を考えた。その計画を基に、役場の復興企画課に出向き、イルミネーションを設置する許可を得た。イルミネーション機器は学校にあるものを活用しようとしたが、数が足りないことが判明した。そこで、21世紀の森公園の冬場イルミネーションにおいて、公園をライトアップしている団体「NPO 法人いわきイルミネーションプロジェクトチーム」の手伝いをし、その流れで機材を貸していただけることになった。1月22日に実際に設置する予定までこぎつけることができた。

【イルミネーションの設置】



④ 風力発電班

浜辺に打ち上げられるゴミ問題、とくにプラスチックゴミについて関心を寄せていた。プラスチックゴミは海洋生物との関わりで広く世界から興味関心を引いている部分である。本校では二つある寮のうちの一つの名前が「海風寮（うみかぜりょう）」であり、身近な海を研究することで周囲の自然環境をよいものにできればと考えている。

地元の豊かな自然環境について考えていくという点で、風力発電にも注目している。福島県には大きな二つの山脈が南北に横たわり、山脈を吹きわたる風も多い。すでに郡山市の布引高原風力発電所（65980kW）や田村市のユース滝根小白井ウインドファーム（46000kW）などが設置されており、私たちの学校のすぐ北に位置する檜葉町では浮体式の洋上風力発電の実証実験が行われていたこともある。風力発電は、振動や騒音また環境の問題から建設が反対される場合があるが、雄大に羽が回転する様子や周囲の長閑な景観を併せて、前述の布引高原のように観光資源として利用している場合もある。

この班では、早稲田大学の永井准教授からアドバイスを頂き、住民にも受け入れられデザイン的にも優れ観光名所になるような風力発電について考えている。また、原子力災害により山林に入る事ができないところが多く、今後、山林が今以上に荒れたり、獣害も増加したりすると考えられる。風力発電の建設や観光化は、山林の有効活用にもつながると考えられ、住民と里山の機能を補助できるのではないかと考えている。

【道の駅なみえ見学】



⑤ CO2 削減班

再生可能エネルギーすべてに共通するのは CO2 を増やさないということである。CO2 増加は近年、地球温暖化や異常気象の原因と認識され、世界的に解決しなければならない課題とされている。この班では、発電することで CO2 を削減するものはないか、さまざまな発電方法の中でも CO2 が出ない発電は何かなどを考えている。また、私たちのどのような行動（例えばテイクアウトでお弁当を食べると、自宅で料理して食べるのとどちら）が CO2 削減につながるか、想定して計算してみる活動も行なっている。これらの想定した計算がまとまったら、わかりやすくまとめて校内に CO2 削減を呼びかけるポスターを設置し、啓蒙活動を行いたいとかがえている。本校では中学校があり、カフェも設置され外部から来た人も飲食することができるため、やり方によっては幅広くこの活動を知ってもらえるのではないかと考えている。

【FH2R 太陽光発電システム見学】



（4）課題と展望

これまで、各班において思うように探究活動が進まず、試行錯誤を繰り返している状況ではあるが、アンケート調査や地域の方々とコミュニケーションを取りながら活動している。まずは、中間発表に向けての課題解決アクションと、再度『現状』と『理想』を整理し、再生可能エネルギーがもつ本質的な役割を模索しながら、粘り強く探究活動を継続していきたい。

2. 2. 3 ④ アグリ・ビジネス探究ゼミ

アグリ・ビジネス探究ゼミの研究概要は、福島県の復興につなげる今後の農業とビジネスを探究することである。選択している生徒は、アカデミック系列1名、スペシャリスト系列【商業】1名の計2名（女子2名）と少人数である。本ゼミでは、2年次初めから2つのプロジェクトが進行している。コロナ禍の影響ではあるが、収束時期やオンライン等を活用し、自主的に能動的な活動が展開されてきた。

昨年度のゼミ生から、アグリという言葉が“agri：農業”だけでなく、“aggregation：集約する”、“ugly：醜さ”、“agree：承諾”といった意味のバトンを受け取ったことで、地元農産物を活用したマーケティングやエシカルの考えを取り入れ、グローバルな活動へとつながっていく。

(1) はじめに

探究活動でアグリ＝農業、ビジネス＝商業としてとらえた場合に、新学習指導要領における教科の目標を確認した。

【農業の目標】農業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、農業や農業関連産業を通じ、地域や社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を（次のとおり）育成することを旨とする。

【商業の目標】商業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、ビジネスの意義や役割について理解させるとともに、ビジネスの諸活動を主体的、合理的に、かつ倫理観をもって行い、経済社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てる。

本来であれば、基礎的・基本的な科目を学習してから探究活動が好ましいが、2年次からの専門教科の学習が始まるため、同時展開での探究となっている。

今後必要とされる教科の目的を達成するために、解説の内容を確認した。

このような知識と技術を習得させるためには、資格取得や競技会への挑戦など目標をもった意欲的な学習を通して知識と技術の定着を図るとともに、単に知識や技術を習得させることにとどまらず、知識と技術を活用する上で必要となる思考力、判断力、表現力等を育成すること、ビジネスの場面を想定した指導をすること、商業の学習と職業との関連について理解させることなどが大切である。とある。

それでは、アカデミック系列の生徒とスペシャリスト系列の生徒はどのようにして実践をしたのかを振り返ってみる。

(2) 実施内容

・共通テーマである化粧品、地元というキーワードから地元で化粧品を製造している工場に、生徒たちがアポイントメントを取り、見学している。

2021/10/13 RACE Co., Ltd 広野工場見学

事業内容：化粧品の製造販売・化粧品の卸売り



○アカデミック系列 生徒S

・テーマ「双葉郡新お土産 せっけんせっけん」
・設定理由（生徒原文） 最初、石けんをつくりたいと思うようになったのは、私がずっとフォローしていたハンドクラフトの YouTuber がコーヒークラスを使って石鹸を作った動画を見てからです。

一回目の石けん作りで失敗したことと私的にこれを



作っても私が考えた「福島の魅力を多くの人に伝えたい」というビジョンにちょっと物足りない感があったのでやめました。

けど、このアクションを私の発表に入れて、三戸さんに発表して、どうやら覚えてくれたらしくて、たまたま、いわきのトラフト企画さんがコーヒークラスを使った石けんを依頼しようと思ったところ、三戸さんが私の話をしてくださって、



「よかったら、ぜひ高校生の方と一緒に！！」と言ってくれました。

私の中では特産品である果物を石けんにしよという思いはありましたが、それだと調達の難しさや季節性で難しいと感じて、手が止まっていたところ、この話が出てきたので、すごく嬉

しかった！！

・この生徒は、他の教科よりも研修での学びを多く取り込んでいる。高校1年には、ドイツ研修(British Hills・徳島県上勝町「地域の現状と自分の探求についての紹介」、高校2年ハッピーロードネット主催(北海道・青森研修「原発廃棄物の再処理や最終処分場について」、広島研修、NY研修(British Hills: 国連関係とオンライン(予定)と、今後の研修内容と探究がクロスすることで、より深い活動が期待できる。

○スペシャリスト系列【商業】 生徒Y

・テーマ「美容で町おこしすることはできるのか？」
・設定理由(生徒原文) 美容を通して双葉郡に興味を持ってもらい、地元の人が双葉郡のいいところを自覚できる社会。私がこのプロジェクトを始めた理由は、少子高齢化・過疎化や双葉郡の魅力を知らないことが気になったからです。そのため、商業で学んだことを、自分が興味を持っている美容を組み合わせたいと思いました。双葉郡産の果物を使った化粧品を開発し、それを使って魅力を発信して双葉郡に興味を持ってもらえたらいいなと考えています。双葉郡の果物を使うことで風評被害の削減にもつながったらいいなと思いました。

・この生徒は、以下のような活動を取り入れ、先輩や中学生との共同活動を展開し、活動の幅を広げている。
高校3年 再生可能エネルギー探究ゼミのリモネン発電班が取り組んだ内容を必要として、協力依頼し協働で実験を行った。化粧品の工場見学の反省として、自分たちで化粧品の成分抽出が可能かを検証した。



2021/12/14 中学生への呼びかけ

成分抽出に必要なミカンの皮を調達するために、ミカンの実は給食で食べてもらい、皮の回収は食堂や給食時の



Zoom 放送で呼びかけを行った。



・広野町より無償でいただいたミカンの報告会の場で、抽出した液体を副町長へ説明する機会があった。その際に、広野町も地元の果物を使ったものをふるさと返礼品として模索していることを教えていただいた。



一つ一つの活動が、多くの人に結ばれて行き、未来への探究活動を照らす結果となった。

(3) 成果

活動から生み出された内容として、わらしべ長者のように、一つ一つの活動の価値を地域が認め、そこから生まれる新たなワクワク感を生徒たちが楽しんで取り組み、意欲へと変換されていった。問題を解決できる手段が、協働で実践されることで、生徒たちの探究テーマが地域に必要で価値あるものに育ってきていることがうかがえる。

(4) 課題と展望

次年度は、民法改正により高校3年生での契約履行が可能となることから、地域の資源を活用した商品開発、地域産業の振興方策の考案と提案、情報通信技術を活用した合理的なビジネスの推進など、実際のビジネスに即した体験的な学習活動が、よりリアルな探究への進化し、創造されていくことだろう。また、各科目において習得した知識や技術などを基に、日ごろから学校教育活動全体を通して、経済社会の発展に主体的に貢献する意欲を高めていくことだろう。

これらの活動が、他の学校の総合的な探究活動にも参考となることに期待する。

2. 2. 3 ⑤ スポーツと健康探究ゼミ

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から11年を迎えようとしている。この11年の間には、避難指示区域の解除や常磐自動車道とJR常磐線の全面開通、ふたば未来学園高校と小高産業技術高校の開校、J-villageの機能再開など、復興が進み明るい話題が増えてきた。震災や原発問題で受けた子どもたちの運動能力低下問題も、様々なプログラムが考えられるようになり、少しずつ回復傾向に向かっている。しかし、震災や原発問題の余波もいまだに残り、福島県民の生活に不安を残し続け、不自由な環境で生活を送っている人々もあり、時間が経過したことで忘れられようとしていることや新たな課題が生まれていることも事実。将来的な課題は続いている。さらに、今年度は新型コロナウイルス感染症が世界で拡大。私たちの生活する日本、福島県にも大きな影響をもたらし、震災からの復興を目指すスピード感にも鈍りを与えた。

「当たり前は当たり前ではない」。これは11年目に私たちが身をもって感じたことである。そして今、「ステイホーム」「新しい生活様式」「緊急事態宣言」「ソーシャルディスタンス」など、私たちはまたそれを感じる事態となっている。日常の一部であった「スポーツ」というものが、どれだけ多くの人に元気や勇気を与え、様々な課題を解決できる可能性を秘めたものであったのかを改めて感じることとなった。「する」「観る」「支える」「知る」。このような状況にある今だからこそ、世界や社会、地域、さらには自らの課題に目を向けて、どのような課題が蓄積されているのかを知り、スポーツを生かして世界や社会、地域、自身の課題解決を目指す。

(1) はじめに

スポーツを通して地域を豊かにする方策を探究する。総合型地域クラブによる地域活性化、健康の増進、子どものスポーツ環境の支援、スポーツビジネスによる持続可能で豊かな地域の実現やアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行ってグローバルリーダーの育成を目指す。

(2) 実施内容

① 興味あるテーマに対する文献調査

高校1年次に決めた、各生徒のテーマに沿ってインターネットや図書館を使用した文献調査を行った。生徒が抱える小さな問いやテーマに関係する、人、施設、団体、専門家を切り口として、既に行われている取り組みや分かっていることの情報収集した。



② 地域のスポーツ振興を担う施設、団体の訪問

文献調査の後、地域のスポーツ振興を担う施設、団体を代表して、広野みかんクラブとナショナルトレーニングセンター Jヴィレッジを訪問、取材を行った。文献調査で分かったことと実際に活動している方から得た情報の同じ部分や異なる部分を通して、生徒が持つテーマをより多様な視点で向き合う時間を設けた。

③ グループ学習(調査・アクション)

文献調査や地域の実態、声を通して得た情報を基に、より深く調査する内容を探索し、生徒自身がどのようなアクションを通して、地域のスポーツ振興に寄与するかを検討した。実施する内容によって、個人で活動する生徒やグループで活動する生徒がいたが、生徒の主体性に任せ、グループ学習を行った。

広野 Revolution

「自分たちの得意なスポーツを使って貢献できる」ことを探して、活動を始めた。調査する中で、広野町が福島県の中でも運動力が低いことを知った。広野小学校の教頭先生と協議を重ね、小学校でスポーツイベントを開催し、小学生に運動する機会を届けた。



Easy Sports で not 苦手

「運動が苦手な人を減らすにはどのようにすればよいか」という疑問を基に活動を行った。高校2年生対象にスポーツに関するアンケート調査を行った結果、幼い頃からスポーツをやっているかがスポーツへの苦手意識に関係していることが分かった。その調査を基に、こども園に通う子どもが楽しめるスポーツを開発した。



コロナ禍でもスポーツ観客数を増やそう

新型コロナウイルス流行により、スポーツ観戦ができなくなった経験を基に、「コロナ禍でもスポーツ観戦ができるようにしたい」と考え、活動を始めた。いわきFCの試合ボランティアを行うことや、VRでのスポーツ体験を通して、多様なスポーツ観戦の実現により、スポーツ観客数を増やせることが分かった。現在、ふたば未来学園のバドミントン部と協働してVRコンテンツを作成し、学校内での活動の応援が活性化することを目指して活動している。



バドミントンで地域活性化

広野みかんクラブで開かれているバドミントン教室の参加者増加を目指して、活動を始めた。バドミントン部所属の生徒が、持っているスキルを活かし、地域に対してできることとして、バドミントン教室を選んだ。週1回、バドミントン教室を手伝い、小学生が楽しんでバドミントンができる環境を模索している。



スポーツを通して町をきれいにしよう

広野町にポイ捨てのゴミが多くあることに問題意識を持ち、活動をはじめた。日本で普及しているスポーツ GOMI 拾いを通して、広野町をきれいにすることを目指した。実際にイベントを開催した中で、きれいにすることよりも参加者がゴミに対する意識の変化が起きること



に気づいた。より多くの人に意識の変化を起こしてもらうために、小学校や地域でのスポーツ GOMI 拾いイベントの実施を計画している。また、広野町生涯学習発表会やFMいわきで活動の報告を行った。

アスリートに必要な栄養を少量で効率的に摂る方法とは

「少食なアスリートが無理せず栄養を摂取できるようにしたい」と考え、活動を始めた。株式会社明治の方とオンラインでヒアリングを行い、現在のプロテインやゼリーの現状を知ることができた。これま



での調査を基に栄養指導をふたば未来学園のアスリート生徒に行う予定だったが、コロナウイルス感染拡大により残念ながら中止となった。

(3) 成果

スポーツと健康探究ゼミに所属する生徒は、トップアスリート系列として日頃からスポーツや運動に親しんでいる場合が多い。しかし、スポーツの4観点(する、見る、支える、知る)で見ると常に「する」立場にいる。このことは、チームメンバー以外に交流することがないことを意味する。なぜなら、スポーツを極めるにはそれ以上の関わりが必要ないからである。しかし、未来創造探究は、地域の課題に焦点をあて、自らのやりたいことと重なる課題を解決するために活動する。すなわち、学校外の人と交流しながら、地域の人のために活動をするのである。自らの能力やチームのレベルをあげる

ことだけ考えればよかったのに対して、未来創造探究は自分以外の人たちのことを考え続けることが要求される。最初の時点では、生徒は地域の方に取材をしたり、協働することに対して、緊張していたり、積極的な姿勢を示さなかった。だが、地域の方との接点が増える、実際に生徒によって何かを提供できたことなどによって生徒が主体的に動き始めることがあった。様々な理由が考えられるが、「私でも、誰かになにかができる」ということを経験から気づくことができたからではないかと考えている。

スポーツはいつか、手段になる。お金を稼ぐためかもしれない、子どもに何かを教えるため、誰かを支えるためかもしれない。スポーツを超えて、だれに何をなしたいのか、簡単ではないが、生徒が少しずつ考え、生徒自身の思いを形に行ってもらいたい、そしてそのスタートを今年の1年で作れたのではないかと。

(4) 課題と展望

本ゼミに所属する生徒の多くは、各部活動の試合や練習日程などによりフィールドワークや各種の体験会などにグループ全員で参加することが難しい場合がある。長期休業中も同様であり、探究活動と部活動のバランスがうまく取れない状況がある。授業時間をうまく活用し、より多くのアクションを起こしていくには、情報共有や機会提供の面でより工夫が必要だ。個別活動が、2人以上のグループになることに対して、策を講じる必要があると考える。スポーツと健康ゼミは8割以上の確率でグループを作る。興味関心が同じである場合は、グループ活動をしていてもよいが、自らの興味関心に向き合いきれていない生徒がいることも分かった。グループになることで、プロジェクトは前に進みやすくなる。しかし、生徒のやりたいことや興味関心に寄り添うことは忘れてはならず、生徒が主体的に行動できるような状態を作る必要はあるのではないかと。また、トップアスリート系列の生徒は、各生徒が行うスポーツ以外に興味関心が薄い傾向があり、地域に目を向けることには多くの人的サポートを必要とする。しかし、現時点では、生徒数に見合った教員を配置できていないと感じる。教員側のスキル面もあるかもしれないが、地域と向き合う経験が比較的少ない生徒に対して、よりよいサポートができる体制を構築できることを望む。

探究活動は何のために行うのか。プロアスリートになれるのはほんの一部の選手のみであり、必ず引退も訪れる。いわゆる「セカンドキャリア」である。高校生のうちからスポーツの4観点到触れ、様々な角度からスポーツを探究していくことは今後の人生に必ず生きてくるはずである。選手を続けている期間でも、探究で学んできたことで視野が広がり、様々な気づきに繋がっていくと思う。次年度は今年度を生かした大きなアクションを起こす年。単発的なアクションではなく、持続可能なアクションを起こし、周囲を驚かせる結果を求めたい。

2. 2. 3 ⑥ 健康と福祉探究ゼミ

本ゼミは、少子高齢化や人口減少が加速する地域における、住民が安心して暮らすことができる町づくりを目標として活動している。高齢者への生活支援、健康づくりや介護予防対策の充実、地域住民の交流の場の設定など、医療・介護・福祉が結びついた包括ケア、地域の高齢者から子どもまで様々な年代の共助による生きがいのある生活の創造を目指し探究と実践を行っている。

今年度本ゼミに所属しているのは、アカデミック系列生徒4名、スペシャリスト系列生徒7名（農業1名、福祉6名）の計11名であり、「健康」や「福祉」分野に興味のある生徒や、高校卒業後の進路に福祉系・看護系・栄養系を考えている生徒が多い。自らの関心のある事柄と「健康」や「福祉」の分野を関連させ、地域の課題解決に向けて、個人あるいはグループで探究活動を行っている。

(1) はじめに

年度初めにゼミを決定した時点で、生徒たちは今後取り組みたいと思っているテーマを仮にはあるが設定していた。しかし、興味関心のある事柄について挙げていだけで、具体的にどのような活動をしたいか述べる事ができる生徒はほとんどおらず、福祉・健康についての知識も不足していることが分かった。そのため、まずはゼミ全体で福祉・健康分野の知識をインプットし、今後の探究活動のヒントをつかむ機会を設けてから、個人の調査活動や実践活動に移行させることとした。

(2) 実施内容

①今年度の流れ

「福祉」「健康」「栄養」についてのインプット学習（5月～7月）

- ・福祉科教員による講義・演習（5月）

本校福祉科教員による講義とボッチャ体験を通して、福祉分野や障がいについての知識を深めることができた。パラスポーツを実際に体験することによって、障がいに応じて様々な工夫がされていることや、障がいを持っている方だけでなく幅広い年代の人が共に楽しめることに気づき、自分の探究活動で活用したいという生徒も見られた。



ボッチャ体験

- ・大学教授によるオンライン講義（6月）
東京家政学院大学運動生態学研究室の江川賢一先生か

ら、「ヘルスプロモーション」をテーマにオンライン講義をしていただいた。広野町、福島県、日本、アジア、世界全体の健康や運動に関する現状をデータと共に解説していただき、専門的知識を得ることができた。また、生徒は質疑応答を通して、探究活動への具体的なアドバイスをいただくことができた。



- ・栄養教諭による講義（6月）

本校併設中学校の栄養教諭である水口公美先生を招き、「健康」「栄養」について講義をしていただいた。調理面、栄養面についてだけでなく、人が集まり共に食事することで生まれるコミュニケーションや、食事を通じた他者理解や地域理解にも言及していただき、「食」が様々な分野とつながっていると気付かせることができた。



・ゼミ内発表会（8月）

夏季休業中に各自のテーマと関連する事項について調査を行わせ、その内容をゼミ内で発表させた。教員やカタリバスタッフ、同じゼミの生徒にアドバイスをもらい、課題解決のための活動に生かす機会とした。

②探究活動内容

・地域リング

地域における子ども、高齢者、障がい者の交流を増やすことを目標に、公共施設での子育て世代に対するアンケート調査や、パラスポーツを取り入れたイベント等を実施した。



ボッチャや脳トレを取り入れたイベント

・「介護」について知ろう

多くの人に介護に興味を持ってもらうことを目標に、特別養護老人ホーム施設長様へのインタビュー、アンケート調査、介護体験イベントの企画等を行った。



特別養護老人ホームでのインタビュー

・LGBTを知ろう

LGBTへの理解を広めることを目標に、校内で中学生・高校生を対象としたLGBTへの意識等についてのアンケート調査を実施し、結果を分析した。

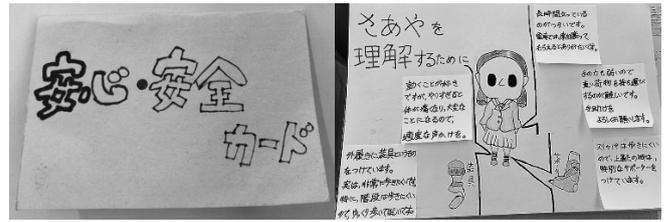
・交流で心もからだも元気に

震災前より地域での世代間交流が減少したという地元の方の話から、世代間交流を増やし高齢者の健康を守ることを活動の目標とした。高齢者へのインタビュー、様々な世代が共に楽しめるイベントの企画等を行った。

・災害弱者の避難について

災害時に障がい者や高齢者が避難から取り残されないことを目標に、アンケート調査、支援学校教員へのイ

ンタビュー等の様々な調査活動を行った。障がい者自身とその周囲の方が災害時に活用できる「避難マニュアル」の普及を目指し、試作している。



避難マニュアルの試作品

・中高生に正しい食習慣を身に付けさせる

福島のメタボ率が全国ワースト4位であり、肥満の要因となる食行動をしていることに着目し、若い世代に正しい食習慣を身に付けてもらうことを活動の目標とした。本校の中学生・高校生全員を対象とした大規模なアンケート調査を実施し、食生活の傾向を分析した。

・DANCEでたくさんのスマイルを

コロナ禍で増加したストレスをダンスによって軽減させることを目標に活動している。ストレスの状況、ダンスへの興味関心についてのアンケート調査を実施し、結果を基に中高生を対象としたダンスイベントを企画した。

・幼児と音楽・幼児と運動

音楽と運動を通して子どもたちの笑顔を増やすことを目標に、こども園の職員の方へのインタビュー、アンケート調査、音楽と運動を組み合わせたイベントの企画等を行った。

(3) 成果

ゼミ活動の早期に「福祉」「健康」「栄養」分野について、講師の方々から最新の知見を得られたことは、その後の探究活動を進める上での大きな推進力となった。

また活動を通して、様々な年代や職業の方と交流し、多様な価値観に触れる事ができたことは、大きな財産である。最初は外部の方に連絡をとることに抵抗感を示していた生徒が、連絡をとった相手から、関連する人を次々と紹介してもらえるとという体験を経て、積極的に人とのつながりを持つ姿勢も見ることができた。

(4) 課題と展望

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、時間をかけて準備してきたイベントが直前で中止となる等、対面での探究活動が思うように進められず、落胆している生徒も多い。しかし、オンラインの活用等、今だからこそ有効に働く手段を考える良い機会と捉え、課題解決のための実践を進めさせたい。

2. 2. 4 探究活動整理のための発表会

10月27日に2年次の探究のプレ発表会を行った。目的は以下の4つである。①これまでの活動を通しての学びや今後の課題を振り返り、発表という形で表現することにより、他の班の探究班の生徒たちと共有し、探究活動の意識の高揚を図ること、②探究テーマ（問い）を明らかにした先にある、自らが考える「地域・社会のあるべき姿」と課題解決に向けて実践したアクションや、構想中のアイデアを報告する、③地域の方から意見やアドバイスを受けることにより、今後の実践を具体的に落とし込む機会や個別に地域の方から協力を得る足がかりとすること。④まとめの段階に入っている3年次生や教員からの意見やアドバイスを受けることにより探究ゼミの縦のつながりを強くする機会とすること。地域のアドバイザーとしては、以下の方々にお越しいただいた。

氏名	所属	地域	関連領域
和田 智行	小高ワーカーズベース	南相馬	原子力
石井 修一	絵本の石川屋	田村氏	原子力
小波津 龍平	クムト	南相馬	メディア
平山 勉	双葉郡未来会議 代表	富岡	メディア
小沢 晴司	宮城大学 教授	広野	再エネ
佐藤 亜紀	HAMADOORI 13 事務局	大熊	アグリ
猪狩 僚	igoku 編集長 いわき市役所	いわき	メディア、福祉
大和田 幸弘	NPO 法人みかんクラブ 事務局長	広野	スポーツ
半澤 悠司	NPO 法人みかんクラブ	広野	スポーツ

(1) 発表準備

課題設定やプロジェクト内容について、印象や思い込みではなく、データや根拠に基づいて設定されているか生徒に気をつけさせた。また、それを受けて、どのような調査／資源（調査源、外部協力者）があれば、探究活動をより深化させることができるか考察させた。今回は生徒の発表回数を増やし、より多くのアドバイスを受けられるようにした。

発表の項目として以下の7つの点を示した。

- ①探究テーマ、そこに至った経緯
- ②どんなアクションをしてきたか
(調査のためのアクション、課題解決のためのアクション)
- ③自分が考える「地域・社会のあるべき姿」
- ④アクションする前後でわかったこと、気づいたこと、学んだこと、新たな仮説
- ⑤自分の考え方や姿勢にどのような変化があったか
- ⑥今後の「課題解決のためのアクション」の内容、計画
- ⑦現在の悩み、壁、相談したいこと

(2) 実施内容

発表件数は原子力防災ゼミ 19 件、メディアコミュニケーションゼミ 20 件、再生可能エネルギーゼミ 5 件、ア

グリビジネスゼミ 2 件、スポーツと健康ゼミ 18 件、健康と福祉ゼミ 10 件。合計 74 件となった。

発表者をプロジェクト内容に基づきゼミを横断して 12 会場（A～L グループ、1 グループにつき 6 プロジェクト）に分け、発表を行った。1 プロジェクトの発表につき 12 分の時間を取った（発表 5 分、ディスカッション 5 分 移動 2 分）。



(発表の様子)

(3) 成果

発表会が探究のマイルストーンとなり、生徒の刺激となったとともに、アドバイスによって探究のブラッシュアップがされた。また早稲田大学の山田研究員および永井祐二先生に発表資料を見てもらい提供し、プロジェクトに関係する外部協力者を紹介いただけた。

2. 3 未来創造探究（3年次）

総合的な学習の時間の中で、3単位を未来創造探究として実施した。そのうち1時間は主として自らを見つめ、進路実現のための時間として、残りの2時間を探究活動として実施した。2年次に引き続き、3年次においても6つの探究ゼミに分かれ、グループや個人でテーマを設定し、実践を行った。昨年までと比して、グループでの探究より個人探究が増え、その結果プロジェクト数も増加した。



2. 3. 1 未来創造探究の概要（3年次）

(1) 3年次の探究活動概要

- 4月21日 中間発表
- 5月～9月 各班、グループに分かれて探究活動
- 9月25日 未来創造探究生徒研究発表会
- 10月～1月 論文作成

(2) 実施内容

① 中間発表

今年度の中間発表は3年次の4月に行った。発表会に新2年次を招いたことにより、2年次がこれから取り組む未来創造探究のイメージがつきやすくなったとともに、新たに赴任して探究担当となった教員にとっても、概要を伝えられるようになった。

また、3組のゼミ混合プロジェクトが見られた。

② 探究活動

6つのゼミに分かれて探究活動を行った。各ゼミの構成は以下のとおりである。

探究ゼミ	生徒人数	教員人数
原子力防災	19	4
メディア・コミュニケーション	34	4
再生可能エネルギー	12	3
アグリ・ビジネス	9	2
スポーツと健康	29	5
健康と福祉	15	3

③ 未来創造探究発表会

「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。各分野の第一線で活躍されている方（専門知を持つ方）、地域の課題に取り組んでいる方（地域知を持つ方）を審査員兼コメンテーターとして呼び出し、各賞を設定した。

今年度は中学3年生も発表を行うことに加え、高校3年次のプロジェクト数が58PJと前年より増加したため、全PJを発表会当日に発表させることが時間的に不可能となった。そのため事前に発表動画を撮影・提出させ、各ゼミの選考および企画研究開発部による審査によって高校32PJを発表会当日の分科会に進出とした。

分科会発表ののち、専門知審査員の8名の先生方からミニ講義を頂いた。講義内容を書き起こしたものを右のリンク先に掲載する。

審査員の菅波香織さんからは「現状の把握ということでアンケートなどを行ったようだが、発表で見えてこなかった」、とご指摘を頂き、最後に「今日の探究のあとも、対話で未来を作ることを考えていただければ」というお言葉をいただいた。

④ 論文作成

発表会以降、探究内容を論文の形でまとめる活動を行った。分量を1万字以内とし、年次主任製作の論文ループリック（「関係資料」に掲載）のもと探究活動を文章でまとめを行ったが、行った活動や得られた知見を概念化し言葉にすることに生徒は苦勞していた。12月中旬を一次締め切り、訂正を経て1月下旬を最終締め切りと定めた。

(3) 評価と課題

感染症の影響による大きな制約の中でも、多くの生徒が地域や実社会の課題を「他人事」ではなく「我がこと」として捉え、主体的に探究に取り組むふたば未来学園の探究文化を堅持し、出来ることを模索し挑戦することができた。また、調査研究に留まらず実践に踏み出し、地域で新たな価値を創造した事例や、探究を通じて自身の生き方を見出し、進路へと向かう姿勢は高く評価できる。

課題設定、調査やデータ、考察の言及が少なく、「探究報告」ではなく「活動報告」の発表に見受けられた点が課題である。「やってみた」だけでは探究とはならない。自身の実践を、書籍や教科から得た知識と結び付け、抽象化して全国・世界の課題とも重ね合わせて考察を行い、地域や社会を揺り動かす新たな知の創出や、未来に向けた提言へと至った活動は少なかった。

また、地域の方を「高齢者」等でくくり抽象的なステレオタイプで捉えている発表が見受けられた。具体的な一人一人と向き合って問題を発見したり、解決策を見出したりしていくことが必要である。

2. 3. 1 ① 原子力防災探究ゼミ

原子力災害によって失われた地域コミュニティの再構築など、双葉郡における様々な問題を調査研究し、生徒それぞれが課題を設定しその解決を目指す。震災から10年が経過し、バナナやコーヒーの栽培など新しい事業を行うところがある一方で、期間が進まない地区もあり、地域が抱える問題や状況は大きく変わってきている。

5期生の原子力防災班は、2年次で中心に行った調査研究を通して知った地域の状況と、未来を作り出す探究を考え、ありがたい未来を設定し、バックキャストで問題と課題を設定し解決アクションをはかった。

(QRを読み取ると動画をご覧になることができますが、スマホアプリ“FlipGrid”で読み取ることで、この紙面上にARで動画がご覧いただけます。)

(1) はじめに

昨年度の調査研究を中心とする現状把握については、以下の点に着目して改善した。これまでの反省点として「印象だけで物事をとらえ、事実を確認しないで、探究を進めていくこと」、例を挙げると、この地域の問題は何かと尋ねた際、「コミュニティの崩壊」、「風評被害」など震災当時から言われていることを、印象で語る傾向があった。改善点として、新聞やテレビからの印象操作に乗らず、それらメディアから1次情報を探るためのキーワードを見つけ出し、事実を明らかにするように指導した。

解決のアクションとして、クリエイティビティに着目し、自分の探究テーマに対して、全く違う分野のことを掛け合わせて、より効率的な解決案を考えることを行った。これについては、これまでの探究で大きく飛躍した先輩方が、無意識にこの発想で行っていたと思われる。たとえば、2期生のT・S君は「避難経路」に「祭り」を掛け合わせた探究、3期生のM・Wさんは、「地域理解」と「交換留学」を掛け合わせ地域交換留学を行った。

高校生が行う探究におけるプロジェクトは、フォアキャストで考えたものや、常識的な範囲で考えたものは、ほとんどすでに行われているものであり、経験のある地域の人たちにとって、高校生が使い勝手の良い人材になり、地域との協働を行う際にも、イニシアチブをとるところか、対等な関係でアクションを起こすことができなくなることがある。もちろんそれも学びになるので悪いことではないが、地域の人たちとwin-winの関係を構築するためには高校生の自由で闊達なわくわくするような発想を進めていけることが理想であると考えている。

以上のことを踏まえて、生徒に対する適切な関わり方を意識しゼミを進めてきた。

(2) 実施内容

【調査のためのオリエンテーション】

【解決アクション】

2年次からの探究活動を2021年9月に行われた「未来創造探究発表会」で提出する最終発表をご覧いただければ

幸いです。

○生徒の探究と実践の発表

① マイクラでつくる双葉郡

マイクラフトというゲームを使い、双葉郡を作成している。ゲームを使うことで多くの人に双葉郡に興味を持ってもらい、将来的にはVRで実際に体験できる様にしたい。



② 鉄卵という地域の可能性

地域の砂鉄を使って南部鉄器の技術で鉄卵をつくる探究と、物質が人体に与える影響を探究している2人が協働して探究している。鉄の専門家からアドバイスをいただきオリジナルの炉を作成し、鉄を取り出す実験をしました。



③ Future Quest～地域のゴミを花に変える

双葉郡にあるゴミをすべて花に変えるプロジェクト。ブンケンさんとゴミを拾ったり、国土交通省から借りた花壇を花で埋めたりしました。そして、ゴミを花に変えるスタートとして大きな看板を双葉町6号線に作りました。双葉と言えばきれいな花咲く場所！というイメージを作っていきたい！



④ 浪江町を元気に笑顔に～開けてびっくり！浪江の宝箱

浪江町商工会青年部と膝をつき合わせて町おこしを考えました。商品開発だけでなく、話題づくりのためのイベントを通して、協働しながらまちおこしをしてきました！



⑤ エネルギーからエコロジーへシビックプライドを形成する環境事業の提案

海洋プラスチックの問題の研究を通して、環境ビジネスの世界的な流れを知りました。住民と行政、そして企業が一体となって双葉郡を発展させていくた

めシビックプライドに着目しました。

⑥ 村おこし in 葛尾村

葛尾村の村おこしを探究している。スポーツイベント等様々なイベントを通して活気ある町作りと魅力作りを地域の方と協働しました。葛尾でできたお米を炊いておいしいご飯の魅力を伝えるイベントを行いました。



⑦ 絵本で記憶の受け渡し

震災の経験や体験を震災の記憶を持たない世代へ伝えていくことを探究している。記録としての震災ではなく記憶としての震災を伝えること、そしてそれを、絵本を通して伝えていくために日々探究している。



⑧ VR in Futaba (with メディア班)

多くの先輩方がチャレンジしてきた双葉郡ツアーを VR で海外の方でも双葉郡を楽しめるコンテンツを作っています。多くの方が、双葉郡の魅力を VR で感じてもらえるように進めています。



⑨ 双葉郡内の未来時代を描く！！

2年次に訪れた双葉駅周辺！震災で壊れてしまっている今の双葉町と未来の明るい双葉町の絵を描いて残す探究をしました。

⑩ ふたば花革命

アロマティックバーを双葉郡に咲いている花をつかって作る商品開発を行った。Future Quest の渡辺さんとともに、双葉郡のゴミを花に変える取り組みとコラボしながら行った。



(3) 成果と反省 (探究プロセス)

○課題設定について⇒現状分析

ふたば未来の「探究プロセス」では、stage1 で問題発見/課題設定を行うことになっているが、インプットが

《成果》

文部科学省主催 Glocal High School Meeting 2022 日本語部門 金賞 鉄卵という地域の可能性

文部科学省主催 Glocal High School Meeting 2022 英語部門 金賞 マイクラで作る双葉郡

福島県教育委員会主催 令和3年度 ふくしま高校生 社会貢献コンテスト

福島大学アドミッションセンター賞 浪江町をを元気に笑顔に

福島県教育委員会主催 令和3年度 ふくしま高校生 社会貢献コンテスト 入選 Future Quest

福島県総合学科課題研究発表会 口頭部門 入賞 Future Quest

ふたば未来学園 未来創造探究発表会 最優秀賞 鉄卵という地域の可能性

されていない状態でのそれらの設定は非常に難しい。理想の状態をイメージしようとしても、具体的に頭に浮かんでこない生徒が非常に多かった。そのため、原子力防災班では、2年次のはじめに、全員で、複数のフィールドワークや映像資料等を遣い現状把握を行った。その際、データや資料を読み取ることが得意な生徒には、RESAS やその他の1次資料をもとに地域をより客観的に見つめることを、そうでない生徒に対しては、様々な場所や地域の方（一般社団法人 AFS 吉川彰浩様など）のところに訪問しお話を伺うなどし、班の中でそれらの情報を共有することをスタートラインとした。現状を知るだけでなく、歴史的な観点から過去もしっかりと調べることが探究を行う上で非常に重要だと分かった。

○課題の再設定⇒解決仮説

現状を知ること、顕在的な問題を把握し、その後、生徒それぞれが理想の未来を設定し、問題と課題の再設定を行った。解決アクションについては、クリエイティブ思考として、自分の好きなものという全く異なることを掛け合わせ、解決方法を探った。

○解決アクション⇒考察

顕在的な問題(第3者が描いた理想に対するギャップ)に対する解決アクションは、すでに解決策が多くとられていることがほとんどであり、そこをスタート地点とすることは問題解決の学習としては良いが、社会との協働としては十分ではない。課題の再設定において作った解決アクションは、課題解決の学習だけでなく地域に対しての高校生としての新たな発想としてヒントを与え、WIN-WIN の協働を成り立たせることが可能だと分かった。

(4) まとめ

事実を客観的にとらえ、既存の問題に対して分析を行い問題と課題を再設定するという手順を踏むことによって、探究の土台とし、クリエイティブ思考として、生徒自身の興味あることをかけ算で組み合わせることで、生徒自身のオリジナルの探究を展開することが出来、持続的に探究活動に集中するということが見えた。総合的な探究の時間のあるべき姿として提案ができるものになったと感じる。

2. 3. 1 ② メディア・コミュニケーション探究ゼミ

メディア・コミュニケーション探究ゼミ（以下メディアゼミ）は地域や社会の問題を意識し、その解決のためメディアを用いた情報発信や、未来への伝達のアクションを目的とし、33名（女子25名、男子8名）が在籍している。注意点として、実践が進むほどメディア製作そのものが目的化してしまいがちなので、出発点である課題や伝えたいことを意識させ続けた。

(1) はじめに

五期生は震災当時小学校一年生だった世代だ。彼らには「自分たちが震災時の記憶を持っている一番下の年代ではないか」という意識が強くあるようだ。彼らの中には、下の世代に対して「震災の記憶を伝えていきたい」という気持ちだが、使命にも似た感情を帯びて秘められている。

(2) 二年次までの取り組み

第一原発最寄り校の本校生たちは、それゆえに社会の課題に向き合わざるを得ない。一年次は地域の現状と、解の見えない課題を肌で感じた。二年次では探究の授業で彼らは理想と現実のギャップから探究テーマを設定し、仮説を吟味するための「調査のアクション」をしてきた。これを踏まえ、三年次ではよりよい社会を自分たちの手で創ることを目標に探究活動を行った。

(3) 各生徒の取り組み

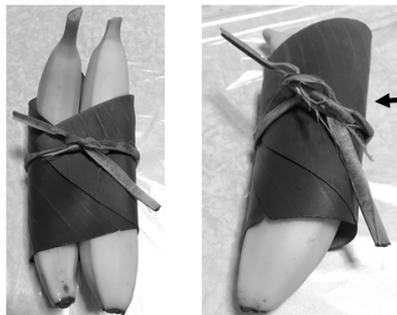
「ふたばの花革命」

双葉郡に咲いている花をドライフラワーにし、アロマンティックバー作りを図った。

「もったいないバナナ」

脱プラスチックに向けたレジ袋の有料化が浸透していることから、バナナの葉を再利用することでビニール袋のコストも削減できるのではと考え、地域の方とともに試行錯誤した。

①四角くカットして包む



(試行錯誤の一例)

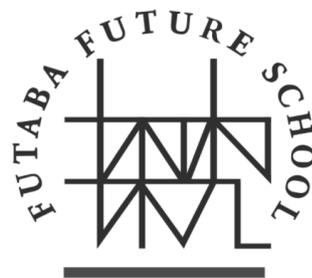
「VR in Futaba」

双葉郡のマイナスイメージを払拭するための情報発信を

行ってきた。双葉郡ならではの魅力をVRカメラで撮影し、その動画をYouTubeに投稿した。

「ふたばメディア」

今までの探究の活動を集約し、記録、発信し学びを還元するシステムが必要と考え、サイト「ふたばメディア」を製作した (<http://futabamedia.com/>)。これにより、先輩が先輩の活動を参考にでき、地域との協働を可視化することができた。



ふたばメディア

「ふたば、伝える」

(HP トップページ)

「動物の殺処分を減らしたい」

震災後放浪していた動物たちが殺処分となり福島県の殺処分数がワースト1位という記事を読みアクションを行った。ペットショップのことも考察した。



(富岡町のNPO法人栖さんへ取材しました)

「正しい情報を私の言葉で」

YouTubeで私自身の学校生活や探究活動、研修活動の様子などを撮影・配信することで福島の現状や課題を知ってもらい、無知による偏見をなくし福島の復興活動に携わっていく人を増やすことを目的として活動してきた。

「富岡元気づけっぺ」

富岡観光協会の方たちと協力し、自分たちが興味のある美容と関連づけ、町の特産品を使用した商品開発を考えることにした。そこで、富岡町のお酒「天の木」と富岡町のフルーツ「パッションフルーツ」に目を向けた。



(インスタグラムで広告した)

「全ての子どもに豊かな生活を」

現在、社会問題化している子どもの貧困に注目し、自分たちと同じ若い世代に伝えたいと考え、いわき法律事務所弁護士の菅波香織さんと相談、いわき市湯本町にある「放デイ AND 舎」のインスタライブにも参加をさせていただき、探究についての情報発信を積極的に行った。

「LGBTQと私」

LGBTQをただの個性として捉えてほしいため、探究テーマとした。アパレルブランド KINGLYMASK、EINS HIMMEL+から衣装提供を受けた。

「韓国と日本が仲良くなるには」

K-POP や韓国ドラマが好きで韓国について興味がありこのテーマにした。歴史を調べ、立命館アジア太平洋大学卒業生が立ち上げた任意団体 J IWA・J IWAが主催している J IWA・J IWA オンライン韓国語講座などに参加した。

「動物の殺処分を減らす&ペットとの避難について」

災害時にその場に残されて、家族と離れてしまう動物がいる。保護されても元の飼い主・引き取り手が見つからずに殺処分に回されてしまうペットがいることを知り、広報活動を行った。

「大熊町民とのつながりを作る」

実際に大熊町に人を呼び込むために、どのようなイベントを企画開催するべきかを考え、それを実行しどう回復していくか探究した。

「「他人事」を「知り合い事」へ FROM “SOMEBODY ELSEs THING” TO “KNOWN THING”」

自分のふるさとでは無い関係ない場所での問題に対して無関心な人の意識を変え、関心を持ってもらいその輪を広げていくためのイベントを行った。

「未来を担う人材を」

震災の記憶と教訓を伝える活動に貢献するべきではないかという思いから、震災から得られた教訓や人の想いを後世に伝え、新たな知識と繋げて発展させていくことができるような機会を作るプロジェクトを行った。



(関西の高校生とオンラインで交流した)

「富岡の酒粕を使った新メニュー」

富岡町で作った日本酒から生まれる酒粕を用いて、新しいメニューを考えました。

「ループリック、うちの言葉で訳してみた！」

ループリックはふたば未来学園の生徒のデータが一目でわかり、これからの学校に必要な物だと思う。しかし分かりづらいので、私たちはループリックの言葉を分かりやすく「翻訳」した。

「LOCAL WEDDING」

私たちの探究では、将来の夢であるウェディングプランナーに関する知識を身に着けることと、地元の活性化を関連付けたものだ。双葉郡の活性化、結婚式の魅力を知ってもらうことを目標に探究活動を始めた。

「震災について語ろう」

私たちは、震災の記憶を繋ぐこと、防災準備や対策の大切さを子供たちに伝えることを目的とし紙芝居イベントを開いた。

2. 3. 1 ③ 再生可能エネルギー探究ゼミ

福島県では、2011年3月に「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」を策定したまさにそのとき、東日本大震災とそれに伴う東京電力第一原子力発電所事故によって再生可能エネルギーを取り巻く情勢が激変した。そこで福島県では新たな再生可能エネルギー推進ビジョンとして震災以降の社会情勢も反映させた「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を2012年3月に策定し、復興の主要施策の1つとした。このビジョンには原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会を目指した福島の再生可能エネルギー産業の未来像が描かれている。

本校の再生可能エネルギー探究ゼミでは、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」をもとに福島県や双葉郡の現状を把握し、課題を見いだし、解決の糸口を探究することが一般的な進め方ではあるが、私達は探究の動機付けとして学校周辺の産業や自然環境に着目し、フィールドワークや基礎実験などの演習を全員で行い、基礎知識や体験の共有化を行った。それと同時に、各グループごとの探究テーマも設定し、探究活動を進めてきた。

(1) はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒13名が、お互いが協力しながら、探究活動を進めてきた。全体の活動としては、広野町火力発電所訪問、浅見川の清掃活動・水質調査、ふるさと創造学の講演会等、様々な取り組みを行ってきた。また、各グループごとの探究テーマも設定し、探究活動を進めてきた。それらのグループは大きく分けて、トリチウム水処理班、海洋温度差発電班、リモネン発電班、川探究班に分かれている。

(2) 実施内容

① トリチウム水処理班

東京電力第一原子力発電所事故によって発生しているトリチウム水処理の問題に注目した。この問題は、地域の関連性が非常に高いにも関わらず、地域の関心が低いという現状がある。このことを踏まえて、自分達でどのようにしたら、より分かりやすくトリチウム水処理の問題を伝えていけるのかを考察した。

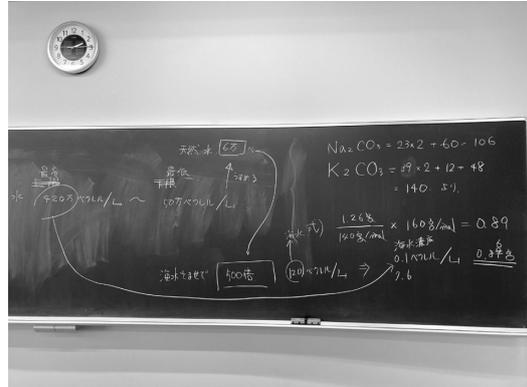
まずは本校の生徒がどれだけ問題意識を持っているかを調査するため、校内アンケートを実施した。アンケート内容は主に「トリチウム水を知っているか?」、「トリチウム水の海洋放出に賛成か、反対か?」の2つである。しかし、準備不足により、高校1年次からしか回答を得ることができなかった。回答数が少ないため、データの信頼性は低いだが、その中でも、6割の生徒がトリチウム水について知っていることや8割以上の生徒がトリチウム水の海洋放出に反対していることが分かった。こちらの予想よりも興味関心が高いことが分かった。

次に、トリチウム水の希釈の様子を分かりやすく伝える方法はないかと考え、牛乳をモデルとした希釈の実験を行った。牛乳をトリチウムに見立て、海洋放出が可能なレベルや自然界に存在するレベルなど、様々な状態を想定して、希釈の実験を行った。実際に希釈の計算を行うことにより、どれくらい薄めればよいのかが分かった。また、牛乳を使うことで、視覚的に濃さを表現することができた。

さらにこれらの活動を「福島イノベーションコースト構想の実現に貢献する人材育成」の成果報告会にオンラインで参加し、代表発表を行った。他の高校生とも交流を行い、積極的に意見交換を行った。

高校3年次では、川探究班と協力して、水質調査を行ったり、廃炉資料館や福島第一原子力発電所を訪問し、双葉郡が直面している課題について正面から向き合った。

探究活動を進めていく中で、最大のテーマであるトリチウム水の海洋放出が決定してしまったため、最終的にはトリチウム水の効果的な活用方法を考察することに舵をきった。



【希釈の計算】



【牛乳を使ったトリチウム水の希釈実験】

② 海洋温度差発電班

東日本大震災前は自然環境にも恵まれ、原子力発電によって、経済的にも支えられていた大熊町。しかし、東京電力第一原子力発電所事故によって、全域避難となってしまった。その結果、町外への人口流出が続いている。そんな大熊町を、再生可能エネルギーを使って魅力のある町にし、地域の復興につなげる活動をしたと考えた。その再生可能エネルギーの手段として、海洋温度差発電に着目した。海洋温度差発電とは、海の表層と深海の温度差を利用した発電方法で、発電量が安定しており、太陽の熱エネルギーを有効に使うことができる。この発電方法を大熊町の海洋で実現できないかと考えた。

まず海洋温度差発電を実現するための基礎実験として、対流の実験を行った。水槽に入った水をヒーターで温めることで、実際に対流が起きているかどうかを調べた。水槽の表層と深層の温度を実際に測定し、グラフにまとめることができた。やはり水槽全体を温めるためには時間がかかってしまい、さらに、温度差はあまりひらかないことが分かった。

次の基礎実験として、ジエチルエーテルをチューブ内で液化させる実験を行った。ジエチルエーテルは海洋温度差発電において、冷媒となる物質でありその性質を確認することができた。

高校3年次では、発電装置の構造を調べるため、本格的な理科の実験器具であるソックスレー抽出器を用いたジエチルエーテルの実験を行った。実験は一人でできるものではなく、あらためて他者と協働することの大切さを痛感した。理論→実証→改善、このサイクルを通して、少しずつ実験の精度をあげていった。

最終的にはオリジナルの海洋温度差発電の発電機的设计図を作成することができた。発電機の試作まではできなかったため、卒業後も引き続き、発電についての研究を進めていきたい。

③ リモネン発電班

広野町の特産品としてみかんが有名であるが、あまりみかん単体として販売されていない。その理由を調べたところ、主に加工用として生産されていることが分かった。そこで広野町のみかんを多くの人々に知ってもらい、さらに地域の活性化につなげるため、リモネン発電に注目した。リモネンとは、みかんの皮に含まれている成分で家庭用食器洗剤にも含まれている成分である。

まずは広野町のみかん園のみなさんに協力を依頼し、実際にみかん狩りを行った。みんなで協力して収穫作業を行い、数箱分のみかんを確保することができた。次に大量のみかんの皮を集め、それをすりつぶしてフラスコに入れて、水蒸気蒸留でリモネンを抽出する実験を行った。はじめは油のような成分を抽出することができたが、時間の経過とともに、その成分が蒸発してしまった。2回目の実験として

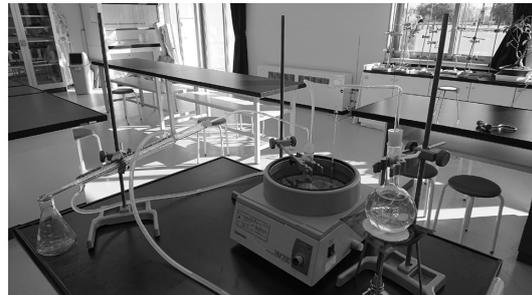
ウォーターバスを使用し、みかんの皮の温度を上げてから水蒸気蒸留を行った。その結果、リモネンと思われる成分を抽出することができた。

高校3年次では、地域のゆず狩りの活動に参加し、地元の幼稚園を訪問し、そこで自分達の実験を披露することができた。実際に実験を体験してもらうことで、成分抽出のプロセスを知ってもらい、興味関心を持ってもらうことを目的とした。抽出した成分は芳香剤として参加者にプレゼントした。

また UV 装置を使った、抽出したリモネンとサンプルの成分比較も行った。その結果、確かにリモネンの成分が存在するという検証結果が得られた。しかし、リモネンの成分を実用化するためには、みかんが最低1トン必要であり、発電への利用や商品化はとても難しいことが判明した。



【みかん狩り】



【水蒸気蒸留の実験】

④ 川探究班

再生可能エネルギーの原点として、まずは地域の自然環境を知ることが基本として、活動を行ってきた。その中でも広野町の主要な川として、浅見川に注目し、水質調査や生態調査を進めてきた。水質調査では、実際に浅見川の上流・下流の水を採取し、CODを利用した実験で、その性質を確かめることができた。また生態調査では、浅見川に生息している生物を捕獲し、飼育と養殖を試みた。その中でも広野町にしか生息していないキタノスジエビを発見することができた。これ以外の活動としては広野町役場でのインタビュー、五社山のフィールドワーク、浅見川の清掃活動などを行った。

高校3年次では、引き続き、浅見川の清掃活動に参加し、地域の人々の温かさや本校に対する期待の高さを、身を持って感じる事ができた。復興の拠点としての本校の役割を再認識できた。

またキタノスジエビの飼育を行ったが、やはり自然

環境の生物をより自然環境に近い状態で飼育することはとても難しく、抜け殻を採取する前に、すべて死滅してしまった。

本来であれば、キタノスジエビの抜け殻を採取し、その抜け殻が CO₂ を吸収することを実証しようと計画していたが、残念ながら確かめることはできなかった。



A student is seen from behind, writing on a chalkboard. The chalkboard contains a table with five columns and several rows of data. The columns are numbered 1 through 5. The rows include labels for '水温' (Water Temperature), 'pH', '溶存酸素' (Dissolved Oxygen), '透明度' (Transparency), and '濁度' (Turbidity). The data points are handwritten and include numerical values and units.

	①	②	③	④	⑤
水温	11℃、15℃	14.7℃、13.8℃	12℃、12℃	11.1℃、11.1℃	12.8℃、21℃
pH	5.5	5.5	5.6	5.4	5.5
溶存酸素	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
透明度	10cm	10cm	10cm	10cm	10cm
濁度	100	100	100	100	100

[水質調査]



[浅見川清掃活動]

(4) 課題と展望

これで約2年間の探究活動は終わりを迎えるが、それぞれのグループで様々な課題と新たなテーマを見つけることができた。この再生可能エネルギー探究ゼミの最大の強みは「チームワーク」であり、どんな困難に直面した時も、お互いが協力し、支え合いながら、1歩ずつ着実に探究活動を進めてきた。

「発電」だけに限らず、地域の「自然環境」にも着目し、幅広い視野で探究活動に取り組んできた。卒業後も、それぞれの分野でさらに調査研究を進めていってほしい。そして、「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」の実現を切に願っている。

2. 3. 1 ④ アグリ・ビジネス探究ゼミ

アグリ・ビジネス探究ゼミは、双葉郡の農業生産の現状を鑑み、今後の農業とビジネスを探究するゼミである。令和3年度はアカデミック系列、スペシャリスト系列農業、商業、福祉の生徒から成り、計12名（男子5名、女子7名）で実施している。

本ゼミでは、6つのプロジェクトが進行しており、県内農産物の風評被害払拭に向けた取り組み、地域資源を活用した商品開発、持続可能な農業に向けた開発、地産地消の推進が主になっている。

(1) はじめに

本ゼミでは、これから始まる探究活動が単なる調べ学習や自己満足的な活動にならないよう、キックオフの際に、「あなたはなぜ〈プロジェクト〉を行うのか」、「そのプロジェクトは、〈誰のため〉〈なんのため〉に行うのか」といった問いを生徒に投げかけ、探究活動の意義を考えさせ進め方を共有した。

(2) 実施内容

① 今年度の流れ

本ゼミでは、6つのプロジェクトが進行しており、原発のイメージ払拭（①「大熊新特産品「いちご」～Make a Smile with sweets～」）、県内農産物の風評被害払拭に向けた取り組み（②みんなバナナすきだよねえ）、③資源の再利用の推進（⑤「古着にもう一度光を」）④「ニーハオはばたけ広野バナナ」地域資源を活用した商品開発（⑤「凍み天復活」）、⑥メディア&福祉&アグリ協働「お肌つるつるお米パック」が主になっている。

・新型コロナウイルス感染症予防の観点から、アクションに制限があったが、感染症対策をしっかりとって、生徒それぞれが考えた未来創造探究発表会（9月25日）に向けた取り組みとなった。

・論文執筆

2年間の探究活動を論文にまとめた。

② 活動内容

・「大熊新特産品「いちご」～Make a Smile with sweets～」



福島民報 2021年7月23日

・みんなバナナすきだよねえ

震災後、双葉郡の農林水産業を取り巻く課題の一つに「風評被害」がある。本探究では、この課題に目を向け、広野町の特産物として力を入れている「広野産のバナナ綺麗」を用い、風評被害の払拭と地域の方と関わりが薄れている現状から、地域の方とのコミュニケーションツールとして「バナナカステラ」を利用できないかと考えた。広野町の農産物を活用した加工品の商品開発を行い、町を訪れた人に配布することで、広野町の魅力発信を目的としていた。

広野町振興公社の中津氏の協力のもと、広野町特産のバナナを活用したカステラを製造し数度の試作をして完成させたバナナカステラに対して広野町をPRする貴重な取り組みと高く評価していただいた。



広野町振興公社 中津弘文様 2021年7月14日



試作の様子 (2021年2月)

・古着にもう一度光を

SDGs 12 つくる責任つかう責任に着目し、捨てられてしまう古着の再利用をテーマに掲げた。作業着として新たに古着のリノベーションを目指す。また、オーガニックコットンの需要と供給の調査調や、環境に配慮した持続可能な活動をめざした探究内容である。



N.P.O. ザ・ピープル理事長 吉田 恵美子 様



2021年
7月11日

・ニーハオーはばたけ広野バナナー

震災後、双葉郡の農林水産業を取り巻く課題の一つに「風評被害」がある。本探究では、この課題に目を向け、広野町の特産物として力を入れている「広野産のバナナ綺麗」を用い、風評被害の払拭と地域の方と関りが薄れている現状から、地

域の方とのコミュニケーションツールとして「バナナギョウザ」「バナナ春巻き」を利用できないかと考えた。

商品コンセプトとして必要な、商品のターゲット（誰が）、ベネフィット（どのような価値）、シーン（場面）を考え、商品の試作を繰り返し商品化に向けたアドバイスを受け商品開発を行った。アクションを通して地域の方々との交流がしつかりと生まれた。



広野町振興公社ひろぼーの休憩所
2021年6月30日

- ・皮がしっとり系よりもカリカリ系の方が良いと思う。(20代男性)
- ・中身の餡がもう少し詰まっていたほうが良い。(60代男性)
- ・餃子の皮ではなく、パイ生地が良いかも。(40代男性)
- ・チョコではなく、あんこバージョンも食べてみたい。(40代女性)
- ・油っこさが口に残った。皮ももう少し薄く、パリッとしていたらもっと良かった。(30代男性)
- ・軽い口当たりで美味しい。どうやって日持ちをさせるのか考慮する必要あり。(60代男性)
- ・アイディアは面白いと思う。冷めたせいか、バナナとチョコの味が薄く感じました。(30代男性)
- ・バナナ風味が弱いと感じた。「バナナ餃子」と言われなければわからなかったかも・・・(40代男性)
- ・チョコ味が濃いため、もう少しチョコを少なくしてもよいかも(20代男性)
- ・販売するにあたり、売値は幾らに設定するのか気になる。(20代男性)

・凍み天復活

震災前南相馬市で販売されていた上げ菓子「凍み天」。震災後工場が被災し一時生産中止となる。その後支援を受け、営業を再開するが、ほとんど知られていない。友人とのたわいのない会話から「凍み天」のワードに関心を持ち、「凍み天復活」を探究テーマに掲げ活動を試みた。

(3) 成果

新型コロナウイルスの影響で商品開発をした商品を地域イベントや自主企画イベントで地域の方々に広く伝えることができなかった。しかし、生徒は社会状況に順応し探究活動を継続することができた。

(4) 課題と展望

県内農産物の風評被害払拭に向けた取り組み、地域資源を活用した商品開発、持続可能な農業に向かう開発、地産地消の推進テーマを掲げそれぞれの探究活動を行ってきたが、多くの大人との関りから地域課題について再確認し、実践を通して何を学ぶのかを整理していくことが必要である。

2. 3. 1 ⑤ スポーツと健康探究ゼミ

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から11年を迎えた。この11年の間には、避難指示区域の解除や常磐自動車道とJR常磐線の全面開通、ふたば未来学園高校と小高産業技術高校の開校、J-villageの機能再開など、復興が進み明るい話題が増えてきた。一方で復興は進んでも、人口の減少は歯止めがかからない。令和4年度には新地高校と相馬東高校が合併し、相馬総合高校となり、相双地区から高校が1つ減ることになった。さらに、今年度も新型コロナウイルス感染症が世界で猛威を振るった。

そんな中、今年度は延期になっていた東京オリンピックが十分な感染対策を施して開催されたことは日本全体に大きな希望と勇気を与えた。インターハイや夏の甲子園などのスポーツの祭典が実施され、少しずつではあるが日々トレーニングに励むアスリートたちの活躍の場が復活してきた。

「する」「観る」「支える」「知る」。このような状況にある今だからこそ、世界や社会、地域、さらには自らの課題に目を向けて、どのような課題が蓄積されているのかを知り、スポーツを生かして世界や社会、地域、自身の課題解決を目指した。

(1) 2年次の活動

総合型地域クラブによる地域活性化、健康の増進、子どものスポーツ環境の支援、スポーツビジネスによる持続可能で豊かな地域の実現やアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行った。

(2) 実施内容

本ゼミはトップアスリート系列の生徒で構成されている。全国各地から本校に集まってきている利点を生かし、「それぞれの3.11」を共有する時間を設定した。そして、その流れを生かしながら、それぞれの出身地における様々な課題を調査した。遠方でも自分の地域と同じような課題があるということを知り、互いの共通点を見つける時間とした。

次に「世界」へ目を向ける時間を設定した。スポーツに限らず、様々な世界の課題を調査した。

これまでの学習を積み上げ、世界や日本、地域、自身の課題調査からどの課題を解決するか決定し、自分がスポーツにおけるどのような立場（選手、指導者、経営者、スタジアム、アリーナ、スポーツショップなど）で関わり、最終的にどのように「win×win」の関係性を作り出すかを考えた。各々で思考を巡らせ後、アイデアが近い生徒同士でグルーピングを行った。過去の卒業生からは生まれてこなかったアイデアも出ており、思考に柔軟性があった。

(3) 3年次の活動

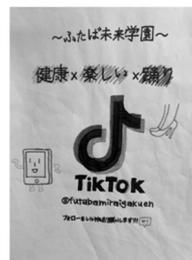
2年次からの活動を踏襲し、アクションを継続した。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響は大きく、現地に赴いてのアクションに制限がかかり、満足な活動ができなかった。そんな中でも自分たちができる活動を模索し、実践を行った。

“TikTok～いきいきプロジェクト～”

広野町の高齢者の健康増進にフォーカスし、高齢者の運動機会の拡大のためのアクションを立案した。SNSの「Tik tok」を取り入れることで、若者



や世界を視野に入れた情報発信を狙った。高齢者向けの簡単なダンスを作り、地域の集会所を訪問して実際に指導しながらダンスを一緒に踊るアクションを実施した。座ってもできるように、また、ダンスが苦手な方でも取り組みやすいように配慮したダンスを考え、アクションを重ねた。



“スポーツの力で世界と繋がる”

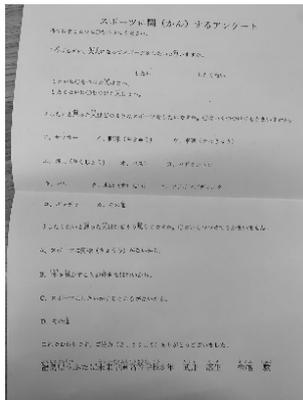
SNSを取り入れながら「世界と世界」を繋げる新しいパイプになるため、東日本国際大学の留学生との交流を通して、スポーツは言語や文化を越えて楽しむことができるツールであることを発信しようと考えた。コロナ禍で交流活動が制限されたため、「You tube」を利用して自分たちがサッカーを楽しんでいる動画を世界へ発信するプロジェクトを実施した。いかに海外の方が楽しんで観てもらえるか、という視聴者の視点で3本の動画を作成し、それぞれの動画に英語の字幕を添えたこともあり、海外



の方から高評価やコメントをいただくことができた。

“障がい者スポーツの振興”

福島県のスポーツの課題を調べていくうちに、障がい者のスポーツの機会が少ないことを知り、知的障がい者のスポーツの振興のためのアクションを立案した。富岡支援学校でフライングディスク、ボッチャ、いわき市のサンアビリティーズで車いすバスケットボールの体験をした。知的障がい者にスポーツを指導するうえで配慮しなければならないことを学び、バドミントンを富岡支援学校の生徒に伝えるアクションを立案した。また、県内の特別支援学校の高等部の生徒にスポーツに関するアンケートを実施し、する側の意識の問題より、支える側の少なさ、指導の難しさ、施設の少なさに課題があることを導きだした。



“貧血に悩む女性アスリートを少しでも減らそう”

女性の貧血問題に注目し、女性アスリート自身だけでなく、その周囲に関わる人々へも発信することで組織的な課題解決へ導いていくアクションを立案した。貧血のメカニズムから栄養や睡眠の質の高さが重要なことを知り、女性アスリートを対象に貧血についてどれくらい知識があるのかアンケートを作成した。また、JFA メディカルセンターの檜山トレーナー、元バドミントン女子日本代表の潮田玲子さんとのオンラインミーティングを開き、学んだことを生かし、校内で女子中高生向けの交流会を企画しようとした。交流会は実現できなかったが、貧血についてのパンフレットを作成した。



(4) 成果と課題

それぞれのグループで、2年次から考えを深めたテーマを実践すべく、3年次を迎えたが、新型コロナウイルス感染症の拡大は落ち着かず、現地に赴いたり、交流したりするアクションはほとんどできなかった

のが残念である。感染状況が落ち着き、プロジェクトの実践まであと一歩のところまで再拡大し、満足な探究活動が行えなかったことで、モチベーションを保つのが非常に困難だったように思う。それでも限られた時間の中で、対話を重ね、現在の状況でできることを模索し、プロジェクトを実践できたことは素晴らしいかった。幸いだったのは、この年代は休校期間があったことで、オンラインでの活動に慣れており、オンラインでの交流を深められたグループがあったのがよかった。また、SNSの取り扱いにも慣れており、映像編集も様々な演出を加えて見ごたえのある動画を作成できた。今後このような形での交流やプロジェクトが増えていくのではないだろうか。

一方で、テーマの設定については課題が残る。地域の課題に目を向けてはいるが、テーマが大きすぎてプロジェクトの実施が困難だったり、テーマとプロジェクトが重ならなかったりするグループもあった。「スポーツと健康」ゼミであることから、地域の課題とスポーツを結びつけて探究活動を深めていくのだが、地域の課題について、無理やりスポーツを絡めている感じが否めないグループもあった。

また、全員がトップアスリート系列の生徒であるので合宿や試合等が重なり、探究活動をしたくてもできない日が続いたりすることもあった。それでも電話やメールを駆使してアポイントを取ったり、依頼文を作成したりと自分の役割に責任を持って臨む姿はいかにもトップアスリートであった。しかし、生涯プレーヤーでいることは不可能で、いずれプレーから一線を引くときが来る。その時自分は何ができるのか。その時この探究活動で学んだことが生かされると考えている。

テーマ設定やプロジェクトの実施など、なかなか思うように進まない2年間ではあったが、この2年間の取り組みは必ず役に立つことと信じている。そのためにも、トップアスリート系列の探究活動のテーマの在り方を見直す時期に来ているのではないだろうか。地域の課題をスポーツを通して解決することも必要であるが、自分の専門種目の課題解決に向けた、いわゆる大学の卒業論文のようなテーマでも探究を深めることができるのではないかと。トップアスリート系列の生徒だからこそ、自分の専門種目に目を向け、自分やチームの課題解決に向けたアクションを実施することもプレーヤーとして大きな経験になると感じる。「スポーツと健康」ゼミの今後のテーマの在り方について、生徒とも議論を重ねていきたい。

2. 3. 1 ⑥ 健康と福祉探究ゼミ

健康と福祉ゼミは、「健康」や「福祉」に興味のある生徒や高校卒業後の進路に福祉系を考えている生徒が選択している。自らの関心のある事柄と「健康」や「福祉」の分野を関連させ、地域の課題解決に向けて探究活動を行っている。

(1) はじめに

「健康」や「福祉」の分野は幅が広く、生徒の興味・関心も多岐にわたる。本ゼミでは個人での活動が多く、昨年度からの継続でそれぞれ探究活動を進めている。

(2) 実施内容

① 今年度の流れ

- ・ゼミ内発表（4月14日）

中間発表の練習のためにゼミ内で発表会を行った。ゼミの仲間や先生方からアドバイスをいただき、スライドや発表の仕方を改善することができた。

- ・中間発表（4月21日）

2年次で行った探究活動の内容と反省、今後の見通し等をまとめ、PPスライドを用いて発表を行った。9月の未来創造探究発表会をイメージする機会となった。

- ・活動計画の見直しと実践（4月～12月）

これまでの活動や新型コロナの状況を踏まえて活動の見直しと実践活動をくり返した。

- ・ゼミ内発表会、発表動画撮影（9月15日）

未来創造探究発表会の代表者を選出するためのゼミ内発表会を行った。また、その様子を動画撮影し、各自で振り返りを行った。

- ・未来創造探究 生徒発表会（9月25日）

各ゼミで選出された代表者は、これまでの活動のまとめを発表し、審査員の方々からアドバイスをいただいた。



未来創造探究 生徒発表会の様子

- ・論文執筆（10月～1月）

2年間の探究活動を論文にまとめた。

② 活動内容

- ・広野町探検隊 ～仲良し大作戦～

子ども達の肥満率の増加に着目し、日常的に体を動かせる環境づくりについて考え活動をした。2年次で計画していた広野小学校3年生との「広野町探検」を実施し、広野町の歴史と運動することの大切さについて伝えた。



「広野町探検」の様子

- ・子どもロコモ改善プロジェクト

ロコモティブシンドロームの増加に着目し、小さい頃からの運動習慣の確立をめざし活動をした。広野町公民館にご協力いただき、自分の考えた運動を小学生と共に行い、小学生の運動習慣の増加に取り組んだ。



「放課後児童クラブ」の様子

- ・音楽療法で認知症予防

広野町社会福祉協議会にご協力いただき、認知症カフェで音楽を用いた動画撮影を計画した。新型コロナの影響により実践には至らなかったが、本校生徒の協力を得て動画のサンプルを作成した。

- ・The challenged

障害者に関わる職業につくことを希望しているので、障害者のニーズを知り、どのような活動をすれば交流できるか考え、計画した。新型コロナの影響により実践はできなかったが、調査アクションを通してノーマライゼーションについての理解を深めた。

・高齢者に生きがいをも！！

高齢者が生きがいを感じるのとはどのような場面かを考えた。新型コロナの対策をとりながら広桜荘に通う高齢者の方々との交換日記を行い、交流を続けた。



高齢者との交換日記の一部

・Make your life in a shelter better

—これからの災害に備えて—

学校で避難所の疑似体験を通して課題を発見し、その解決法を模索した。また、国内外の避難所の比較や避難所におけるベッドの有効性について検討した。

・ハンドケアで高齢者と交流

—私たち高齢者ができること—

ハンドマッサージに関する知識を踏まえて、ハンドケアの練習を繰り返した。また、広桜荘を訪問して高齢者と交流しながらハンドケアの実践を行った。



広桜荘でのハンドケアの様子

アロマストーンづくりの様子

・Aroma and refresh

アロマバスボムを作成し、それを利用したハンドケアで高齢者と交流することを計画した。また、アロマストーンを作成し、香りの癒し効果・リフレッシュ効果について調査した。

・健康な心を持つこと◎

高校生に対し高齢者に関するアンケートを実施し、高齢者に対する印象を知った。また、高校生に高齢者について知ってもらおう機会をつくった。

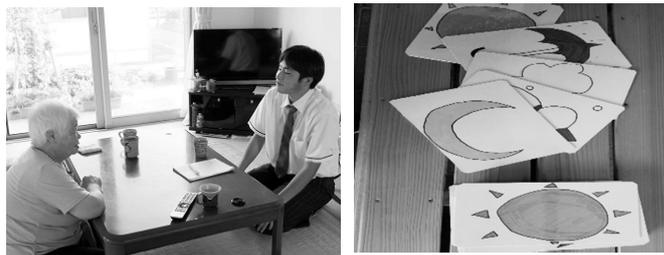
・コミュニケーションでつながるバトン

高齢者の孤独死が増加傾向であることを踏まえ、一人暮らしの高齢者の生活を安全なものにしていくことをテーマとして活動した。檜葉町の住宅地のゴミ拾いを通して高齢者と交流をした。

・認知症 もっと楽しく 毎日を〈ゲーム編〉

認知症患者の生活をより充実したものにしていくこと

を目的として活動をした。高野病院を訪問し、自作のカードゲームを実施していただき、アドバイスを踏まえて改良をくり返した。



高齢者との交流の様子

認知症患者のための手作りカードゲーム

・Enjoy with the elderly

将来、自宅介護をしなければならない人が増えることが想定されるなか、「いざその時」になって困らないように介護についての知識を広めることを目的として活動をした。レクリエーションを考え、広桜荘で実践をくり返した。



広桜荘での手作りボッチャ（レクリエーション）の様子

「福島県」を取り入れた高齢者の食事

・高齢者の健康を支える食生活

自らの進路を踏まえ、「食」を通して高齢者のQOLを向上させることを目的として活動を行った。福島県の食材を活用した献立を考え試作を繰り返した。

(3) 成果

新型コロナの影響により実践が難しい状況の中で代替案を検討し、十分に対策を取りながら探究活動を行っている姿が印象的であった。生徒は実践を繰り返しながら計画的に活動することや地域人材と協働することの大切さ等を学ぶことができた。

(4) 課題と展望

3年次の活動においては、積極的に実践をくり返した生徒が多かった。しかし、「実践してみた」で終わり、地域や世界の現状と関連付けた考察やまとめ発表ができていないことが課題である。実践と並行して「福祉」に関する知識のインプットやデータの活用方法を学ばせる時間をどのように確保するかを検討していく必要がある。

2. 3. 2 探究活動発展のための発表会（未来創造探究 生徒研究発表会）

高校2年次から2年間取り組んできた「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。本校における課題解決型学習の成果を披露する機会として、調査アクションのみならず、課題を解決するアクション、生徒自身の総括、社会への提言等を発表した。様々な分野の第一線で活躍されている方（専門知をもつ審査員）や地域の課題に取り組んでいる方（地域知審査員）に審査をお願いした。感染症対策として体育館での全体会は行わず、分科会のみでの発表とした。また外部の参加者には全体会でZoomを活用したライブ配信を行い、保護者や地域の方のみならず、全国に向けて成果を披露した。また、今年度はふたば未来学園中学校が開学して3年目の年となり、初めて中学校3年生の「未来創造学」の成果を発表する機会となった。

(1) 概要

- ① 目標
- 1) 地域課題解決のための探究と実践に取り組む学習「未来創造探究」の成果をまとめて発表することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（D：表現・発信力、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
 - 2) 発表を聴講することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（A：社会的課題に関する知識・理解、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
 - 3) 保護者、地域の方々、県内外の教育関係者に本校の探究活動の内容を発信し、ステークホルダーとの協働関係をより強固なものにする。
- ② 日時 令和3年9月25日（土）9：00～16：50
- ③ 内容 9：00～10：15 分科会（8教室で高校生4発表、中学生2発表ずつ）
 10：30～11：10 専門知審査員によるミニ講義
 11：30～11：50 ★開会行事
 11：50～12：35 ★全体会Ⅰ（高校生代表発表【前半】）
 12：35～13：20 休憩
 13：20～14：05 ★全体会Ⅱ（高校生代表発表【後半】）
 14：20～14：45 ★全体会Ⅲ（中学生代表発表）
 15：05～15：50 ★閉会行事（結果発表、表彰、総評）
 16：20～16：50 教員と審査員の探究交流会

④ 審査員 専門知を持つ審査員8名（1～8）、地域知を持つ審査員8名（①～⑧）

	氏名	所属	専門		氏名	分野 or 地域	地域
1	松岡 俊二 様	早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科 教授	地域全般	①	青木 淑子 様	富岡町3.11を語る会、 元富岡高校校長	富岡
2	小山 良太 様	福島大学 食農学類 教授	アグリ	②	吉川 彰浩 様	一般社団法人 AFW 代表	南相馬
3	佐藤 理夫 様	福島大学 共生システム理工 学類 教授	再エネ	③	下枝 浩徳 様	葛力創造舎 代表理事	葛尾
4	菅波 香織 様	未来会議 事務局長 弁護士	地域全般	④	平山 勉 様	双葉郡未来会議 代表	富岡
5	永井 祐二 様	早稲田大学 環境総合研究 センター 准教授	地域全般	⑤	松本 昌弘 様	檜葉町役場	檜葉
6	中田 スウラ様	福島大学 人間発達文化学 類 特任教授	地域全般	⑥	吉田 恵美子様	NPO 法人 ザ・ピープル 理事長	いわき
7	古川 拓也 様	大阪成蹊大学 経営学部 講師	スポーツ	⑦	小松 理虔 様	ヘキレキ舎 代表 ローカル・アクティビスト	いわき
8	猪狩 僚 様	いわき市役所 IGOKU 編集長	福祉	⑧	青木 裕介 様	ちゃのまプロジェクト 共同代表	広野

⑤ 外部聴講者（Zoom） 185名（参考：昨年46名）

(2) 詳細

① 事前準備

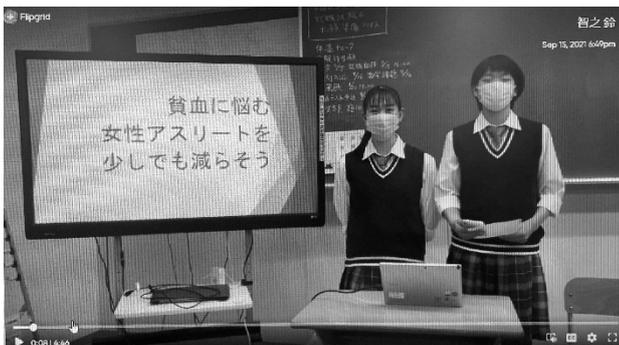
今年度の発表会は県内に「まん延防止措置」がとられている状況下での実施となった。昨年度同様に、コロナ感染症の防止対策を徹底して行うことに留意して実施することとなった。対策としては、全体会における三密回避を徹底するためにアリーナには高校2・3年次と中学校3年生だけとした（中学校1・2年生と高校1年次は別教室でZoom映像を参観する）。また分科会会場の人数についても多くなりすぎないように、8会場で分科会を行った。外部からの来場者は審査員のみとし、それ以外の参加者についてはZoomによるライブ配信を行った。

実践内容を様々な観点から探り、参加者全体で学びを深めるために、分科会会場ごとに専門知を有する審査員1名、および地域知を有する審査員1名に参加していただき、校内審査員（教員）1名を加えて3名で審査をすることとした。地域知を有する審査員は本校の開校の経緯や生徒の探究活動が面的に広がってきたことをふまえ、昨年度は双葉郡の全八町村からお呼びするようにした。今年度はさらにいわき市からも審査員をお呼びした。審査員の方々はこれまで本校の探究活動に参画して下さった方が多く、依頼した審査員の方には快諾をいただいた。

今年度は個人探究に組んでいる生徒が増加し、更に中学校3年生の発表も加わったため、総数の増加が昨年度以上に増加した（今年度74PJ【高校48PJ、中学校16PJ】、昨年度は48PJ）。そのため、今年度は動画による事前審査を行い、高校の発表プロジェクトを58PJから32PJまで絞ることとなった。また、昨年まで発表時間10分であったのを5分に短縮し、内容をより精選して発表するように指導をした。

- ・動画による審査（FlipGridを使用）

発表を5分にまとめ、動画をFlipgrid上にアップさせた。この動画は事前審査のために審査員とも共有をした。



② 分科会

- ・昨年同様に、分科会ではゼミの枠を外し、複数のゼ

ミの生徒が参加するようにした。とは言え、分野については共通して括れるように配慮した。

- ・発表数と時間を勘案し、会場数は8会場、各会場で6発表（高校4発表、中学校2発表）を割り当てた。
- ・各分科会に外部審査員2名、内部審査員（本校教員）、司会（本校教員）を設定した。生徒は発表に集中できるように、係の設定は極力少なくなるようにした。



- ・発表するだけでなく、専門知を有する審査員によるミニ講義の時間を設定した。
- ・審査のための審査基準を作成し、その基準に基づいて各分科会会場で審査を行った（未来創造探究賞）。また生徒投票による審査も同時に行った（共感賞）。
- ・分科会の結果、以下のグループが全体会出場となった。（全発表内容については巻末資料を参照）。

○環境事業でシビックプライドを作ろう

○Enjoy with the elderly

○もったいないバナナ

○大熊×いちご×私

○Future Quest

○子どもロコモ改善プロジェクト

○鉄たまごという地域の可能性

○わかものがたり



③ ミニ講義（専門知審査員による）

- ・今年度も昨年度同様に専門知審査員によるミニ講義をお願いした。特にこれから探究を進めていく低学年の生徒にとっては、専門家のお話を聞ける貴重な時間となっ

た。昨年度は講義 20 分の内容であったが、今年度は講義の時間を 30 分とし、内容を充実させた。なお、ミニ講義のタイトルは以下のとおりである。

	氏名	ミニ講義 タイトル
1	松岡 俊二 様	「2050 年の福島浜通りの地域社会を考えよう :1F 廃炉や復興はどうなっているのだろうか?」
2	小山 良太 様	震災 10 年以降の福島県農業と新しい産地・ブランド形成の可能性
3	佐藤 理夫 様	2040 年ふくしま再生可能エネルギー100%の先に
4	菅波 香織 様	対話が未来を作る～8年間の未来会議を通じて感じる無力感と希望～
5	永井 祐二 様	豊島産業廃棄物不法投棄問題と自然再生事業～1F 廃炉における合意形成のヒント～
6	中田 スウラ様	子どもの貧困と地域社会～教育と福祉～
7	古川 拓也 様	スポーツを通して“誰が”地域課題を解決するのか?
8	猪狩 僚 様	「福祉の IGOKU、健康の極意」

④ 全体会

・全体会では先述の高校生代表 8 プロジェクトと中学生代表 4 プロジェクト、中学校バドミントン部の特別発表の全 13 プロジェクトが発表した。表彰は以下の通りとなった。

「未来創造探究 最優秀発表賞」

- ・鉄たまごという地域の可能性

「未来創造探究 優秀発表賞」

- ・大熊×いちご×私
- ・もったいないバナナ

「未来創造探究 発表賞」

- ・環境事業でシビックプライドを作ろう
- ・Enjoy with the elderly
- ・Future Quest
- ・子どもロコモ改善プロジェクト
- ・わかものがたり

「共感賞」大熊×いちご×私

中学校「未来創造学 優秀発表賞」

- ・りーふる編集部
- ・手話を使ってろうあ者理解への第一歩
- ・チームゲーマーズ
- ・五社山嵐 (ごしゃやまおろし) の研究



⑤ 総評 (専門知審査員: 佐藤理夫、菅波香織)

1) 佐藤理夫先生から

- ・探究活動ができる恵まれた環境を振り返って欲しい。他校にはない充実した設備、熱心に探究に向き合っ

ている先生、なにより地域の方々の協力があることを再確認して欲しい。

- ・中学生の皆さんの発表のレベルが高い。これをさらに高校で伸ばして欲しい。高校生も中学生の目標になるように頑張ってください。
- ・テクニカルな話になりますが、5分間のプレゼンはきつかったと思う。人に伝えたいものをもっともっと厳選して欲しい。グループでの発表は考察がちょっと甘いかなと思うところもあった。
- ・探究と学習が乖離していませんか? 理系は特に高校までの理科的知識を踏まえてください。また、理系に限らずデータ解析などを活用してください。「やりたいことをやってみた」となってしまう PJ も見受けられました。学んだものをいかし、どう進めれるか…特に大学進学を考えている方は意識してください。
- ・これは「探究」ではなく「地域貢献体験記」ではないかと思われるものがありました。それはそれで大切なことですが、成長するためには「高校生がやった」というレッテルがついて満足してしまっってはいけない。20～30 才にやった場合でも、そのプロジェクトが地域に活かされているか、考えたい。「高校生がやることだからまあいいか」となってしまうと甘くなる。探究はあくまで探究…。探究という言葉を再考してほしい。体験記録だけにとどまらない論文を期待しています。

2) 菅波香織さんから

- ・地域の課題と自分の関心を合わせて、自分事としてとらえているのが分かりました。みなさんのネットを使った情報活用も上手でした。
- ・現状の把握として、アンケートなどをやっていたと思いますが、発表で見えてこなかった。データがもう少しあればよかった。また、印象で語られる発表も多い。「ヒントを貰えました」「印象が変わりました」というコメントには何を得たのか、どんな風に変ったのか、具体的に欲しい。
- ・みなさんが探究を主体的に取り組んでいるのが伝わりました。2つ目とも関係しますが、みなさんの探究の対象となる地域の子供、高齢者も主体を持つ存在です。コロナで難しかったと思いますが、お一人お一人の心情や意思や尊重すべきことも考えつつ、皆さんのやりたいことを掛け合わせて共創していければ素敵だと思いました。
- ・私的にドキッとしたり、違和感を覚えたワードがありました。皆さんもそれを友人らと言葉にして、対話

をしてみてください。もやもやを一人の中で消してしまうのは勿体ないです。今日の探究のあとも、対話で未来を作ることを考えていただければと思います。



⑥ 教員と審査員の探究交流会

昨年初めて教員と審査員の探究講習会を実施して、外部審査員と担当教員との懇談会を、発表会終了後に設定した。生徒の発表を踏まえて、日頃の指導方法や連携の在り方等について忌憚のない意見をいただくことができた。今年度は「中学3年間の探究を高校でさらにどのように伸ばしていくか?」という問いを設定し、KPT (Keep, Problem, Try) 法を用いてグループディスカッションを行った。



【Keep (そのまま続けたいこと)】

- ・発表の丁寧な言語化
- ・専門知と出会える場を作る
- ・率直な個人の興味を反映した探究 (中学生)
- ・とがった才能をどんどん伸ばす

【Problem (問題点)】

- ・審査基準が文系の方が点数に反映されやすい (理系のプロジェクトを評価しにくい)
- ・理系をフォローできるゼミ編成
- ・高入生と一貫生のゼミの接続
- ・テーマと自分自身のつながりをもっと言葉にした方がよい
- ・課題からスタートにしないこと
- ・仮説と検証を行って、課題が変わってもいいはずなのに変わらない (「課題」という言葉を使わない方がいい

いのではないか)

- ・発表時間5分は短い

【Try (来年やってみたい)】

- ・最終発表会で地域の人とであるのではなく、常にオープンな関係を作る
- ・学年を超えた交流・コラボ

⑦ 結果および今後の展望

・今年度もコロナ感染症対策のため、予定していた活動ができなくなるケースがあった。昨年と異なっている点は、Zoomなどの新たなオンラインのツールを手に入れた点である。このツールを積極的に利用し、他県の高校生とオンライン交流会を行った探究やマイクラフトを利用した探究、分科会発表の様子をライブ配信で行う探究など新機軸を導入した探究なども見られた。

・この発表会は1期生から始めて今回が5回目であるが、会を重ねるごとに発表件数が増え、調査だけでなく課題解決のための実践を進める生徒の割合が増えており、質、量ともに高まっている傾向が見られる。一方で、現実的に地域の外に出て課題解決のアクションの総量は絶対的に少ない。また、海外研修がここ2年国内の代替研修に切り替わり一定の成果は出ているが、海外研修を通じて得られる世界の課題と地域の課題を繋げて考える視点が今回の探究で見られなかったことは次年度の課題ともいえる。

・外部参観者向けにZoomによる配信を行ったが、取組そのものに対しては好意的な意見が多かった。また遠方からの参加者も多く遠隔配信のメリットを活かすことができた。一方、映像や音声の質等、配信の技術的な点は課題が多かった。次年度以降は直接来場いただくようになることを願うばかりであるが、今回培った配信ノウハウは今後も生かしたい。

・3年生はこの後、論文作成や探究活動を仕上げる期間に入るが、それらの質を高めるための機会として、全体として今回の発表会は有効に機能したと思われる。また外部の方に本校の活動の様子を理解していただく場としても効果が大きかったと思われる。次年度以降も、定着した取組として実施していく。

2. 4 海外研修・国内研修

2. 4. 1 ドイツ研修代替研修

本校では、2年次からの未来創造探究として、原子力災害からの復興や、持続可能な地域づくりについて探究を行う。この取組は、福島だけの課題ではなく、全世界が共有する「持続可能な社会づくり」にも繋がるものである。これまでの1年次におけるドイツ研修では、環境首都と呼ばれるフライブルク等の町づくりを視察するとともに、本校の海外連携校である Ernst Mach Gymnasium 校（ミュンヘン）と互いの探究を通して交流を図り、将来起こりうる世界の難題に向き合い、持続可能な社会をめざして未来を創造していく一歩としてきた。ドイツ研修は本校の学びの核の一つであり、学年全体・学校全体が思考を深め、2・3年次探究にもつながる重要な機会となる。しかし、昨年度に引き続き、今年度も新型コロナウイルス感染拡大の鎮静化が見込めず、7期生はドイツ渡航を諦め国内代替研修とオンラインでのドイツとの交流を行い、学びを深めるとともに、学年全体へその成果を還元することとした。

(1) 代替研修内容

(1) 国内研修

- ① 国内のゴミ問題や放射性廃棄物など、この地域特有の課題について知識を得る。
- ② 「ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）」を掲げ、究極の持続可能な地域を追求している徳島県上勝町のゼロ・ウェイストセンターを訪問し、スタディツアーを行うと共に、地域住民と交流し意見交換を行う。
- ③ 英語による議論やプレゼンテーションの技術を身に着けるため、British Hills における合宿を行う。

(2) ドイツとの交流・意見交換（オンライン）

- ① 国内研修を踏まえ、ミュンヘンの Ernst Mach Gymnasium 校の生徒とオンラインにて交流を行う。

(2) 実施内容

募集の段階で現地渡航はできない旨を説明した。代替事業を複数設定することで、海外研修同様の学びを担保することを約束し、多くの生徒が選抜面接に臨んだ。なお、生徒の選考には以下のような課題を設定した。

- ① ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）についてのあなたの考えを明らかにすること。
- ② 持続可能な社会づくりについて全世界が共有する目標である SDGs の 17 の目標のうち、本研修を通じて考えを深めていきたい目標を明らかにすること。
- ③ 本研修での学びを今後の学校生活にどのように生かしていこうと考えているかを明らかにすること。

本研修の目的を自覚し、学校の代表としてドイツと交流し、そこでの学びを地域や学校に積極的に還元する意志を持った 12 名の生徒たちが選抜された。

代替事業① 語学研修

(1) ALT による SDGs 研修・英会話

期日：令和3年12月～2月

SDGs を英語で学ぶためのテキストを購入し、本校 ALT による事前講義を行った。講義では知識のインプットと語彙力の向上をねらいとし、そこで学んだことについて自分の考えを英語で話せるよう、ディスカッションやプレゼンター



ションなどを行った。また、昼休み時間に加えて、コロナ休校期間中や入試期間中は Zoom による英会話を実施した。3人グループの少人数での英会話の時間で、実践的な力を鍛えていった。

(2) ブリティッシュヒルズ(以下 BH)研修

期日：令和4年1月5日(水)～1月7日(金)

現地渡航ができない中で、3月に予定しているドイツとのオンライン交流に向けて英語でプレゼンテーションや議論を行う練習が必要となった。そこで、英国の文化・マナーに触れながら活きた英語を学べる県内の BH にて2泊3日の語学研修を行った。

ドイツの高校とはゴミ問題やリサイクルなどの環境問題について意見交換を行う予定であるため、SDGs を用いたレッスンを中心に、最終的にはプレゼンテーションを作成し、発表できるようなプログラムを実施した。

生徒達は初めこそ All English の授業に戸惑い、上手く反応できずにいたが、夜に宿舎内の Meeting Room に集合し、遅くまで SDGs にまつわる語彙や表現をシェアする様子も見られた。

最終日の発表では、SDGs 目標達成に向けた内容を組み込んだ街をデザインして発表を行った。生徒達は各々自由な発想で町をデザインし、楽しみながら自分達が理想とする社会について意見を発表することができた。



最終日の発表の様子



代替事業② ドイツとのオンライン交流

(1) e-Twinning を使用した交流

ドイツにて交流予定だった、ミュンヘンの Ernst Mach Gymnasium 校とオンラインによる交流を続けた。e-Twinning というサイトを使い、お互いに自己紹介や簡単な投稿を通して交流を深めた後、ドイツの高校生2名と本校生徒2名のグループを作り、あとはそれぞれに個別

に連絡を取り合うようにした。生徒達の中には Instagram など写真や動画をシェアし合う生徒もおり、デジタルネイティブならではの速さで距離を縮め、仲良くなっていた。大変楽しそうに交流しており、現地ですれ違うことが叶わなかったことが尚更に悔やまれた。

e-Twinning でトピックを作成したり、アンケートを取ったり、チャットのやりとりをする機能もあったが、時差の問題もあり、即座の生きたやりとりにならなかったことと、生徒達にとっては使いにくく、なかなかこちらから話題を提供したりすることができなかった。そのため、グループでのやりとりはほとんどが Instagram などの個々のものになってしまい、オープンなディスカッションなどがあまりできなかった。

(2) Virtual Homestay

期日：令和4年1月9日（日）

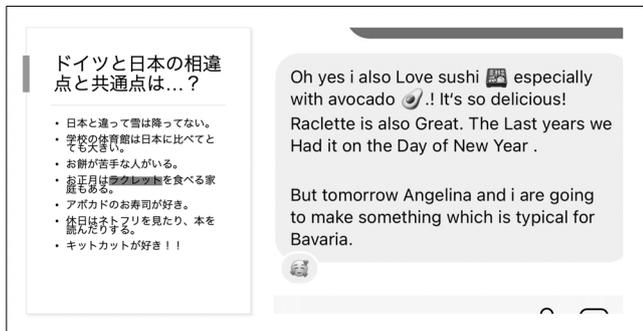
BH 研修の直後にドイツの高校生との Virtual Homestay を実施した。直前の BH 研修時に一度顔合わせを行った。お互いに顔を合わせて自己紹介をした。

Ernst Mach 校も新型コロナウイルス感染拡大により休校が相次いでおり、この日も学校からではなくそれぞれの家からの参加であったため、お互いのコロナ事情について情報交換をした。



Virtual Homestay 当日は、それぞれに Zoom のルームを割り当て、各家庭から接続して交流を行った。日本時間の 19:30、ドイツは 11:30 から、お互いに Lunch と Dinner を食べながらの交流となった。生徒達は家族や、お互いが食べているものを紹介したり、お互いの部屋を案内したりと楽しい時間を過ごした。

その後、振り返りではそれぞれがどのような話をしたのか共有し、スライドにまとめて共有した。スライドから、生徒達がそれぞれに交流を楽しんだことが伝わる内容だった。お互いの国の習慣などの話になると、生徒達も驚くことが多かったようで、日本での当たり前が世界では当たり前ではないということをドイツとの交流を通して学んだようである。それぞれにドイツの高校生から聞いたドイツの習慣や文化で驚いたことを共有していた。



生徒達の感想は以下の通りである。

「事前にいくつか話題を用意していたため、沈黙にはならなかったが、伝えたいことが伝えられない歯痒さを感じた。」

もっと語彙力や文法知識を身につけて、ジェスチャーを交えながら会話できるようにしたい。」

「共通の話題がたくさんあって、話し足りなかった。英語が上手く話せるか不安だったけれど、楽しく文化交流することができた。いつか絶対に会いたい！」

「自分が言いたいと思ったことはなんでも言うべきだと思った。『相手に伝えられるか不安』『伝わらなかつたら恥ずかしいから意見を言わない』という考えはもつたいないと思った。英語が話せない僕でも1時間半もコミュニケーションを取れたので意見や質問の大切さがわかった。」



(3) Online Discussion

期日：令和4年4月（予定）

会場：本校協働学習室

この後、次年度の4月にオンラインディスカッションを行う予定である。テーマは①SDGs12「つくる責任、つかう責任」から、お互いの町の取り組みについて、②お互いの町についての紹介、③ロシアのウクライナ侵攻におけるドイツの状況などを予定している。現在、お互いの町を案内するビデオを作成したり、プレゼントを送りあったりと準備を進めているところである。これまでの学びのアウトプットと、ドイツの高校生との意見交換が英語で円滑に行えるように準備を進めている。



代替事業③ 徳島県上勝町研修（オンライン）

期日：令和4年1月17日（月）

講師：野々山聡氏（合同会社パンゲア CEO）

徳島県上勝町は、持続的な循環型社会を目指し、2020年までにゼロウェイスト達成を公約に掲げてきた。同町はゴミを45分別することで既に再資源化を8割達成しているが、その目標に向けてはゴミを処理する側の体制だけではなく、製品の供給側の意識や、生産・販売・消費の関係、ひいては私たちの暮らし方そのものを考え直すことが必要になる。

昨年度に続いて、国内代替研修として徳島県上勝町を訪問する予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、中止となった。ここでは、訪問予定だった頃に事前研修としてオンラインで行った内容を記す。



(1) ゼロウェイストセンターについて

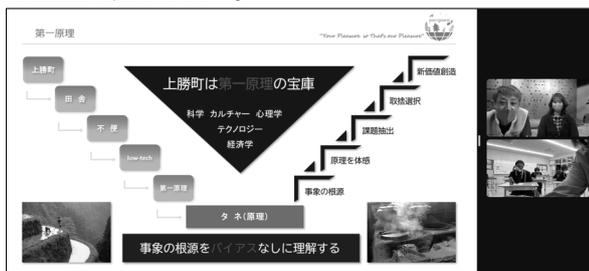
徳島県上勝町にあるゼロウェイストセンターは、町内

唯一のゴミ収集所である。上勝町はゴミ収集車がなく、住民が直接ゴミを持ち寄りその場で分別する。それぞれのゴミや資源の行き先やその後、1kgあたりの処理にかかる金額も明示しており、捨てる側も意識をするようになるという仕組みである。センターに併設されている宿泊施設「HOTEL WHY」ではゴミゼロ生活を体験できる。今回、体験はできなかったものの、様々な取り組みを知り、サーキュラーエコノミー（循環型経済）と、コラボティブエコノミー（共同経済）の両側面が実現されている場所から、これからあるべき町の姿としてのヒントをいただいた。

(2) 株式会社いそどりの「葉っぱビジネス」について

上勝町は、人口が約1,700人、町の面積の86%が山林である。さらに65歳以上の高齢者の割合が人口の半分以上を占め、県下でもっとも高齢化比率が高い町である。そこで、高齢者が里山の葉っぱや花を収穫し、料理の「つま」として出荷する「葉っぱビジネス」で生き生きと働き、年間2億円以上を売り上げている。町の高齢化や、自然豊かな町という点において双葉郡と共通する部分が多く、どうすれば地域住民が生き生きと暮らし、若者が戻りたくなる町になるのか考えた。

生徒達は事前に第一原理について予習をして今回の研修に臨んだ。第一原理とは、基本的前提のことである。上勝町と広野町の共通点として、豊かな自然が挙げられた。この第一原理を魅力に変えていくには環境リテラシーが大切である。地域の資源を自分で分析し、理解した上で、それを使ってどのように地域の魅力を発信するかということが大事であるという言葉は、これから探究に進む生徒達にとって大きなヒントとなった。生徒達は研修を通して広野町の第一原理を見つけ、それを活かすプロジェクトを考え、上勝町民に発表する予定であった。今後の探究活動に期待したい。



代替事業④ NPO 法人 ザ・ピープルでの研修

講師：吉田恵美子氏（NPO 法人ザ・ピープル 理事長）

(1) 校内事前研修

期日：令和4年2月28日（月）

3月21日（月）イベントでの研修

「特定非営利活動法人ザ・ピープル」は、1990年いわき市内で設立された団体である。身近な生活環境の問題のひとつであるゴミ問題の解決に向けて、古着のリサイクル活動に1992年から取り組んでいる。

今回、吉田氏を講師に迎え、古着に着目したゴミ問題についての研修を行った。古着などの繊維製品のリサイクル率は全国平均で20%にも満たない。ザ・ピープルでは古着リサイクル事業を行っており、現在90%以上のリサイクル率を達成しているという。この活動をいわき地域内に留めることなく、他地域にも広く共有し、古着をゴミとして燃やさない社会に変えることが目標である。

アパレル業界の環境への具体的影響

- ◆1本のジーンズの生産に必要な水
≒約7,500ℓ≒平均的な人が7年かけて飲む水の量
- ◆ファッション業界が毎年使用する水の量
≒300億ℓ≒500万人の生存を可能にする水の量
- ◆ファッション業界が出す廃水≒全世界の20%
- ◆衣料品と履物の製造により生まれる温室効果ガス
≒全排出量の8%（「これまでどおりのアプローチを続ければ、業界からの温室効果ガス排出量は、2030年までに50%近く増大すると見られる」- エリツトング国際環境計画消費生産課長）
- ◆理め立てに使われたり、焼却されたりしている繊維
≒ゴミ収集車1台分/秒

Copyright © UNIC, All Rights Reserved.

(2) ザ・ピープル 諏訪倉庫での実習

期日：令和4年3月12日（土）

実際にザ・ピープルの倉庫を訪れ、古着の仕分けのボランティアを行った。県内の古着回収BOXから集められた衣類を、様々な用途に分類していった。倉庫内の衣類の量に衝撃を受けたが、まだ使える衣類が多く、生徒達は普段自分達が身に付けている衣類から大切に長く着ることの大切さを学んだ。ファストファッションが流行っている一方で、それらの衣類を低賃金で作っている発展途上国の人達がいること、我々にとってはゴミでも、他国の人にとってはまだまだ着ることが出来る貴重な衣類であることを知った。



(3) 「衣」と「食」について考える SDGsカードゲーム体験会への参加

期日：令和4年3月21日（月）

吉田氏が新たに立ち上げた「フード&クロージングバンク事業」のPRイベントに参加した。古着リサイクル事業の他に、震災後の新たな地域課題となりつつある生活困窮者支援の目的でスタートしたフードバンク事業を組み合わせさせた事業で、地域内で生活困窮に悩む方を「衣」と「食」の両面で支える仕組みづくりを目指している。循環型社会をテーマとする古い着物を活用したステージショー等に加えて、2030SDGsカードゲームの体験を通してみんなが「衣」や「食」の在り方を考えた。



カードゲームでは、他の参加者達とコミュニケーションを取りながら、経済・環境・社会をバランス良く成長させていくことの難しさを体験した。展示コーナーでは、市民から回収した古着を服飾専門学生が新たにリメイクした衣装が展示されていた。ファッションに関心のある生徒が熱心にデザイナーに質問し、探究活動のヒントを

もらっていた。吉田氏のご厚意により、最後のショーにも特別出演させていただき、出演者の皆さんとステージで踊り会場を盛り上げた。

代替事業⑤ 国際理解教育×哲学対話

ロシアが2月24日にウクライナに侵攻し、戦争が始まった。Ernst Mach Gymnasium校と連絡を取り合う中で、ドイツにもすでにウクライナからの難民が流れてきていること知った。生徒達も、隣の隣で起きている戦争に胸を痛めているが、やはり戦争を知らない世代であるため、何が起きているのか知りたいということで勉強会を開いたそうだ。そこで、オンライン交流の際にドイツの高校生とウクライナ問題について意見交換をすることにして、我々もまずは対話による勉強会を開いた。

(1) 世界史教員による哲学対話

期日：令和4年3月16日（水）

事前に宿題として、ウクライナに関する問いを1人50個考えてきた。生徒達からは以下のような問いが出た。

なぜ戦争を続けるのか？ 日本が巻き込まれる可能性はあるのか？ 中国はなぜ沈黙しているのか？ ロシアは戦争のルールを守っているのか？ なぜロシアは制空権を奪いに行かないのか？ 戦争後、ウクライナが復興するのに何年かかるか？ ロシアのメディアはどのような報道をしているのか？ なぜロシア軍はチェルノブイリ原発を抑えているのか？ ロシアは核兵器を使う可能性が本当にあるのか？ 日本がウクライナに防弾チョッキを提供することは憲法違反にならないのか？ 日本の報道の仕方は本当に公正なのか？

今回の課題「問いづくり」で生徒達が出した600の質問から、調べれば答えが出るものを除き、話し合いたい本質的な問いを選んだ。

ロシア国内でのプーチン支持者に年配者が多く、若者が少ないことが、情報の入手方法の差から来ているのではないかという意見から、メディアリテラシーの話にまで話が及んだ。現在ロシアやウクライナでインターネットが遮断されている箇所があるという情報を受け、ネットワークが遮断されるとどうなるのか想像した。世界から見て、現在ロシアが情報鎖国になっているという話から、高遠菜穂子氏が講演で仰っていた「日本は情報鎖国」という言葉と繋げて、日本はどのようなだろう？という話にもなった。また、歴史の上で独裁者を生んだ過去があるドイツ人はロシアのことを複雑な思いで見ているのではないか。自分の立場をはっきりさせずに中立でいることは果たして本当に良いことなのか等、オンライン交流会で是非ドイツの高校生と話し合いたい話題がたくさん出た。

(2) 高遠菜穂子氏との哲学対話

期日：令和4年3月20日（日）オンライン

「なぜ戦争は起きるのか？なぜ止められないのか？」

- ① 講義「国民は望んでいないのになぜ政治家は戦争をするのか？」柳澤協二氏（元内閣官房副長官補）
- ② 講義「国連や国際法では戦争は止められないの？」伊藤和子氏（弁護士/ヒューマンライツナウ事務局長）
- ③ BORを使った哲学対話
講師：神戸和佳子（北陸大学経済経営学部講師）

本校1年次の国際理解教育において、毎年ご講演いただいている高遠菜穂子氏によるオンラインでの哲学対話イベントに参加した。



Inputとしての講義を聴いた後、イラク戦争を知らない世代である10代の参加者の他に、世界中の様々な年齢・立場の方も交えて哲学対話を行った。

【生徒感想】

・「なぜ戦争がやめられないのか」というテーマで対話をした。主に、①罰則規定が弱いから、②戦争のイメージが持ちにくいから、③人々が強い国家を求めるから、という話になった。また、見過ごされている人権侵害や戦争について考えていきたい。ウクライナ情勢が深刻化してから、それまで騒がれていたタリバン政権や中国のウイグル自治区の問題等について考える機会がなくなってしまった。1つの問題だけに目を向けるのではなく、世界で起きているどの問題にむけてもアンテナを広げていきたい。

・「自分家族や身近な人が殺された場合、武器を持って闘うか」という議題で対話をした。自分だったら善悪の判断がつかなくなってきくと報復をしようとしてしまうと思い、「闘う」を選択した。様々な人の考えを聞かなかで、自分がそうってしまったとき、こういう人達に止めてほしいとも思った。また、自分がそうってしまった人達を止められる人間になりたいとも思った。それができるのが理性なのではないか。そしてその理性は本を読んだり勉強をしたり対話することで身につけられるのではないかと。

最後に生徒の心に深く刺さった高遠氏のメッセージは以下である。「米兵やイラクの武装した兵士こそが戦争の被害者である。自分も同じ立場になった時、人を殺さずに自分を止められるのか。自分は自分のことを平和主義者だと信じたいが、私の中にもそういう残虐性を持っていて、自分は反射的に人を殺してしまうかもしれない。それを強く自覚することで私は武器を持たない選択をしたい。『私は違う』とは絶対に言い切れない。なぜこの人はその選択をしてしまったのかということを考える。それが私がこれまでの経験から学んだことである。」

(3) 成果と課題

コロナの影響により2年連続で渡航が叶わず、生徒達の大きな学びのチャンスを失ってしまった。しかし、同じ目的の下、国内代替研修に置き換えて実施することができたことについて、感謝申し上げたい。

国際交流の第一歩は、自分の国や地域のことを積極的に情報発信することである。しかしながら、毎年、基礎知識のインプットと英語力の向上については課題がある。国際理解教育の高遠氏も述べていたが、知識不足や表面的な情報だけで何かを意見することは、新たな対立や分断を生んでしまう。今後も双葉郡の高校生として、分断や対立・差別や偏見と闘うべく情報発信を行っていくためには、正しい情報リテラシーが必要である。

今回、様々なご協力の下生徒達は沢山のインプットができた。4月に最後のドイツとのオンライン交流を控えているが、ドイツの高校生と学びを共有し、意見を交換することで視野を広げ、難しい問いの中にあっても対話を諦めない人材育成の要となる研修としていきたい。

2. 4. 2 ニューヨーク研修代替研修

本校が SGH 指定校であった期間から続く本事業は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い中止や代替を余儀なくされている。SGH 指定最終年度となった一昨年度(本校 4 期生)およびグローバル型初年度の昨年度(本校 5 期生)、そして今年度(本校 6 期生)も渡航を断念した。このような状況であっても、グローバル型事業目標に立ち戻り、国内にいながら学習成果を最大限担保できる機会として、ブリティッシュヒルズ語学研修・留学生向け浜通りツアー・UNIS-UN2022 (オンライン)・UN 職員とのディスカッション (オンライン、来年度予定) を実施した。

(1) チームビルディング

本研修は、教員主体の語学研修や、探究活動の広報活動とは異なる。地球市民としての生徒たちが、能動的市民性を大いに高め、地域や世界に貢献していくために生徒主体で進めるプロジェクトである。

本研修のミッションを自覚し、国際社会で提言をしたという意志を持った 12 名の生徒たちが選抜される。原子力災害からの復興にかかわる自分たちが、世界の人々とともによりよい未来を目指すためには、どのような相手と議論をし、どのように提言をすべきかから生徒たちは議論を重ねる。研修前後には積極的に地域と学校に学びの成果を還元する。

参加者 12 名を選抜する際には、以上の観点を踏まえた内容および自分の探究と地域・世界とのつながりについての志望理由書を重要視し選抜した。

また、今年度は、渡航断念になった場合には、外国人に双葉郡地域を案内するという企画に切り替えることを想定しており、結果的にそのようになった。

(2) 実施内容① (ブリティッシュヒルズ研修)

期日：令和 4 年 1 月 5 日(水)～1 月 7 日(金)

県内にあるブリティッシュヒルズ (福島県岩瀬郡天栄村) は、語学研修を中心とした英語のイマージョンプログラムを提供しており、プレゼンテーションや議論を行う研修としては最適である。本研修では特に、建設的に議論を進める方法や重要表現と、効果的なプレゼンテーション方法および質疑応答の仕方について学んだ。

本研修は英語の運用能力を高めるためという要素が強いが、今後の留学生との交流、UN 職員とのディスカッションにも繋がられるよう、一方的なプレゼンテーションではなく、それに基づいた相手からの質疑応答および議論も効果的にできることを最終目標とした。実際、本研修の最終日に行う Public Presentations では、例年だと発表することに留まるが、今回は質疑応答を充実させること、また発表に基づいた議論の題材を聴衆側に投げかけさせることで、一方通行ではなく、発表者と参加者

とが意見を言い合える場を作ることができ、結果的に議論のファシリテーションをも英語で行う力も育成することに繋がった。

(3) 実施内容② (留学生向け浜通りツアー)

期日：令和 4 年 3 月 7 日(月)～3 月 10 日(木)

NY への渡航が断念された時、外国人向けに双葉郡ツアー (当初の仮称) を生徒が立案・企画・実施し、双葉郡の抱える課題を英語で説明するという研修に切り替えた。本校設立の経緯および双葉郡が依然として抱える諸問題について理解を深めるとともに、英語による説明によりプレゼンテーション能力の醸成および、その後の UNIS-UN や UN 職員との議論にもつながると考えたためである。

今回の対象は、APU 立命館アジア太平洋大学 (大分県) の留学生 (国籍：中国・タイ・ベトナム・ウズベキスタン・パキスタン・バングラデシュ・パレスチナ・ウガンダ・オーストラリア) で、本校併設の中学校が修学旅行で交流のため訪問する予定であったが、コロナのまん延防止措置により叶わなかった背景もある。

この研修の実施に当たり、主に 2 つの事前研修を行った。

※事前研修① 文献の輪読会

何のためにツアーを企画するのか等のコンセプトを決めるにあたり、参考とするのに相応しいと考える文献を提供した。

ブレイディみかこ『他者の靴を履く』

小松理度『新復興論』

ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

小手鞠るい『ある晴れた夏の朝』

このうち、上の 2 冊を役割分担による輪読を行い、UN ディスカッションでも重要となる「共生」という観点を深めた。残り 2 冊は推薦図書扱いとした。

※事前研修② 協力者への取材を含めた下見

ツアーの実施およびその説明にあたり、どのような場所でのどのような内容を伝えるのかを、生徒自身の目線で事前の下見を行った。参加者の中には双葉郡や相馬市出身がいるが、震災当時は幼稚園の年長で記憶もあいまいであり、また大半を占めるいわき市出身は、双葉郡のことについてそもそも知らない現状があり、綿密な下見が必要であった。

その際大事にしたのが、地域の地理・現状等に詳しい人物への取材である。自らが留学生に説明するという立場を想定して、現地の事情に詳しい人の話をどのように表現すればいいのか考えることで、その地域についての理解を深めることができるからである。

以上のような事前研修を踏まえ、本研修は以下のような行程で行った。

○1日目 (3/7 月)

東日本大震災による複合的震災の象徴である浪江町の請戸小学校を訪れ、その被害や課題を英語で説明を行った。

その後、檜葉町にある地域交流センターのならばCANvasにて、留学生と本校生がゲーム等を通じて親睦を深めた。

○2日目 (3/8 火)

朝は本校高校生と一緒に登校した後、中学生の探究発表を聴講し、お互いの親睦を深めた。

その後、帰還困難区域に指定されている大熊町を訪れ、時が止まった建物や中間貯蔵施設を見学した。

午後は、野馬追を体験するため、南相馬市の銘醸館で戦国時代の足軽や武将に扮し、練り歩いた。

○3日目 (3/9 水)

朝は富岡アーカイブミュージアムで、原発が誘致される前の町の様子や、原発設置後や原発事故について学んだ。

その後、双葉町を訪れ駅や伝承館周辺の様々なアートを見学し、それに込められた想いについて考えた。

お昼は、川内村のかわうちの湯で地元特産物を堪能し、天山文庫では伝統的な茅葺屋根の建物の造りなど日本文化の深さについて学んだ。

最後の行程として、檜葉町の天神岬で東日本大震災の犠牲者に追悼の祈りを捧げた。

○4日目 (3/10 木)

最終日は、これまでの行程を振り返り、「観光業」「ビジネス」「SNS」「雇用」という観点で双葉郡に足りないものについて議論し、閉会となった。

(4) 実施内容③ (UNIS-UN2022 オンライン参加)

期日：令和4年3月24日(木)～3月26日(土)

今年度のUNIS(国連国際学校)もオンライン参加となった。例年はニューヨークにある国連本部で、国連職員の子どもたちが通う学校であるUNIS-UNの生徒や世界各地から集まる高校生徒と一緒に、世界が抱える諸問題について議論する予定であった。オンラインでの参加とはなったが、講演・ディベート・ワークショップと形式が豊富であったのと、オンライン会議のブレイクアウトルームを多用し、発言がしやすい環境であったため、発言・質問を積極的に行った。

今年度のテーマ：Food for Thought : A Sustainable Approach to Food Security

ディベート議題

Motion 1: “The fast-food industry has had positive effects on reducing food insecurity.”

(ファーストフード産業は食糧不足問題に良い効果をもたらすか)

Motion 2: “Food secure nations have the responsibility to provide food for undernourished populations.”

(食糧安定国家は栄養不足の人々に食糧を与える義務がある)

ゲストスピーカー

Seth Goldman : Honest Tea, Eat the Change や PLNT Burger の創設者で植物ベースの料理を提供する。

Esther Penunia : アジア農民協会 (AFA) の事務局長で、小規模な家族農園経営の支援を行う。

Abby Maxman : Oxfam America の CEO。世界の貧困と不正をなくすための人道支援と開発を行う。

Mary Ellen McGroarty : アフガニスタンの世界食糧計画(WFP)で、食糧援助を行う。

Mai Thin Yu Mon : ミャンマーの権利活動家として、先住民の土地と天然資源の尊重と保護にあたる。

ワークショップ (参加したもののみ)

Diet Culture and Body Image, Evolving innovation and food, Business pitch Simulation, Jeopardy, United Nations Virtual Tour, Bagels: Nurturing New York, Sustainable Innovation in Urban Agriculture, Latin American Food as Art, Food and Climate Change Role Play

(5) 実施内容④ (UN 職員との議論オンライン参加)

期日：令和4年5月21日(土)予定

新型コロナウイルス対策に係るまん延防止措置が実施直前まで延長され、浜通りツアーの準備等にかかなりの時間を要したこと、および、浜通りツアーやそれに参加した留学生の感想等を元に、地域・世界が抱える問題にどのように対処していくべきかについての議論を十分に振り返り、今後の探究学習等に生かしていくため、年度内の実施を見送り、改めて来年度5月に実施する事とした。

(6) 成果と課題

チームビルディング

今回のチーム編成に当たっては、いわゆる「フリーライダー」を作らないよう、誰もが責任ある立場から物事を進めたいという観点から、議論をまとめる司会の輪番制、参考文献の輪読の割振り・プレゼン、各自の探究内容の英語プレゼンの深化等により、チームとは言えませんが個々のスキルアップの重点を置いた。英語力の不安を感じる生徒もいたため、朝・昼・放課後の時間をうまく活用し、個別指導に当たった。

しかし、英語力には差があり下位の生徒の練習にかなりの時間と労力を費やした。普段の授業がどれだけ大切かを思い知らされた。普段の授業において、プレゼンテーションやそれに基づいた質疑応答の言語活動のやり取りをすることの重要性を感じた。ふたば未来学園らしく、その場しのぎではない英語力を醸成するカリキュラムが、普段の授業の中で求められていると感じた。

ブリティッシュヒルズ研修

主に英語の運用能力を高めるためのプログラムであったが、単に提供されるプログラムをこなせばいいという考えにならないよう、本研修での最終目標を「自分の探究内容を英語で発表し、それへの質疑応答を行い、それに基づいたトピックによる聴衆と議論をする」と設定したこと。これにより、発表前日は夜遅くまで原稿書き・発音練習等の準備に勤しんでいた。また、「聴衆との議論」を大切にすることで、一方通行ではない、本物の英語力が問われるため、苦勞した生徒も多かったが、今後の英語学習への大きな動機付けとなった。

留学生向け浜通りツアー

代替研修の目玉である本研修は、「いかにして福島の問題を『共事化』(小松理虔氏の造語。「共感」と同義)でできるか」というコンセプトのもと、双葉郡など浜通り地

区の光(魅力)と影(課題)を体験によって感じてもらうというものだった。昨年度のUNDPの岸守氏の指摘にもあったように、例年のような単に発信するだけでなく、実際のアクションによる発信が求められていた。

そのような折、本校中学校が修学旅行先としていた(新型コロナの影響で断念)APU立命館アジア太平洋大学の留学生から福島を訪問したいという打診があり、多国籍を背景とする方々にとって浜通りの光と影がどのように映るかを実践検証するのに格好の機会だと捉えた。

ツアー中の留学生の反応は驚きの連続であった。まず、影の部分では複合的災害(地震・津波・原発事故)の象徴としての請戸小学校、帰還困難区域の中で当時のままの熊町小学校、人の住んでいない廃墟、広大な中間貯蔵施設など、まだまだ課題が山積している状況を目の当たりにして、「私の知っている日本ではない」という言葉が印象的であった。

また、光の部分では、浜通り地方の食の豊かさ、野馬追の追体験としての甲冑仮装、日本伝統文化の奥深さなど思ったよりも留学生の関心は高かった。

しかし、その場の楽しさを単なる楽しさで終わらせるのではなく、今回のツアー全体の中で福島の課題を提示するのにその楽しさがどう作用したのかを分析する必要がある。特に、福島と世界の課題との結び付けにおいて本校探究学習はいまだに発展途上のため、本ツアーを今後どう探究学習に生かしていくかが大変重要になる。この点については令和4年度5月に行われるUN職員との議論において本校生徒が作成するプレゼンテーションに組み込む予定である。

2022 UNIS-UN 会議オンライン参加

今年度もオンライン参加となったが、ブレイクアウトルームの多用で、講義・ディベート・ワークショップ等の各活動において、発言や質問がしやすくなった。そのためか、日を追うごとに発言・質問の回数が増え、議論に参加しようという姿勢が見られた。また、基調講演となるゲストスピーカーによる講義についても、前半は受け身になっていたが、質問を全体で取り上げて欲しいという一心で、後半では講義に備えるために、ゲストスピーカーについて調べ、それを全体で共有し、候補となる質問を考える等の準備を行った。講義の本番では、その努力が報われ質問を取り上げられたことで、改めて講義についての事前準備がどれだけ大切かを実感したようである。

2. 4. 3 広島研修

広島研修では、原爆被害からの復興と平和に向けた取り組みについて学習するとともに、広島県の高校生との交流を通して、双葉郡の課題を国内の他地区の課題と重ねながら、課題の本質を探る機会とした。

初日は原爆ドームと平和記念公園を見学した後、広島県立広島国泰寺高校においてエネルギー問題について意見交換を行った。二日目は、旧陸軍被服支廠、広島平和記念資料館を見学した後、被爆体験講話、広島市立舟入高校原爆劇鑑賞を行った。3日目は世界遺産厳島神社のある宮島を見学し、帰路についた。

(1) 日程・参加生徒

10月に募集を行い、事前研修を経て12月10～12日の2泊3日で研修を行った。生徒は2年次14名参加(男子4、女子10)。

(2) 実施内容

事前研修として、早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター主催のシンポジウム「広島原爆ドームの世界遺産登録と1F 廃炉の将来像を考える」にオンラインで参加した。広島平和記念資料館の元館長の原田浩さんによる講演や同学芸課職員の菊楽忍さんの発表は、広島への原爆投下の状況や、戦後の原爆ドームの世界遺産登録に向けた動きなどを詳細に伝えるもので、広島訪問前に戦争・原爆・遺構についての基礎知識が得ることができた。

初日は広島到着後すぐに、原爆ドームをはじめ、平和記念公園内を見学した。同級生の協力を得て作った折り鶴の献納も行った。その後、広島県立広島国泰寺高校へ移動し、生徒交流と意見交換を行った。



生徒の感想…

- ・他校の高校生同士で日本の社会問題について対話することで、色々な視点を知ることができたり、高校生ならではの考えもたくさん話したりできた。
- ・日本の10年後、20年後を創っていくのは自分たちの世代だと思う。
- ・今大人が私たちの未来について考えて、エネルギー問題についても考えてくれている。私達もエネルギー問題について考えた方がいい。

二日目は朝に旧陸軍被服支廠を見学した。シンポジウムで知り合った多賀俊介さんにガイドを引き受けていただき、広島市内をバスで移動する途中も各所にて戦時の状況等について案内していただいた。その後、広島平和記念資料館を見学し、追悼平和祈念館にて山本玲子さんによる被爆体験講話を伺った。午後は、広島市立舟入高校を訪ね、演劇部による「ケイショウ ～『ある晴れた

夏の朝』から考えたこと～」を鑑賞させていただいた後、生徒交流を行った。夕食後は、舟入高校の前身である広島市立高等女学校(市女)の職員・生徒で原爆の犠牲となった方々を慰霊するため、ホテルのそばに立つ広島市立高女原爆慰霊碑を訪ね、手を合わせた。

生徒感想…

- ・この場所だけ時間が止まっていて、現代から被爆当時のことを想像させてくれる。何人もの人たちが助けを求めてやってきて亡くなった場所、爆風から身を守ってくれた場所…、色々な思いが詰まっていた。
- ・当時幼かった後輩たちには震災の記憶がないが、広島若者のように、体験者の記憶を言葉で聞き、表現し、受け継いでいく、「語り手の語り手」になることはできる。
- ・劇中の「原爆投下について肯定派でも、否定派でも、考えるのをやめないでください」というセリフが印象に残った。原子力発電所や処理水海洋放出への賛否についても同様で、他人事とってしまうのが一番いけない。



ホテルでは一日ごとに研修の学びについてグループで振り返りを行った。自分では言葉にできなかった思いが他人の言葉を聞くことで言語化できるようになったり、研修中に感じたモヤモヤを徹底的に議論することで少しずつはっきりさせることができるようになったりと、充実した対話の時間となった。平和、伝承などについて、一人ひとりが自分の思いを言葉にできるようになったのは大きな収穫であった。三日目は宮島を見学した。

後日、広島国泰寺高等学校の皆さんと、「原子力エネルギーを今後どう活用していくかをともに考える」をテーマにオンラインで意見交換を行った。

研修成果の報告の機会として、第9回ふくしま学(楽)会に参加し、代表生徒3名が研修での学びを報告した。

2. 5 発表・交流

ここでは外部団体が主催する発表会への参加や他校との交流についてまとめる。

2. 5. 1 ふくしま学（楽）会および関連学会

ふくしま学（楽）会は早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターが主催する学会である。世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、福島の復興について考える場として毎回多くの方が参加している。今年度も昨年度同様にオンラインで2回実施された。

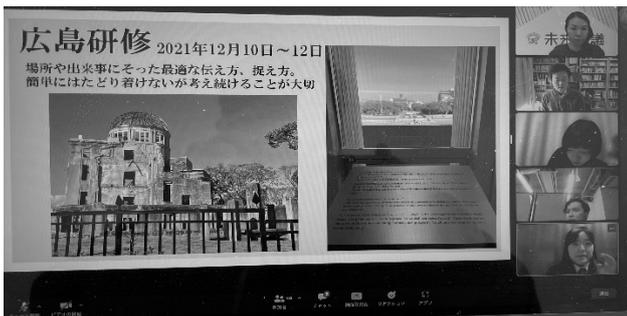
① 第8回ふくしま学（楽）会（7月25日（日））

今回のテーマは「福島の教訓を考える：福島から学ぶことは何か」をテーマとして、震災から10年の節目の意味について議論をした。第7回の発表(2021年1月)からさらに探究を進めた生徒がその進捗状況や考察について「マイクラでつくる双葉郡」「エネルギーからエコロジーへ：シビックプライドを形成する環境事業」というテーマで3年生の6名が発表を行った。



② 第9回ふくしま学（楽）会（1月30日（日））

第9回では1F 廃炉の先とこれからの対話をテーマとして、本校の広島研修に行った生徒が「広島視察を通じて学んだこと」というテーマで研修の成果を発表した。また、第2部の「福島の経験を学び、語り継ぐ枠組みを考える」では早稲田大学の学生との交流を行った社会起業部の生徒から「中高生と大学生との対話の報告」の発表があった。高校2年生を中心に参加した12名の生徒たちは、オンラインでのブレイクアウトセッションでも大人の参加者に負けないような対話を繰り返した。



早稲田大学ふくしま広野未来リサーチセンター関連行事として、以下の行事にも生徒が参加した。

③ シンポジウム「福島復興と国際教育研究拠点に関する地域対話」（7月4日（日））

国際教育復興拠点の第5分野「原子力災害に関するデータや知見の集積・発信」をテーマに本校の中高校生18名を含む95名の参加者がオンラインでのシンポジウムに参加した。また、3名の生徒が「ふたば未来学園から：国際教育研究拠点の第5研究分野をめぐって」というテーマで発表を行い、学校にいる生徒とオンラインで参加している一般参加者との対話を行った。

参加した本校の中学校の生徒から国際教育研究拠点について「地域との関係が深くなければ、地域住民の信頼や協力は得られない。小中高生との連携も大事であり、地元の中高校生や高校生が参加するだけでなく、他の地域の中高校生も参加し様々なディスカッションができる場になったら良い」という発言があったことが印象的である。

④ シンポジウム「広島原爆ドームの世界遺産登録と1F廃炉の将来像を考える」（11月14日（日））

第8回ふくしま学（楽）会で地域の方から1Fを負の遺産として捉えるのではなく、福島復興の象徴として1F世界遺産（文化遺産）登録を行うための最初の取り組みとして、このシンポジウムがオンラインで開かれた。本校からは広島研修に参加する生徒12名が事前研修の位置づけとして本シンポジウムに参加した。



また、本校教員2名もパネラーとして参加した。元広島平和記念資料館の館長を務められた原田浩さんによる「原爆ドームの世界遺産登録と広島市ピースツーリズム」という講演は、広島と福島という原子力災害に見舞われた二つの都市を繋げて考えるための示唆に満ちたものだった。

ふくしま学（楽）会は本気で地域課題に取り組む大人たちと共に議論する貴重な機会である。また、生徒のテーマについて継続的にアドバイスをいただく人脈を築く場としても機能しているため、今後も活用したい。

2. 5. 2 ふるさと創造学サミット

(1) 「ふるさと創造学サミット」について

双葉郡8町村内の各学校で行われている「ふるさと創造学」の取り組みを共有し、子どもたちの学びの場となるのが「ふるさと創造学サミット」である。例年であれば、地域間の交流を生み出すイベントとして盛大に開催されるが、コロナ感染症対策のために今年度もオンラインにて実施された。

(2) 実施内容

本校からは、チアで双葉郡を元気にする「Let's cheer up ふたば!!」というプロジェクトを行っている高校2年生の生徒が代表として発表を行った。中学生は「双葉郡の魅力の発見・発信」というテーマで発表を行った。オンライン上でも積極的に意見交換を行う様子が見られ、双方の学びになったと考えられる。



また、全体企画では、福島県国際交流協会の吾妻久先生による「中高生のためのSDGs」というワークショップに参加し、“World Shift”について考えを深めた。社会の課題や理想の未来を言語化できずに悩んでいた生徒も、自分たちの身近な生活に視点を置くことで、持続可能で平和な世界へのシフトを宣言できるようになった。



(3) 成果と課題

本サミットは双葉郡内の小中学生と高校生とが交流できる貴重な場である。オンラインという限られた環境であったが、双葉郡で学ぶ児童生徒達が、お互いにどのようなことに取り組んでいるのかを共有できるきっかけとなった。

その一方で、貴重な交流の場を活かしきれていないという声も挙がった。学びの成果を発表したり意見を交換したりするだけでなく、学校を超えて、町村を超えての協働が今以上に促進されれば、より有意義なサミットになることが予想される。

2. 5. 3 福島県高校生社会貢献活動コンテスト

本コンテストは、地域の課題解決に向けた創造的復興教育を目的として、福島県教育委員会の主催で震災以降毎年行われている。各学校が探究活動を推進する一つのインセンティブとしての位置づけもあり、最優秀賞を受賞すると県知事への訪問という機会も与えられる。本校では令和元年度から本コンテストの積極的な活用を呼びかけており、今年度も希望のあった以下の3件を応募した。

このうち、書類選考に応募した3件が最終選考に選ばれた。最終選考会は10月3日(日)、自治会館(福島市)で行われ、県内の12件のプレゼンテーション、質疑応答が行われた。なお、例年よりもコンテストの実施時期が2か月早まり、進路活動が忙しくなる時期にコンテストの準備が重なることとなった。

審査の結果、以下のような結果となった。

<優秀賞>3プロジェクト

- ふたば未来学園高校
社会起業部
活動名：今と未来を
つなぐ語り部活動
- ふたば未来学園高校
メディアコミュニケーション探究ゼミ
ふたばメディアグループ
活動名：ふたばメディア



<入選>8プロジェクト

- ふたば未来学園高校
原子力防災班ゼミ
活動名：Future Quest
～ふたばの魅力を探る～



となった。令和元年度より本コンテストに参加し、過去2年連続で最優秀賞を獲得してきた。このコンテスト以外にも様々なコンテストがあるため、今後は年間計画を見ながら、長期的な視点で低学年からのコンテスト出場を進めていく必要がある。

2. 5. 4 マイプロジェクトアワード校内選考会

「マイプロジェクトアワード」は、高校生の探究活動、マイプロジェクトなどを発表する日本最大級の学びの場である（認定NPO法人カタリバ主催）。本校では、応募するプロジェクトの質を高め、あわせてプロジェクトからの学びをより深める機会を設定するため、福島県 summit の校内予選という位置づけで校内選考会を実施した。校内選考会の前には、応募者を対象に「事前ブラッシュアップ会」を開催し、学年の垣根を越えて、それぞれのプロジェクト内容や発表に対してアドバイスをし合う機会を設けた。アドバイスを受けて、自分の発表に磨きをかけた上で、選考会当日を迎えた。本選考会には高校1年生～3年生まで19件の応募があった。1年生から3件の応募があり、早期に探究に取り組み自発的に探究活動を行う生徒も見られた。

審査はマイプロジェクトアワードの審査基準に則り、アクションしていることを前提に、オーナーシップ、コクリエーション、ラーニングの観点で行った。

実施日：令和3年11月24・25日（水・木）

内容：発表、質疑応答、審査

審査員：本校教員5名、カタリバ2名

校内代表を選考する審査についてはかなり紛糾し、「生徒たちのプロジェクトをどう評価するのか」「良いプロジェクトとはどのようなものか」など、審査員も改めて、探究やマイプロジェクトの意義を考えるきっかけになった。いずれも甲乙つけがたい発表であったが、最終的に福島県 summit に出場する校内代表の10件を決定した。

選考会という観点だけでなく、生徒同士の学びの機会も設けることで、学年を超えて対話をし、様々な視点に気づくことができたようだった。ここでの発表後、お互いの活動に協力し合う様子も見られ、交流の契機となったことが伺えた。



2. 5. 5 マイプロジェクトアワード福島県 summit

マイプロジェクトアワード福島県 summit は全国 summit に向けた福島県予選として、今年度で2回目の開催となる「学びの場」である。本校から校内選考会によって選出された9件が応募し、全員が書類選考を経てそのまま参加した。

実施日：令和4年1月9日（日）終日

実施形態：オンライン

発表数：60件

本校からの発表テーマ

○私はカフェをつくる！！（1年）

○居心地のいい学校を（2年）

○Let's unify the AED mark（2年）

○生理によりそう探究（2年）

○誰一人取り残さない防災の世界（2年）

○浜通り×聖地巡礼（2年）

○双葉の新土産「石けん石けん」（2年）

○Let's cheer up ふたば！！（2年）

○人と人を繋ぐ場を（3年）



本年度の福島県 summit は「学びの場」として実施され、審査に関しては後日提出する発表動画をもとに、全国 Summit への選考を行う形であった。生徒達は分科会に分かれ、自分のプロジェクトの発表を行った。福島県ゆかりの専門家・実践者の方々や他校の生徒から、質問やコメントをもらいながら、自身のテーマや活動の内容について、分科会のメンバーと対話を行った。発表終了後の振り返りでは、どのような気づきや学びがあったかを言葉にするとともに、今後の活動をどうしていきたくかを考えた。普段は関わりのない大人や他校の生徒との交流を通して、自分の活動の意義に気づき、今後の活動のモチベーションアップにも繋がった。また、その結果、Let's cheer up ふたば！！が全国サミットに選出された。

2. 5. 6 全国高校生フォーラム 2021

本校では令和元年度まで SGH（スーパーグローバルハイスクール）に指定されており、その SGH ネットワーク参加校として本フォーラムに参加した。特に、生徒が探究において日常的に取り組んでいる地域の課題を全地球的な観点で捉えるきっかけとして本フォーラムに参加した。

実施日：令和3年12月19日（日）終日

実施形態：オンライン

発表者：久保田明日香、児玉花心

発表テーマ：To Use AEDs Effectively - the first step to people's proactive engagement in caring for each other's healthcare -

今回のフォーラムは、発表内容の事前の動画撮影と当日の交流会に分かれている。

まず、発表内容については、地域の課題として医師不足を取り上げ、医師や看護師といった医療の専門家でなくても人命を大切にするためにできることは何かを考え、身近にある AED に注目した。人々は AED については知っているものの、自分の身近な場所のどこに AED があるのか、それを常に意識して日々の生活を送っているのか、という点に着目し、日常生活の中で人々が AED の具体的な設置個所が分かるように、AED の標示を目につく箇所に設置するアクションを行った。その活動や調査を進めるにあたり、WHO の掲げる Social Determinants of Health（健康の社会的決定要因）という考えや、アメリカのシアトルでは住民の救急救命講習率が高い等、住民自ら自分たちの命を大事するという意識が高いという事実に出会い、AED を地域に広めていくためのヒントとしていく、という内容を発表した。

当日のフォーラムでは、大学教授や文科省の担当者の方、他県の高校生から様々な感想・意見をもらったが、特に「地元地域でのアクションはどのくらい行っているか」という質問によって、自分たちのアクションがまだ実際の地域レベルで行われていないこと気づき、今後本本格的に地域でのアクションを起こしていくことを確認した。

2. 5. 7 Glocal High School Meetings 2022

地域との協働による高等学校教育改革推進事業グローバル型指定校として、全国高等学校グローバル探究オンライン発表会に参加した。今年度も COVID-19 の感染再拡大に配慮し、Zoom を活用したオンライン発表会の形をとった。日本語発表と英語発表の2部門に分かれ、本校からはそれぞれに1プロジェクトずつがエントリーした。

(1) 実施内容と成果

参加校は事前に発表の様子を Zoom で収録した動画の送付と、発表の要旨の提出を求められた。提出された全参加校のデータは、幹事校の名古屋石田学園 星城中学校・高等学校のご尽力により

<https://www.seijoh.ed.jp/glocalhsm/> に日本語英語とも分科会毎にアップロードされた。参加校の教員と生徒は分科会の動画を審査し、投票を行った。各分科会から、金・銀・銅賞が選出され、金賞の中でも優れたものには、文部科学省初等中等教育局長賞をはじめとする特別賞が付与される。

本校の結果は以下の通り。

日本語発表部門 金賞・生徒間投票特別賞

タイトル「鉄たまごという可能性」

英語発表部門 金賞・探究成果発表委員会特別賞

タイトル「Memories and feelings connected by games」



(2) 今後の展望と課題

日本語発表部門は2年連続の金賞、今年度は日本語発表部門と英語発表部門のW金賞という成果を上げることができた。両部門金賞を受賞したのは本校と山形県立山形東高校の2校だけであった。ただ、大会委員長からのコメントにあるように、まだまだ「探究」として、改善の余地があるとのこと指摘もいただいた。生徒がたてた問いとその検証プロセスを明確にするための指導法の確立は本校の課題として残された。

2. 5. 8 第21回福島県総合学科研究発表会

(1) はじめに

福島県総合学科研究発表会は、総合学科での学びの集大成の場である。本校を始めとして、県内で総合学科を設置している福島北高等学校や、会津学鳳高等学校など計8校が参加した。

今年度は、令和4年1月14日に福島県立小野高等学校で開催された。本校からは、口頭発表部門に1発表、展示発表部門に1発表がエントリーした。

(2) 実施内容

【本校からの発表テーマ】

○口頭発表部門

「記憶と^{おも}念いを繋ぐ町づくり」(3年生)

○展示発表部門

大熊×いちご×私(3年生)

パワーポイントを用いる口頭発表部門では、3年間にわたり様々な探究アクションに取り組む中でNPO法人ハッピーロードネットの方々と一緒に活動に取り組み、特別な復興に取り組むのではなく、日常の何気ない活動にこそ「念い」が繋がる町づくりにつながることを本校の代表として発表を行った。

展示発表部門では、高校3年生1名が本校の代表生徒として発表を行った。スペシャリスト農業系列で活動する生徒がイチゴを用いたスイーツ開発や、大熊町民にかつて愛されていたUFOパンを復活させる取り組みなどを発表した。



(3) 成果と課題

本校からエントリーした1件の探究活動は、優良賞を頂いた。残念ながら優秀賞・最優秀賞には届かなかったが、生徒にとって総合学科研究発表会は、これまでの活動を客観的に振り返ることができる良い機会となった。特に高校3年生にとっては2年間にわたる探究活動の集大成を発表できる貴重な場となった。中通り、浜通り、会津三地域の高校生が交流することのできる数少ない機会を、今後も活用して



いきたい。

2. 5. 9 東日本大震災メモリアル day 2021

本校では設立以来、宮城県立多賀城高等学校が2016年より主催している本発表会に参加している。今年度はオンラインでの参加とはなかったが、東日本大震災と原発事故との関係性の深い本校として、震災によって浮き彫りとなった地域の課題に注目した探究を中心に、発表会に参加した。

実施日：令和4年1月22日(日)

実施形態：オンライン

発表者：大和田紗希

発表テーマ：食のありがたみを認識してもらうために

発表内容としては、まず、本人の東日本大震災と原発事故による避難の経験から始めている。震災当時は幼稚園生で、記憶もおぼろげながらも、避難生活の大変さと日常生活のありがたさを忘れてしまった現代の人々への警鐘を込めて、探究内容が構成されている。震災当時の大変さを考えれば、日々の食事等の当たり前にある生活がどれだけ大切かを、もう一度多くの人に再認識してもらいというのが発表の大きな動機となっている。

その上で、日本の食品ロスについて、その食糧自給率や世界で飢餓に苦しむ人々の状況と照らし合わせながら、調査を行い、特に自分たちでも実践できそうな「家庭形食品ロス」への対策として、身近なところからできることを模索している。

2. 6 社会起業部の活動

2. 6. 1 社会起業部

社会起業部は、普段から地域を「知る・伝える・盛り上げる」活動をしており、今年度は「今と未来をつなぐ語り部活動」を主軸として活動を行った。パンフレットやポケットティッシュなどを製作し、交流先への配布を予定した。製作費、およびフィールドワークの費用は福島県の「チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業」の対象である。

(1) News Picks 交流会 (5月28日)

オンラインで山口・島根・宮崎の高校生と交流、「福島の処理水問題」について伝える活動を行った。「原発事故に興味はなくても、自分で積極的に情報を集めたりはしない」「とはいえ福島＝原発のイメージは強い」などの意見があった。

(2) 広野町の限界集落・簗平を訪問 (6月11日)



(3) いわき市湯本の原子力災害考証館でワークショップ (7月10日)

湯本温泉に原子力災害考証館を創設した古滝屋の当主・里見喜生さんからお話を伺い「語り部活動」を行うためには地域の歴史を学ぶ必要があることに気づかされるとともに、ふたば未来が、原発事故が起こった双葉郡にある唯一の高校だということを強く意味づけをしてくれた。

(4) 双葉町フィールドワーク (7月20日)

「ふたばプロジェクト」さんによる双葉町フィールドワークを通じて、双葉町を知り、語り部として必要な知識を学んだ。

(5) 白河高校とオンライン交流 (7月27日)

「浜通り×中通り 高校生震災対話会」をテーマに震災の意識について語り合うとともに、震災時小学5年生だった両校のOBからお話を伺った。その後、グループごとに話し合いをし、あるグループでは「若者に震災体験をどう伝えるか」という話題が出た。

(6) 福島県 社会貢献活動コンテスト (10月3日)

今までの活動を2年生がオンラインで発表し、優秀賞(2位相当)を受賞した(写真)。



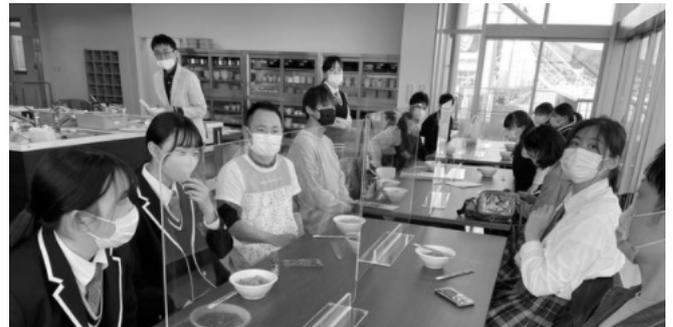
(7) 岐阜県瑞浪市の中京高校さんと交流 (10月27日)

(8) 東京都小金井市の中央大学附属高等学校の2年生と交流 (10月29日)

(9) 気仙沼・石巻研修 (11月20日～21日)

気仙沼のクッキングスタジオという所を借りて福島県産で豚汁を作り、NPOの方々と共食して福島の話をして、気仙沼の話聞いた。

NPO底上げを通じて、生徒より少し上の若い世代の方々3名に来てもらってお話を伺った。



観光客用さかな市場で、製作した双葉郡八町村のティッシュと部のパンフレット、福島県産のリンゴを配布したのち、南三陸町で語り部の方に乗っていただき津波被害のあとを見て回る。

小高い丘の上の小学校に行き「この一階まで津波が来ました」と言われてギョッとする。

翌日は8時半に宿を出て石巻へ。語り部さんに乗っていただき、児童の津波被害者を出した大川小学校跡へゆく。校舎の壁が引きちぎられ鉄骨がむき出しとなり、2階渡り廊下もねじ切られて倒れており、津波の凄まじい力を感じた。



(10) 早稲田大学の学部生・大学院生との交流 (11月22日)

(11) 水俣研修 (12月26~28日)

福島原発事故の構造が水俣病事件の構造と似ていることに気づき、熊本県水俣市で水俣病について学習するとともに、福島県の現状を伝えていく2泊3日の水俣研修を企画した。

事前研修を経て(講義動画を右リンク先に掲載する)、初日は水俣病資料館を訪問した。症状の他に偏見・差別のことも深ぼりしていると同時に、各節の最後に「あなたがそのとき 患者家族、チツソ社員、水俣市民、周辺住民だったらどうしただろう」など、問いかけが設けてあるのも面白い。

翌日はホテルの朝食会場で朝食を食べているお客さんたちの前で、ポスターを広げれば未来学園高校創設の経緯と、社会起業部の取り組み、福島県の現状について話をしたのち、各テーブルに福島県産のリンゴと社会起業部配布セット(パンフ、双葉郡8町村ティッシュ、コーヒーなど)をお配りした。皆さん聞いてくださり、喜んで受け取ってくれた(右上写真)。

この日は一般財団法人水俣病センター相思社のKさんの案内のもと、水俣病事件の現場をフィールドワークした。

大崎岬から半島と島に囲まれた不知火海を見晴らし

た。「見えている範囲全てに患者がいます」とのこと。



おれんじ鉄道水俣駅からJNC正門まで歩いた。駅舎には水俣を紹介するコーナーがあり、オープン時は石牟礼道子さんの紹介もあったそうだがクレームがついて一カ月で撤去したという。現在、そこでは水俣病について一切言及されていない。水俣病を排除したい、なかったことにしたい、という市民の気持ちがうかがえる。「差別していたし、されてきたし」「それをのりこえて、売りにしていこう、という気持ちまではとても到達していない」とKさん。

水俣病「爆心地」の百間排水溝から埋立地を左手に見つつバスは走る。16年間かけて埋め立てられたようだ。先端はエコパーク水俣となっており、石仏が並ぶ敷地を歩いた。碑があるが「過ちは繰り返さない」という碑文にはヒロシマと同様主語がない。英訳の主語はWeとなっている。「行政としては、水俣病はみんなが悪かった、時代が悪かった、というストーリーを作りたいんです」とKさん。

続いて漁村地域を見学する。一口に水俣市といっても工場がある北部と漁村がある南部は全く異なる印象だった。10キロの間に前近代と近代の暮らしがある。山にへばりつく漁港と平野、一次産業と二次産業、海に生きる人々と経済成長を担う人々、そして「被害者」と「加害者」の世界だ。

お昼のあと相思社へ行き、水俣病歴史考証館を見学し、患者さんのお話をうかがった(下写真)。



2. 6. 2 社会起業部カフェチーム

(1) はじめに

「地域を知る・伝える・盛り上げる」ことを目的として、社会起業部カフェチームとして高校の部活動でカフェを運営している。ケーキや焼き菓子の製造、子供たち向けのイベント開催など、生徒主体で活動している。

(2) 実施内容

今年度の社会起業部カフェチームは、コロナウイルス感染症の感染予防対策をしっかりと行い、より地域に密着したカフェを目指すため一か月毎に双葉八町村などをテーマとしてイベントやインタビューを実施した。また今後の活動内容について情報共有を図った。

(3) 成果

① 「双葉のだるまを知ろう!!」(本校) 5/20

双葉だるまは、従来のだるまをそのまま使うのではなく、町章の「竹」を模様付けしてした「町章だるま」。「鶴は千年、亀は万年」という縁起がよいことわざをモチーフとして、眉は鶴、ひげは亀のデザイン。震災後の双葉町を応援する気持ちで「七転び八起き」という意味があることを学んだ。

双葉だるまの特徴を知るだけでなく、そこに込められた想いを直接講師の方から聞くことができよい経験となった。



② 藍染め体験(楡葉町) 7/17

広島の小中学生たちが応援の思いをこめて、楡葉へ藍の種を送った。そこから「ならば藍染会」の方々の活動が始まった。その復興の思いが込められている藍を使って、シルクのスカーフを10枚染めさせていただいた。作成後のインタビューでは、「若者が藍染めという伝統文化にどう関わるかは自分たちで考えること」という熱い言葉をいただいた。今後のcaféふうとして自分たちにできることを考え、今後の活動に生かせるよう思わせる体験となった。



③ 第6回全国高校生SBP交流フェア

カフェの紹介をします! オリジナルブレンドコーヒーのふうスペシャルを召し上がれ

カフェチーム小野澤、山田が全国高校生SBPフェアに参加し、「極」を受賞した、惜し



くも決勝進出は果たせなかったが審査員より大会評価を受けた。

特別賞 極株式会社百五銀行賞
皇學館大學学生スタッフ賞

④ 嵐が丘(葛尾村) 10/23

奥様はおいしいものを食べることが大好き。すべて手作りにこだわった料理やケーキをみんなに食べてほしい思いでカフェをオープンした。若いころから自分が気に入ったものを少しずつ集めたコーヒーカップやソーサーでお客様をもてなしていた。3.11の地震により大切に集めたコーヒーカップやソーサーの大部分が割れ、「地震があるなら福島にはこなかったのに」との言葉が印象的だった。現在は、福島や関東からもお客様が利用する予約でいっぱいのカフェだ。



⑤ ハロウィンイベント 10/30

今年のハロウィンイベントは福祉系列の生徒とコラボをした。

caféふう主催! みんなで楽しむハロウィンイベント

かぼ"ちゃまつり"

10/30(土)
10:30~13:30

参加費 無料

イベント①「折り紙でハロウィン飾りを作ろう!」
ふたば未来学園高校の生徒が折り方を教えます! 色々な形を折って、お家やカフェをデコレーションしてみませんか?
お子様だけでなく、大人の皆さんもぜひ一緒に折ってハロウィン気分を味わいましょう~

イベント②「みんなでポッチャを体験しよう!」
ポッチャとはパラリンピックの正式種目でボールを転がして目標のボールに近くに近づけられるかを競うスポーツ! 当日はふたば未来の生徒がルール、やり方を丁寧に教えます。初心者大歓迎! 幅広い年代の方にお楽しみいただけます。

⑥ 出張販売

広野町役場に出張販売を試みた。役場いっばいにコーヒーの香りが立ち始め、多くの方に利用していただき、準備したポットではお湯が足りず、役場のポットで助けていただいた。役場の方からは次回開催の催促と、「予約」というキーワードをいただいた。ご利用ありがとうございます。



(4) 課題

今後の課題としては地域イベントへの参加を積極的に行いたい。コロナウイルスによる制限も徐々に解除の見通しが立った今、たのしい思い出を作りながらcaféふうでゆったりとした時間を過ごしていただけるような新たな企画を立案している。

生徒の学びが継続できるように、様々な工夫をしながら他校との交流会も含め積極的に活動していきたい。

第3章

カリキュラム・マネジメント

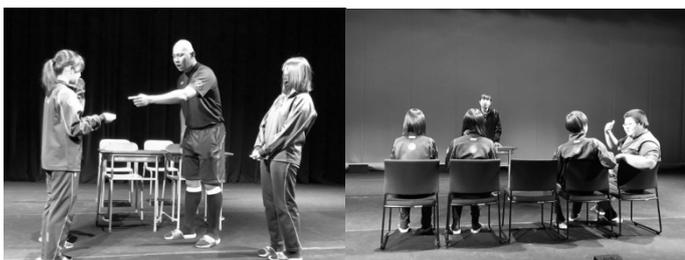
3. 1 探究活動の指導法 I 演劇での地域課題把握から探究接続

本校では開校初年度より、1年次に「演劇を通して地域の課題を知る学習」を実施してきた。これまで、生徒の特性に応じた演劇プログラムのブラッシュアップに並行して、演劇から探究への接続について試行錯誤してきた。演劇で得た学びを探究に上手く繋ぐことが課題であった。演劇という対話的実践の場において、ダイナミックに獲得した学びが、その後の探究活動にどう生かされているのか。演劇を総合学習の時間に取り入れたことによる生徒と教員の関わり方の変容をまとめる。

(1) なぜ演劇なのか

演劇プログラムで、生徒は集団創作という協働的な関わりの中で学んでいく。学びは、「対話」を通して他者との間で生まれ、意見も考え方も違う他者と向き合う中で、自らの学びが育まれる。また、演劇の場で関わる他者には、一緒に創作を行う実在の「他者」に加え、演劇作品の中に登場する、まだ出会ったことのない想像上の「他者」も含まれる。時間や空間を超えた多様な「他者」との関わりの中で学んでいくプログラムである。

本校の授業内容については、第2章 研究開発の内容・活動実績の「地域創造と人間生活」にて詳しく述べているため割愛する。地域を歩き、人と出会い、そこで見えてきた課題を演劇で表現することで地域課題を立体的に捉えるという目的は当初から変わらないが、開校後より7年の年月を経て、双葉郡を取り巻く環境や生徒の震災との距離感も変化中、プログラム内容も変容を続けてきた。ワークシートを用いて脚本を書き上げていくスタイルから、コミュニケーションを重視したインプロ(即興演劇)へと変えた。演劇を創ることが目的ではなく、そのプロセスの中で、「対話」や「コミュニケーション」を通してしか乗り越えられない壁を乗り越えさせる意図を持ってデザインした。対話の種類は大きく分けると以下の3つである。



・地域の大人との対話(地域×生徒、地域×地域)

生徒達は、入学後に双葉郡8町村バスツアーに参加し、双葉郡と出会う。後に地域の方々の取材に入る。震災から10年以上が経ち、震災との距離感も多様な生徒達が、地域の方々との対話を通して、震災当時から現在に至るまでの話や現在課題と感じていることなどを取材していく。初めのうちは、生徒たちにとってそれらは演劇を創作するための素材でしかなく、実感を持って取材対象の話や腹落ちさせることは難しい。取材対象をきちんと理解するには、その人だけでなく、その人を取り巻く社会についても理解する必要がある、そのためには足りない情報を補わなければならない。

他者を演じるということは、その人物を代弁してしまう可能性を有する。また、生徒達が作った作品を取材対

象本人が見るということは、その人が語る様々な事柄の中から生徒が何を切り取るか、言い換えると、その人が生徒たちの目からどう映ったのかが表出することとなる。



取材対象やその周りの方々を自分の身体を使ってなぞることを続けているうちに、そしてそれが誰かの前に現されてしまうという「責任」を感じる中で、生徒たちは「他人事」ではいられなくなる。自分の演じる他者は、目の前にいて、固有の人生を歩んでおり、すぐに触れられる生身の身体を持っていて、実際に自分が現実世界で関わりを持ち、その人生を変化させる可能性を有するのだ。そこで迫ってくる責任感は重いものがあるが、それが演劇を媒体とした対話のなせる技であり、他者を演じるという非日常的な演劇体験を「遊び」にさせないための仕掛けである。そして、それらの作品を鑑賞し、実際に舞台上に立った生徒たちや、客席の生徒たち、審査員、取材対象である地域の方々と対話をすることで、重層的な「主体的・対話的で深い学び」が実現しているのだ。



取材対象の視点で客観的にこのプログラムを分析する必要もあるだろう。取材・FWから最後の演劇の発表会までの数ヶ月間、生徒たちとの対話から地域の方々にどのような変化があったのかは、これまでアンケートのような客観的なデータを取ったことはない。しかし、発表会の後の対話の時間において、このプログラムが、取材対象に良い影響を及ぼしていると感じた。地域の方は、自分のことを知ろうとしてくれている生徒の想いに触れ、そのことを大変肯定的に受け止めてくれていた。また、震災直後ではあり得なかった、立場を超えた対話も見られた。極端に言えば加害者と被害者のような関係性だっ

た人々の間に、生徒たちの演劇を通してお互いの当時の想いを知り、お互いの境界を超えて新たな対話が生まれる場面もあった。

「境界を越える」とは、自らが引いた境界が揺らぐことである。境界とは自分のモノの見方に関わるものであり、人が自らを納得させるために整理し、すなわちカテゴリー化するという大きな力によってつくられる。震災当時、そうすることで自分の心を守ってきたであろう（当時はそうすることが正解であったと思う）方達が、震災後10年以上経ち、生徒との対話や、演劇を通してそれらの境界が揺らぎ、自分と他者を全く異なるものとして区切る視点自体が疑わしいものとして現れる。演劇を見ることで他者の記憶を追体験し、自分が自分でありながら他者に「なる」ことで足場を揺るがされるとき、境界が揺らぎ、自分の見方で他者を判断する眼差しは相対化され、その先に対話が生まれるのだ。

・演劇を創るチーム内での対話（生徒×生徒）

演劇的手法を用いた活動で生徒は、グループ活動という普段とは違う他者との関わりの中で、話し合いながらFW先を決め、取材の役割分担をし、取材した内容を演劇にしていく。

往々にしてグループ内で意見の違いは生じる。演劇を創るために構成された男女混合のグループ編成はクラス担任に委ねられており、それぞれの教員が様々な意図を持って生徒を配置している。そのようなグループの中で対立や分断が生じた時、それは平穏なものばかりとは限らず、時には葛藤、衝突、軋轢が伴う。一見、上手く行っているように見えるグループも、よく観察すると、一部のリーダータイプの生徒が主導で話し合いを進めており、その他が傍観者だったりする。

傍観者というのは、対話や活動に参加しようとしないう人、聞いているふりをしているだけで無関心な人、自己開示しない人、嘘をついたり、正直に言わない人などのことだそう。嘘をつくということは、「自分という個人として他者と関わらない」ということであり、会話をしているように見えても実は会話していないということだ。（『他者の靴を履く』ブレディみかこ著）。

意見の違いをネガティブなものとして捉え、傍観者であることで乗り越えるべき壁を避けており、対話が成立していない班は、作品が深まらずに表面的な部分をなぞったものとなることが多い。逆に、あらゆる壁にぶつかり、上手く行っていない班ほど、それらの対立や分断を対話によって乗り越えた先に完成した演劇は、こちらが驚くほど地域の課題を捉えた素晴らしいものとなっている。



【生徒たちの対話の例】

他県出身のトップアスリートの男女と、浜通り出身の生徒、中通り出身の生徒らで構成された班での話である。この班は、浜通り出身の女子生徒Aの希望により、大熊町で家族を津波で失いながらも伝承活動を続ける木村紀

夫氏を取材した。しかし、FWにて大熊町の帰還困難区域にある木村氏の自宅を訪問することとなった際、Aが見えない放射能への不安から、参加を辞退したいと申し出た。Aに振り回されていると感じた生徒たちの創作意欲が下がり、グループ内で対立が生まれ、雰囲気も悪くなってしまった。WS講師や教員と相談の上、話し合いの場を設けた。出身地も、本校に進学した理由も、震災や原発事故に対する認識もバラバラな生徒たちが、お互いの考えを共有したことにより、価値観の違いを認識できた。自分とは違うもの、自分は受け入れられない性質のものでも、他者として存在を認め、その人のことを想像することができた。大変理性的な対話であり、その場にいた教員は静かに感動を覚えた。その対話がまさにエンパシーそのものだったからだ。その後、その班は素晴らしい作品を創作した。生徒たちは、まさに双葉郡で起きている「分断や対立」を自分たちの班の中で体験し、対話を通して乗り越えたことで以下のような感情が生まれたという。Aの感想である。

「対立が生まれた時、心が苦しくなったけど、そこで逃げずに向き合って対話をするのが偏見や差別をなくすことに繋がると学びました。（中略）みんなの考えが違うほど時間もかかり、まとめるのも難しかった分、多様な意見や考えがうまれました。演劇は年齢や性別、人種を超えて人と人を結び、相手や自分のことを知ることでできるものだと思います。同時に、双葉郡の問題も対話によって解決されていくべきものだと思います。」

これらのことから、学びは、「対話」を通して他者との間で生まれるものであると分かる。時にそのやりとりはダイナミックで騒然としたものになりうるが、他者を眼差す自らの視点に気づき、境界が揺らぎ、変化する自分自身を知ることは、これまで見えていなかった他者の側面を見て、関わり方を柔軟に変えられるという生き方を作り直すことにもなる。

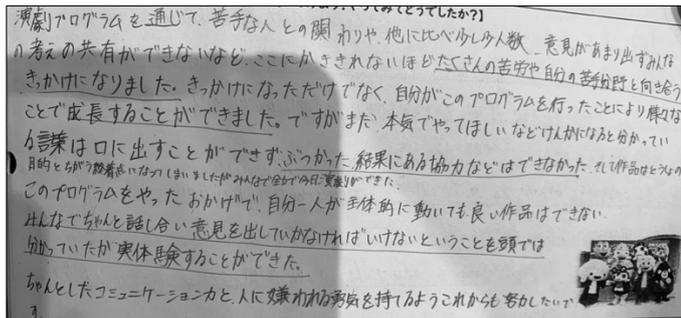
・演劇プログラムを通じた自分自身との対話（メタ認知）

演劇的手法とは、「表現」することが目的ではなく、自身の身体を通して他者・仲間・ひいては地域と主体的に関わることで生徒自身が経験し、考え、変容することである。

演劇プログラムでは、生徒一人一人に冊子が配られる。授業の終わりに必ず振り返りを記入させ、その中で生徒たちは自らの行動を客観的に「省察」していく。意識的に自らを振り返る時間を取ることで、自分の言動や行動を俯瞰して見つめ直し、常に改善しようとする意識を持ち、次の行動に繋げることができるようになる。この能力は、本校が育てたいルーブリックの項目の1つである、「自らを振り返り変えていく力（メタ認知）」である。

1.あなたはどれくらい班に貢献できましたか？(数字に○)
十分・ 5 4 3 2 1 ▶ 不十分
どうでしょう？
2.あなたはどれくらい積極的に発言できましたか？
十分・ 5 4 3 2 1 ▶ 不十分
3.発言するとき、相手にわかりやすく伝えることができましたか？
十分・ 5 4 3 2 1 ▶ 不十分
4.あなたは他の人の意見を耳を傾けられましたか？
十分・ 5 4 3 2 1 ▶ 不十分
5.あなたは班の議論の前に進めることに貢献できましたか？
十分・ 5 4 3 2 1 ▶ 不十分
6.タイムキープを意識し、議論をまとめることに貢献できましたか？
十分・ 5 4 3 2 1 ▶ 不十分

創作期間中は、渦中ということもあり冷静に振り返ることができない生徒もいるが、全ての演劇プログラムが終了した後の全体振り返りは実感を伴った深い対話があちこちで生まれる。ポジティブなことだけでなく、「最初は嫌だった」「やりたくなかった」というネガティブなことも聞くことができる。それは、演劇を通して生徒たちが自己開示できたことと、それらを共有できる関係性を作ることができたことの現れである。これらのプログラムによって生徒たちが何を体験し、考え、変容したのかを言語化させることで活動の意味や意義をとらえる。評価が対象とするのは、学びの結果ではなく、学びのプロセスになる。



(2) 教員の関わり方の変容

生徒の成長には、それを見守る教員の関わり方が重要である。本校では7年かけて、演劇の授業が市民権を得ることができた。生徒の成長が大きな証拠となっているからである。しかし、これから演劇を取り入れようとしている学校は、教員の理解を得る際に難しさを感じることもあるだろう。

授業に演劇的手法を取り入れるということは、実践者が意図する、しないに関わらず、現行の教育に異議を投げかけるものとなる。さらに、それらが身体や感覚、スピリチュアリティの領域に踏み込んだ活動であることがさらに相互の理解を難しくさせる。実践者のねらいは抽象的であり、生徒の状態に応じてどんどん変えていかねばならないし、これらの活動が育てる生徒たちの力はすぐには目に見えにくいものであるし、数値でも測りにくいものであるからだ。

しかし、対話、身体、関係、創造、想像。これらはすべて演劇が大切にしている要素でもある。時に「対話」を通して他者との間で学びが生じる時というのは、そのやりとりそのものが衝突や軋轢を伴うものとなることがある。そのため、これらを制限することなく伸び伸びと生かしていく演劇プログラムは、現在の教育の在り方や教員の関わり方を部分的にあるいは全体的に批判するものになってしまう。そこで重要なのは、演劇プログラムに関わる教員のマインドセットである。教員は、これまでの授業における「インストラクター」としての生徒との関わり方、「ファシリテーター」としての関わり方に変容する必要がある。ファシリテーションの語源はラテン語の「facilis」で、「する・つくる」(facio)ことが「できる・ありうる」(ilis)ようにするという意味である。「する・つくる」のは学習者であり、それが「できる・ありうる」ようにするのが我々の仕事となる。

他者をコントロールしない。これがインプロ（即興演劇）におけるファシリテーションの考え方である。コントロールしようとすれば、コントロールできなかつたらどうすればいいかという恐怖がうまれる。また自分の思い通りにいかなかった時に、無理矢理に未来や他者をコントロールしようとしてしまう。まずは今、生徒のまわりで起こっていることをよく観察する。生徒をどうやって支援できるかを考える。その際に前提となる考え方は「人は人を変えることはできない」という考え方だろう。演劇的手法においては、我々が生徒を変えることはできない。もし生徒が変わることがあるならば、それは生徒が自分で変わったということである。我々ができるのは学習者が自ら変わるときの支援である。

生徒が民主的な社会の形成者として、問題解決能力と市民的資質育成の学びが生成されるためには、「教師から生徒への一方的な知識伝達」を受動的に受けさせられている状況を克服しなければならない視点が見えてくるのだ。未来とは受け取るべく与えられるものではなく、人間によって創造されるべきものである。そのためには人々は「傍観者」ではなく「行為者」にならなければならない。それにより生徒が自分と世界との関係を変えていく時、我々教員はどのように関わっていけば良いのか。

対話を育むWSの態度と行為について

- 1 生徒と教師は学び合う
- 2 教師も知らず、生徒も知らないという自覚から始める
(無知の知の自覚)
- 3 教師と生徒が対話により創造する (対話の学びの生成)
- 4 教師と生徒は耳を傾けあう (協働と他者尊重の関係)
- 5 教師と生徒で公共性を作り出す
(意識化から主権者となるプロセスへ)
- 6 生徒が学習内容を選択し教師はファシリテートする
(生徒の主體的な探究姿勢と教師の支援)
- 7 生徒が行動し教師はそのことから学ぶ
(異化による気づき、傍観者から行為者への学び)
- 8 生徒が問題意識からテーマを決めて探究する
(問題の関心と解決への意欲)
- 9 教師は父権主義から解放されて生徒と関わる
(権威性からの解放)
- 10 教師と生徒の関係を注入の主体客身体関係から対話する協働の探究者の関係に変容する
(「演劇教育とワークショップ 学校という劇場から」(論創社) 第3章『演劇は学びを民主化できるのか』より)

インストラクター、ファシリテーター、メンター、そして学習者など、複数のアイデンティティをゆるやかに持つこと。教師自身も、自分はいかにできない、これしかしてはいけなくて決めつけるのではなく、生徒のありのままを観察し、その混沌を冷静に見つめる。そこで自身に起きる葛藤も楽しんでほしい。時には生徒と一緒に悩むフリをし、生徒が前に進むための後押しをする。こういう悪く言えばいい加減さ、よく言えばしなやかさを持った教員が今後さまざまな人との関係の中で創造的に実践を作り出していけると考える。その中で、教師自身も学び、教員としての関わり方を探究していくのだ。そしてこのマインドは探究を進めるにあたって必ず必要

3. 2 探究活動の指導法Ⅱ 探究カリキュラムの開発について

【本校の探究を開発するに当たって】

◎社会の変化による「総学」から「総探」への変化

総合的な探究の時間の学習指導要領が総説で述べているように、現在の生徒達が成人して社会で活躍するときには、生産年齢の人口減少やグローバル化、技術革新等により、予測困難な時代がやってくると考えられている。これまでの社会は明確な課題があり、それに対してどうアプローチすれば正解かを求めることが目標となっていた。しかし、現在の社会、これからの社会では、さまざまな価値観からさまざまな課題があり、「唯一絶対解」ではなく、答えのない課題に対して、多様な他者と共同しながら「目的に応じた納得解」を見出す必要がある。

教育の分野でも大きな変更がなされてきている。学習指導要領の中で、「総合的な学習の時間は、課題を解決することで自己の生き方を考えていく学びであるのに対して、総合的な探究の時間は、自己の在り方 生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学びを展開していく。」とあるように外に存在している一般的な課題だけではなく、自分自身が問題を設定し、課題を設定していくことが求められる。

【探究の3つの型】

これまでの探究の実践から、指導をしやすくするために探究を3つの型に分類した。

- ① 基礎研究型探究
- ② 問題解決型探究
- ③ 未来創造型探究（課題達成型探究）

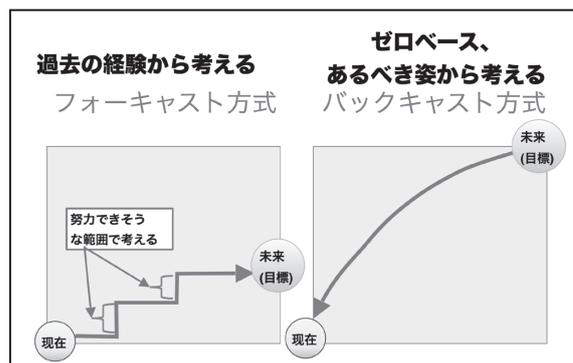
まず①は真理を追い求めるような探究である。科学の分野だと、山中教授のiPS細胞の研究のようなものであり、情報の分野だとブロックチェーン技術等、いわゆる基礎研究に近いものを想定している。本校では、再生可能エネルギー班などで、新しい発電方法などの探究がこれに当たる。②は、今現在目に見えているネガティブな事（顕在的な問題）やこのままだと起こることが予測できる問題（潜在的な問題）を解決する探究であり、総合的な学習の時間でも行われていたような探究である。③の未来創造型は、問題をとらえ直し、新たな課題を見だし、新しい価値や価値あるものを作り出す探究である。探究を進める上で、②の問題解決型の探究は、（地域）社会で共有された問題であり、共通の課題であるため、解決の方向性がある程度見える。そのた

め、参考事例があり、生徒が探究を進める際にアドバイスが受けやすいが、すでに行われていることをなぞることになったり、地域の活動の中に都合良く組み入れられたりする可能性がある。一方で、③の未来創造型の探究は、一般的に言われている問題や課題を再設定することから始めるため、具体的な解決アクションが（地域）社会で行われていることが少なく、オリジナリティのあるプロジェクトを行うことが可能である。

【問題と課題の設定について】

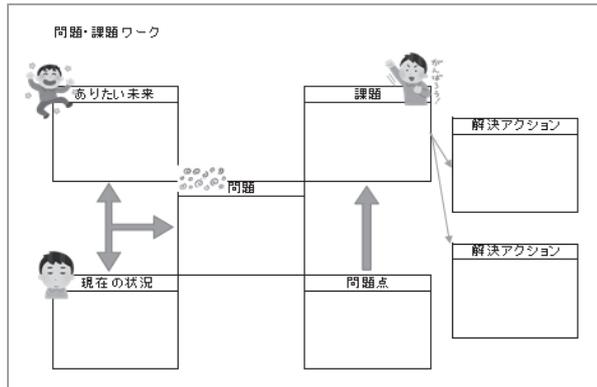
以上のようなことを踏まえ、探究プロセスの中の、課題設定を次のように進めている。本校では、課題と問題の違いをビジネスの分野で使われている定義で進めた。「問題」＝達成したい目標と現状の差、「課題」＝その差を埋めるために起こすべき具体的な方向性。さらに、達成したい目標についての次の2種類に分けた。「本来あるべき状態」と生徒それぞれが考える「ありたい状態」である。消しゴムを例にすると、「あるべき状態」はしっかり消しゴムとしての機能を果たすことであるが、「ありたい状態」はさまざまあり、その一つとして、「角で消す心地良さが続く状態」とゴールを設定することで、カドケシという本来の機能以上の付加価値を持つ商品を生み出すことができる。「ありたい状態」を達成したい目標にすることで、達成することでより付加価値の高いゴールを生み出す「課題」を設定できるようになる。この考えは、「バックキャスト」の発想をもとにしている。

バックキャストとは、最初に目標とする未来像を描き、次にその未来像を実現する道筋を未来から現在へとさかのぼって考える手法であり、現在を始点として未来を探索するフォアキャストと対置される。フォアキャスト型のシナリオ

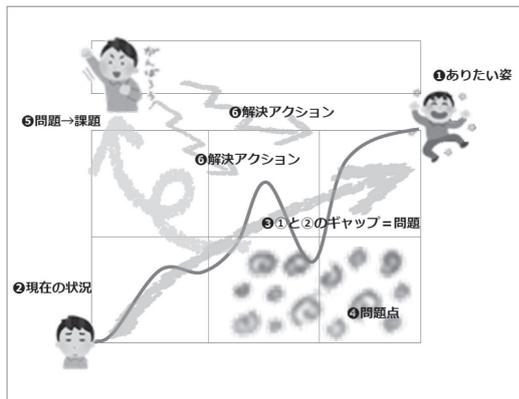


作成手法は、現在の延長上に将来を描くことについて有効だが、現在とは全く異なる未来を描くことは困難。それに対して、バックキャスト型シナリオ作成手法は、現在の状況を前提とすることなく、描きたい将来を定義するので、劇的な変化が求められる課題に対して有効とされている。

以上のことを踏まえて、「問題・課題ワーク」を作成し、生徒に対して課題設定を実施した。このワークを使い、ありたい未来を設定することによって、未来創造型の探究を進めることができる。



【問題・課題ワーク】



【問題・課題ワーク (フューチャーマッピング版)】

【生徒の未来想定能力向上のための取り組み (バックキャスト型を効果的に働かせる方策)】

1 Future Mapping

Future Mapping は、創造的課題解決を目的とする企業研修を手がける神田昌典氏により開発された思考法である。バックキャスト型の発想で、課題を達成していくために必要な、幾重もの思考レイヤーを一枚のチャートにまとめたもの。一般的な問題解決のフレームと異なり、理想の未来と現状とのギャップを埋めるストーリーの力を使うことで、枠を超えた発想と結果を生み出す行動シナリオを作り上げ実現させることができる思考法である。

このフューチャーマッピングを使うことで、物語の流れと状況の変化を想像できることから「問題・課題ワーク」を、より現実的行動に移すシナリオ作りに行うことができる。言い換えると、課題解決までの流れが、ストーリーとして作られ、さらに、作成段階から、問題解決プロセスを想像の中でトレースしてわくわくする臨場感を感じることもできる。横浜国立大学・教育学部高本真寛先生とベネッセ教育研究所の共同研究では、自律的動機付けがされた生徒だけでなく、外的動機づけによって学習を行っている生徒も学習それ自体の楽しさに気づく契機となりうることを示されている。

5期生は、1年次生の「産業社会と人間」でキャリア教育の一環として行い、2年次の探究の時間、原子力防災探究ゼミで探究テーマの深化を目的に、石ヶ森久恵先生を講師として迎え実施した。この思考法を使うことで、探究におけるプロジェクト設計が紙一枚で完成する生徒もおり、これからの探究学習のフレームワークとしての可能性が非常に高い。

2 問題/課題の再設定の考え方

問題と課題の設定方法の考え方を応用した方法を取り入れた。一般的な問題や課題に対して、問題・課題ワークで分析し考察することで、(地域の)問題や課題を新しい観点から再設定することができる。例としてあげると、「少子高齢化」という現象に対して、理想状態を「社会システムを維持できる若手人口の維持」とすると、問題自体が「少子化」になりその課題が今行われているような方向性になる。一方で、理想状態を「AI やロボットによる労働力の維持」とすると、課題は、「テクノロジーの発達と社会における積極利用」になり、「少子化」が問題ではなくなる。このように、一般的に言われている問題や課題と言うスタート地点とは異なる観点から探究を行うことができる。

*オックスフォード大学でAIの研究を行うオズボーン准教授が2013年に発表した論文によると、「(当時の調査から) 10~20年程度で約47%の仕事が自動化され、人間の職が奪われる」と報告され、野村総研の2015年のレポートでも、「(当時から) 10~20年後には日本の労働力の約49%がAIで代替可能」と報告されている。しかし、この問題・課題ワーク的発想で、一般的に言われる問題/課題にとらわれず、新しい問題を見だし、それをスタートラインとして課題を設定することで、それまでの枠組みと

は異なる観点で、新しい解決アクションを考えることができる。

3 クリエイティビティに対するアプローチ

令和元年度の1年次の「産業社会と人間」において、「調べ学習アワード」という取り組みを行った。それまで、本校では「調べ学習」に対して、「調べ学習になっては良くない」等、非常にネガティブな印象を持っていた。しかし、探究を進めていく際、幅広くとことんまで調べる力は非常に重要であり、それは探究に限ったことではないので、より価値のある「調べ学習」になるように指導する試みを行った。1つのものを調べ尽くした後、自分の興味のあるものを掛け合わせることで、価値を創造するという講座を行い、クラス毎に代表を決め発表会を実施した。5期生長岡嘉人の発表では、漫画「キャプテン翼」について調べ、作品について調べた後、「リーダー」の在り方という観点で最終的にまとめた。以下まとめから

・・・リーダーには「トランザクティブリーダーシップ」と「トランスフォーメーションリーダーシップ」と言う考え方がある。前者は、飴と鞭を重視する従来型であり、後者は、啓蒙を重視するヴィジョンナリーな型である。キャプテン翼は30年前の作品であり、当時のリーダーについての考え方は前者であったが、作者高橋陽一氏は後者の価値に気づき、キャプテン翼を描いていた。不確実な現代社会で求められるのはビジョン啓蒙型のリーダーが求められる。30年前の漫画「キャプテン翼」に影響を受けたビジネスマンを見ると、新時代のリーダーを育成するための良い素材になっていたと思われる。
(長岡嘉人の発表より)

このように、足し算で増やした知識に新しい概念を掛け合わせることで、より深い考察ができるよう

になった。この足し算とかけ算の発想は、実際の探究の中でも使われており、特に「解決アクション」の中で、自分の好きなことや興味あることを掛け合わせることで、よりクリエイティブなプロジェクトがうまれた。例としてあげると、「地域の記憶を伝える×ゲーム＝マインクラフトで地域を作る」、「地域に新しい産業を生む×南部鉄器＝鉄卵の研究」、「地域交換留学（3期生の探究）×デジタル＝VR 双葉郡ツアー」、「避難経路×祭り（2期生の探究）」等である。

4 メディアリテラシー（新聞やテレビの使い方）の育成

正確に現状を把握するために、マスメディアに対する向き合い方を伝える必要がある。新聞やテレビ等マスメディアのニュースは「事実＋メディアの考え」という点で2次情報であり、情報に色がついているということを理解させた。メディアの情報は、あくまで、1次情報へのアクセスのためのキーワード探しととらえさせ、事実に対するエビデンスの重要性を伝えた。

5 未来リテラシーの育成

“ありたい未来”を設定する際に、ある程度の未来予測ができることで、より可能性の高い未来を設定することができる。博報堂生活総合研究所の未来年表

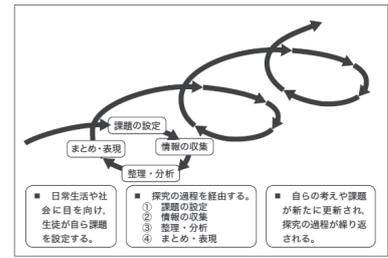
(<https://seikatsusoken.jp/futuretimeline/>) の様な情報にアクセスすることで、より具体的なありたい未来を設置できる。未来に起こりうるテクノロジーの進化や社会の変化に対する情報にアクセスできる力を「未来リテラシー」と定義し、これから起こりうることに對する生徒のアンテナを高くさせる取り組みを行った。

【探究プロセスをアクセラメンツの学習サイクルを使って再構成】

1 探究プロセスの開発

「学習指導要領（総合的な探究の時間編）」で探究における生徒の学習の姿という形で探究プロセスが描かれているが、実際の現場に落とし込むためには、より具体的な探究プロセスを作らなければならないと考えた。探究のカリキュラム開発の際に、生徒の探究学習が効率的に加速するようにアクセラメンツを導入した。アクセラメンツは、Peter Klein 博士とアメリカの Paul R. Scheele 博士が開発した学習カリキュラム作成のための方法論である。また、学習者は①受容的に物事を吸収するステージ、②生成的に仮説を立てるステージ、③持続的に検証を行うステージという3つのステージを経験する。その要素を基に以下のような「未来創造探究プロセス」を作成した。

探究における生徒の学習の姿



未来創造探究プロセス							
	Stage1	Stage2(1)	Stage2(2)	Stage3	Stage3	Stage3	Stage4
	問題発見 課題設定	現状分析	解決仮説	解決アクション① 考察 新たな課題	解決アクション② 考察 新たな課題	解決アクション③ 考察 新たな課題	考察 論文作成 道路実現
探究内容	問立て 目標設定 研究動機 背景材料	調査 調査のためのアクション 整理・分析	解決のためのアクション仮説 構造化した問題・課題との関係 性を知る	解決のためのアクション 考察 より本質的な問題の発見 新たな課題設定 具体的な解決アクション	解決のためのアクション 考察 より本質的な問題の発見 新たな課題設定 具体的な解決アクション	解決のためのアクション 考察 より本質的な問題の発見 新たな課題設定 具体的な解決アクション	考察 論文作成 道路実現
協働/個別	協働で行う良い段階			プロジェクトごとに個別で行うべき段階			考察と論文
探究段階	調査研究			解決のためのアクションと考察			考察と論文
			発表会	発表会			発表会
カリキュラム 段階	産社/2年次生前期		2年次生後期		3年次生前期		3年次生後期
具体的行動	【調査のためのアクション】 文献調査/インターネット等を使った調査 アンケート調査/フィールドワーク 諸団体との共同調査			【解決のためのアクション】 実験/プロジェクト実施/大学との共同研究 企業との共同研究/行政との共同プロジェクト /プロジェクト実施のための資金準備等			論文作成 セルフエッセイ完成 道路実現
	【考察】 輪読・読書会 生徒同士でのディスカッション/教員とのディスカッション			【考察】 報告・発表を通じたフィードバック/教員とのディスカッション 仮説と実施結果の比較/学会等によるフィードバック			
生徒の態度 の変容	受容的態度 (Be Receptive)	生成的態度	持続的態度				
	生成的態度 (Be Generative)	受容的態度	受容的態度	受容的態度	受容的態度	受容的態度	受容的態度
	持続的態度 (Be Persistent)	持続的態度	生成的態度	生成的態度	生成的態度	生成的態度	生成的態度
総合的な学習 の時間							
総合的な探究 の時間							

2 実社会でのアクションの定義（調査アクション・解決アクション）

ここで大きく改善したことがもう一つある。これまでの探究の中で、生徒に対して、実社会に出てアクションを起こすことを促していたが、現状を把握するためのアンケート調査などと地域行政への提言というようなアクションでは質的に違うため、前者を「調査アクション」、後者を「解決のためのアクション」と区別しプロセスの中に入れたことだ。設定した課題に対して、しっかりした調査を行うことで、課題に対する仮説を生み出し始める。そのアイデアをしっかりと形にし、今度は実社会でそれを検証する。そこから得られたフィードバックを生かし、さらなる仮説検証を行う。この探究プロセスは、教員だけでなく生徒自身が見ても、自分自身が今どのステージにいるのかが明確に分かる。

3 生徒の態度変容と教員の関わり方

生徒の態度変容に着目すると、それぞれのステージでの適切な関わり方がわかる。教員はそれを適切にモニタリングできるように、生徒それぞれの知性、生徒の探究の進み方、生徒の探究を止めてしまう事象などを意識し、適切に関わる必要がある。それを構造化したものが次の表である。

生徒は、探究者として課題に対して“受容的に正確に物事を吸収するステージ”では、印象ではなく正確に事実をとらえ客観的に考える必要があるため、教員はインストラクターとして厳しく接しないといけない。“生成的に仮説を建てるステージ”では、アイデアをどんどん出したり、似たような事例を参考にしたりと発想力が重要になるため、教員はファシリテーターとして生徒のアイデアを引き出し、ジ

ジェネレーターとして生徒の中に入り一緒にアイデアを出していく役割になる必要がある。そして、実社会で“持続的に検証するステージ“では、生徒の背中を押してあげられるメンターになることも必要である。この態度変容については、明確にステージごとに変化するわけではなく、もっと小さいサイクルでも起こる。教員はそれをしっかりとモニタリングし、適切に関わり続けたいといけない。

◎教員の生徒への関わり方

1 インストラクターとして

- しっかりと課題設定のための、未来像を個人、または班の中で共有させる。
- 国内・世界の問題の構造にも興味が持てるように、インプットをする。
- 物事について、現在/過去/未来の観点でとらさせ、因果関係等についても考えさせる。
- 何のための調査、現状把握なのかをしっかりと意識させる。
- 現状把握の際の調査においては、文献だけでなく実地調査、RESAS等の最新の情報にアクセスさせる。
- 学校だけでは不可能な計画がある場合、外部との連携で可能になるかどうか柔軟に考えさせる。
- 考察については、①テーマと自分、②テーマと他の事例、③テーマと世界の問題の3つについてのつながりを意識させる。
- 論文作成については、アブストラクト(要旨)をしっかりと作ったうえで、規定にのっとった形で作成するように指導する。
- 企画書などの作り方を伝え、実現するために必要なことなどを自分から気が付くように配慮する。

2 ファシリテーター/ジェネレーターとして

- 生徒自身の探究だけでなく、他の生徒や、実社会で行われていることなども知れるような環境づくりをする。
- ブレインストーミングについては生徒が安心して発言できるように、またブレーキをかけることの無いようにファシリテーションする。
- 一見不可能に見えるアイデアであっても、問いかけを通して深化させる。
- 人と違うことを楽しませる。

- 未来ビジョンを想定させるときには、自由に行わせることができるだけ創造的に行わせる。
(様々な未来予測などを使う)
- 先生自身も一緒に楽しんでアイデアを出す。

3 メンターとして

- 生徒自身がどんどんチャレンジできるようにバックアップする。ただし、外部での活動に関しては、必ず学校側が把握できるようにする。
- 常に生徒が、ポジティブな未来を語れる(語り合える)雰囲気づくりをする。
- 生徒が持続してチャレンジできる環境作りをする。

【探究論文ルーブリックについて】

今年度、5期生に対して論文指導する際に「論文ルーブリック」を作成し、実施した。これまで、体系立てた論文指導がなかったことと、本校の探究の目指すべき4つポイント(①全国や世界の課題と照らし合わせた考察があるか。②課題解決に向けた調査や実践の報告があるか。③社会や未来に向けた提言があるか。④地域や社会の変革に繋がる特筆すべき成果があるか。)を生徒に意識させ言語化できるようにするという目的で作成した。大きく変更した点は、文字数を10,000字以上から以内に変更した。生徒が文字数を確保するために無駄に長くなり、論旨がわかりにくくなること、さらにバカロレア等の論文の規定が日本語8,000字以内と言うような文字制限であったことを参考にした。

論文ルーブリックを利用して分かったことは、論文の作成の方向性を生徒が理解したことで、各自が論文構成を洗練させることができたということである。また、もう一つの大きな変化は、多くの生徒が、こちらから指導しなくても英語での発信を始めたことである。アブストラクトだけでなく、論文すべてを英語で作成した生徒もいた(論文集に掲載している)。

【今後の展望】

1 探究プロセスの改善点

5期生に探究プロセスをベースに進めてきて、課題の設定の難しさを体感した。ある程度のインプットがなければ課題設定ができないと考え、トライアル的に原子力防災探究ゼミで、帰還困難地区の双葉町等にフィールドワークに行った。それが大きなきっかけになり、探究プロセスが回り始めた。このことから、Stage2(2)の解決仮説の段階で、課題の再設定を行う必要がある。

生徒の探究取り組みステージと態度変容						
生徒の探究に対するあるべき態度の変容	Be Receptive (受容的に正確に物事を吸収するステージ)		Be Generative (生成的に仮説を立てるステージ)		Be Persistent (持続的に検証を行うステージ)	
	生徒思考・行動	該当のガガワガ	生徒思考・行動	該当のガガワガ	生徒思考・行動	該当のガガワガ
生徒の各変容フェーズにおける望ましい具体的態度や行動	①Think Flexibly ①柔軟に考える	意見が自由になるような学習づくり	①Seek Complexity ①自分の探究以外のこととの関係を探す	異論時に物事を捉えるようなアドバイス	①Take Risks with Courage ①勇気をもってリスクをとる	アクションを起こす習慣作り
	②Inquire ②詳細に探究し、様々なところから情報を引き出す	正確な情報収集・分析への強い探究	②Think Fluently ②アイデアが溢れてきたら、流れ続けるだけ考え、記録する	意見が自由になるような学習づくり	②Imagine ②より良い未来を想像し続ける	未来ビジョンを常に意識させる習慣作り
	③Access Expanded Brain ③直感を無視しないで積極的に活かす	誰でも受け入れられる学習づくり	③Combine ③人と違うことを楽しむ	他の人との強みを理解し楽しむ学習づくり		
			④Elaborate ④アイデアを細部にまでこだわり洗練させる	課題にアイデアを浮かせるような学習		
探究フェーズ(簡易版)	探究フェーズ1 (仮テーマ設定)		探究フェーズ2 (本テーマ設定)		探究フェーズ3~4 (プロジェクト実践と考察)	探究フェーズ5 (まとめと発表)
	問題と課題設定 現状を正確にする		現状を他のこととつなげる 課題解決の仮説を立てる		プロジェクトを実施する フィードバックをかける (繰り返す)	
教員の役割	インストラクター		ファシリテーター ジェネレーター		メンター	

2 オンラインを通じた地区を越えた協働

コロナ禍により、ICTの活用が非常に活発になった。それにより、距離にとらわれない協働の在り方を探ることができた。実際、これまでも、3期生の渡邊美友のように他県の高校生との協働を行ってきた生徒はおり、非常に価値のある探究にしてきた生徒がいる。オンラインを活用することでやりやすくなると思われる。また、海外の生徒との協働も可能になる。探究ではないが、2020年に英語の授業で、アメリカの高校との協働学習やトルコの高校とプロジェクト学習を進めた。コロナによるロックダウン等で、最後まで達成することはできなかったが、世界共通の課題を踏まえた探究の深化、それに伴うプロジェクトの立ち上げを行う可能性を感じることができた。

3 未来創造型探究(課題達成型探究)

予測不能の社会に対して、価値を創造する未来創造型探究を生徒に挑戦させることが必要である。その際に、客観的事実を基にした現状把握をベースに、クリエイティブ思考を使ったプロジェクトを立案し、探究テーマを深めていく生徒を多く育成していくことで地域に対しても、さらに生徒自身の能力育成にも利益があると感じる。

3. 3 外部連携

本事業を行うにあたり、昨年度からコンソーシアムを構成し、双葉郡教育復興ビジョン協議会や福島大学などと連携し、地域から海外まで、様々なグループとの連携を意識的に推進してきた。今年度もコロナ禍により現地に赴くことができなかつたり、直接会って話ができなかつたりする等、活動に大きな支障が生じた。一方ではオンラインの活用によって移動の制約がなくなり、時間さえ合えば校内で様々な方と容易に話し合うことができるようになった。オンラインツールは慣れてしまえば大変便利であり、これを活かして逆境をチャンスに変えることにより新たな連の形が進み、生徒の様々な取組が面的、質的、量的に大きく展開してきた。ここでは外部連携の経緯や状況等について、「地域知」と「専門知」に分けてまとめた。

3. 3. 1 コンソーシアム

(1) はじめに

昨年度に結成したコンソーシアムによって、これまで以上に外部連携を強化することとした。また、外部連携が教員個人の繋がりを活用しているケースが多く、長期的に連携を進めるには組織同士で連携する必要性はあるという課題は引き続き解消しなければならない。

(2) コンソーシアム

今年度のメンバーは以下のとおりである。

双葉郡教育復興ビジョン推進協議会	笠井 淳一 氏
福島大学 人間発達文化学類	中田スウラ 氏
福島相双復興推進機構	桜町 道雄 氏
福島イノベーション・コースト構想推進機構	山内 正之 氏
NPO 法人カタリバ	横山 和毅 氏
福島県教育庁	丹野 純一 氏
本校校長	柳沼 英樹 校長

今年度は令和3年7月と令和4年度の1月に協議会を実施した(コンソーシアムの記録については巻末に記載)。

コンソーシアム協議会では、まず本事業の目的や目指す人材育成像の確認を行い、今年度の開発計画の進捗状況を共有し、意見交換を行った。昨年度から双葉郡8町村との連携を面的に広げたので、今年度はその関係強化を進めてきた。具体的には地域の課題を把握するためのインタビュー取材先を福島相双復興推進機構に紹介していただくなどの新たな取り組みを行うことができた。また本校で行ってきた地域の方との連携の状況を説明し、具体的な連携方策について検討いただいた。

また、第2回では7期生1年次生の製作した「トリチウム水」を題材として扱った演劇を観ていただいた。委員の方々から取組みが蓄積され、課題の捉え方が進化しているのご意見を頂いた。

(3) 今後の展望

今年度は地域創造と人間生活における演劇プログラムの深化ができたが、2年生以降の「未来創造探究」への

継続性については、引き続き課題が残されている。同じ地域に住んでいるのに多様な意見が出る理由について、複眼的な検証作業をフィールドワークに組み込んでいく必要がある。

3. 3. 2 地域知連携

(1) はじめに

本校では開校当初から地域の課題探究活動を学校の教育活動の中心に据えてきた。本校が所在する福島県浜通りは震災原発事故が起きた地域であることから、社会課題が顕在化しており、その課題の解決のために頑張る大人が他地域に比べると多い。このような方々を本校では「地域知を持つ方」あるいは単に「地域知」と呼んでおり、開校から7年目となる現在、「地域知」は増えてきている。一方、ターゲットとする地域が本校の所在する近隣に限定されてきことが課題の一つとなっていた。そこで今年度も双葉郡8町村全域での活動を展開した。

(2) 地域知連携

「外部連携を個人的なつながりから組織としての網切りにする」ことを目標に、コンソーシアムを軸とした連携を模索した。また、1年次に行く双葉郡8町村バスツアーで行った場所・出会った人の影響で2年次の探究学習を始まる生徒が増え、生徒が教員を介さずに地域の方々と直接つながる事例が生まれてきた。また、それに伴い、生徒が地域の祭りに参加するなどの取り組みが生まれてきた。

・葛尾村との連携：葛尾村で活動している下枝浩徳氏(葛力創造舎)との繋がりが深くなり、葛尾村でのイベント実施等の探究活動が始まった。

・川内村との連携：葛尾村のケースと同様、1年次のバスツアーで川内村を訪問するようになった。演劇のテーマ設定の場として川内村役場にお願ひし、村長である遠藤雄幸氏にもインタビュー等で関わっていただくことができた。

(3) 今後の展望

年度当初に目標とした双葉郡8町村への活動展開をほぼ達成することができ、多くの「地域知」と繋がることのできた。教育と地域復興の相乗効果を目指し、この方向性を引き続き継続していく。

3. 3. 3 専門知連携

(1) はじめに

前述した「地域知」に対して、生徒の考えた探究テーマに関連した学術的な見識を持った方を「専門知を持つ方」あるいは単に「専門知」と呼んでいる。本校がある地域には大学や研究機関はほとんどなく、結果的に専門知を持つ方との接点は限定的であった。

(2) 専門知連携

オンラインの利用が日常的になったことで、今まで地理的な制約で接触できなかった方と容易につながることができるようになり、専門知へのアクセスが容易になった。また、今年度は早稲田大学との連携が強化され、早稲田大学高大連携リエゾンマネジャーを校内に常駐することとなった。このため、主に理系分野の生徒と「専門知」を持つ複数の研究者とのアクセスを容易にし、ふくしま学(楽)会などで生徒が外部研究会に参加することを促す体制が出来上がった。

生徒のテーマと関連のある、適切な専門知につながることも容易ではない。これまでは教員が仲介役を担っていたが、教員の人脈にも限界がある。今年度は、これまでの担当教員の仲介に加え、ふくしま学(楽)会でお世話になっている松岡俊二先生(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授)、永井祐二先生(早稲田大学環境総合研究センター准教授)が仲介役を申し出てくださり、これまで以上に複数の専門知とつながることができた。

(3) 今後の展望

専門知との連携により、新たな見方、考え方が加わり、探究活動そのものの進展、深化がみられた。今後も引き続きこの環境を活用していきたい。

3. 3. 4 国際連携

(1) はじめに

開校以来、本校は海外国際機関の関係者や、海外の学校との交流を継続してきた。海外研修のみならず、海外から日本への修学旅行や視察・研修の受け入れ実績も

多く、都度、授業内での受け入れ・交流や参加者を募ったプロジェクト型の交流を行ってきた。

COVID-19の感染拡大以後、国内外を行き来しての研修や交流の場面は限られてしまった。しかしながら、Zoomを用いたオンラインでの交流が継続されている。

(2) 実施内容

授業内交流:イギリスWoodbridge Schoolとの交流(英語表現1 Zoom実施) 本校生徒と現地で日本語を履修している学生と文化交流を行った。

プロジェクトによる交流:ドイツ研修の代替研修として、Ernst Mach Gymnasiumの学生や教職員と交流が続いている。また、NY研修の代替研修として、国内在住の海外留学生を招待し、福島県の浜通り地域を案内するツアーが行われている。(それぞれ後述)

卒業生などの活躍:OECD東北スクールと福島大学の行ったイベントの実行委員として本校の卒業生と教職員がかかわった。また、過年度実際に現地交流を行ってきた9.11家族会との交流は続き、3・4期生がオンライン会合に参加した。その様子はテレビでも報じられた。

AFS生徒との日常生活:母国の政情不安により、昨年度から引き続きミャンマー生1名と、今秋から本校で生活しているベトナム生1名をAFSアジア架け橋プロジェクトから受け入れている。それぞれ2年次と1年次のHRに在籍し、本校生と一緒に学んでいる。普段は寮生活もともにし、閉寮期間中は通学生の自宅にホームステイをした。また、学校行事の代替案として国際問題を取り上げ、全校でパネルディスカッションを行うことに貢献した。

(3) 成果と課題

オンライン交流によって、つながりを持ち続けることは容易になった。しかしながら、本来直接交流することによって習得されていたであろう身体知は、オンラインによる完全な置き換えがきかないものである。

本校5期生となる現3年生は1年次のドイツ研修を実施することができたが、6期生以降は1度も海外研修の現地渡航ができていない。

今後実施が可能になった場合は、コロナ禍に蓄積されたオンライン交流の技術を駆使した事前研修などを行い、学びの最大化へとつなげたい。

3. 3. 5 コラボ・スクール 双葉みらいラボ

コラボ・スクール双葉みらいラボは、生徒たちが放課後に集うコミュニティスペースである。学校と地域の「潮目」の場所として大学生や社会人、地域の大人たちとのナナメの関係に溢れた生徒にとっての学びの場となっている。そこは生徒たちの安心・安全な「居場所」であり、様々なことを挑戦できる「ステージ」でもある。

2019年4月新校舎への移転と共にプレハブ校舎から学校内へ移転して3年目を迎え、様々な法人・個人のご寄付に支えられながら、認定NPO法人カタリバのスタッフが常駐、運営。学校と協働する形で、地域協働スペース、協働学習ルームを使用し、毎日平日の放課後から20時まで運営が行われている。

(1) はじめに

コラボ・スクール双葉みらいラボは、ふたば未来学園内の地域協働スペース内に設置。施設内は大きく2つのエリアに分かれている。生徒が自学自習に取り組む協働学習ルーム、生徒が交流の場や居場所として用いる地域協働スペースである。

また施設内には「カフェふう」が併設されており、地域交流の起点として、卒業生や地域の大人なども含め、多様な人材が生徒に関わる場所となっている。

(2) 取り組み内容

○困難さへの対応

原発事故での避難経験や居場所不足から起こる心のケアや学習の遅れ、また思春期世代特有の複雑な悩み相談に、居場所支援や学習支援を通して対応している。

居場所支援では、カタリバのスタッフがユースワーカーとして常駐し、コミュニケーションを通して意欲喚起の土台となる「安心安全なセーフプレイス」をつくっており、生徒が先生や親、友だちには相談できないような悩みを打ち明けられる場となっている。

学習支援では、日常においてスタッフが学習指導を行っている。また定期考査前には福島大学と連携し大学生ボランティアによる学習支援を開催している。



～双葉みらいラボでの居場所支援・学習支援の様子～

○地域との連携・協働

双葉みらいラボを活用し、生徒主体で地域の方と打ち合わせやイベントを一緒に実施する姿が見られた。

地域協働スペースには、双葉郡8町村への理解を深めるために各地域の広報誌やイベント情報チラシがカウンターに並べられている。

また、オンラインを活用した地域連携も行われており、「探究・マイプロジェクトオンライン相談会」では、生徒の発表に対して地域の方々がアドバイスをを行い、その後の活動サポートに繋がっている。



～地域協働スペースを通じた地域の方々との交流の様子～

○未来創造探究のサポート

2・3学年で取り組まれる「未来創造探究」のサポートを行っており、双葉みらいラボのスタッフが「未来創造探究」の授業にアドバイザーとして教員とともにゼミ運営を行っている。具体的には、地域の大人・企業の講演やフィールドワークのコーディネーター、生徒同士の議論のファシリテーター等を通して、生徒の学びを広げるサポートを行っている。

また、放課後の時間もさらに探究学習に取り組みたいという生徒に対して、個別で面談を行ったり、資料作成のフォローをしたりしている。

活動に対するフィードバックを受ける場として、「社会貢献活動コンテスト」や「全国高校生マイプロジェクトアワード」などの外部機会に生徒を送り出す支援もしている。

(3) 今後の展望

双葉みらいラボには、今年度7,375名の生徒が来館している。今後は地域の方々が双葉みらいラボを活用しながら生徒との接点を持つことにより、生徒主体の地域協働の企画・実践の後押しや、学びと地域復興の相乗効果に貢献できる場所を目指したい。

3.4 外部連携実績

1年「地域創造と人間生活」お世話になった方々

活動名	日付	氏名	所属、役職		
コミュニケーションWS	2021.4.16	河野 悟	NPO法人PAVLIC		
		森内 美由紀	NPO法人PAVLIC		
		石本 径代	NPO法人PAVLIC		
		村田 牧子	NPO法人PAVLIC		
演劇WS	2021.4.21	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC		
		河野 悟	NPO法人PAVLIC		
		石本 径代	NPO法人PAVLIC		
		村田 牧子	NPO法人PAVLIC		
		有吉 宣人	NPO法人PAVLIC		
		宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC		
		植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC		
		北村 耕治	NPO法人PAVLIC		
双葉郡バスツアー	2021.7.7	木村 正信	浪江町役場		
		森 雄一朗	一般社団法人ならはみらい		
		松本 淳	株式会社FiveStar		
		堺 亮裕	一般社団法人葛力創造舎		
		松本 佳充	元双葉高校教員		
		磯辺 吉彦	広野わいわいプロジェクト		
		佐藤 亜紀	大熊町復興支援員		
		青木 淑子	3.11富岡町を語る会		
		平山 勉	双葉郡未来会議事務局代表		
		井出 寿一	一般社団法人かわうちラボ		
		演劇創作インタビュー	2021.10.6	鷲 周作	株式会社Jヴィレッジ
				下枝 浩徳	一般社団法人葛力創造舎
松本 佳充	元双葉高校教員				
森亮太	檜葉町				
菅原 文宏	ホテルリーブス代表取締役				
青木 淑子	3.11富岡町を語る会				
鈴木 謙太郎	木戸川漁業				
藤田 大	株式会社島藤本店代表取締役				
平山 勉	双葉郡未来会議事務局代表				
加井 佑佳	東日本史・原子力災害伝承館職員				
秋元 菜々美	富岡町職員				
木村 紀夫	大熊町				
西村 正夫	鹿島建設株式会社				
脇田 伸吾	鹿島建設株式会社				
清田 彰一	鹿島建設株式会社				
水野 静雄	鹿島建設株式会社				
大須賀 勝之	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社				
花井真里奈	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社				
青木 知里	東京電力ホールディングス株式会社				
演劇創作インタビュー	2021.10.13			鷲 周作	株式会社Jヴィレッジ
		菅原 文宏	ホテルリーブス代表取締役		
		鈴木 謙太郎	木戸川漁業		
		森 雄一朗	一般社団法人ならはみらい		
		青木 淑子	3.11富岡町を語る会		
		平山 勉	双葉郡未来会議事務局代表		
		加井 佑佳	東日本史・原子力災害伝承館職員		
		秋元 菜々美	富岡町職員		
		木村 紀夫	大熊町		
		松本 佳充	元双葉高校教員		
		西村 正夫	鹿島建設株式会社		
		脇田 伸吾	鹿島建設株式会社		
		清田 彰一	鹿島建設株式会社		
		水野 静雄	鹿島建設株式会社		
		大須賀 勝之	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社		
		花井真里奈	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社		
		青木 知里	東京電力ホールディングス株式会社		
		下枝 浩徳	一般社団法人葛力創造舎		
		演劇WS	2021.10.20	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
				河野 悟	NPO法人PAVLIC
石本 径代	NPO法人PAVLIC				
森内 美由紀	NPO法人PAVLIC				
有吉 宣人	NPO法人PAVLIC				
宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC				
植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC				
北村 耕治	NPO法人PAVLIC				

活動名	日付	氏名	所属、役職
演劇WS	2021.10.27	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		河野 悟	NPO法人PAVLIC
		石本 径代	NPO法人PAVLIC
		森内 美由紀	NPO法人PAVLIC
		有吉 宣人	NPO法人PAVLIC
		宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC
		植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC
		北村 耕治	NPO法人PAVLIC
演劇創作	2021.10.28	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		河野 悟	NPO法人PAVLIC
		石本 径代	NPO法人PAVLIC
		森内 美由紀	NPO法人PAVLIC
		有吉 宣人	NPO法人PAVLIC
		宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC
		植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC
		北村 耕治	NPO法人PAVLIC
演劇創作	2021.10.29	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		河野 悟	NPO法人PAVLIC
		石本 径代	NPO法人PAVLIC
		森内 美由紀	NPO法人PAVLIC
		有吉 宣人	NPO法人PAVLIC
		宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC
		植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC
		北村 耕治	NPO法人PAVLIC
演劇ブラッシュアップ	2021.11.17	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		河野 悟	NPO法人PAVLIC
		宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC
演劇創作インタビュー	2021.12.08	植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC
		喜多見 薫	元学校経営支援課主任
		石井 宏和	富岡漁港 長栄丸船長
演劇ブラッシュアップ		わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		石本 径代	NPO法人PAVLIC
		村田 牧子	NPO法人PAVLIC
演劇成果発表会	2021.12.14	宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC
		平田オリザ	青年団
		わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		有吉 宣人	NPO法人PAVLIC
		植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC
		石本 径代	NPO法人PAVLIC
		鷲 周作	株式会社Jヴィレッジ
		松本 佳充	元双葉高校教員
		鈴木 謙太郎	木戸川漁業
		平山 勉	双葉郡未来会議事務局代表
		青木 知里	東京電力ホールディングス株式会社
		園部 隆	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社
		日比 賢二	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社
		下枝 浩徳	一般社団法人葛力創造舎
		西村 正夫	鹿島建設株式会社
		脇田 伸吾	鹿島建設株式会社
		西村 聡	鹿島建設株式会社
吉越 巧	鹿島建設株式会社		
小田 浩暉	鹿島建設株式会社		
青木 淑子	3.11富岡町を語る会		
藤田 大	株式会社鳥藤本店代表取締役		
大須賀 勝之	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社		
花井真里奈	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社		
清田 彰一	鹿島建設株式会社		
水野 静雄	鹿島建設株式会社		
新井 和仁	鹿島建設株式会社		
加井 佑佳	東日本史・原子力災害伝承館職員		
秋元 菜々美	富岡町職員		
木村 紀夫	大熊町		
高遠菜穂子	イラク人道支援ワーカー		
国際理解教育	2021.12.15	高遠菜穂子	イラク人道支援ワーカー
マインドマップ講座	2022.1.19	内山 雅人	一般社団法人学びコミュニケーション協会代表

2年 未来創造探究 まとめ

探究ゼミ名	日付	氏名	所属、役職
原子力防災探究ゼミ	複数回	横須賀 幸一	富岡町観光協会事務局長
原子力防災探究ゼミ	複数回	猪狩 幸子	富岡町観光協会
原子力防災探究ゼミ	複数回	岩清水 銀士朗	株式会社いわきスポーツクラブいわきFC経営企画室室長
原子力防災探究ゼミ	複数回	川崎 渉	株式会社いわきスポーツクラブいわきFCプロモーションチームマネージャー
原子力防災探究ゼミ	複数回	石河 美菜	NPO法人クラブス
原子力防災探究ゼミ	複数回	日野 涼音	東北芸術工科大学
原子力防災探究ゼミ	複数回		東北チアプロジェクト
原子力防災探究ゼミ	複数回		クラブスチアリーダーズ
原子力防災探究ゼミ	複数回		みんなの交流館ならはCANvas
原子力防災探究ゼミ	複数回		富岡町文化交流センター学びの森
原子力防災探究ゼミ	複数回	小松 和真	広野町復興企画課課長
原子力防災探究ゼミ	複数回	大森 博隆	広野町広野暮らし相談窓口「りんくひろの」相談員
原子力防災探究ゼミ	複数回	磯辺 吉彦	特定非営利活動法人広野わいわいプロジェクト 事務局長、ちやのまプロジェクト
原子力防災探究ゼミ	複数回		NPO法人いわきイルミネーションプロジェクトチーム
原子力防災探究ゼミ	複数回	青木 淑子	
原子力防災探究ゼミ	複数回	松本 登志枝	広野町食生活改善推進協議会会長
原子力防災探究ゼミ	複数回	及川	
原子力防災探究ゼミ	複数回	石井	
原子力防災探究ゼミ	複数回	小豆畑 望	株式会社公益財団法人ふくしま海洋科学館命の教育チーム指導主事
原子力防災探究ゼミ	複数回	佐藤 勇樹	Bridge for Fukushima
原子力防災探究ゼミ	複数回	佐藤 至子	Bridge for Fukushima
原子力防災探究ゼミ	複数回	辺見 珠美	
原子力防災探究ゼミ	複数回	鈴木 みなみ	
原子力防災探究ゼミ	複数回	吉田 恵美子	
原子力防災探究ゼミ	複数回	大和田	みかんクラブ
原子力防災探究ゼミ	複数回	薄井 健文	双葉郡富岡町立富岡第一小学校 教頭
原子力防災探究ゼミ	複数回	松本 涼一	檜葉町立檜葉北小学校 教頭
原子力防災探究ゼミ	複数回	阿部 加奈子	広野町こども家庭課 係長
原子力防災探究ゼミ	複数回	桜井 聖子	広野町公民館生涯学習課 会計年度任用職員
原子力防災探究ゼミ	複数回	石上 克洋	福島県相双地方振興局県民環境部県民生活課 主事
原子力防災探究ゼミ	複数回	大場 美奈	広野町起業型地域おこし協力隊、ちやのまプロジェクト 代表
原子力防災探究ゼミ	複数回	遠藤 一善	富岡町議会議員
原子力防災探究ゼミ	複数回	山根 辰洋	双葉町議会議員、一般社団法人双葉郡地域観光研究協会
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.3.23	吉田 恵美子	NPO法人ザ・ピープル
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.10.18	吉川 彰浩	一般社団法人AFW
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.10.27	小波津 龍平	クムト
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	大和田 徹	広野町役場復興企画課
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	北郷 功	広野町役場復興企画課
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.7.17		いわきアカデミア協進議会
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.10.27	猪狩 僚	いわき市役所保健福祉部
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.7.7	中津	広野町振興公社代表取締役兼社長
メディア・コミュニケーション探究ゼミ		下枝、篠田、半澤	葛尾野外劇関係者
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.7		アニメツーリズム協会
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.9	吉田 徹	アニメーター
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.5	渡辺 正勝	元役場職員(生徒の祖父)
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.8	新妻 良平	広野町の農業家
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.8	佐久間 辰一	田村氏の農業家
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.8	菊地 英文	鳴子温泉観光協会
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.7		母園・横浜バーン
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回		twitterで知り合った海外の学生
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.10.27	平山 勉	ふたばインフォ
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	青木 裕介	ぷらっとあっと
再生可能エネルギー探究	2021.6	松元 孝一	ドローン企画 一級建築士事務所
再生可能エネルギー探究	2021.6	渡邊友歩	浪江町役場 産業振興課
再生可能エネルギー探究	2021.7	小沢晴司	宮城大学 事業構想学群
再生可能エネルギー探究	2021.1	原田正光	福島工業高等専門学校 都市システム工学科
再生可能エネルギー探究	2021.12	永井祐二	早稲田大学 環境総合研究センター
再生可能エネルギー探究	2021.12	山田美香	早稲田大学
再生可能エネルギー探究	2021.12	青木裕介	プラットアット

探究ゼミ名	日付	氏名	所属、役職
アグリ・ビジネス探究ゼミ	複数回	三戸 豪士	GSauto
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.10.13	古林 秀雄	株式会社 レイス(RACE Co.,Ltd.)工場長
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.10.13	國井 佳奈	株式会社 レイス(RACE Co.,Ltd.)研究部係長
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.12	松本 正人	広野町副町長
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.12	根本 明和	広野町産業振興課
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野町みかんクラブ
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野小学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野町役場総務課
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野町認定こども園
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	権丈 泰巳	日本パラサイクリング連盟専務理事
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	寺澤 亜彩加	noreru
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		ふたば未来学園高校教職員
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		いわきFC
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	今井 純子	日本サッカー協会女子委員長
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	佐藤 慶	福島県サッカー協会
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	林 雄一	勿来フォーウインズ監督
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		Jヴィレッジ
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	青木 淑子	NPO法人3.11を語る会 代表
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		スポGOMI
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	馬見塚 健一	ソーシャルスポーツイニシアチブ
健康と福祉探究ゼミ	複数回	江川 賢一	東京家政学院大学
健康と福祉探究ゼミ	複数回	永井 祐二	早稲田大学
健康と福祉探究ゼミ	複数回	水口 公美	ふたば未来学園中学校 栄養教諭
健康と福祉探究ゼミ	複数回		広野町立こども園
健康と福祉探究ゼミ	複数回		リリー園
健康と福祉探究ゼミ	複数回		南相馬市小高区
健康と福祉探究ゼミ	複数回		広野町立こども園
健康と福祉探究ゼミ	複数回		富岡特別支援学校
健康と福祉探究ゼミ	複数回		檜葉町役場

3年 未来創造探究 まとめ

探究ゼミ	日付	氏名	所属、役職
原子力防災探究ゼミ	複数回	中津弘文	広野町振興公社
原子力防災探究ゼミ	複数回	西本由美子	特定非営利法人ハッピーロードネット
原子力防災探究ゼミ	複数回	橋爪清成	福島高校
原子力防災探究ゼミ	複数回	高橋洋充	福島県立福島東高等学校
原子力防災探究ゼミ	複数回	吉田秀亨	古代製鐵研究所 所長／川俣町教育委員会生涯教育課 主任専門員
原子力防災探究ゼミ	複数回	高島祥太	福島県いわき市遠野町地域起こし協力隊
原子力防災探究ゼミ	複数回	平子めぐみ	福島県いわき市遠野町地域起こし協力隊
原子力防災探究ゼミ	複数回	小林祐子	福島県いわき市遠野町地域起こし協力隊
原子力防災探究ゼミ	複数回	吉川彰浩	一般社団法人AFW
原子力防災探究ゼミ	複数回	澤田哲生	東京工業大学
原子力防災探究ゼミ	複数回	高橋徹治	原子力発電環境整備機構
原子力防災探究ゼミ	複数回	松本淳	株式会社Five Star
原子力防災探究ゼミ	複数回	高橋大就	一般社団法人 東の食の会
原子力防災探究ゼミ	複数回	前司昭博	一般社団法人 浪江町商工会議所
原子力防災探究ゼミ	複数回	安達 有希	NARA-ROMA.COM
原子力防災探究ゼミ	複数回		公益社団法人 福島相双復興推進機構
原子力防災探究ゼミ	複数回	先崎信一	常磐共同ガス株式会社 エナジーパークひろの
原子力防災探究ゼミ	複数回		東日本大震災・原子力災害伝承館
原子力防災探究ゼミ	複数回	齋藤健一	いわき市役所遠野支所
原子力防災探究ゼミ	複数回	松岡教授	早稲田大学
原子力防災探究ゼミ	複数回	永井祐二	早稲田大学
原子力防災探究ゼミ	複数回	藤安将平刀匠	
原子力防災探究ゼミ	複数回	高橋徹治	原子力発電環境整備機構
原子力防災探究ゼミ	複数回	石本 豊昭	原発のごみ処分を考える会
原子力防災探究ゼミ	複数回	永田 夏樹	一般社団法人 日本原子力文化財団
原子力防災探究ゼミ	複数回	碓井 天津博	東京電力ホールディングス株式会社
原子力防災探究ゼミ	複数回	加藤正人	東京電力ホールディングス株式会社
原子力防災探究ゼミ	複数回	庄司結衣	浪江プロモーション課
原子力防災探究ゼミ	複数回	田河 朋裕	なみえ焼きそば製麺所 旭屋
原子力防災探究ゼミ	複数回	下枝浩徳	葛力創造舎
原子力防災探究ゼミ	複数回	那須名奈子	一般社団法人ふたばプロジェクト
原子力防災探究ゼミ	複数回	祓川正道	一般社団法人ふたばプロジェクト
原子力防災探究ゼミ	複数回	石上 崇	一般社団法人ふたばプロジェクト
原子力防災探究ゼミ	複数回	高橋洋充	福島県立福島東高等学校
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021.6.16	菅波 香織	
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021.6.16	田子恵子	放デイU.AND舎代表
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021.6.16	藁谷弘子	Re.yoga.Lotusの代表
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021.6.23	猪狩幸子	富岡町観光協会
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021	平山勉	ふたばいんふお
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021	青木 裕介	ひろのパソコン教室
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021	堀江莉帆	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021	高橋七海	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021	秋山杏由子	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021	森崎陽	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021	及川滉太	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021	吉田智美	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021	佐藤勇樹	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021	山澤世和	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021	田口未来	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021	遠藤匠	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ﾏﾞ ﾂﾐﾆｹｰｼﾞﾝｸﾞ 探宄ゼミ	2021	猪狩幸子	富岡町観光協会
再生可能エネルギー探究ゼミ	複数回	鈴木 正範	NPO法人浅見川ゆめ会議 理事長
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.5.1	高荒 智子	福島高等専門学校建設工学科 准教授
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.6.23	松本 幸英	双葉地方水道企業団 企業長
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.6.23	松本 有加	双葉地方水道企業団
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.7.7		東京電力廃炉資料館
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.10.20		櫛葉遠隔技術開発センター
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.11.17	松本 広行	櫛葉町ユズ研究会 会長

探究ゼミ	日付	氏名	所属、役職
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.12.8	永井 祐二	早稲田大学理工学術院 環境総合研究センター 主任研究員
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.12.21	日比 賢二	東京電力ホールディングス株式会社福島復興本社部長
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.12.21	大須賀 勝之	東京電力ホールディングス株式会社福島復興本社副部長
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.7.17	西崎 芽衣	ならはみらい
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.7.17	木村 英一	ならはみらい
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.8	李 洸昊	早稲田大学
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.12	坂上 英和	NPO法人コースター
アグリ・ビジネス探究ゼミ	複数回	猪狩幸子	富岡町観光協会
アグリ・ビジネス探究ゼミ	複数回	中津 弘文	広野町振興公社
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	大和田さん	広野町みかんクラブ 代表
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野小学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		檜葉北南小学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野中学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		檜葉中学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	小名山さん	Jヴィレッジ
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	明石さん	Jヴィレッジ
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		いわきFC
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野野球スポーツ少年団
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	佐藤さん	富岡さくらスポーツクラブ
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		NPO法人 うつくしまスポーツルーターズ
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野町認定こども園
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広桜荘
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		つくし会
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		富岡支援学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		県内特別支援学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		潮田玲子さん
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	檜山さん	JFAメディカルセンター
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		ニッ沼総合運動公園
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		東日本国際大学
健康と福祉探究ゼミ	2021.4.2	青木裕介	多世代交流スペースぷらっとあっと
健康と福祉探究ゼミ	2021.4.2	大場美奈	多世代交流スペースぷらっとあっと
健康と福祉探究ゼミ	2021.7.17	後藤采納	長岡造形大学
健康と福祉探究ゼミ	複数回	遠藤浩一	広野町居宅介護支援事業所 広桜荘
健康と福祉探究ゼミ	2021.6.18	松本聡二	広野小学校 教頭
健康と福祉探究ゼミ	複数回	櫻井聖子	広野町公民館
健康と福祉探究ゼミ	2021.6	古内伸一	広野町社会福祉協議会
健康と福祉探究ゼミ	複数回	小林誠	高野病院 看護部主任

3. 5 未来研究会

変革者としての生徒の資質能力向上と、教員の指導力向上のために行われてきたのが本校の現職教育「未来研究会」である。地域・世界の中の学校として、どのようなカリキュラムが実現されるべきかについて、その具体策について教職員どうしが議論を行い、外部から講師を招待しカリキュラムの実現に必要な知見を得る機会として開校時から行われてきた。しかしながら、中高一貫校としての完成年度となる今年度当初、本校教職員の多忙感の解消(Teacher's Well-being の実現)については課題があった。

(1) はじめに

中高のそれぞれの現職教育の計画や学校行事のスケジュールをもとに、今年度の未来研究会の方針を策定した。

ルーブリックの活用方法(形成的評価へのつなげかた・ルーブリック面談のコツ)や、**変革者としての資質・能力の向上を意識した場面を組み込んだ授業の在り方**を未来研究会の中で議論することで、中高横断で資質・能力の育成に取り組むことを目指し、今年度の未来研究会として次のような内容を取り扱うこととした

(2) 実施内容

年度当初に検討された内容は以下の通り。

①ルーブリックの活用方法や資質能力伸長の評価方法についての共有

ルーブリックの資質・能力を、中高の探究や各教科等の授業を通じて高める方策について、高校でも次年度より始まる観点別評価(学習評価の3観点)とルーブリックによる形成的評価の関連について、中学教員の知見も生かしながら議論する。

②探究活動指導法の研修

中高で探究活動指導方法を共有し、日常の指導に直結する形で指導法を議論する。

③外部講師来校時等のワークショップ

哲学対話や演劇製作の講師によるWSや他地域や他国の方と生徒・教師が対話や議論を行う機会を保障する。

④外部研修・外部発表の伝達研修

大学や他校での探究指導方法の講義(オンライン含)や、本校来校者へのプレゼンテーションなどでの発信内容を共有。

⑤クロスカリキュラム関係

昨年度までの実践を生かし、より「普段使い」で「年間計画から大きくそれない」形で実現。

(3) 成果(2021年末時点)

①7月 互見授業期間

8月5日 互見授業期間振り返り研修

②4月5日 着任者フィールドワーク

5月19日 ICT活用研究会

③6月25日 北角裕樹氏講演会

11月11日 飯盛義徳氏・田熊美保氏ワークショップ

④福島大学にて講義

⑤各教科で複数回実施

(4) 課題と展望



参加者と欠席者が継続したアイデア出しをするためのジャムボード



北角氏による講演会のYouTubeの共有



飯盛氏・田熊氏とのワークショップ、講演会の動画の共有。



ワークショップ中に使用された模造紙を写真で共有した。オンラインでコメントが付いた。

未来研究会として持続していくうえで、今後の課題となるのは、中高の接続を教員の中でもスムーズに行える体制づくりと実施までのプロセスの効率化である。

前者について、現状は、高校教員が中学の授業を担当する方法での交流を行っているが、中高をまたいで探究的な学びの橋渡しをするような機会や、6年間を見通した探究活動のデザインについての共有知が十分ではない。学校文化の異なる部分を強みにして、中高接続時に学びが止まらないカリキュラムにしていくことが求められる。

中高共通して早急に必要とされるオンライン授業に関する研修については、年度初めの段階で実施したことにより、突然の休校時にもスムーズにオンライン授業に取り組む体制づくりにつながった。現職教育についての中高それぞれのニーズを改めて考え、適切な時期に実施することで、今年度のオンライン授業研修のように、納得感のある教員研修を行うことにつながるのではないかと感じた。

後者について、これまでの未来研究会は考查期間中にまとめて行われることが多かった。しかし、完成年度に差し掛かり、中高それぞれの考查期間がずれ、多忙な時期もそれぞれずれてきた。これまでの形で持続していくことが難しくなっている。また、外部講師に依頼を行い、人を集めて集合研修を行うまでの手続きも、持続させることを困難にさせる一因となっている。

中高それぞれの探究活動に向けた指導者の月次会や打ち合わせは定期的に行われている。このような、日常の会合から学ぶことは多い。今年度十分に周知することはかなわなかったが、他学年やゼミの会合にオブザーバーとして気軽に参加できるような風通しも必要ではないかと考える。

主体的、創造的、協働的な学びを実現するためには「エージェンシー」の高まりが必要である。OECDによれば、これは、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」を言う。

しかし生徒エージェンシーは一人だけではぐくまれるものではない。共同エージェンシーとして、親や仲間、教師や地域住民等との交流の中で身に付いていくものでもある。

未来研究会の中で、「生徒プロジェクト継続性と学びの深化が両立可能なものであるか」を議論してきたが、今後の教員チームの現職教育を通して、校内外のステークホルダーと協働して、主体的・創造的・協働的な学びを実現できるようにしたい。

第4章

ICTの活用

4 ICTの活用

COVID-19の感染が拡大し、学校が臨時休校になることで生徒の学びが止まってしまうぬよう、本校では2020年からICTワーキンググループが発足した。オンライン環境を活用した学習について校内外の関係者と取り組みを共有し、緊急事態に備えるだけでなく、主体的・創造的・協働的な学びの実現をするための手段として活用していくことにした。

4. 1 経緯

2022年1月、COVID-19第6波により、日本全国では今まで感染の広がりの少なかった若年層を中心に多数の感染者集団(クラスター)が発生した。本校も臨時休業を経験した。これまでの取り組みの蓄積や普段の取り組みから、本校はスムーズにオンライン学習に移行することができた。

本校は、東日本大震災後、原子力災害によって休校となった双葉郡5校の教育を汲んでいる。2011年の震災時には、生徒・家族の安否確認の連絡がつくまでに相当な時間を要した。学校が再開されるまでにはさらに長い時間がかかり、生徒と教師がつながっていることも困難であった。

震災から10年ほどが経過し、COVID-19により休校となっても、「一人も見捨てない。学びを止めない」をスローガンに学校が一丸となって遠隔授業を行う原動力でICTワーキンググループが結成された。

コロナ禍以前も、原子力災害で避難した生徒が通う学校は県内各所にサテライト校舎を開いた。散り散りになった生徒たちは、ビデオ会議で顔を合わせることも行っていた。また、本校の海外研修プロジェクトや探究活動では、活動の進捗や成果の共有のため、積極的にICTやインターネットを活用してきた。ニュージーランドの関係者とビデオ会議を行ったこともある。

文部科学省からの通知 やGIGAスクール構想、各県・各市町村教育委員会が提供するオンライン支援を受け、学習指導要領が変わることも相まって、オンライン授業に必要な機材環境などは徐々に整ってきているようにも感じられる。

緊急事態宣言下に行ったオンライン学習や、登校が可能になったあとも、オンラインの学習環境を活用した対面学習から得られたのは、緊急事態のためにICTを備蓄しておくことではなく、コミュニケーションツールとして、学習の質を高めていくことへの期待感と、教員個人の活用技術の格差や与えられた人的資源の中でICTを活用したカリキュラムが実施可能かどうかという不安感である。

これまでに行われてきた議論も常に心に置きながら、学びを止めないレジリエンスのある学校にしていきたいと考えた。

4. 2 内容

(1) 今年度体制

企画研究開発部 塩田を責任者として、高校企画研究開発部より5名、中高教務部より4名、進路指導部より1名、カタリバ職員から2名をメンバーとしてワーキンググループ(以下WG)を結成した。授業者・担任・実践経験の視点を踏まえ、WGの検討事項の議論に参加する教員を「指名協力者」として、中高各学年の担任団から1名ずつ指名した。指名協力者を中心に全教員が実践事例の情報提供等でWGに協力する体制とした。

WGで検討を重ねる内容は次の通り。

- ①本校におけるICT活用事例の整理(形態、長所短所、留意点等)
- ②今後臨時休業や複数名同時出停が発生した際の、望ましいICT活用形態の検討(学活・HR、授業、課題進捗確認、面談、みらいラボ等)
- ③組織的対応のための環境整備
- ④その他本WGの目的達成に必要な事項

(2) オンライン授業のための講習会

主に今年度着任した職員向けに、未来研究会を実施した。Zoomの基本操作と、Google classroomの基本操作について取り扱った。

令和3年度未来研究会
Zoom 授業活用

令和3年5月19日
企画研究開発部・ふたば未来学園ICT-WG

Zoom
会議(授業)を主催する、会議(授業)に参加する
ホストになる
各種機能を使う
画面共有をする
会議を終了する

①生徒がメールを見て参加希望する。
スマートフォンにリンクが開かっている場合、生徒が招待メールを要らない。保護者に一時的にフィルタを解除してもらうか、個人のアドレスでクラスコードからのログインを。 (緊急事態下、連絡がつかない場合は一番前まで、ID、IDは授業に参加させる。ID、IDがつかない場合は、ログインできない生徒にクラスコードを送付してあげることが可能。)

② クラスコードからログインさせる
講習作成時にクラスコードが発行される。(トップ画面内やページの設定ボタンで表示可)
授業で
①教室の音源に接続
②電話などで伝える
③所属 ID 経由でコードを示す
等で生徒はログインさせる。
(生徒がタブレットなら chrome から開かせ、ケータイならアプリをインストールさせて起動させる。アプリでもいいけど同じアカウントを使わせる。)

生徒がログインする際の注意事項: 学校で共有しているアカウントは個人のキーボードでは使わない。(後とから判別がつかなくなる。ラッキー懸賞したマイドメインが他人に取られる。)

(3) 各学校行事オンラインハイブリッド化

「未来フォーラム」

今年度は COVID-19 第 5 波の影響により、文化祭を行うことができなかった。学校内で議論を行い、代替行事として「未来フォーラム」を実施した。外部講師と留学生を含む本校生徒代表数名のパネルディスカッションに、フロアの生徒がオンラインで意見を投稿する形態をとった。壇上のファシリテーターが適宜意見を取り上げ、ディスカッションに反映させていった。

「未来創造探究成果発表会」

今年度の成果発表会については、中高 6 学年の完成年度となり、中学 3 年次と高校 3 年次の発表会が同時に開催されることとなった。また、探究的な学びが活発になってきたことにより、発表プロジェクト数が増加し、効率的かつ公正に最終発表に進出するプロジェクトを選定する必要があった。

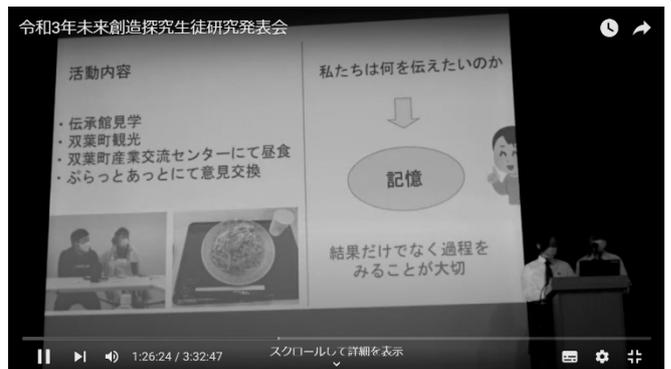
そこで、各ゼミ内での事前審査において全プロジェクトの発表を録画し、外部・内部の審査員に共有するために、Flipgrid というアプリを使用することにした。これは前年度から、主に本校英語科の授業で授業内の交流活動に使用してきたものである。



発表会のグループを作成し、各ゼミの名称でトピックを作成した。それぞれのトピックに生徒は発表の様子を収録した動画をアップロードし、その QR コードや URL を各審査員に共有した。



当日体育館で行った全体会については、発表の様子を各教室に Zoom で配信し、遠隔参加している外部審査員や保護者にも同じ Zoom で発表をリアルタイムで視聴いただいた。



(4) Google アプリセットの活用方法共有

Google Classroom 以外にも、生徒・教師が普段使いできる技術として、複数のアプリの活用方法を提案した。なお、生徒が 1 人 1 つずつ与えられている momo.fcs.ed.jp のアカウントは google をもとにしているので、以下のアプリセットは生徒のタブレット等との親和性も高い。

Google Forms : 前年度から頻繁に活用されている。生徒が探究活動で作成する機会も多くなってきており、教師向けには未来研究会で使用方法の資料を共有した。



Jamboard :

授業中に活用することもできるが、教員研修でも密になる環境を避け、

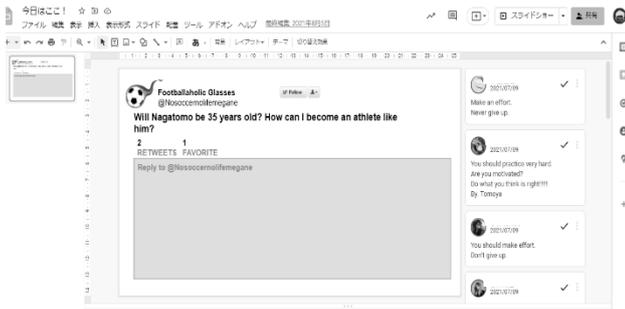
当日欠席者が活用できるように用いた。県教育センターの研修で用いられている教科もある。



Google Slide : 授業内で教師がプレゼンテーションで用いるだけでなく、能動的に言語活動に参加できる手法を英語科の研究授業で取り扱った。以下のようなやり方が考えられる。

「コメント欄活用型」

- ① 教師がプレゼンテーション用の Slide を作成し、言語活動に用いるスライドを最後に入れる。
- ② 言語活動のタイミングで、教師が開いているものと同じファイル・スライドを共有ドライブから開かせる。(コメント可能閲覧者)
- ③ 発問への回答をコメント欄に記入させる。



[高校コミュニケーション英語 I の言語活動において、SNS 投稿を模したスライドに、参加生徒がコメントを付けた様子。]

「スライド編集型」

- ① 教師がプレゼンテーション用の Slide を作成し、言語活動に用いるスライドを最後に入れる。
- ② 言語活動に用いるスライドのみ必要分複製し、生徒には個人・ペア・グループ単位でスライドを編集するように指示する。
- ③ 生徒は編集したスライドを活用して発表をする。
- ④ 聴衆は発表者と同じスライドを開き、コメント欄にフィードバックを記入する。



[中学 3 年英語の授業で新しい ALT に英語でミニプレゼン。原本スライドを複製しているため、短時間で生徒が編集可能。]

コメント欄活用型については、高校 1 年生の英語科の授業内で、スライド編集型については、コメントの部分抜きにして中学 3 年生の授業の中で実施した。生徒がリモートで参加する授業や、後述のハイフレックス型の中でも活用が可能な方法である。一方で、生徒・教師それぞれにある程度の技術と準備が求められるため、対面授業のうちに活用方法が共有される必要がある。

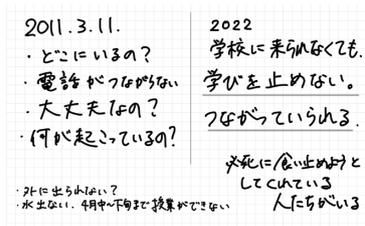
(5) 臨時休校中のオンライン授業

今年度は、2021 年の 8 月末に 1 度目、2022 年の 2 月上旬には、COVID-19 第 6 波による 2 度目の臨時休校があった。

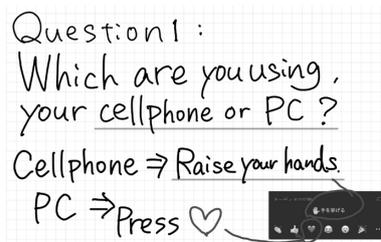
1 度目の休校期間中は、休校クラスのホームルームなどにおける体調確認等で Zoom を活用した。

2 度目の休校期間は 2 週間程度続いたため、最初の 1 週間を生徒が一切登校せずに授業に参加するフルリモート型、翌週を後述のハイフレックス型で行った。

フルリモート型では、リアルタイムの Zoom 授業を行った教科と課題配信型で行った教科、課題配信後にリアルタイムの授業で補充学習を行う方式も見られた。出席停止の生徒に不利益を生じさせず、これまで掲げてきた「学びを止めない」姿勢が、早急なオンライン授業への切り替えにつながった。

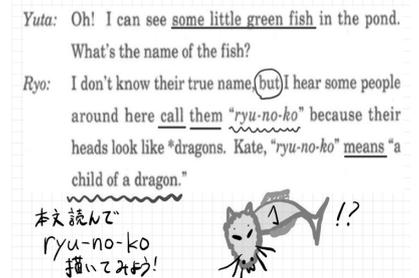


[初めてオンライン参加した生徒との目線合わせに使用した手書きスライド]



[オンライン授業のアイズブレイク、反応ボタンの操作確認を兼ねる]

[オンライン授業で使用したスライド。手元に教材がない生徒もいるため、スマートフォンでも視認可能な大きさとテキストを準備。本文を読み取り、想起される生き物を図示する活動。]



(6) ハイフレックス(Hybrid-Flexible) 型授業

今年度 2 度目の臨時休校期間は、感染終息のスケジュールを見ながら、分散登校を行うこととなった。とはいえ、中高一貫の本校は、生徒数も多く、通学には公共交通機関を使用する生徒が多いため、登校時間を分けただけの分散登校では対応しきれない事情があった。そこで本校は分散登校の一形態として、ハイフレックス(Hybrid-Flexible)型の分散登校へと移行した。国外研修でつながりのある学校では、3 グループ(分散①・分散②・フルリモート)に分けたハイフレックス型で実施しているところもあった。

中学生：時間をずらした分散登校で出席停止生徒や出席に不安のある生徒への授業配信

高校生：1 学年を午前中登校、2 学年を午後登校にすることに加えて、曜日ごとに登校する生徒を指定する。登校日に当たらない生徒と出席停止生徒、出席に不安のある生徒に授業を配信する。

高校1年次

月曜1・3組 火曜2・4組
水曜1・3組 木曜2・4組…

高校2年次

月曜1・4組 火曜2・3組
水曜1・4組 木曜2・3組…



〔登校日ではない生徒の分、距離を開けて着席する。スクリーンには、リモート出席の生徒や教師の手元の資料が共有されている。〕

4. 3 考察

今年度は、必要性に迫られ、急遽ハイフレックス型の分散登校を実施した。導入期に苦労はするものの、本校ではスムーズに実施された。各部・学年から ICT ワーキンググループにメンバーが所属し、特に教務部からオンライン授業の時間割等が速やかに提案されたことで、適切に学校の日課が定まり、生徒も生活リズムを崩さずにオンライン授業に参加できることにつながった。また、学校外の関係者等と多くかかわりを持ち、ICT の活用の実績が多くあった企画研究開発部からメンバーが所属したことで、教務メンバーが生徒の動線を的確に準備し、企画研究開発部からは技術的な準備を行うという分担ができた。このワーキンググループ体制が、オンライン授業の実施に大きく貢献したといえる。

ここ2年ほどで、GIGA スクール構想のもと、児童生徒に1人1台のタブレット端末が行きわたり始めた。しかしながら、現状では非常時のために備えて使わずにとっておく学校や、出席停止になった生徒に対して補充学習を行うことに使わず、ただひたすら出席停止が明けるのを待っている子供たちも少なくない。本校でも、1日～2日程度の欠席生徒には即座に授業配信等をしていなかった。技術的には可能である以上、今後は一人も取り残さない指導にも活用されていくことが求められる。

4. 4 今後の展望

前述のとおり、ICT は備蓄しておくものではなく、生徒の学ぶ権利の保障と主体的・創造的・協働的な学びの実現のために、活用されるべきものである。今後は教師方にも1人1台端末が導入され、ICT を活用した授業への期待は高まっていくことになる。

しかしながら、今後、ICT が日常使いになっていくまでには、本校のみならず、各校乗り越えていかなければならない課題として次のことが考えられる。

- ① 生徒用端末、教師用端末の導入に伴う機器の設定とメンテナンスを行うことのできる、熟達した技術者の確保や校内外研修の充実。
- ② ICT 活用についての指導方法の蓄積と活用を行う上で、チャレンジ精神のある学校文化の創造
- ③ 情報リテラシー・情報モラルの指導
- ④ 安定した通信回線の確保

生徒の Well-being を高めるために導入された ICT によって、特定の教師の Well-being が損なわれている学校の話も耳にする。生徒用タブレットの設定やメンテナンス等を特定の個人が請け負っている例である。本校にも来校している ICT 支援員のような専門知識のある技術者の力を借りながら、課題解決を図っていきたい。

本校の例のように、校内部署を横断したワーキンググループとして活動することで、ICT 技術は特定の教員のみ技術ではなく、共有知化が進む。未来研究会のような現職教育の場面でさらに活用を推進していきたい。

第5章

実施の効果とその評価

5. 1 ルーブリック評価

本校では生徒の資質・能力をはかる指標のひとつとして独自のルーブリックを作成し、定期的に評価を行っている。ルーブリックは本校で育成したい生徒像でもあり、これを用いた面談も行いながら、総括的評価としてだけでなく、形成的評価として活用し、生徒の目標設定等に活かしている。ここではルーブリックの推移を分析し、本校生の特徴や学年ごとの特徴等について考察する。

(1) はじめに

平成27年度に開校した本校では、「未来創造型教育」を目指すグランドデザインの下、開校直後4月、教員全員による教員研修会(本校では「未来研究会」と称する)を実施した。県下全域から赴任した教員集団はそれぞれの想いを抱きスタートを切った。そこで、新しい学校・教育としての「育成したい生徒像」としての共通イメージを持ち、互いに意思疎通を深めていくために、ワークショップ形式での意見交換会を行った。

開校当時、入学してきた子供たちの8割は原発事故で避難を強いられた地域の出身であった。子供たちの状況は多様だが、数カ所の避難先を転々とし、学力に課題を抱えている子供も多かった。また、避難する中で不登校となってしまった生徒も存在した。一方で、地元への愛着や、世界からの支援に対する感謝の気持ちから、社会に貢献したいという意欲の強さも感じられた。「この子供たちが卒業する3年後に、どのような姿になっていて欲しいか」教職員全員が付箋に書き込み、出し合いながら議論を重ねた。

研修後、「育成したい生徒像」に必要な「育成したい能力」を分析し、共通項をまとめると同時に、本校の校訓である「自立」「創造」「協働」を意識し、福島県双葉郡教育復興ビジョン、OECD キーコンピテンシー等の内容を踏まえ、本校のルーブリックを作成した(巻末関係資料参照)。

ルーブリックの言葉の一つ一つに、教職員の感覚や想いが反映されている。例えば、「寛容さ～異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさを持ち、協調して共に高めようとする事ができる」という項目である。この地域は今、放射線の安全性に関する考えが違う者同士の衝突や、避難した人と帰還した人との気持ちのすれ違いなどに直面している。考えの違う人を排除しても地域復興はままならない。仕事をする上でも生活をすることも、考えの違う他者との関わり合い無くして成り立たない。考えの違う人を説得していく交渉力と

言うより、異なる考えも受け入れ、ユーモアを持って接し、包み込んでいく「あたたかさ」が必要であると私たち教職員は考えた。この力が土台となって、別の項目に定義された「他者との協働力」が発揮される。

また、「表現・発信力～どのような場でも臆することなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる」という項目も同じように教職員の想いが詰まっている。震災や原発事故のバックグラウンドを否応なく背負ってしまった子供たちは、世界中のどこに行っても意見を求められる。その時、言葉を発せず沈黙すれば、風化や風評に繋がっていく。例え突然指名されたときでも、自分の言葉で語れることが大切だ。話し相手のバックグラウンドも考えながら、定量的なデータの説明や定性的な復興のストーリーを組み合わせ、情緒にも働きかけながら相手の心を動かす力が求められる。

開校して真っ先に行ったのが、このルーブリックの設定である。目指す資質・能力を明確化して、その目標に向けて学校をあげて取り組むために、よそから借りてきた表面的な言葉では無く、自分たちの視点・言葉で定義することを重視した、学校全体の欠かせない出発点である。指導の重点の設定も、授業の展開も、学習の評価も、学校評価も、このルーブリックと関連づけながら展開していくことを目指している。

開校から7年が経過し、ルーブリック評価は学校に定着している。当初は年度終了時に生徒がどの程度資質能力を伸ばしてきたか検証する、いわゆる「総括的評価」として使ってきた。しかし、ルーブリック評価は本来生徒個人が活用すべきものであるという考え方から、生徒ひとりひとりにフィードバックし、その先の目標設定等に活かすような「形成的評価」として使うため、ルーブリック面談を導入した。面談は手間がかかるものの、メタ認知の向上にも役立っていると思われ、生徒、教員共に好意的に捉えている。また、2年間かけてルーブリックの改訂を行い、令和3年度からCの思考・創造力をC-1思考力、C-2創造力と分けて運用している。

(2) 1期生（平成27年度入学生）から7期生（令和3年度入学生）のルーブリック評価（表1～7, 図1～7）

表1 1期生 ルーブリック推移表	1年4月	1年7月	1年3月	2年2月	3年1月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.65	1.43	1.87	1.88	2.48	
B. 英語活用力	0.50	1.00	1.17	1.14	1.26	
C. 思考・創造力	0.74	1.32	1.78	1.94	2.43	
D. 表現・発信力	0.64	1.28	1.47	1.42	1.83	
E. 他者との協働力	0.85	1.59	1.77	1.80	1.90	
F. マネージメント力	0.84	1.37	1.75	1.71	1.96	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	0.62	1.03	1.50	1.43	2.04	
H. 寛容さ	1.06	1.73	1.98	1.77	2.07	
I. 能動的市民性	0.66	1.17	1.36	1.57	1.91	
J. 自分を変える力	0.78	1.38	1.78	1.81	2.04	
平均	0.73	1.33	1.64	1.65	1.99	



表2 2期生 ルーブリック推移表	1年4月	1年12月	2年6月	2年3月	3年9月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.98	1.70	1.85	2.52	3.20	
B. 英語活用力	0.78	1.05	1.25	1.39	1.46	
C. 思考・創造力	1.28	1.70	1.98	2.47	2.71	
D. 表現・発信力	0.75	1.51	1.54	2.10	2.40	
E. 他者との協働力	1.35	1.66	2.04	2.45	2.73	
F. マネージメント力	1.23	1.60	1.73	2.17	2.55	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.00	1.45	2.00	2.35	2.86	
H. 寛容さ	1.66	1.77	2.11	2.47	2.95	
I. 能動的市民性	1.27	1.39	1.73	2.13	2.84	
J. 自分を変える力	1.40	1.56	2.04	2.19	2.63	
平均	1.17	1.54	1.83	2.22	2.63	

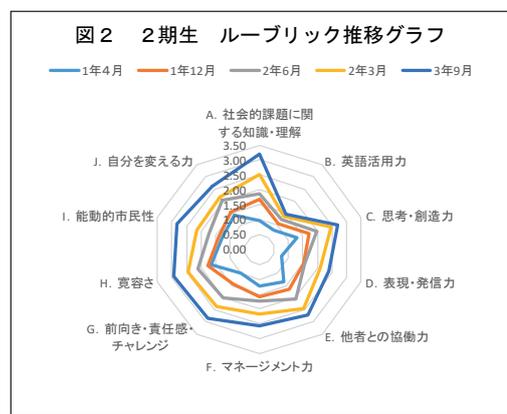


表3 3期生 ルーブリック推移表	1年4月	2年4月	2年11月	3年4月	3年9月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.83	1.99	2.21	2.80	3.33	
B. 英語活用力	0.93	1.23	1.54	1.79	1.95	
C. 思考・創造力	1.34	2.07	2.37	2.81	3.18	
D. 表現・発信力	0.89	1.51	1.92	2.55	3.09	
E. 他者との協働力	1.51	2.18	2.52	2.71	3.21	
F. マネージメント力	1.45	1.96	2.27	2.58	3.10	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.33	2.06	2.15	3.47	3.35	
H. 寛容さ	1.73	2.39	2.70	2.92	3.39	
I. 能動的市民性	1.26	1.80	2.29	2.61	3.21	
J. 自分を変える力	1.39	2.25	2.43	2.86	3.15	
平均	1.27	1.94	2.24	2.71	3.10	

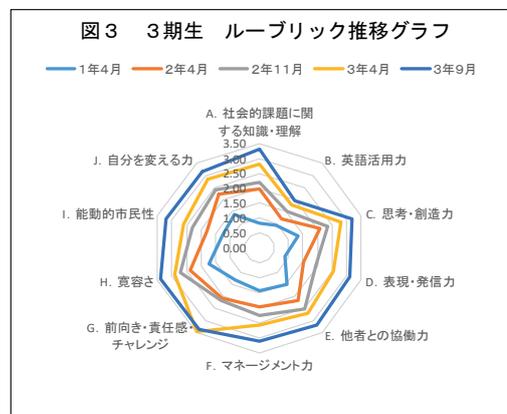


表4 4期生 ルーブリック推移表	1年4月	2年4月	2年11月	3年5月	3年10月	簡易グラフ
A. 社会的課題に関する知識・理解	0.69	1.71	1.96	2.48	2.83	
B. 英語活用力	0.89	1.29	1.28	1.59	1.70	
C. 思考・創造力	1.27	1.68	2.11	2.49	2.77	
D. 表現・発信力	1.04	1.40	1.75	2.10	2.36	
E. 他者との協働力	1.42	1.80	2.11	2.59	2.68	
F. マネージメント力	1.49	1.71	2.04	2.43	2.64	
G. 前向き・責任感・チャレンジ	1.19	1.54	1.84	2.40	2.72	
H. 寛容さ	1.69	2.12	2.26	2.63	2.95	
I. 能動的市民性	1.38	1.63	2.09	2.39	2.81	
J. 自分を変える力	1.51	1.95	2.17	2.48	2.78	
平均	1.26	1.68	1.96	2.36	2.62	

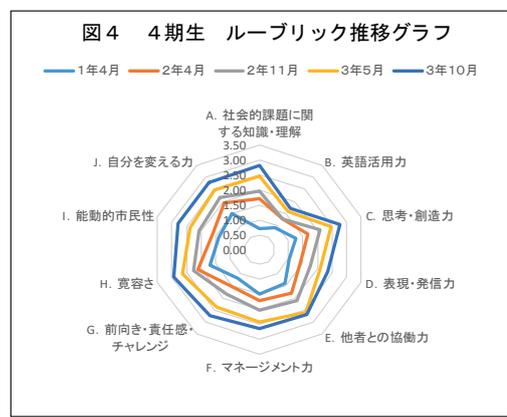


表5 5期生ルーブリック推移表	1年4月	2年4月	2年11月	3年6月	3年1月	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.43	1.70	1.94	2.98	3.04	
B 英語活用力	1.11	1.44	1.06	1.71	1.95	
C 思考・創造力	1.91	2.18	2.04	2.87	3.13	
D 表現・発信力	1.52	1.72	1.64	2.51	2.69	
E 他者との協働力	1.93	2.02	1.94	2.88	3.07	
F マネージメント力	1.83	1.97	1.77	2.77	2.87	
G 前向き・責任感・チャレンジ	1.80	2.09	1.82	2.88	3.14	
H 寛容さ	2.25	2.31	2.38	3.15	3.15	
I 能動的市民性	1.62	1.81	1.78	2.81	2.92	
J 自分を変える力	2.16	1.98	1.91	3.01	3.04	
平均	1.76	1.92	1.83	2.76	2.90	

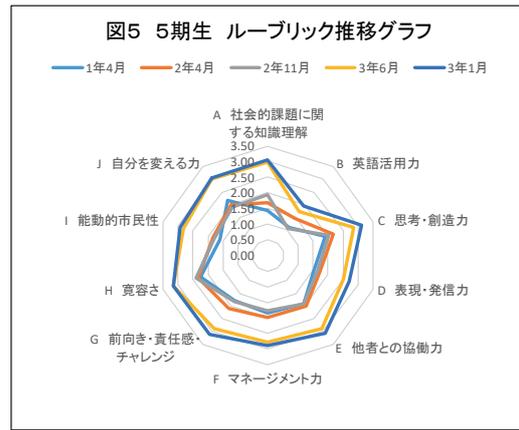


表6 6期生ルーブリック推移表	1年4月	1年11月	2年6月	2年10月	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.69	1.89	2.24	2.54	
B 英語活用力	1.23	1.27	1.49	1.75	
C 思考・創造力	2.05	2.07	2.45	2.67	
D 表現・発信力	1.78	1.72	1.92	2.29	
E 他者との協働力	2.15	2.20	2.23	2.51	
F マネージメント力	1.96	1.98	2.15	2.49	
G 前向き・責任感・チャレンジ	2.20	1.99	2.39	2.45	
H 寛容さ	2.58	2.44	2.58	2.84	
I 能動的市民性	2.07	1.89	2.02	2.48	
J 自分を変える力	2.16	2.16	2.42	2.67	
平均	1.99	1.96	2.19	2.47	

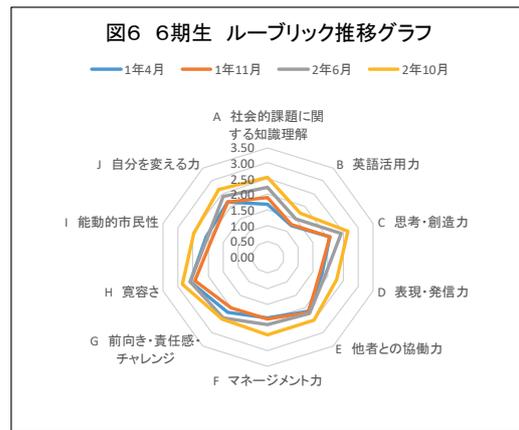
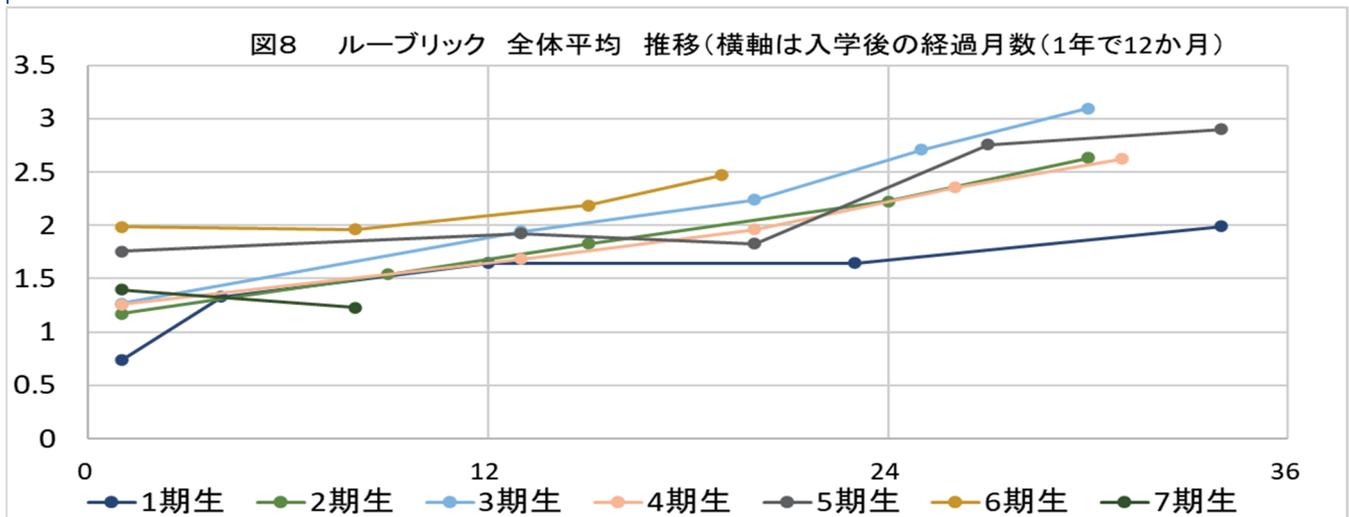
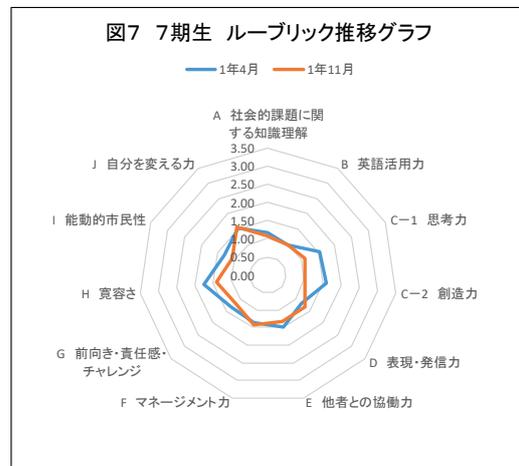


表7 7期生ルーブリック推移表	1年4月	1年11月			推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.16	1.08			
B 英語活用力	1.00	1.00			
C-1 思考力	1.55	1.09			
C-2 創造力	1.62	1.01			
D 表現・発信力	1.21	1.33			
E 他者との協働力	1.50	1.33			
F マネージメント力	1.37	1.42			
G 前向き・責任感・チャレンジ	1.33	1.17			
H 寛容さ	1.77	1.42			
I 能動的市民性	1.30	1.08			
J 自分を変える力	1.52	1.58			
平均	1.39	1.23			



(3) 5期生(令和3年度3年生)の評価

5期生(3年次)に対しては、本校入学から卒業までに計5回のルーブリック調査を実施した。なお、本校のルーブリックについては本報告書の関係資料に掲載した。

調査では、生徒自身が評価の観点10項目それぞれに対して自己評価を行った。各項目について最低は0、最高は5である。最高レベルは本校の開学の精神である「変革者たれ」を実現できるレベルとして設定している。自己評価後、生徒同士のピアレビューや教員と生徒による1対1の面談(ルーブリック面談)による修正を経て、自身が現在どのレベルにいるかを評価した。また1期生からの評価条件を統一するため、ここでまとめたものは自己評価後、ピアレビュー、面談前のデータを用いる。

5期生のデータを(2)表5、図5に示す(表1~4、図1~4は1~4期生のデータである)。まず、1年4月の時点での値の平均が1.76とこれまでの1~4期生よりも高い状態からのスタートとなり、4期生の2年4月の時点の値(1.68)とほぼ同様な値を示した。その後、平均が2年4月には1.92と上がったものの、2年11月には1.83と下がった。

5期生では1年次より探究のプロセスを重視し、これまでの1~4期生の探究で多く見られた「自分の考えを印象で語る」ことをしないように客観的なデータに基づく自分の主張の構築やメディアリテラシーを高めるために、批判的に物事を判断するトレーニングを多く取り入れてきた。また、メンタルマップやフューチャーマップングなどの手法を取り入れ、探究のゴールまでのプロセスを見通した探究指導に取り組んできた。このような成果は2年次後半から3年次前半の時期の数値の伸長に大きくされている。特に、2年次後半から3年次にかけてはコロナの影響で再び学校が休校になって時期をふくんでおり、思うように探究が進まない中でも試行錯誤しながら探究を進めていく中で、これまでとは違った学びの形を5期生が自ら切り開いていったというところが見ることができる。オンラインでの交流会で探究を進めた生徒やコロナの小康状態を見計らって積極的に校外に出て探究を進めた生徒など活動は様々であるが、予測不可能な時代(VUCA)を生きるこれからの時代の学びを体現した活躍だったと考えている。

なお、例年よりも3年次最後のルーブリック取得時期が他の学年よりも遅い時期(1月の論文作成終了時)だったこともあり、自分のこれまで取り組んできた探究の総まとめを論文に反映し、俯瞰して自己評価ができたことが高評価につながっていると思われる。

(4) 6期生(令和3年度2年生)の評価

6期生はこれまで4回ルーブリック評価を行っている。値を表6、グラフを図7に示した。6期生の推移は5期生の推移と非常によく似ている。最初の値は以前の1~4期生と異なり、高い値から始まっている。全体の平均値は1.99と、1~7期のなかでは最も高い値となっている。特に高いのはH寛容さであり、これは1~6期生で共通している。次に高い値はG前向き、責任感・チャレンジであり、6期生の学校生活に対する意欲や期待が非常に高かったことが伺える。Gが2番目に高かったことはこれまでの1~5期生とは少し異なる。

2年次は1~5期生とルーブリックの取得時期が異なっている。従来は2回目のルーブリック取得は2年4月の未来創造探究スタート時であったが、5期生は1年11月に演劇プログラムが終了し、2年次の未来創造探究の開始時期を前倒しするために、1年の12~3月は未来創造探究へとつながるプレ探究のプログラムを行った。そのため3~5期生の3回目ルーブリック取得データと6期生の4回目ルーブリック取得時期を合わせて比較できるようになっている。この比較によると、2年11月の同時期の比較では6期生の数値は全項目で3~5期生のデータを上回っており、特にG前向き・責任感・チャレンジの項目が高い。探究を前倒してスタートさせ、自分の取り組むべきことに積極的に取り組んでいるところや海外研修・マイプロへの希望率が高いことやふくしま学(楽)会への外部イベントへの参加率が高いなどにつながっている。

(5) 7期生(令和3年度1年生)の評価

7期生はこれまで2回ルーブリック評価を行っている。値を表7、グラフを図7に示した。7期生の推移は1~4期生と似ている。1年次4月のデータでは5~6期生の4月のデータよりも全体的に低い、1~4期生と比べてA~Jの項目のばらつきが少ないことがあげられる。また、1年11月のデータではD表現力・発信力やJ自分を変える力が伸びたものの、多くの項目で数値を下げた。特に、C-1思考力とC-2創造力の落ち込みが大きい。高校生活が始まった直後に行った数値と演劇や地域の課題発見プログラムを終えた後のルーブリック取得であったことも数値には影響している。1学年担任団及び地域創造と人間生活の担当者との話から、11月のデータについては、「4月当時よりもより客観的にルーブリックの指標を理解し、演劇プログラムを通じて内省的に自分を客観視できるようになってきている。見かけのデータとしては

数値は下がっているが、11月の評価の方がむしろ適正な評価であり、次年度以降の探究学習に向けて大きく期待できる。」というコメントがあり、今後も推移を見守っていきたい。

(6) 1期生から7期生の平均値の推移

1～7期生のルーブリックの推移について、値の全体平均値の推移グラフを(2)図8に示す。1～4期生までは1年次から3年次まで順調に値が高まっているのに対し、5～6期生は、1年次最初から値が高く、その状態をほぼ維持したまま推移している。

これまでのところ、3期生が3年最後の値としては最も高くなっている。昨年度、4期生(今年度卒業生)は2期生とほぼ同じような推移を示した。3期生は特に3年次の最後の半年で大きな伸びを見せており、4期生でも同様な状況になることを期待したが、コロナ禍の影響もありそれほど高まらなかった。3年間のグラフの傾きに注目すると、5期生の第3回(2年11月)から第4回(3年6月)の急上昇が見られる。

5期生の3年ゼロ学期はコロナによる3回目の緊急事態宣言が出ていた時期で、探究が当初の計画通りに進まなかったことも多いと思うが、探究に必要な力が定着してきた時期がこの頃だったと考える。

また、6年間のデータより、当初、最終的に高くなるのはA社会課題に関する知識・理解、H寛容さ、G前向き・責任感・チャレンジあたりであったものが、最近ではH寛容さ、J自分を変える力、C思考・創造力あたりに変化しつつある。H寛容さが高いのは本校の1期生からの特徴である。寛容性は本校の設立経緯を踏まえて本校で独自に設定した項目であるが、この力が探究活動をはじめとする学校教育全体で育成されていることは注目したい。またJやCはこれからの教育で必要とされる要素であり、これらが高いことも、本校の教育が好ましい方向に進んでいることを示していると思われる。

5. 2 ルーブリック評価の定量的分析（アクセンチュア株式会社）

本校において独自に設定したルーブリック評価に基づき、定期的に測定してきた。その結果を基に、アクセンチュア株式会社様と一般社団法人次世代教育・産官学民連携機構（CIE）様の視点から生徒の成長、変容を客観的に確認することに取り組んだ。その結果、全体的に成長している一方で、指標ごとの伸びの大きさに違いが確認できた。主に社会的課題に関する知識・理解、思考・創造力、前向き・責任感・チャレンジ、能動的市民性といった要素が成長しており、未来創造探究等の活動を通じた影響が現れていると考えられる。実際の活動内容と分析結果を比較することで、次年度以降のカリキュラム検討に活用することができる。

(1) はじめに

本校では、指導の重点の設定、授業の展開、学習評価、学校評価等をルーブリックと関連づけながら展開することを目指している。ルーブリックの指標、レベル設定は全教員で議論を重ね、自分達の言葉で定義した。4 カテゴリー（「知識」、「技能」、「人格」、「自らを振り返り変えていく力」）、10 指標を定義し、それぞれ 5 段階のレベル（1-5）を絶対評価になるよう設定した。

■知識：A 社会的課題に関する知識・理解、B 英語活用力

■技能（スキル・コンピテンシー）：C 思考・創造力（7 期生からは C-1 思考力、C-2 創造力に分離）、D 表現・発信力、E 他者との協働力、F マネージメント力

■人格（キャラクター・センス）：G 前向き・責任感・チャレンジ、H 寛容さ、I 能動的市民性

■自らを振り返り変えていく力：J 自分を変える力

<データ取得タイミング>

年度/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
令和1年度	5期生	①										
	6期生											
	7期生											
令和2年度	5期生	②						③				
	6期生	①						②				
	7期生											
令和3年度	5期生			④							⑤	
	6期生			③			④					
	7期生	①						②				

測定においては、自己評価に加え、生徒間ピアレビューを実施することで評価の客観性をもたせている。

データ分析はプロボノとして関わってアクセンチュア株式会社に依頼し、次項以降のデータ分析、示唆出しを行った。（OECD 東北スクール、地方創生イノベーションスクール 2030 東北クラスターにおいても福島大学と協働でルーブリック評価をしており、その知見も活用して実施していった。）

(2) データ分析の概要

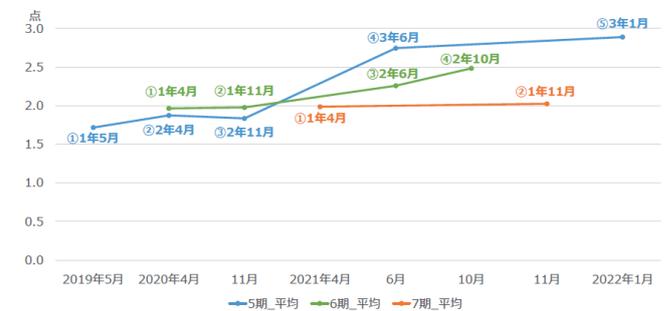
今回の分析対象は、全ての測定時に回答している学生のみとした（5 期生：計 99 名。アカデミック 36 名、ス

ペシャリスト 32 名、トップアスリート 31 名。6 期生：計 125 名。アカデミック 45 名、スペシャリスト 35 名、トップアスリート 45 名。7 期生：計 96 名）。入学時から卒業までの推移を見るとともに、5 期生と 6 期生、7 期生を比較しながら、指標ごとの傾向、生徒の系列ごとの傾向、海外研修有無別の傾向などの分析を進めていった。

1) 5 期生・6 期生・7 期生の平均値の推移

5 期生は 2 年後半までの到達度は低かったものの、3 年への進級にかけて大きく点数を伸ばした。6 期生では点数の伸びは 2 年への進級にかけて (②→③) 確認できた。一方で 7 期生は、6 期生の同時期と類似した点数の推移であった。（図 1）

図 1



2) 全体ルーブリック評価の学年別平均比較

左より 5 期生、6 期生、7 期生の順にグラフが示されている。全ての学年で A. 社会的課題に関する知識・理解の点数の伸びが最も大きい。その一方で、B. 英語活用力については全ての学年でどの測定時点においても他の項目と比べて最も低い点数で推移している。この傾向は 1～7 期生のすべての年次で見られる傾向である。（図 2）

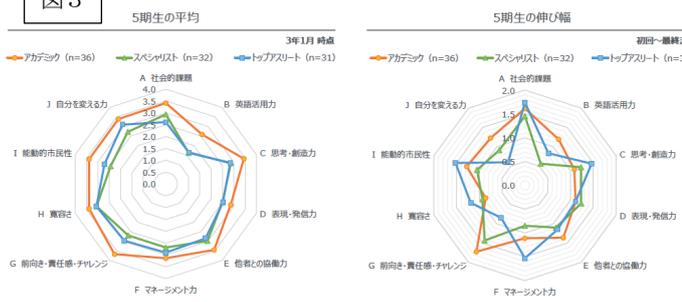
図 2



(3) 生徒の系列ごとの比較

左のグラフが5期生の平均、右のグラフは5期生の伸び幅を示している。アカデミック系列が他の系列と比べ全ての項目で点数が高かった、一方、伸び幅については、能力をのばした項目が系列に異なる傾向が見られた。アカデミック系列では G. 前向き・責任感・チャレンジと E. 他社との協働力の項目、スペシャリストは A 社会的課題に関する知識・理解と G. 前向き・責任感・チャレンジの項目、トップアスリートは I. 能動的市民性と F. マネージメント力の項目の伸び幅が高かった。(図3)

図3



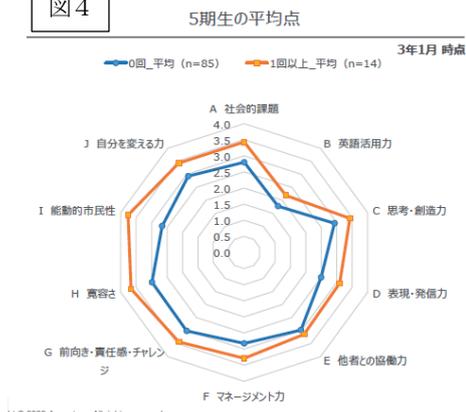
また、すべての系列で3年次以降の点数の伸びが顕著であった。一方トップアスリート系列については初回測定時①から J. 自分を変える力が他の項目に比して高いレベルにあり、その後も能力を伸ばしていった。

(4) 海外研修参加有無の比較

海外研修は授業に加えて重要視される活動の一つがある。5期生の対象とする海外研修は、ドイツ(1年次)、アメリカ(2年次冬)であり、どれか一つでも参加した生徒は14名であった。ただし、コロナ禍の影響でドイツ研修は現地に行くことができたが、アメリカは国内代替プログラムとなった。そのため、今回の分析は参考として行った。

左側は5期生の平均点、右側は伸び幅を示している。オレンジは海外研修参加生徒を示しており、全ての項目で海外研修に参加していない生徒の数値を上回った。(ただし、海外研修への参加はランダムに決まったものではないため、研修参加と成長度合いの因果関係は必ずしもあるとは言えるわけでは

図4

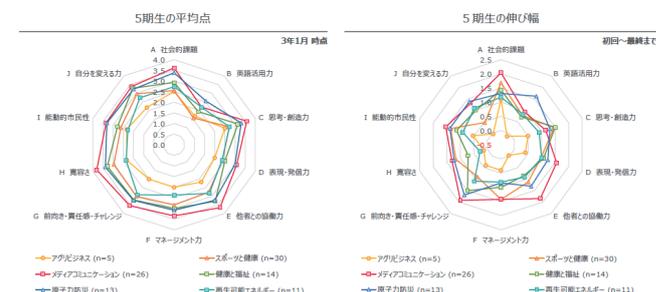


ないことは注意が必要である。)

海外に参加した生徒の中で特に大きく伸長が見られた項目は、I. 能動的市民性と J. 自分を変える力の項目である。A の項目は海外研修参加者の初期値がもともと高く、得られた知識を踏まえて行動に生かしたり、よりグローバルな視点で考えることができるなどの観点からこの項目が伸びたと推察する。

(5) 所属ゼミごとの比較

7年間の探究活動の蓄積の中で、所属ゼミごとに伸長する項目が異なっているのではないかと仮説を立て、今年度は新たに所属ゼミごとの平均点の比較(左)と伸び幅(右)の分析を依頼した。



平均点については、どのゼミでもほぼ相似形を示しているが、メディア・コミュニケーションゼミが B. 英語活用力を除くすべての項目で最も高いレベルを示す一方、伸び幅については、原子力防災ゼミは B の項目の伸び幅が他のゼミと比して著しく高い。

(6) 今後の展望

今回の分析では、ルーブリックの定点観測のデータから、全体の成長の傾向、及び系列や海外研修の有無といった活動内容ごとの比較検討を行った。今後、他学年のルーブリックの観測時期が揃えられ、さらに活動内容がより細かく記録されることで、成長の傾向を比較分析することができるになれば、より効果的にカリキュラム検討への示唆が得られるようになると思われる。

また、ルーブリック評価のデータを個人別に整理すること(例、生徒カルテの作成)により、生徒と教員の面談や、アクティブラーニングを実施する際の目標設定に活用することができる。到達レベルを可視化し、データを用いて面談を進めることにより、生徒のメタ認知を伸ばすことにもつながる。加えて、分析の元データの客観性、信頼性の担保という課題に対しても、教員による確認が入り、本人との面談を通じてレベルの修正が行われることにより、改善され、更に分析の精度が向上するものと考えられる。

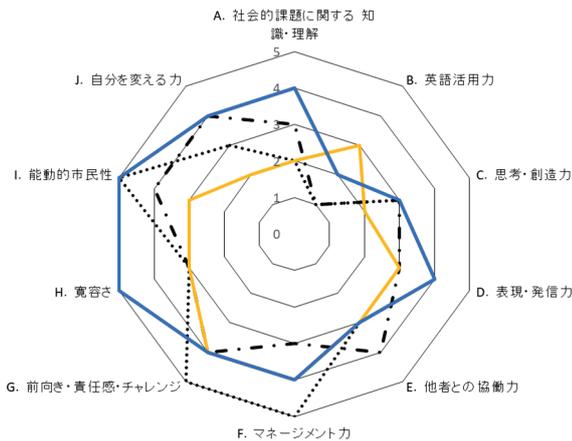
5. 3 5期生の個別評価

5期生のうち、未来創造探究の各ゼミ 1～2人ずつ生徒をピックアップし、本人の活動の様子とルーブリック評価の推移について分析した。

○生徒 R・A（原子力防災探究ゼミ）

【平均値】平均値 3.40（1年4月）→3.80（3年1月）

…… 1年5月 - - 2年4月 — 2年11月 — 3年6月 — 3年1月

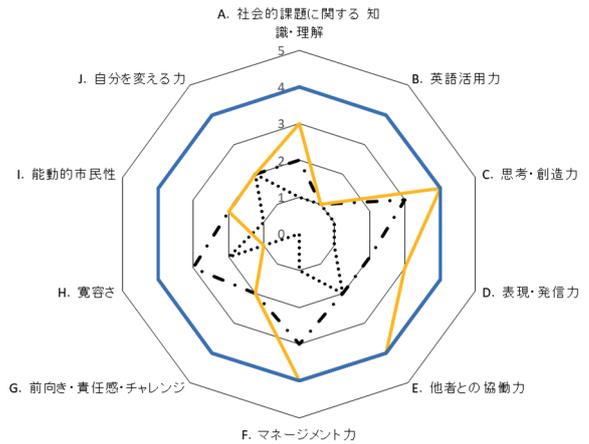


本生徒は、双葉郡出身の生徒であり、アカデミック系列に所属している。入学当初から双葉郡の復興に対して興味関心が高く、問題意識を持って生活しており、積極的に行動していた。しかし、1年次後半より、具体的に自分は何をすべきかに行き詰まりを見せ始めた。校内の海外研修や校外の様々なイベントにも積極的に参加し、視野を広めようと努力した。1年次にドイツ研修に参加しフライブルクの町づくりに感銘を受け、地元の強みを活かす町づくりという自分なりのテーマを持つことができた。2年次4月からの探究では、漠然としたテーマは持ちつつも、やはり具体的な行動に移すことができず、3年生の前半までほとんど探究を進めることができなかった。そのことがこのルーブリックの自己評価に反映されている。3年次の夏休み前から、浪江町の商工会とつながることで、探究テーマに対するプロジェクトを設定し、地域と協働で企画立案から事前準備、そしてイベント開催中のマネジメント、その後の振り返りを通して、自己肯定感も高まり3年1月の自己評価につながった。浪江町商工会との関わり方が、比較的対等な立場で、意見を反映させることができたことが、全体的な自己評価の向上に反映していると思われる。

○生徒 Y・A（原子力防災探究ゼミ）

【平均値】1.20（1年4月）→4.00（3年1月）

…… 1年5月 - - 2年4月 — 2年11月 — 3年6月 — 3年1月

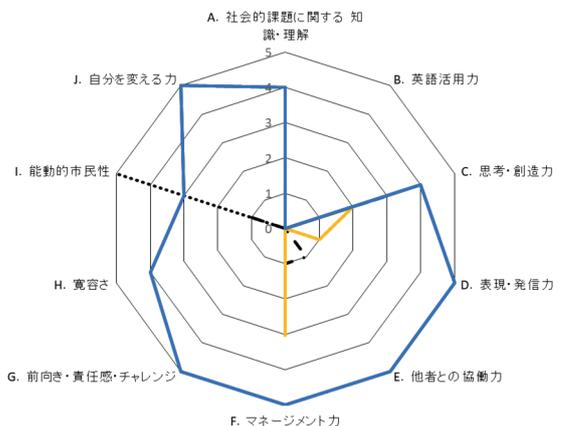


本生徒は、双葉郡外出身の寮で生活している。アカデミック系列に所属しているが、陸上に力を入れ、東北大会等でも活躍する生徒である。1年次から2年次の前半にかけて、探究にもあまり力を入れることなく、周りの生徒が行う調査研究などにもそれほど積極的に関わらない生徒であった。しかし、原子力防災班全体でのフィールドワーク等を通して徐々に双葉郡に対する知識を増やし、問題意識を持つようになり、探究に対して積極的に発言するようになってきた。そのことは、2年4月から徐々にルーブリックの自己評価に現れてきている。第1志望とする心理学系大学の総合選抜型の入試において、自分たちの班で行ってきた探究をアピールすることをきっかけに、論文作成において心理学を組み合わせ仮説を立てるなど非常に積極的に探究に取り組むようになった。それに伴い、班のメンバーだけでなく、多くの生徒や先生からの評価も高くなり、自己肯定感も高くなり、ルーブリックの自己評価の向上につながってきたと思われる。

○生徒 M・S（メディア・コミュニケーション探究ゼミ）

【平均値】1.10（1年5月）→4.00（3年1月）

…… 1年5月 - - 2年4月 — 2年11月 — 3年6月 — 3年1月

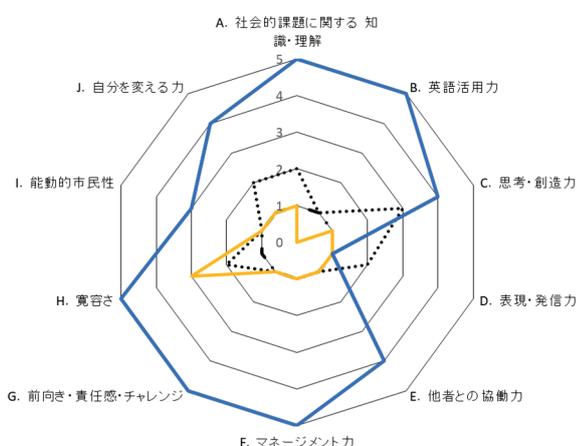


S は双葉郡大熊町にルーツを持つ男子生徒である。未来創造探究の当初から、ふるさとの大熊町に関する活動を行おうと考え、友人とともに大熊町出身の生徒の座談会や、役場職員と協力したイベントの企画に携わった。「他者との協働性」「前向き・責任感・チャレンジ」「自分を変える力」が0から5に、「表現・発信力」が1から5へ飛躍的に伸びている。探究活動の中で異なる世代との交流を行ったことが背景にあると考察する。

○生徒 Y・M (メディア・コミュニケーション探究ゼミ)

【平均値】 1.60 (1年4月) → 4.10 (3年1月)

.....1年5月 - - 2年4月 — 2年11月 — 3年6月 — 3年1月

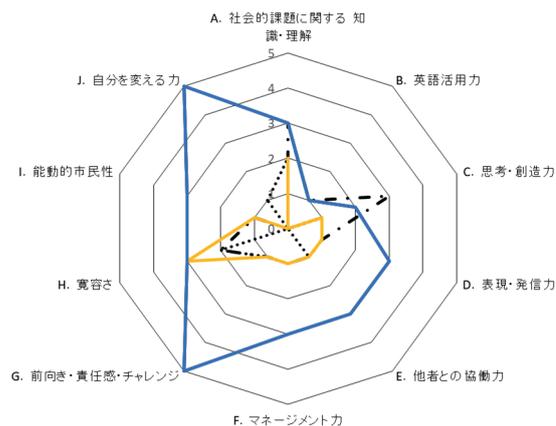


本生徒は双葉郡檜葉町出身かつ現在も檜葉町から通学し、町の Youtube での CM に出演、2021 年の東日本大震災追悼復興祈念式では「誓いの言葉」を述べるなど、発信力が期待されていた女子生徒である。探究は人びとの諸問題へ関心を高めることを目標とする「「他人事」を「知り合い事」へ」をテーマに活動を行った。ルーブリックでは「マネージメント力」「前向き・責任感・チャレンジ」が1から5へと飛躍的に伸びた。特筆すべきは本校生徒の平均値が低い「英語活用力」も1から5へと伸びており、探究活動の論文も英語で執筆したことからも自信がうかがえる。本校のニューヨーク研修などに積極的に参加したことなどが背景にあると思われる。

○生徒 S.S (再生可能エネルギー探究ゼミ)

【平均値】 0.90 (1年4月) → 3.10 (3年1月)

.....1年5月 - - 2年4月 — 2年11月 — 3年6月 — 3年1月

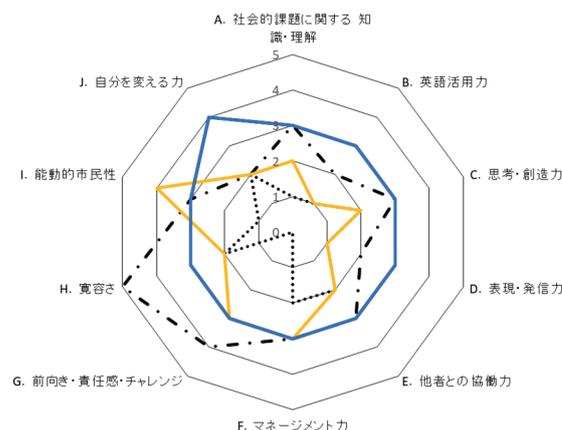


本生徒は広野町出身の男子生徒であり、地元の農業に貢献したいという思いから、スペシャリスト農業系列を選択した。高校2年次より、授業や探究活動、農業クラブの諸活動を通して、自分の興味関心の高い分野において、積極的にチャレンジをしてきた。その成果もあり、「前向き・責任感・チャレンジ」「自分を変える力」の項目において、1から5へ変化してきた。様々な挑戦を通して、自己肯定感が高まり、さらに新たな課題に挑戦してみたいという気持ちのサイクルが身についたようだ。

○生徒 S.S (再生可能エネルギー探究ゼミ)

【平均値】 1.40 (1年4月) → 3.10 (3年1月)

.....1年5月 - - 2年4月 — 2年11月 — 3年6月 — 3年1月



本生徒は広野町出身の男子生徒であり、情報系の大学進学を希望しており、アカデミック理系を選択している。当初は人と話すことを苦手としていたが、1年次のペラルーシ研修や2年次からの探究活動のテーマでもあるトリチウム汚染水処理問題を通して、コミュニケーションを取ることの難しさを痛感し、そこから徐々に姿勢が変化していった。周りへの感謝の気持ちが芽生え、「表現・発信力」「他者との協働性」「前向き・責任感・チャレン

ジ」等の項目において、全体的に数値が上昇した。

○生徒 F.K (アグリ・ビジネス探究ゼミ)

【平均値】0.80 (1年4月) →3.90 (3年1月)

.....1年5月 - - 2年4月 — 2年11月 — 3年6月 — 3年1月



本生徒は双葉郡には縁のない女子生徒である。未来創造探究の当初から、スペシャリスト農業で菓子作りを授業で学んだことから、お菓子を通して地域コミュニティーの復活を志し、大熊町新特産品「イチゴ」で双葉郡でも人口が最も少ない大熊町、原発の町としてのレッテルが貼られている大熊町に交流を生み出そうと活動した。

「他者との協働性」「前向き・責任感・チャレンジ」「自分を変える力」が0から5に、「表現・発信力」が1から5へ飛躍的に伸びている。探究活動で異なる世代との交流や発表会で高い評価をいただいたことも背景にあると考察する。

○生徒 N.S (アグリ・ビジネス探究ゼミ)

【平均値】2.90 (1年4月) →3.70 (3年1月)

.....1年5月 - - 2年4月 — 2年11月 — 3年6月 — 3年1月



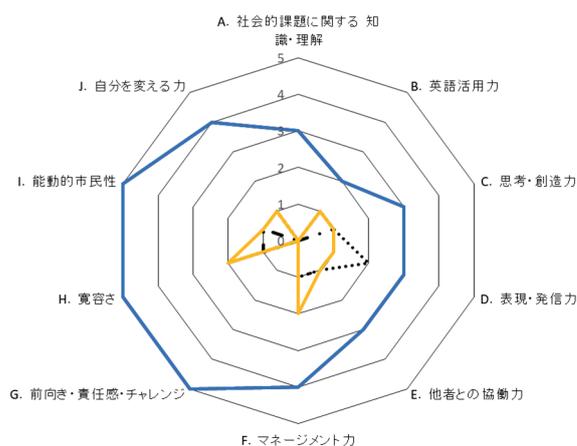
本生徒は原町出身の女子生徒である。2年次の途中からゼミ移動をしてきた生徒の一人である。福島(広野)を発信していくために、広野のバナナを使ってバナナ×

ギョウザを作り、県内+県外にイベントへの出店・出品を計画した。広野町内だけでの販売でおわったが「他者との協働性」「前向き・責任感・チャレンジ」「自分を変える力」が0から5に、「表現・発信力」が1から5へ飛躍的に伸びている。探究活動の中で、異なる世代との交流や、チーム内の意見を整理し、実現に向けた誠実な取り組みは評価に値する。

○生徒 K.E (スポーツと健康探究ゼミ)

【平均値】0.90 (1年4月) →3.70 (3年1月)

.....1年5月 - - 2年4月 — 2年11月 — 3年6月 — 3年1月

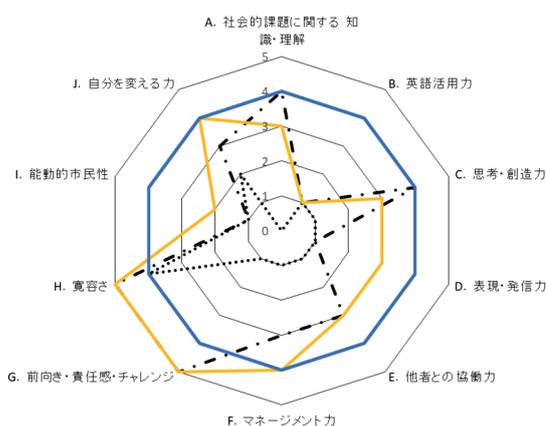


最初のテーマから試行錯誤を繰り返し、tik tokを利用した高齢者向けのダンスの配信というテーマまで実践を行った。コロナ禍で様々な制約がある中で3回のプロジェクトを実施できたことが、マネージメント力が1→4まで上昇したことに表れている。プロジェクトごとに課題を明確にし、改善して次のプロジェクトに臨めることができていた。

○生徒 M.A (スポーツと健康探究ゼミ)

【平均値】1.30 (1年4月) →4.00 (3年1月)

.....1年5月 - - 2年4月 — 2年11月 — 3年6月 — 3年1月

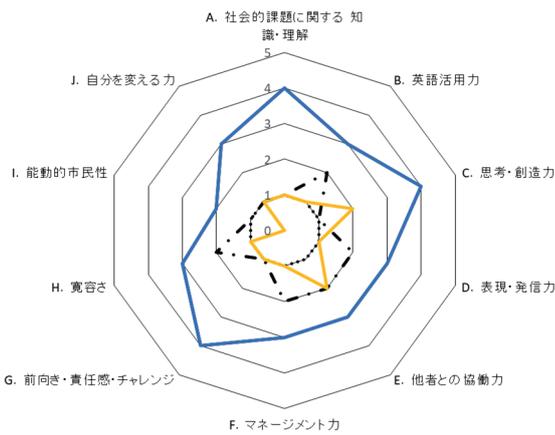


最初に設定したテーマがから何度も話し合いを繰り返して、自分たちで動画を作成して発信することで世界と繋がることを目指したプロジェクトを実践した。3本の動画を作成していく中で、世界に発信するため、英語の字幕を付けて動画を配信した。英語活用能力が1→4まで上がっており、成果が見られた。

○生徒M・S（健康と福祉探究ゼミ）

【平均値】1.00（1年5月）→3.20（3年1月）

……1年5月 - - 2年4月 — 2年11月 — 3年6月 — 3年1月



本生徒は「高齢者の生きがい」をテーマとして探究活動を行ってきた。本校へ入学する以前から高齢者福祉に興味があり、介護に携わる仕事に就きたいと考えている生徒である。2年次では「ヘルプマーク」をテーマにすることを検討していたが、自らの興味・関心と進路の希望を踏まえて「高齢者に生きがいを！！」というテーマへ変更することとなった。テーマ変更後はコロナ禍において高齢者と安全に交流し、生きがいをどのように持ってもらうかを真剣に考え、高齢者との交換日記を積極的に実践した。この実践における思考や行動の変容は3年次1月のルーブリックに表れている。特にA.「社会的課題に関する知識・理解」、C.「思考・創造力」、G.「前向き・責任感・チャレンジ」では評価が「4」に高まった。

5. 4 3年間を通した各取組に関する評価

本校で探究に関連する科目（産業社会と人間、総合的な探究の時間（未来創造探究））や海外研修について、生徒がどのように捉えてきたのか、5期生に対してアンケートを行った。

意識調査

以下の表に示す内容について探究の授業についての意識調査を行った（実施時期：令和4年2月、回答生徒数：49人、任意）。Q1～Q3は地域との関わり、Q4～Q6は探究と教科の関わり、Q7～Q11は自分自身と社会との関わりについてである。

表 調査項目と結果（数値は回答の割合）

（4：とてもそう思う 3：そう思う
2：あまり思わない 1：全くそう思わない）

	調査項目	4	3	2	1
Q1	探究授業を通じて、地域に対する興味関心が高まった。	49.0	51.0	0.0	0.0
Q2	探究授業を通じて、自分と地域とのつながりが増えた。	38.8	46.9	14.3	0.0
Q3	探究授業を通じて、地域のことが好きになった。	32.7	57.1	8.2	2.0
Q4	探究授業を通じて学んだことと、教科学習で学んだこととのつながりを感じることもある。	24.5	51.0	24.5	0.0
Q5	探究授業に、教科学習で学んだことを活かしている。	22.4	57.1	16.3	4.1
Q6	探究授業を通じて、教科学習の必要性を感じる。	38.8	46.9	12.2	2.0
Q7	探究授業を通じて、世界や日本で起こっている課題を自分の身近に感じるようになった。	46.9	42.9	10.2	0.0
Q8	探究授業を通じて、自分の在り方や生き方を考えるようになった。	36.7	53.1	10.2	0.0
Q9	探究授業を通じて、自分の考えや意見が深まった。	49.0	49.0	2.0	0.0
Q10	探究授業を通じて、自分のことが好きになった。	16.3	34.7	38.8	8.2
Q11	探究授業を通じて、自分が動けば社会は変えられると思った。	18.4	51.0	24.5	6.1

ほぼ全ての項目について肯定的意見（3，4）を半数以上の生徒が回答している。一昨年から同様な調査を行っているが昨年に引き続き肯定的に捉えている生徒が多いことも特徴であり、探究の授業が生徒にとって学びの土壌になっていることがわかる。地域との関わりについては、今年度もコロナ禍により接触が制限される環境であ

ったものの、9割の生徒が肯定しており、本校の探究活動が地域と密接に関連していることがわかる。Q6のように探究と教科の関わりについても肯定的意見は8割以上となり、今年度はこの項目が一番伸長した。（昨年 77.1 →今年 85.7）教員が意識して取り組んでいる「探究と教科学習との往還」についても有効に活用されていることが伺える。また社会と関わりについても肯定的意見の割合は高く、Q9「探究授業を通じて自分の意見が深まった」については98%の生徒が肯定的に捉えている。Q10「探究授業を通じて自分のことが好きになった」という項目については他と比較して肯定的意見が少ないが、それでもほぼ半数の生徒が肯定的に捉えており、自分のことを見つめる良い機会になっていると思われる。

取組別評価

1～3年の間に実施してきた主な取組を示し、その中で印象に残った取組、力がついた取組を調査した。結果を下表に示す（実施時期：令和4年2月、回答生徒数：49人）。

表 印象に残った取組、力がついた取組（数値は割合）

		印象に残った取組	力がついた取組
A	1年次 マインドマップ講座	31%	10%
B	1年次 フューチャーマッピング	6%	8%
C	1年次 演劇（バスツアー・FW）	47%	29%
D	2年次 探究オリエンテーション	6%	12%
E	2年次 ゼミごとに分かれての活動	33%	33%
F	2年次 探究講座（調べ方講座）	6%	10%
G	2年次 ポスター作成講座	20%	18%
H	2年次 理科×福島学	10%	8%
I	2年次 社会×福島学	6%	6%
J	2年次 ゼミ内発表会	12%	18%
K	2年次 プレ発表会	31%	20%
L	2年次 4期生の未来創造探究発表会	22%	24%
M	3年次 未来創造探究発表会	41%	55%
N	その他	6%	4%

回答については複数回答も可としてアンケートを行っており、平均すると一人あたり2.6個程度（昨年平均2.5個）回答している。印象に残った取組と力がついた取組で数値は似通っている。最も印象に残り、また力が付いた取組は「発表会」であり、自分が発表する経験により生徒が成長している様子が伺える。生徒にとって、印象に残った活動と力のついた活動にはある程度の相関関係が見られる。今後も、各年次で力がついた取り組みについては、ブラッシュアップをしながら継続していくことが必要だと思われる。

5. 5 進路や在り方生き方への影響に関する評価

探究活動が卒業時の進路や在り方生き方にどのような影響を与えたのか調べるために、3年次生徒にアンケートを行った。なお、このアンケートは平成30年度から始めており、今年度が4回目である。

実施日：令和4年2月

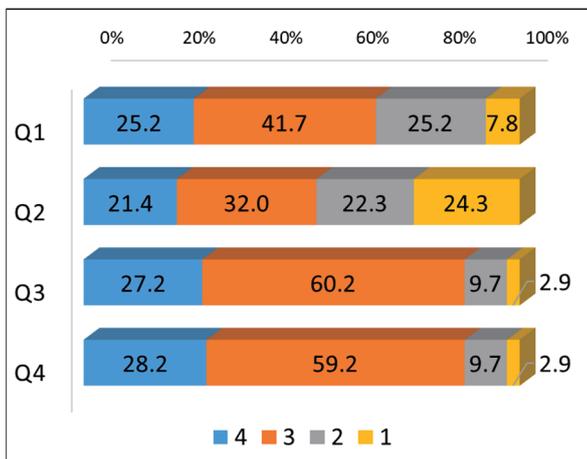
対象生徒：5期生3年次生徒 103人

内容：以下のアンケート項目に対して、1～4の4観点で選択、さらに具体的事例などを記述で回答。

結果：

質問項目		4	3	2	1
Q1 未来創造探究は、あなたの卒業後の具体的な進路選択に影響を及ぼしましたか？	5期生	25.2	41.7	25.2	7.8
	4期生	23.4	42.3	27.9	6.3
	3期生	18.6	31.9	34.5	15.0
Q2 未来創造探究での活動を、入社試験や入学試験に活用しましたか？	5期生	25.2	32.0	22.3	24.3
	4期生	32.7	33.6	20.9	12.7
	3期生	24.8	34.5	22.1	18.6
Q3 未来創造探究は、あなたが将来「社会とどう関わって生きていきたいか」を見出すことに繋がりましたか？	5期生	27.2	60.2	9.7	2.9
	4期生	31.3	57.1	10.7	0.9
	3期生	25.7	54.9	16.8	2.7
Q4 未来創造探究は、あなたが自分の価値観を考えることに繋がりましたか？	5期生	28.2	59.2	9.7	2.9
	4期生	35.7	54.5	8.9	0.9
	3期生	38.9	47.8	10.6	2.7

- 4 大きく影響した（繋がった・活用した）
 3 ある程度影響した（繋がった・活用した）
 2 あまり影響しなかった（繋がらなかった・活用しなかった）
 1 全く影響しなかった（繋がらなかった・活用しなかった）
- 表中の値は割合（%）である。



Q1、Q2については高卒時の進路選択、いわば短期的な進路について、探究活動の影響があったかどうかについてのアンケートである。Q1では67%の生徒が進路選択に影響があったと回答している。またQ2においても6割近くの生徒が試験に探究活動を活用したと回答している。3期生、4期生と比較して、Q1は肯定的評価は引き続き定着しており、Q2では5期生は例年よりも一般受験にチャレンジしている生徒が多いため、数値は下がった。しかし、生徒の記述コメントからは探究が具体的に進路指導に結びついている例が多く見られた。「面接で探究のことを語った」や「受験のプレゼンで探究の発表が役に立った」というコメントが多く見られた。

Q3、Q4は長期的な観点から、社会との関わりや自身の在り方生き方に関するアンケートである。いずれも抽象度の高い問いであるにも関わらず8～9割の生徒が肯定的に捉える結果となった。Q3では「将来のことは何も考えていなかったが、社会に貢献していける人になりたいと思った。」「目の前の地域との関わりを深めることで、社会などの大きな見方ができるようになった。」といった記述が見られた。Q4は価値観についての問いだが、これに対する肯定的意見が最も高くなっていた。

「探究を通して、人と人とのつながりの大切さ、自分で問いを見つけ出し、どうすれば解決するか、アクションをおこしながら学びを深めていく大切さや復興とは小さなことから活動をしていくことなど、考えや価値観が一年次から大きく変わった。」といった記述が見られた。また、3期生、4期生と比較して、こちらの項目も3、4を回答する生徒が増えており、探究活動を行う効果が年々高まっていると言える。

高校生と社会の関わりを問う『18歳意識調査「第20回-社会や国に対する意識調査-」』（日本財団、2019年11月）（<https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2019/20191130-38555.html> 2022年3月閲覧）と本校生の今回のデータを比較すると、本校生は社会に対する課題意識を明確に持ち、社会に積極的に関わろうとする意欲が高いことが特徴といえるであろう。

	自分を大人だと思う	自分は責任がある社会の一員だと思う	将来の夢を持っている	自分で国や社会を良く変えたいと思う	自分の国に解決したい社会課題がある	日本課題について、海外から学ぶつもりの人と積極的に話し合っている
日本	29.1%	44.8%	60.1%	18.3%	46.4%	27.2%
インド	84.1%	92.0%	95.8%	83.4%	89.1%	83.8%
インドネシア	79.4%	88.0%	97.0%	68.2%	74.6%	79.1%
韓国	49.1%	74.6%	82.2%	39.6%	71.6%	55.0%
ベトナム	65.3%	84.8%	92.4%	47.6%	75.5%	75.3%
中国	89.9%	96.5%	96.0%	65.6%	73.4%	87.7%
イギリス	82.2%	89.8%	91.1%	50.7%	78.0%	74.5%
アメリカ	78.1%	88.6%	93.7%	65.7%	79.4%	68.4%
ドイツ	82.6%	83.4%	92.4%	45.9%	66.2%	73.1%

参考資料：18歳意識調査「第20回-社会や国に対する意識調査-」（日本財団）

5. 6 学校アンケートによる評価

本校の教育活動全般を評価するため、毎年1回、保護者、生徒、教員によるアンケートを行っている。このうち、本事業に関係するものについてピックアップした。

対象：本校舎高校1～3年の生徒、保護者、教員

回答数：保護者218名、生徒268人、教員75人

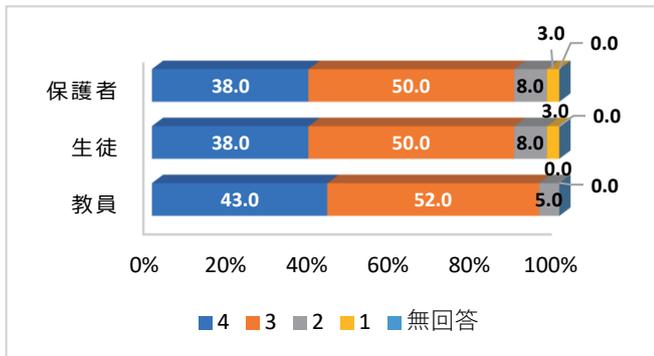
回答：以下の4段階および無回答による回答

4：思う 3：ある程度思う

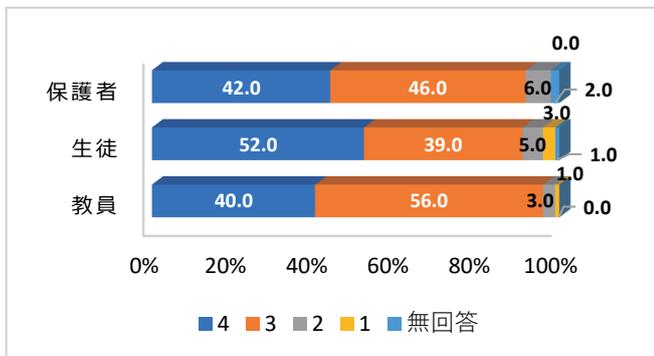
2：あまり思わない 1：思わない

アンケート項目と結果：

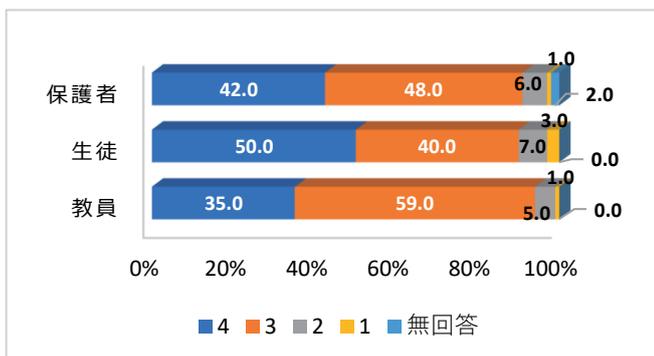
Q1 アクティブラーニングをはじめ、探究する力を育てる充実した授業が行われている



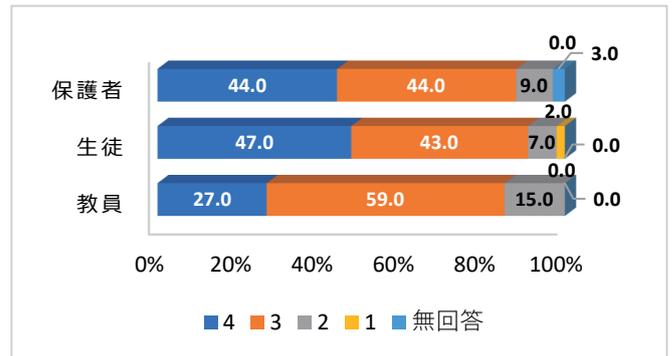
Q2 地域の課題に向き合う授業や活動が行われている。



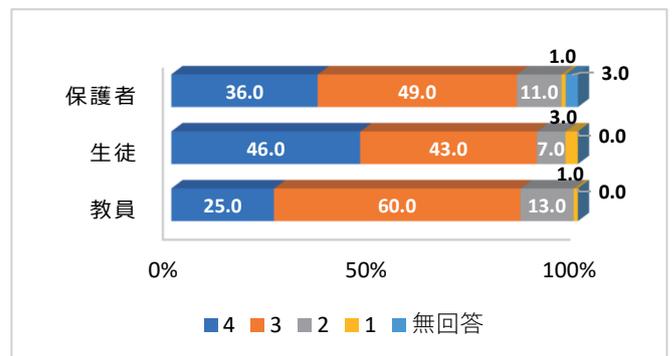
Q3 地域の課題に取り組むために、地域の方々や国内外の様々な組織と連携している。



Q4 地域の課題に向き合う授業や活動が、復興を目指す地域にとってプラスになっている。



Q5 地域だけでなくグローバルな視点(SDGsなど)を持つような取組が展開されている。



回答いただいた保護者、生徒、教員、いずれも肯定的意見が非常に高く、本事業の取組は高く評価されている。Q1をみると、生徒・保護者ともにアクティブラーニングや探究する力を育てる授業がふたば未来学園の取り組みと認知されている様子が見える。

Q2については昨年度の生徒の肯定的評価(84%)から91%に大きく上昇した。また教員についても昨年度の(87.8%)から96%と上昇し、地域の課題解決に向けた授業を行う学校文化が根付いてきた。

Q3は外部連携の状況についてのアンケートである。昨年度の生徒の肯定的評価(79.9%)から90%と上昇し、コロナ禍にあっても協働的な学習を行うことができた。

Q4は探究活動の地域へ与える効果についてである。この質問についても肯定的意見が8～9割ほどであるが、教員の肯定的意見が3者のなかで一番低くなっていることは残念である。生徒が実践している内容は地域の復興にも寄与することも教員間で目線合わせをする必要がある。Q5はグローバルな視点についてである。これも全体としては肯定的意見が多いものの、教員の肯定的意見が低い。教員の肯定的評価自体は75.7%から85%へ上昇しているため、積極的に自校の取り組みを振り返る必要があると考えられる。

5. 7 設定した目標の達成度

本事業で設定した目標と今年度の達成度について以下に示す。またそれぞれの項目について以下にまとめる。

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値					単位：なし
	本事業対象生徒：	2.63	3.10	2.62	2.90	3.5
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：ルーブリック評価は年に2回程度定期的実施する。生徒の自己評価であるが、生徒同士のピアレビューや教員との面談などで客観性を高める。途中経過のチェックも可能であり、定量的評価として好適である。						
b	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上					単位：%
	本事業対象生徒：	83.2	84	89	87.4	70
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：アンケートは生徒の自己評価であるが、理由も書かせるため信頼性は高い。進学する生徒もあり、定着状況は長期的な視点で地元への還流を見据えた指標として取り上げることとする。						
c	(その他本構想における取組の達成目標) 本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合					単位：%
	本事業対象生徒：		調査なし	67	88.5	70
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：保護者を対象とした学校評価アンケートの中に本事業に関する項目を加えて、保護者による本事業に対する意識調査を行う。						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数（3年次生）					単位：件
		31	40	52	60	50
	目標設定の考え方：本件数は、地域の方々との連携の度合いを示す指標として好適である。全校生の1年間を対象とする。					
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数					単位：件
		調査なし	調査なし	178	192	250
	目標設定の考え方：来校者数は本校の注目度を表す指標となる。※ただしコロナ禍の状況で未確定な要素が大きい。					
c	(その他本構想における取組の具体的指標) 生徒の外部発表、コンテスト応募件数					単位：件
		調査なし	35	42	44	45
	目標設定の考え方：外部発表、コンテスト応募件数は、本校の完成度の高いプロジェクト数の指標となる。					

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数					単位：件
		150	165	301	310	200
	目標設定の考え方：関わっていただく地域の団体の数はそのまま活動状況を表す指標となる。※ただし、コロナ禍の状況であるため、オンラインでの対応活動指標に含めることとする。					

1a 本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値

本校の開校以来、ルーブリックの最終調査における平均値は以下の表のように推移してきた（詳細は5.1参照）。

1期生 H29年度卒	2期生 H30年度卒	3期生 H31年度卒	4期生 R2年度卒	5期生 R3年度卒
1.99	2.63	3.10	2.62	2.90

1～3期生まで値が順調に伸びていたが、4期生は3期生よりも低下した。5期生はそこから2.90まで上昇した。本事業の最終年度となる令和4年度において「3.5」以上を目指しており、これを達成できるように引き続き取り組みたい。多くの生徒は年次が上がるにつれ評価が高くなり、探究活動も自走できるようになっていくが、一部、レベル0や1の評価のままの生徒もおり、そのような生徒について指導を手厚くする等、丁寧な伴走、指導を教員側で心掛けたい。その意味において、ルーブリックを「形成的評価」として活用したり、生徒と定期的に面談等を行ったりすることがより重要となる。

1b 卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合

この項目については2期生からアンケートを行っており、今年度の調査で4回目となる（詳細は5.5参照）。ここでは以下の2つのアンケートの平均を指標としている。
Q①未来創造探究は、あなたが将来「社会とどう関わって生きていきたいか」を見出すことに繋がりましたか？
Q②未来創造探究は、あなたが自分の価値観を考えることに繋がりましたか？

今年度、肯定的意見の割合は、Q①では87.4%、Q②では87.4%であり、目標である70%を大きく上回る結果となった。この値は4回実施しているなかで昨年より微減だったが、ここ2年は上昇している。このことから本校の探究活動は自分たちの生き方・在り方を深く考える非常に良い機会となっていることがわかる。

1c 本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合

例年実施している学校評価アンケートのなかにも、今年度より本事業に関連する項目を追加した（詳細は5.6参照）。5つのアンケート項目のうち、肯定的意見（3および4の回答）について各アンケートの平均をとり、この値で評価することとした。結果としては72.7%となり、

昨年達成できなかった70%の目標を超えた。5項目のアンケートのうち、授業についての項目で昨年は保護者の未回答が多かったが（35%）、今年度は5%とおおきくさがり、本校での授業の取り組みが、保護者にもご理解いただけるようになったと考えている。

2a 地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数

本校の課題探究は、地域に関わるテーマとすることを基本としている。ここではそのうち地域の方と連携、協働しながら進めるテーマ数を取り上げることとした。今年度、3年次の課題探究のプロジェクトのうち、これに該当するものは60件あり、目標としている50件以上を達成することができた。高校2年次や中学生の探究プロジェクトを含めると常時200以上のプロジェクトが動いており、学校全体としても探究学習が活性化している。

2b 視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数

本校への来校者数は昨年度まで調査しておらず、今年度よりカウントを開始した。今年度もコロナ禍により来校者がいない時期もあったが、最終的に192名の方に来校いただいた。今年度は直接来校した方（実質3か月の間）が集中し、オンラインで開催した生徒探究発表会では99名の方が外部から参加された。本校の探究学習が県内外から注目されていることから、本校の教育活動が今後も積極的に外部の視察を受け入れ、本校の教育活動の他への普及に寄与したい。

2c 生徒の外部発表、コンテスト応募件数

今年度の具体的な取組を以下に示す。件数は最終的に51件となり、今年度の目標である45件を上回ることができた。今年度の成果としては、

- ・Glocal High School Meetings 2022（1月、本事業（グローバル型）に指定された高校による探究活動コンテスト、本校から日本語部門1件、英語部門1件発表、日本語部門で金賞（生徒間投票特別賞）、英語発表部門で金賞（探究成果発表委員会特別賞）を受賞した。
- ・第21回福島県総合学科高等学校生徒研究発表会（1月、本校から2件発表）
- ・マイプロジェクトアワード福島 summit（1月、福島県内高校生対象の発表会、本校から10件応募、このうち1件が福島県代表として全国 summit へ進出）
- ・マイプロジェクトアワード全国 summit（3月、福島県

代表として1発表)

- ・第8回ふくしま学(楽)会(7月、早稲田大学が主催する産官学による地域復興に取り組む学会、本校から2件発表。またパネリストとして生徒1名が登壇。)
- ・第9回ふくしま学(楽)会(1月、早稲田大学が主催する産官学による地域復興に取り組む学会、本校から3件発表。広島研修で学んだ生徒たちを中心に発表を行った。)
- ・ふたばアワード(11月、1~3年による学年横断型の地域課題探究発表会、18発表)
- ・ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト(10月、福島県内高校生対象の発表会、本校から4件応募、優秀賞2本、入選、福島大AC賞受賞)

3a 本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数

第2章に詳細を示したが、今年度、本校の探究活動関連でお世話になった方は310件(3月15日現在)となっており、今年度の目標(300名)をやや上回った。探究活動の特定のゼミの連携数が突出しているという面もあるが、概ねどのゼミにおいても地域や外部の方との連携は進んでいる。昨年度からコンソーシアムが立ち上がり、加えてふくしま学(楽)会のつながりから外部の専門家ともつながることができ、外部連携を推進する環境が整ってきた。引き続き、外部の方の協力も得ながら活動の活性化を図りたい。グローバル型指定から2年で数値が倍増し、学校と地域の連携が質的にも量的にも深化していることが表れている。

第6章

研究開発の成果と課題

6 研究開発の成果と課題

平成27年度から令和元年度までの5年間にわたり、スーパーグローバルハイスクール（SGH）指定に取り組み、昨年度より指定されている本事業も、2年目が終了した。ここでは成果と課題を総括する。今年度は昨年度に立ち上げたコンソーシアムを本格的に活用していく段階に入った。また本校の設立経緯に立ち返り、双葉郡8町村という広域エリア全域での活動を意識して展開した。次年度は本事業の最終年度であり、成果と課題をまとめるとともに、探究学習についての伴走方法を県内外の学校や地域に情報発信をしていく必要がある。また課題の本質に迫れるような探究活動になるよう、指導法についても引き続き検討していく。

6.1 研究開発の成果

(1) 探究活動を支える外部との組織連携の進展

本事業を実施するにあたり、双葉郡8町村をカバーする広域コンソーシアムを結成し、本校の教育活動や本事業の取組について共有することができた。本校の探究活動について、広域で組織的に支援していただく初めての組織が立ち上がり、これまで個人での繋がりに頼っていた仕組みから変化したことは昨年度の大きな成果である。本年度は特に1年次の演劇プログラムでコンソーシアムの方々に演劇の取材先を紹介していただくなど、質的・量的に深化することができた。また、コンソーシアムの正式なメンバーではないが、ふくしま学（楽）会を通じて早稲田大学との連携をさらに強め、早稲田大学高大連携リエゾンマネージャー（本校常駐）による組織的連携枠組みの中にはこれまで本校では接点が少なかった理工系の領域の専門家も含まれており、この連携により生徒の探究テーマの領域が広がる可能性があり、今後の展開が期待される。

また、連携していた個人、グループを「地域知」「専門知」として整理し、これまで手薄だった「専門知」の方々との連携を強化することができた。この連携の糸口となったのは、ふくしま学（楽）会である。ふくしま学（楽）会はこれまで主に発表の場として活用していたが、関わり方が変わり、探究活動の強力なサポーターとしての役割を担っていただけるようになった。結果的にこのことが探究活動の進展に大きく寄与することとなった。

(2) 探究活動の面的な拡がり、量的、質的な進展

震災、原発事故により休校になった双葉郡5校の伝統を引き継ぐ形で開校したという本校の設立経緯に立ち返り、今年度も双葉郡全8町村をフィールドにすることを意識して探究活動を推進した。この結果、実際に目指していた領域に活動を拡げることができた。また、地域との方々の企画に参加するという関わり方ではなく、計画

の段階から対等な立場で参加し、ともに作り上げる「共創」的な探究が昨年よりも増えてきた。生徒の活動についてはその地域の方々に高く評価していただき、本事業の目的としている「教育と地域復興の相乗効果」の形に近づいているともいえる。

探究のプロジェクト数、外部発表件数は年を経るごとに増えてきた。これまでほとんどいなかった1年生の自発的な探究活動が始まったこともあり、生徒の探究に対する意欲の高まりが感じられた。

外部発表では、本事業に取り組んでいる全国の高校生の発表会である‘Glocal High School Meetings 2022’において、日本語部門では2年連続金賞、英語発表部門でも金賞のW受賞は本校を含め全国で2校のみであった。このことは本校の探究の質が着実に高まっていることの現れと言える。

(3) 探究活動への導入プログラムの進展

今年度から学校設定科目「地域創造と人間生活」が始まった。この科目では「困難な地域社会の現状とSociety5.0時代の変化を踏まえた能力と態度を養い、自己の在り方生き方を見出すカリキュラムを開発」することを目指し、3年間を貫いた探究活動の実践を意識した内容にカリキュラムの改善を行った。具体的には地域バスツアーの重点化、プチ探究やヒューマンライブラリーの導入、演劇プログラムの再編等を行い、探究活動を早期に導入する可能性について探ってきた。今年度の演劇プログラムの充実と、追取材を行うことで、より地域の課題を多面的に見ることに成功できたと思う。

また次年度はふたば未来中学校から高校に入る最初の学年となるため、中高6年間を見通したカリキュラムの開発を検討してきた。演劇プログラムから探究学習への移行期にどのようなプログラムを組み込みかが課題であったが、演劇プログラムの製作において地域の対立構造を地域に住む人のみに着目するのではなく、人と人が生み出す関係の分析を行う視点を加え深化できた。

(4) オンラインの活用

今年度も昨年度同様コロナ禍により、休校、行事の中止、授業や外部連携の制約等、学校活動に多くの支障が生じた。一方、このような中でも「学びを止めない」手段として活用したのはオンラインである。オンライン授業を行うにあたって、校内ではICTワーキンググループを中心に、環境整備、授業実践、教員のリテラシー獲得のための研修等がただちに行われた。これによりオンラインを日常的に活用することができるようになり、全国や県内でも先進的な事例として紹介された。探究活動では、これまで距離的な制約により連携が難しいと考えていた方々と簡単につながるようになり、質を高めることができた。また校内発表会についてもオンラインを活用し、遠方の方に気軽に参加していただけるようになった。「オンラインの普及」という意味においては、コロナ禍は良い影響をもたらしたと言えるが、海外研修をはじめとする様々な取組の実施に向けては、大きな試練となった。このような状況でも生徒と教員で様々なアイデアを出し、試練を乗り越える柔軟な対応ができた。この点も成果として取り上げたい。

海外研修について現地で研修ができない状況ではあったが、中止とするのではなく代替研修を実施することとした。代替研修でも海外研修に参加するのと同程度の学びが得られるように複数のプログラムを組み、参加する生徒を募った。参加希望者は海外研修の時と同程度集まり、生徒も海外に行けなくても獲得できる学びの意味をしっかりと捉えてくれた。代替研修のプログラム作成には生徒が主体的に動き、またオンラインも活用して現地との交流も行う等、現在の環境下、できる限りの実践を行った。緊急時でも臨機応変に対応することで「学びを止めない」ことができることを生徒、教員ともに学ぶことができた。

(5) 教員の指導力向上に向けた取組

昨年に引き続き、今年度も教員の指導力向上に向けた取組を組織的に実践することができた。具体的には以下のような取組が行われた。

- ・未来研究会（全体で行う教員研修）（年間11回）
- ・企画・研究開発部（15名程度）による定例ミーティング（週に一度実施。探究関連の取組についての議論、情報共有の場）
- ・各学年の探究担当者（各学年20名程度）による月次会（月に一度実施。生徒の指導の在り方等についての議論、情報共有の場）

- ・2, 3年の各ゼミ担当者（各3名程度）による定例ミーティング（週に一度実施。ゼミ内の探究テーマの指導、進捗確認の場）
- ・生徒の資質能力の状況については、年に2回ルーブリック評価を行い、その動向について企画・研究開発部が集約、分析を行い、探究担当者との共有、対策検討等を行った。
- ・生徒一人ひとりに対しては、ルーブリック評価をもとに、2年生以降は各ゼミ内での生徒同士によるピアレビューや担当教員との面談（ルーブリック面談）を行い、生徒自身の活動の振り返りや目標設定の機会とした。これらの取組が校内でほぼ定着してきたことは大きな成果である。ただし、今年度は校務多忙化の解消のために、各ゼミ担当者の定例会のメンバーをゼミリーダーのみに厳選したり、回数を減らすなどの取り組みを行った。しかし、このことはゼミの教員間の共有の機会を減らすことになり、あまり多忙化解消の効果よりもデメリットが目立つ結果となってしまった。運営指導委員会の田熊委員長からの指摘もあったように、メンバーの「目線合わせ」のための打ち合わせは減らしてはいけない。

6. 2 課題と今後の方向性

(1) カリキュラムの変更と探究の前倒し

次年度から新学習指導要領が始まり、また本校では、ふたば未来学園中学校からの1期生が高校に入学する最初の年となる。新学習指導要領では「総合的な探究の時間」をはじめとして探究的な取組が本格的に他校でも導入されることになる。本校の教育課程も大きく変わる。特に新入生となる8期生のアカデミック系列では週36時間のカリキュラムが組まれている。半期ごとに前期は地域創造と人間生活2単位、後期は未来創造探究2単位、夏休みなどの期間を活用し未来創造探究1単位(35時間)に充てる形となる。これまでの学年と比べて、探究の活動時期が約半年ほど前倒しすることにより、様々な変更点が生じている。以上の点を踏まえつつ、新しい探究サイクルの形を模索していきたい。

(2) 外部連携の活用促進

昨年度構築したコンソーシアムや、ふくしま学(楽)会との連携について、引き続き協働していきたい。これまでの取組の様子から、組織的連携を加速させれば生徒の探究活動にはプラスになることは間違いない。本校の生徒の特質や探究活動の特徴を理解していただいたり、配慮が必要な点を共有したり、お互いに情報共有をしながら進めていきたい。

またコンソーシアムのメンバーには理工系の関係者が多い一方で、本校ではその分野に興味関心を抱く生徒はそれほど多くはない。双葉郡地域は原子力発電所の廃炉やイノベーション・コースト構想、復興庁が進めている学術教育拠点構想等があり、今後理工系人材の活躍できる場が増えることが想定される。このような地域性も見通して文理バランスよく人材育成を図っていきたい。

(3) 課題の本質に迫る探究活動の指導法

探究活動の深まりが見られる一方で、以下のようなケースも毎年見受けられる。

- ・風評、風化といった一般的な言葉で物事を捉えたり、巷にあふれる情報を鵜呑みにしたりする等、課題を表面的にしか捉えられない。
- ・課題を自分の印象やイメージだけで捉えて、データに基づいた調査を行っていない。
- ・教員から教えてもらった専門家や地域の方にはアクセスできるが、自ら開拓しようとなし。地域の有名な方にはアクセスするが、市井の方々にはアクセスしようとなし。

- ・調査研究のみで実践研究が伴わない。調査研究と実践研究の区別がつかない。
- ・調査研究、実践研究そのものが目的化してしまい、本来目指すべき目的がはっきりしない。
- ・実践研究まで進んだとしても言語化ができず、自分がどんな課題に対峙し、どんな解決をしてきたのか文章でまとめられない。

まずはこういった生徒の状態を把握する必要があるが、生徒も指導側の教員も感覚の隔たりがあり、目線合わせが必要である。今年度は論文ルーブリックを作成し、探究の論文指導について、一定の方向性を示せた。今後、これらのルーブリック作成と運用を検討していく。

また探究活動の指導法については企画研究開発部での定例ミーティングや2年生の探究活動の担当教員による月次会等を中心に議論を進めているが、理論的な指導法に偏りがちであった。こういう場で生徒の活動のケーススタディー等、実践事例を共有して指導法を検討する方向性も検討したい。

(4) 教員のウェルビーイングの向上と多忙化解消

ふたば未来学園中学校・高校は探究学習の先進校として県内外からも認知されるようになってきた。その分、教員がかかえる校務量は多く、教員の長時間労働やオーバーワークが問題点としてあげられる。一方、その中でもなくてはいけないものもある。例えば校務の中で削減してはいけないものは「目線合わせ」のための会議や「理念を共有」する会議である。校務の内容を精選しつつ、教員のウェルビーイングを図るうえで、「自分たちが必要だと思う教育活動は何か」を教員間で議論し、校務の棚卸しをすることが必要不可欠である。

(5) 目標管理

目的を達成する指標として掲げている目標について、今年度はいくつか未達成の項目があった。特に本校の人材育成要件であるルーブリックの値については、3.5といふかなり野心的な目標を掲げているとはいえ最終年度では確実に目標達成できるように取り組みたい。とはいえ、この数値はあくまで生徒の資質能力を伸ばさせるガイドに過ぎないため、数値に囚われすぎず、生徒の実践内容や活動の様子を丁寧に見ながら指導を進めたい。そのためには教員と生徒との関わり方について教員側が知見を深めていく必要がある。本校では教員のチームによる指導体制がある程度確立されており、この体制を活かして生徒の指導力を向上させたい。

關係資料

令和3年度教育課程単位計画表

福島県立ふたば未来学園高等学校（本校舎）

〈普通教科・科目〉

全日制の課程 総合学科

教科	科目	入学年度		令和3年度			令和2年度			令和元年度			備考	
		年次		1	2	3	1	2	3	1	2	3		
				必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修		選択
国語	国語総合	4				4				4			現代文B、古典Bは、2・3年次継続履修	
	国語表現											3		
	現代文A				2				2			2		
	現代文B				2	2			2	2		2		
	古典B				2・3	2・3			2・3	2・3		2・3		
歴史	世界史A		2	2			2	2			2	2	世界史Aまたは世界史Bと日本史Aまたは日本史Bまたは地理Bの計2科目を履修 地理Bは、2・3年次継続履修	
	世界史B		3				3				3			
	日本史A		2	2			2	2			2	2		
	日本史B		3				3				3			
	地理B		2	2			2	2			2	2		
公民	現代社会	2			2		2			2		2	現代社会は、いずれかの開講年次で履修	
	倫理				2							2		
	政治・経済				2							2		
数学	数学I	3				3				3			数学Aは、いずれかの開講年次で履修 数学Bは、2・3年次のいずれかで履修	
	数学II			4				4				4		
	数学III											6		
	数学A	2		2		2		2		2		2		
	数学B			2・3	2		2・3	2			2・3	2		
	数学活用			2				2				2		
理科	科学と人間生活	2				2				2			1年次に科学と人間生活か、化学基礎および生物基礎のいずれかを、2年次に基礎の付する科目1科目を履修（ただし、生物基礎は1・2年次続けての履修は不可） 物理、化学、生物は、基礎を付した科目を履修した者が選択可 化学は、2・3年次継続履修	
	物理基礎		2				2				2			
	物理					5						5		
	化学基礎	2				2				2				
	化学			3	2			3	2			3		2
	生物基礎	2	2			2	2			2	2			
	生物					5						5		
保健体育	体育	2	3	2		2	3	2		2	3	2		
	保健	1	1			1	1			1	1			
芸術	音楽I	2				2				2			音楽I、美術I、書道Iから1科目を選択 芸術IIは、1年次に「I」を付す科目を履修した者が2・3年次いずれかで選択可	
	音楽II			2				2				2		
	美術I	2				2				2				
	美術II			2	2			2	2			2		
	書道I	2				2				2				
	書道II			2	2			2	2			2		
外国語	コミュニケーション英語I	3				3				3			英語表現Iは、1・3年次のいずれかで履修 英語表現IIは、2・3年次継続履修	
	コミュニケーション英語II			4				4				4		
	コミュニケーション英語III					4						4		
	英語表現I	2			2		2		2			2		
	英語表現II			2	2			2	2			2		
	英語会話				2			2				2		
家庭	家庭基礎	2				2				2				
情報	情報の科学	2	2			2	2			2	2		1・2年次のいずれかで履修	

〈専門教科・科目及び学校設定教科・科目〉

教科	科目	令和3年度			令和2年度			令和元年度			備 考
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	
		必修 選択									
農 業	農 業 と 環 境		2			2			2		課題研究は、2・3年次継続履修 総合実習は、2・3年次継続履修 食品製造は、原則2・3年次継続履修
	課 題 研 究		3	3		3	3		3	3	
	総 合 実 習		3	3		3	3		3	3	
	農 業 情 報 処 理			2			2			2	
	野 菜			2			2			2	
	草 花		2			2			2		
	食 品 製 造		2	2		2	2		2	2	
	食 品 化 学										
	微 生 物 利 用			2			2			2	
	植 物 ハ イ テ ク ノ ロ ジ ー										
	農 業 土 木 設 計										
	農 業 土 木 施 工										
造 園 技 術			2			2			2		
測 量											
工 業	工 業 技 術 基 礎		3			3			3		
	課 題 研 究			3			3			3	
	実 習			3			3			3	
	製 図		2			2			2		
	生 産 シ ス テ ム 技 術			2			2			2	
	環 境 工 学 基 礎			2			2			2	
	電 気 基 礎		3			3			3		
	電 力 技 術			2			2			2	
	衛 生 ・ 防 災 設 備										
	社 会 基 盤 工 学			2			2			2	
	地 球 環 境 化 学		2			2			2		
	ビ ジ ネ ス 基 礎		2			2			2		
課 題 研 究		3	3		3	3		3	3		
マ ー ケ テ ィ ン グ		2			2			2			
商 品 開 発			2			2			2		
広 告 と 販 売 促 進			2			2			2		
簿 記		3			3			3			
財 務 会 計 Ⅰ			3			3			3		
原 価 計 算		2	2		2	2		2	2		
情 報 処 理											
ビ ジ ネ ス 情 報			2			2			2		
家 庭	子 ども の 発 達 と 保 育		2	2		2	2		2	2	
	子 ども 文 化										
	生 活 と 福 祉		2・3			2・3			2・3		
	フ ァ ッ シ ョ ン 造 形 基 礎										
	服 飾 手 芸										
情 報	フ ー ド デ ザ イ ン			4			4			4	
	情 報 テ ク ノ ロ ジ ー										
福 祉	情 報 メ デ ィ ア			2			2			2	
	ア ル コ リ ス ム と フ ロ グ ラ ム			2			2			2	
	社 会 福 祉 基 礎		2			2			2		
	コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 技 術		3			3			3		
	生 活 支 援 技 術			4			4			4	
体 育	介 護 総 合 演 習			4			4			4	
	こ ころ と か ら だ の 理 解		2			2			2		
	ス ポ ー ツ Ⅱ	10	10	10	10	10	2・10	10	10	2・10	
	ス ポ ー ツ Ⅲ	10	10	10	10	10	10	10	10	10	
音 楽	ス ポ ー ツ Ⅳ										
	ソ ル フ ェ ー ジ ュ			2			2			2	
美 術	鑑 賞 研 究			2			2			2	
	器 楽			2			2			2	
英 語	描 画										
	鑑 賞 研 究										
人 文	英 語 演 習			3			3			3	
	総 合 英 語 演 習			4			4			4	
	国 語 演 習			2			2			2	
	世 界 史 演 習			5			5			5	
理 数	日 本 史 演 習			5			5			5	
	表 現 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン			2			2			2	
	数 学 演 習			4			4			4	
	総 合 数 学 演 習			6			6			6	
	物 理 演 習										
	化 学 演 習			2			2			2	
	生 物 演 習			2			2			2	
	地 学 演 習			2			2			2	
応 用 数 学			2			2			2		
工 業	地 域 エ ネ ル ギ ー			2			2			2	
探 究	地 域 創 造 と 人 間 生 活	2									
総 合	産 業 社 会 と 人 間				2			2			
総 合	的 な 探 究 の 時 間		3	3		3	3		3	3	
小	計		74~			74~			74~		
ホ	ー ム ル ー ム 活 動	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
合	計		77~			77~			77~		
組	編 成		4			4			4		

福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校 人材育成要件・ルーブリック (6 April 2021 Ver.)

学力概念	No	資質・能力・態度 (まとめると)	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5	
知識 Knowledge "What we know"	A	社会的課題に関する知識・理解 一般常識や基礎学力をつけながら、世界・社会の状況の変化やその課題を理解するための知識を身に着ける。	地域や社会の成り立ちについての基礎的な知識を得る。	地域の復興に向けた課題や、目的の前の課題についての基礎的な知識を得る。	環境・エネルギー問題など持続可能な社会実現に向けた課題や、世界の状況・課題について基礎的な知識を得る。	社会の課題について、習得した知識を深掘し、周辺情報や関連情報を集め理解する。	社会の課題について、目的の前の課題と関係する知識を俯瞰してつなげ、人に説明できるレベルまで理解する。	
	B	英語活用力 英語を使ってのコミュニケーションができるようになる。	英語でコミュニケーションをとろうとする関心・意欲・態度を持ち、自分のことについて英語で簡単に伝えられる。	自分の興味関心のあることや、地域について英語で説明できる。	地域や研究内容について、原稿を元に英語でスピーチし、簡単な質疑応答ができる。(CEFR A2レベル)	地域や研究内容について、即興で英語でスピーチし、意見交換ができる。(CEFR B1レベル)	地域や研究内容について、即興で英語でスピーチし、意見交換ができる。(CEFR B1レベル)	地域や研究内容について、ストーリー、データ、事例などを交えながら英語で説得力を持って主張し、議論できる。(CEFR B2レベル)
	C-1	思考力 物事を論理的に考え、批判的思考ができるようになる。	与えられた情報を整理できる。	目的のある課題やその解決のための内容を論理的に掘り下げたてて考えられる。	メディアを活用して情報を集め、情報を分析・評価・活用しながら課題を発見したり設定できる。	弱美と理想の差を踏まえながら、広い視野・大きなスケールで既知の事実について批判的に考える。本質を追求することができる。	未知のことについても粘り強く考え、自分の考えや常識にとらわれず、多面的・根源的な問いを立て、本質的に考えることができる。	未知のことについても粘り強く考え、自分の考えや常識にとらわれず、多面的・根源的な問いを立て、本質的に考えることができる。
	C-2	創造力 自分なりの見方や好奇心を持って試行錯誤し、社会に新たな価値を創造することができる。	アイデアを生み出そうと、自分なりの見方や考え方に基づいた観察や思考を行うことができる。	好奇心をもって、他者との違いを生み出そうと行動できる。	目的の課題に対して、これまでに得た知識や技術を関連づけながら、自分なりのアイデアを表現しようとして行動できる。	行動する中で、出会いから得られた知見や発想を取り入れ、自分なりのアイデアを社会的に価値あるものに高めることができる。	試行錯誤(創造のスパイラル)を繰り返しながら、価値を更に発展させ、社会に新たな価値を創造することができる。	試行錯誤(創造のスパイラル)を繰り返しながら、価値を更に発展させ、社会に新たな価値を創造することができる。
	D	表現・発信力 どのような場でも臆することなく、自分の考えを表現でき、他者の共感を引き出せる。	自分の意見や考えを、集団の前で話すことができる。	突然指名されたときでも臆せず、集団の前で、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。	データや事例を紹介しながら、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。	多様な人々へ、相手の立場や背景を考えた上、テクノロジーを活用したりしながら、分かりやすく伝えることができる。	多様な人々へ、相手の立場や背景を考えた上、テクノロジーを活用したりしながら、分かりやすく伝えることができる。	多様な人々へ、熱意とストーリーを持って腑に落ちる形で説得力のある発信を行い、共感を得ることができている。
	E	他者との協働力 異文化・異なる感覚の人・異年齢等と乗れ越え、仲間と協力・協働しながら互いに高めあえる行動が取れる。	集団や他者の中で、決められたことや指示されたことにより一人で取り組むことができる。	集団や他者の中で、自分の役割を見つけて、個性を活かしながら行動でき、身近なメンバーの支援もできる。	集団や他者の中で、互いに良い部分を引き出しながら、win-winの関係を築くことができる。	集団や他者との間で、互いに良い部分を引き出しながら、win-winの関係を築くことができる。	集団や他者との間で、互いに良い部分を引き出しながら、win-winの関係を築くことができる。	分断・対立・文化・国境を越えて、社会を改革する行動につなぐし、互いに高めあう同志としての関係をつくれる。
	F	マネージメント力 自分や組織での取り組みを計画性を持って進めることができる。	指示を受けながら作業を実施できる。	指示を待たず、解決に向けた適切な目標を設定し、自発的かつ責任を持って自分の作業を実施することができる。	全体にとって必要な作業を見出し、自分の作業に優先順位をつけて、複数の課題に同時に対処することができる。	作業の繋がりが、全体スケジュールを意識し、チームやメンバーで作業を適切に役割分担し、目標に向けた行動ができる。	今後のスケジュールやリスクを把握して、リスクへの対応策をチームで確認しながら進めることができる。	今後のスケジュールやリスクを把握して、リスクへの対応策をチームで確認しながら進めることができる。
	G	前向き・チャレンジ 自分自身に存在意義を感じ、課題解決のために自分の役割を見つけて、決断して取り組める。	自分を意味ある存在として考え、物事をポジティブに捉えることができる。	自分を自信を持ち、目的の課題を自分のこととして好意的に捉えて、主体的に取り組める。	集団や他者に対して、思いやりや役割を持って接する努力をし、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。	困難にぶつかっても逃げずに自分の責任を果たし、失敗してもその失敗を糧とできる。	困難にぶつかっても逃げずに自分の責任を果たし、失敗してもその失敗を糧とできる。	困難にぶつかっても逃げずに自分の責任を果たし、失敗してもその失敗を糧とできる。
	H	寛容さ 異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやる気持ちで支えを持ち、協調して共に高めようとする態度がある。	集団や他者の中で、他者を気遣うことができる。	集団や他者に対して、思いやりや役割を持って接する努力をし、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。	集団や他者に対して、思いやりや役割を持って接する努力をし、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。	考えの違う他者の意見や存在を、自分や社会をより良くしていくための重要なものと捉えて受け入れられる。	考えの違う他者の意見や存在を、自分や社会をより良くしていくための重要なものと捉えて受け入れられる。	考えの違う他者の意見や存在を、自分や社会をより良くしていくための重要なものと捉えて受け入れられる。
	I	能動的市民性 社会を支える当事者としての意識を持ち、地域や内外の未来を真剣に考えることができる。	所属する集団の一員としての自覚を持つ。	社会の一員としての自覚を持ち、社会の抱える問題に目を向けようとする。	社会をより良くしようと、社会の主体としての意識を持ち、社会がより良くするための考えを持つことができる。	社会に貢献しようとする意欲と自分の価値観を持ち、自ら社会に影響を及ぼそうとする。	社会・未来を良くしようとする志を持ち、自分自身の意見を他者に真剣に語る事ができる。	社会・未来を良くしようとする志を持ち、自分自身の意見を他者に真剣に語る事ができる。
J	自分を変える力 自分の言動や行動を俯瞰して見つめ直し、常に改善しようとする意欲を持ち、次の行動や、将来の夢に繋げることができる。	自分を向上させるために、自身で目標を立てることができる。	自分を向上させるために、自分の目標と現実の差を見つめることができる。	自分の目標に近づき、自ら行動することができる。	自分の目標の達成のための行動を、常に自分自身で見直して反省しながら、学び続け、次の行動につなげて取り組むことができる。	社会の中で、自分の役割や意識を俯瞰して考え、自分の目標や将来の夢と関連づけて大高的に行動できる。	社会の中で、自分の役割や意識を俯瞰して考え、自分の目標や将来の夢と関連づけて大高的に行動できる。	

協働
創造

自立

令和4年1月27日
高校教育課

令和3年度福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」
第2回コンソーシアム協議会 記録

日時 令和4年1月27日（木） 13:30～15:00
会場 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校（オンライン会議）

【出席者】

No	所属	職	氏名	備考
1	双葉郡教育復興ビジョン推進協議会	代表	笠井 淳一	
2	福島大学人間発達文化学類	特任教授	中田 スウラ	
3	福島相双復興推進機構	常務理事	遠藤 和人	専務理事代理
4	福島イノベーション・コースト構想推進機構	教育・人材育成部長	山内 正之	
5	NPO法人カタリバ 双葉みらいラボ	拠点長	横山 和毅	
6	ふたば未来学園中学校・高等学校	校長	柳沼 英樹	
7	高校教育課	主任指導主事	志賀 勲	教育次長代理
8	ふたば未来学園高等学校	教諭	林 裕文	企画・研究開発部主任
9	ふたば未来学園高等学校	教諭	齋藤 夏菜子	企画・研究開発部副主任
	高校教育課	指導主事	赤岡 奈津美	

1 開会（13:30）

2 主催者あいさつ（高校教育課 志賀勲主任指導主事）

3 指定校長あいさつ（ふたば未来学園中学校・高等学校 柳沼英樹 校長）

- 本日は、コロナ感染防止対策のため、本校の出席者が最少人数となりますこと、ご了承いただきたい。最終年度に向けて、コンソーシアム委員の皆様の忌憚のないご意見をいただきたい。

4 説明

(1) 令和3年度研究開発実施状況【林教諭】

- 1年次における地域課題把握のためのフィールドワークから演劇までの流れを強化した。
- コンソーシアムのご協力のもと、取材先を広げることができた。
- 本稿の活動に関わっていただく地域の団体や個人は、224件を超え、目標を達成している。
- 論文指導において、ルーブリックを活用した。

(2) 令和4年度研究開発実施計画等について【林教諭】

- 令和4年度入学生（特に一貫生）の探究レベルをどう引き上げるか検討したい。
- 生徒の探究を通して学びと地域復興の相乗効果を創出できるよう、今後も継続して取り組みたい。
- 取材先の外側を取り巻く複雑な対立・分断の構造を描き出すために、生徒がより広範な地域の方々と向き合い、課題の深掘りをする必要がある。

- 最終年度となるため、情報の共有、県内外への発信等の効果的な方法を検討したい。

5 演劇発表

- 1年次の生徒による演劇「トリチウム」を動画で視聴。
- 概要：トリチウムなどの放射性物質を含む処理水の放出について、様々な立場の方々を取材し、それぞれの役になりきり、演劇にまとめた。
- 平田オリザ氏からの講評：国の立場の方の葛藤にしっかり向き合っていた。椅子の配置で心情をうまく表していた。人間の複雑さを深掘りし、フィクションの力を使って探究してもらいたい。インタビュー先の人に共感して、これを伝えたいという気持ちが強くなることは当たり前だが、ここで踏ん張って、深掘りをしてほしい。ロジカルシンキングとクリティカルシンキングで考えられるかが大切である。国の立場で国民から理解を得ようとしている方がどうすれば困るかを考えてほしい。例えば、その人のお父さんが漁師だったらどうなるのか。これが演劇を作るということ。別の言い方をすれば、意地悪になるということ。原発事故などの不条理と戦う皆さんには、もっと深掘りしてほしい。

6 協議

- 遠藤和人氏（福島相双復興推進機構）

- ・演劇をやることの意義について、お尋ねしたい。

【齋藤】フィールドワークにおいて取材をすることで、様々な立場の方の気持ちや葛藤を理解することができる。また、班員同士で話し合いをしながら作品制作をすることは、「合意形成のトレーニング」にもある。「トリチウム」の演劇では、追加の取材を行い、当事者の視点から課題を追究しようという姿勢が見られた。

- 中田スウラ氏（福島大学）

- ・生徒の外部発表、コンテストの応募について、重複して参加していることはあるのか。

【林】実績としては、43件応募したが、重複は2件のみである。低学年での応募も見られる。

- 福島イノベーション・コースト構想推進機構山内正之氏

- ・論文指導におけるループリックは非常に有効だと思うが、どういった内容になるか。

【林】本校の論文の特徴はセルフエッセイが含まれること。自分が震災とどのように向き合ってきたかが探究に大きく関わる。その上で、論をまとめるために、アブストラクトシートを作成させた。

- 笠井淳一氏（双葉郡教育復興ビジョン推進協議会）

- ・双葉郡独自に、ふるさとや復興に関する探究的な学習として、「ふるさと創造学」を推進しているが、ふたば未来学園の取組は、大変参考になる。

- ・演劇における取組を共有できたらいいのではないか。

【林】ふるさと創造学発表会后、コロナ禍で探究があまり進まなかった生徒たちが小・中学生をもっと巻き込んで活動したいと言っていた。中高交流会等が生徒の探究の交流の場になるとありがたい。

- 横山和毅氏（認定NPO法人カタリバ）

- ・地域の課題とは、そもそもどういったものになるか。様々な学校で探究学習が行われているが、挙げられた課題を見てみると、人口減少、エネルギー問題などがよく挙げられている。地域における本質的な課題は、何かを発見させることが大切。

【林】引き続き高校とカタリバの連携による学びの協働・協創をお願いしたい。

7 閉会（15：00）

令和4年1月25日
高校教育課

令和3年度福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」
第2回運営指導委員会 記録

日時 令和4年1月25日（火） 15:00～16:30
会場 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校（オンライン開催）

【出席者】

No	所属	職	氏名	備考
1	OECD 教育局	シニア政策アナリスト	田熊 美保	
2	慶應義塾大学	教授	飯盛 義徳	
3	ふたば未来学園高校	校長	柳沼 英樹	
4	ふたば未来学園高校	副校長	南郷 市兵	
5	ふたば未来学園高校	教諭	林 裕文	企画・研究開発部主任
6	ふたば未来学園高校	教諭	齋藤 夏菜子	企画・研究開発部副主任
7	ふたば未来学園高校	教諭	高野 寛之	企画・研究開発部
8	ふたば未来学園高校	教諭	塩田 陸	企画・研究開発部
9	ふたば未来学園高校	常勤講師	山内 姫	企画・研究開発部
10	ふたば未来学園高校	教諭	荒 康義	企画・研究開発部、3年次主任
11	ふたば未来学園高校	教諭	鈴木 知洋	企画・研究開発部、2年次担任
12	ふたば未来学園中学校	教諭	新田 健斗	企画、3年生担任
13	NPO 法人カタリバ	拠点長	横山 和毅	
14	NPO 法人カタリバ	職員	内海 博介	
	高校教育課	課長	平澤 洋介	
	高校教育課	主任指導主事	志賀 勲	
	高校教育課	指導主事	赤岡 奈津美	

- 1 開会（15:00）
- 2 主催者あいさつ（高校教育課 平澤 洋介 課長）
- 3 指定校長あいさつ（ふたば未来学園中学校・高等学校 柳沼 英樹 校長）
 - 地域の皆様のご支援をいただき探求活動ができたことに感謝したい。コロナ禍における制限や限界を感じる中、教職員・生徒一丸となって、地域とのつながりを持たせていただくことができた。
 - 今年度の取組を分析していただき、最終年度に向けた課題について、運営指導委員の皆様のご忌憚のないアドバイスやご意見をいただきたい。
- 4 委員長あいさつ 田熊美保氏
 - 2022年全国高等学校グローバル探究オンライン発表会では、日本語・英語発表部門の両部門での金賞受賞につきまして、おめでとうございます。前回同様、こちらから指導という形ではなく、皆さんが解を見つけられるよう、対話を中心に進めたい。

5 説明及び協議

(1) 「ふたばメディア」について（生徒より）

- SNSとWebサイトを利用した複合メディアで探究活動の発信をしている。未来創造探究における問題点（探究活動の集約と発信がされていない、一過性の取組になっている）を解決するために立ち上げた。
- 年間1万2千円の活動費がかかるため、地域の事業所の広告を載せるようにした。
- 卒業生、在校生、地域の人々とのつながりを可視化した。メディアとして、データベースとしての新たな可能性がある。調査のアクション（意識調査やアンケートなど）のデータを共有すれば地域の財産となり、データに基づいた活動につながっていく。

(2) 質疑応答

<飯盛義徳氏>

- 継続性の担保、引き継ぎについてはどう考えているか。
【生徒】後継者を探しているところである。候補者はいるが、発信しながら探している。
- 情報の保管だけではなく、更新が重要。いつも同じ情報だと見なくなる。協力してくれる人がインセンティブを感じるか、やって良かったと思えるかについては、どうしているか。
【生徒】5年支援してくれる2社の協賛事業者がいる。影響力が必要不可欠であり、情報発信で魅力を伝えたいと考えている。

<田熊美保氏>

- ふたばメディアの目指す目的は何か、何か変えたいものはあるか。
【生徒】探究活動を集約することで地域を復興させることが目的である。その中で、ふたばメディアを通して、双葉地区の魅力を伝えたり、探究活動の底上げを図ったりしたい。
- 探究活動の共有については、ふたば未来学園の先生方も問題意識を持っている。学校内だけでなく、他県や世界の人々と共有するためには、データベースをカテゴリー化し、共通言語があるとなつたりやすい。イスラエルで行われているブロックチェーンで生徒の成長を可視化する実験と似ている。

(3) 今年度の研究開発実施状況（林教諭）

① 未来創造探究実施状況

- ・コロナ禍でもコンスタントに実施できた。
- ・1年次の演劇において、コンソシアムにご協力いただき、取材先を広げることができた。
- ・探究活動を論文としてまとめるために、3年次において、論文ループリックを活用し、指導しやすくなった。
- ・6月に開催したみらいフォーラムは、文化祭の代替行事である。海外研修の成果やミャンマーからの留学生による発表、情報発信をテーマにパネルディスカッションなどを行うことができた。

② 目標設定シートのアウトカムについて

- ・本校で規定する人材育成要件・ループリックレベルは、3年次最終評価が2.90となった。年々上昇傾向であるが、3.5が目標。これは、野心的な目標である。
- ・2020年から2021年は、マネジメントの項目が上がっていない。コロナの影響で計画通りに進まないこと原因と考える。
- ・ほかの項目については、目標が達成されている。

③ 目標設定シートのアウトプットについて

- ・プロジェクト数は、3年生が約60、常に200プロジェクト動いている。数が多くなっているため、教員がどう関わるか課題。
- ・直接来校者数は、192人。コンテスト等応募件数、43件。概ね目標を達成している。
- ・関わっていただく地域の方の延べ人数は、260～270人くらいになる。企画の段階から協働的な関わりが見られ、質的变化が見られた。

- ④ 来年度に向けて
- ・中学校からの一貫生においては、探究の前倒しが可能。高校から入学する生徒をいかに巻き込むかを考えている。
 - ・探究発表会は複数日を設定する予定。
 - ・これまで御指導いただいたように、地域が活性化する探究活動が重要と考えている。今回のふたばメディアのように、いかに探究を引き継いでいくかも課題である。
 - ・教員の多忙化が見られる。教員のウェルビーイングも考えたい。
 - ・教員間で探究のノウハウの共有する時間は必要。
 - ・最終年度において、取組をいかに発信するかが課題。

(4) 質疑応答

<飯盛義徳氏>

- 論文指導において、どのような指導をされているか、分量はどのくらいかかせているか。
【荒】 I B (国際バカロレア) の Extended Essay (課題論文) を参考にした。要旨を最初に書かせる。要旨を骨格とし、目次をつけて肉付けする。世界の課題につながるように考察する。レベル 1 から 5 までである。今までは、分量は多ければいいという指導であったが、読みやすい 8, 0 0 0 字~1 0, 0 0 0 字程度の分量で書くよう指導している。
- 毎年ゼロスタートは大変であるため、例えば、大学 4 年生による発表会において、下級生にも建設的なコメントを書かせるという方法は有効である。下級生に論文の型を理解したり、作成の見通しを持たせたりすることができる。上級生と下級生の「共創」が見られる。半学半教(あるときは学び、あるときは教える)の関係性こそが「共創」であると考えられる。
【柳沼校長】プレゼンのスキルは高まっている。読む人にわかりやすく伝えること、学年を追って系統立てて論文指導していくことが課題。下級生に見てもらおう方法について参考にさせていただきたい。
- 書くときの説得力と妥当性は、話すときとは異なる。書き方の基本を教えることは大事。引用、参照などのルールも学ぶ必要がある。大学では、ライティングコンサルタント(博士課程の学生)から論文の書き方や引用の仕方を学ぶという知の循環がある。文章を書くこともグローバルの要件だと思う。

<田熊美保氏>

- グローカルという考え方はいろいろなところで見られる。日本の探究活動を見ていると、地域と世界を分けて考えているので、地域と世界を結びつけようという意識が強い。ヨーロッパでは、グローバルとは地続きの発想。書く指導においても、グローバルの発想が大事。ふたば未来の取組がアカデミックライティングの高大接続になるといい。
- 先生方のウェルビーイングのために、学校全体のシステムチェンジについて、どう考えるか。
【荒】探究の指導としては、教えなければいけないと一人で抱えるとキャパオーバーする。一緒に楽しんで考えていくジェネレーター立場になったり、ほかの先生方と役割分担をしたりするといい。
【齋藤】演劇においては、毎年同じようにやれば楽かもしれないが、生徒の特性に合わせてやりたいため、労力はなかなか減らない。
- 【横山】柔軟な考え方ができるといいが、なかなか難しいこともある。カタリバとしても、先生方の変容に伴走したい。開校からやるが増えているので、何をやらないかという議論が必要。先生方のウェルビーイングと生徒の学びの両立を目指すのはどうか。企画研究開発部の存在が大きいの。先生方に対話の文化があるのが素晴らしいので、維持してほしい。
- 先生同士のメンターシステムはあるか
【横山】探究指導において、長年いらっしゃる先生と新しい先生という組み合わせにしたり、月次会(月 1 回のミーティング)でゼミごとの課題や好事例の共有をしたりしている。
- 対話において、インフォーマルな関係性を作れるといい。探究か教科かと分けて考えるのではなく、連携させるから負担が減るといえる考え方にする。大事なことを抜き出すといい。

【林】 会議の回数や出席者を減らしたが、先生方のノウハウの共有や擦り合わせの重要性を感じている。

- ドイツの学校では、会議のための会議は減らすが、目線合わせ、歩幅合わせ、呼吸合わせの会議は必要と言われている。

【荒】 クロスカリキュラムは、本来どういうものをめざすのか。

- 先生が授業をデザインするというよりも、共創のアプローチでもある、生徒も授業をデザインする主体と考えるパターンもある。生徒が持っている知識を活用することも有効である。

(5) まとめ

<飯盛義徳氏>

- ふたば未来学園は、全国の先頭ランナーならでは大変さがある。ふたば未来の先生方や生徒の活躍を全国の学校が注視している。正答がある取組ではないが、全国各地に萌芽的な取組が見られる。地域活動と学校の教育活動をつなげる研究をされている方がいるので、そういった知見も生かしてほしい。

<田熊美保氏>

- 知りたいことがあれば、こういった会議だけではなく、いつでも私たちに気軽に尋ねてほしい。皆さんの知見をまとめて発信することは、次世代の生徒たちのウェルビーイングにつながる。

<南郷副校長>

- 「ふたばメディア」における探究活動では、教育を俯瞰して見ながら課題を指摘している。まさに学びと地域復興の相乗効果のサイクルをどう作っていくかという議論とつながっている。まだまだこれではだめだという意識やプラットフォームの具現化が来年度、考えるべきことである。また、ケースメソッドをどう入れれば、探究が深化するか、いかにコンテキストベース、コンピテンシーベースの学びに変えていくか、楔を打っていきたい。また、業務の軽減化についても、しっかり考えたい。

<柳沼校長>

- 多忙な状況を減らすには、メリハリをつけてやる必要がある。多忙感を減らすために、チームでやる、成功体験を分け合う体制づくりをしていきたい。多忙な状況を解決するためにはどうしたらいいか、解が見つからないが、チャレンジしていきたい。

6 閉会（16：30）

令和3年度 5期生プロジェクト紹介一覧

原子力防災探究ゼミ			
探究テーマ		探究テーマ	
マイクラでつくる双葉郡		村おこし in 葛尾村 !!	
内容	メンバー	内容	メンバー
①福島の中でも外でも福島や原発の情報に触れる機会がない。②1、吉川彰浩さんの話し合いで私たち高校生の視点を含めた未来も創ろうという考えを得た。2、福島学(案)会に参加した。③間違った情報を正しい情報と思い込んでいたり、身近にある危険や特徴を知らない人が多い。そのため自分の目で見たほうが何が正しいか判断できると考え、バーチャル上に今の原子力発電所を再現している。④福島を等身大に感じられたり、自分の目で見て考えるきっかけになってほしいと思っています。	菅波 竜人 猪狩 大樹 森 俊輔 山内 直 渡邊 快 浅川 悠	自分たちの解決したい課題は、葛尾村の小・中学生の人数が少なく、スポーツ大会などのイベントに人が集まらないことです。葛尾村の小・中学生は自分たちの住んでいるいわき市と比べてとても人数が少なく、人が集まらないことが自分たちの課題です。解決に向けたアクションはまだやってはいませんが、今後、葛尾村の教育委員会さんと葛力創造舎の下枝さんと協力をし、葛尾村の小・中学生と仲良くなってイベントに参加してもらえるように学校などに行き、交流を深めていきたいと思っています。解決のためのアクションは上に書いたことと同じです。全国や世界の課題と照らし合わせて少子高齢化だと思っています。	市川 爽海 島山 潤也 園部 瑠伊
探究テーマ		探究テーマ	
「開けてびっくり! 浪江の宝箱!」		鉄たまごという地域の可能性	
内容	メンバー	内容	メンバー
①住民の帰還率が低く、若い人が県外や地域外に出てしまうことが多いことから、住民の方が帰ってきたいと思える町にする。②浪江町に実際に足を運ぶ。アンケートを行う。浪江町以外の双葉郡内他の町と比較して考える。③ふたば未来学園の中高生を対象としたワークショップを行い、浪江町の伝統的な魅力や新しく行っている活動を見て、浪江町の魅力を知ってもらう。また、浪江町の魅力を生かした商品を考えてもらう。浪江町の「浜の輝」を使った料理を考え、浪江町商工会青年部の皆さんと料理対決のイベントを開催した。④福島県の双葉郡で避難解除が最近された町では、まだまだ10年前に時が止まったように建物などが残っている。少しずつ町を戻していくには、地域を盛り上げ戻ってくる人を増やすことが大事だと思う。それは世界や全国で過疎化が進んでいる地域や、同じように災害や被害を受けた地域も同様だと考える。	荒川 礼奈	①貧血で悩む友人や地域の高齢者の貧血問題について、地域の砂鉄から製鉄を行い鉄製品(鉄たまご)を作る。お湯を沸かすときに鉄たまごを入れ、そのお湯を飲むことで鉄分の補給を行う。②「まほろん」に行く→浜通の製鉄の歴史や製鉄の方法を学ぶ。岩手県南部製鉄所を制作している工房に修行に行く→鉄鉄を溶かし鑄物をつくる工程等を学ぶ。福島市の刀匠藤安将平氏の工房に行く、古代鐵研究所所長吉田秀章氏の講話→海砂から砂鉄の分別、炉の作り方製鉄の方法③・小高町村上海岸、鹿島町右田浜海岸、四倉海岸、広野海岸の4カ所から砂を採取。→分析を依頼・鉄穴流しをするための材料購入・道具の作成・鉄穴流しの実施 広野と村上について、砂3kgから2回行い、とれた量と成分の分析・製鉄炉を製作するための材料購入・道具の作成・平工業高校から機材の借用・7/14(水)第1回製鉄・8/18(水)第2回製鉄④広野町や近隣の海岸から採れる砂鉄から鉄製品が作ることができる可能性。現在日本は鉄鉱石や石炭を100%輸入に頼っている。資源供給の見直しになるのではないかと、また広野町の砂鉄から刃物等の製品を作れば、町おこしや産業の一つとして有効になるかも知れない。	木田 晏奈 宮迫 柚果
探究テーマ		探究テーマ	
環境事業でシビックプライドを作ろう		物語をきっかけに	
内容	メンバー	内容	メンバー
双葉郡八町村の経済循環率をまわし、環境にやさしいという新しいイメージを作り他県や世界からのイメージチェンジをはかること。震災前後の経済循環率をデータを使い比較。双葉郡に新しいイメージを定着させるには、何かいいのかわ、一環境に配慮したものはなにか、ネットを使い調査。環境に配慮された商品を作り、どうやってサステナブルな社会・地球環境にしていくのか。地球温暖化が進み、世界では多くの国が温暖化・自然環境に対し政策を打ち出し環境経済にお金が回るようになってきた。その流れにもった探究活動である。	木田 晏奈 草野 真緒	福島への興味を呼び込みたい。また風評被害克服。福島県、また双葉郡の特産品や観光名所を調べました。小説投稿サイトで福島県を舞台にした小説の投稿。興味を持ってもらうきっかけ作り。復興の定義とは何かを考えた時に、震災を忘れず、しかし震災が原因の悪い面(風評被害)などは忘れられていくことではないかと考えました。	猪狩 玖美
探究テーマ		探究テーマ	
Future Quest		双葉郡内の未来時代を描く	
内容	メンバー	内容	メンバー
①負のイメージが残る双葉郡の町づくり ②放射線ワークショップ・廃炉フォーラム、3.11を学ぶ会、双葉郡バスツアー、双葉町街づくり会議、広島研修、大川小見学 ③桜ウォークゴミ拾い、ハイスクールアカデミー、双葉町6号線花壇・看板づくり、自動販売機設置 ④SDGsの10(人や国の不平等をなくそう)16(平和と公正を全てのの人に)と風評被害を無くす取り組み。11(住み続けられる町づくり)と町づくり活動が繋がるのでは?	渡辺 空	双葉郡内では、東日本大震災から10年が経ちましたがまだまだ復興が進められていない中でも絵を描いてやっています。また、解決に向けた調査アクションでは富岡町役場に行って復興のまちづくりのことを話をしました。解決のためのアクションでは、絵を描いたりするなどの作業をしています。全国などの課題と照らし合わせた考察では、皆さん方が戻ってこられるようにするために絵を描いて見せています。	長谷川優貴

ゼミ総合			
探究テーマ		探究テーマ	
ふたばの花革命(メディア×原子力防災)		VR in Futaba(メディア×原子力防災)	
内容	メンバー	内容	メンバー
① 町民の方々のストレス軽減。そして楽しみ、癒しを与えたい。さらにこのご時世、コロナで自粛期間が増えているので軽いひまつぶしになればいいなと考えました。② 私はストレス軽減するには、体や心に癒しが必要だと思います。そしてネットで『癒しになるもの』と検索しました。すると、マッサージ、香り、温もり、肌触り、他にも木の揺らぎ、綺麗な景色、色彩など様々な物がありました。そしてコロナ対策しつつ時間がある時に作れるものでも思い出として形に残るものはないかと考えました。そこで考えたのがアロマティックパーです。③ そして私たちの今後の活動としては双葉郡の町の花でドライフラワーを作成。もちろん町の花以外でもドライフラワーの作成を試みたいと考えています。さらにナラロマさんが開発したゆずのアロマオイルを使用してアロマティックパーを作成していきたいと思っています④地域への貢献	下鍋桜瑛 八景好香	① 双葉郡に対して悪いイメージの情報が世の中に回っている。(原子力発電所の処理水問題など)双葉郡を良いところと思って貰えるようにするべきだと思い、今ふたば未来学園にいる私たちが伝えていくべきだと思った。双葉郡のことを知ってもらい自分事として捉えてもらうこと+コロナ禍で来てもらうことは難しい、遠くの方はなかなか来づらいということから、来てもらうためのきっかけ作りをしようとした。 ② 双葉町や広野町などを実際に見て周り自分たちでいい所を探しに行った。 ③ SNSなどを使い世界に発信したら良いと考え、動画を撮って発信した。VRとiPhone、それぞれのカメラで2つの動画を撮ってどちらの方が発信しやすいか比べた。YouTubeにあげた。 ④ VR動画を見てもうことは全国的にも来たいと思ってもらえることに有効であると言われている。国土交通省の資料によると、旅行前にVR又はARを使用した動画を見て、行ってみたいと思った人の回答が、強く思う46%、まあ思う46%という割合で8割以上になっている。これを見ても、VR動画を見ることは訪問意欲をあげるための施策として有効であると言える。現在コロナ禍でなかなか旅行などができるわけでもなく、観光業は低迷しつつある。オンラインイベントも、VR動画で発信することでコロナ禍の現状でも感染のリスクを冒さず楽しむことができるのではないかと考察する。	清野妃南子 村木亜花莉 横山日向子
探究テーマ		探究テーマ	
		富岡元気づけっぺ!!(メディア×アグリ×福祉)	
		内容	メンバー
		① 震災で活気がなくなってしまった ② 富岡観光協会さんと話した ③ 富岡観光協会さんの活動をInstagramを使って発信している ④ 富岡町を沢山のひとに知ってもらう	渡邊梨音 佐伯咲子 宮本エリカ
		観点	
		① 解決したい課題 ② 解決にむけた調査アクション ③ 解決のためのアクション ④ 全国や世界の課題と照ら合わせた考察	

メディアコミュニケーション探究ゼミ					
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
ルーブリック、うちの言葉で訳してみた。		富岡の酒粕を使った新メニュー		大熊町民との繋がりを作る	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
私達は、ルーブリック内の言葉がわからず、適当に行っている生徒がいることを知った。そこで、ルーブリック制作に携わった先生方に、行う意図や本来の実施方法を聞き、現在のルーブリックでは、一人一人の正確なデータを得られていないのではないかと考えた。ルーブリックを改訂し、副校長先生、校長先生に提案する。そして可能であれば、学校で私達が改訂したルーブリックを使用して貰おうと考えた。	加藤 鳴菜 白岩 眞奈	富岡町で作った日本酒から生まれる酒粕を用いて、新しいメニューを考えている。コンセプトにも出る予定。	青柳 彩音	自分達は大熊町を昔のような活気のある街に戻すためにはどうすればいいのかというテーマで探究しています。そのため大熊町出身者や大熊に興味がある人向けのイベントを企画、開催をしたり震災前の地図を作りたいと考えています。次に今まで自分たちが行ってきたアクションは大熊出身者の1名に昔の大熊町の現況について教えてもらいその方を招いて座談会を開催しました。この2つのアクションから色々なことを学びました。	志賀 港 堀川 愛斗 志賀 弘崇
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
わかものがり		ペットとの避難		「他人事」を「知り合い事」に	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
東日本大震災後、双葉郡には避難指示が出され人口が減少した。地域内では交流が減り、外部からは原発事故があった場所というイメージだけが先行することで双葉郡に人が集まりづらくなる状況に危機感を覚えた。これからの双葉郡を守るために、これから大人になり産業に携わる若い世代が、地域について学び、衰退していく負の連鎖から脱却しようと考えた。そこで、私たち高校生が交流イベントなどを通じて情報発信をすることで印象だけでなく事実に基づいた情報を知ってもらい、マイナスな印象だけが浮かぶことを減らす取り組みを行った。	渡辺あさひ 小野澤彩乃	ペットとの避難について関心がない人、最低限のことを知らない人が多いことに着目しました。調査のアクションでは、ネットで避難に必要なもの、情報などを調べました。また、生徒向けのアンケートの作成で現状を調べました。解決のためのアクションでは、ポスターの作成、パンフレットの作成を現在進行形でしています。	鈴木 暹	双葉郡の中でも特に人口減少と高齢化が進む葛尾村に焦点を当て、関係人口を増やしていくことを目的としたプロジェクトです。主にコミュニケーションに関するワークショップや対話をういたイベントを行っています。葛尾村に関心を持って復興に協力してくれる人を増やし、村が壊れるのを防ぐことが目標です。自分事とまではいかなくても、関心を持つ人を増やしその輪を広げていくことはできると考えました。葛尾村の、人が少ないという弱点を逆手にとり、豊かな自然の中で対話することで、葛尾村の魅力に触れてもらいやすくなります。	政井 優花 半澤 詩菜
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
LGBTQと福島		震災について語ろう		ペットショップの実態と殺処分を減らしたい	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
私が探究しているテーマは、「LGBTQを身近に感じるために」です。この探究テーマを決めたきっかけは自分が当事者であることが大きいです。このテーマのためのアクションは、LGBTQの周りからの印象や同年代のLGBTQの当事者に話を聞いてみたり、実行予定なのが、ジェンダレスファッションを体験してもらうことです。このテーマを実行している上で、また視野は狭いですが、この高校でLGBTQの普及が進めるといいなと考えます。	佐藤 愛	①もっと人が集まるようにしたかった。 ② ③ない ④震災を経験している東北地方の人たちがあんまり震災を忘れてる人が多かった	吉田 愛佳 佐藤 菜 横田 うらら	震災やコロナの影響で動物たちが幸せになれず、殺処分されていることが悲しく、変えたいと思った。保護活動のボランティアと情報収集を行うとともに、日本とドイツのペット事情を比較し、日本のペットショップのあり方を考察した。	長谷川翔大 佐藤 舞
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
正しい情報を私の言葉で		もったいないバナナ		すべての子どもに豊かな生活を	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
福島に関する情報を得る手段が少ないことや、福島についての関心がないことから生まれる情報格差が原因で起こる偏見・差別問題を少しでも解決するために、Youtubeという多くの人が利用しているメディアを通して福島の現状などを配信する活動を行っている。福島＝原発＝難しいなどという印象を変えるために、福島の復興の象徴とも呼ばれているふたば未来学園の生徒である私の学校生活の様子など、比較的興味を持ってもらいやすい内容の動画を作ることを意識して活動している。実際にはどのような偏見・差別問題があるのか、福島県外の高校生は現在の福島についてどのくらい知っているのかを知るために、マイプロジェクトアワードなどに参加して意見交換を行った。また、NY研修を通して、世界でも同じように情報格差によって偏見・差別問題によって苦しんでいる人々がいることを知った。現在世界中で大流行しているコロナウイルスがその一例である。コロナウイルスの影響のため、なかなか思うように活動することが出来ないが、その中でもできることを見つけ、この探究活動を進めている。	古内 千聖	①栽培後に大量に廃棄されるバナナの葉っぱを使って、ビニール袋を使わずバナナを販売する。そして、環境を考えた広野のバナナを広める。→バナナ園にインタビューした際に中津さんが「バナナを美味しく作ることも大切だけど、環境を考えて育てることを大切にやっています」と聞いたから。②インタビュー2回本やネットで情報収集③バナナの葉を煮てみる・そのままの葉を使ってバナナを包んでみる④新しい包装方法でバナナを売ること、ゴミ(捨てても葉っぱだから肥料みたいになる)が減ったり、二酸化炭素を削減できる。・広野のバナナは栽培で無農薬とともに、販売も環境に優しくすることで新たな付加価値が生まれる。・普段量に廃棄されていた葉っぱを使うことで、コストも抑えて環境にも配慮できる。	戸田麻奈未	①日本で起きている子どもたちの貧困を知り、わたしたちの目線で同世代に伝える。②弁護士の日波さんとアンド舎と連携をとり、わたしたち高校生にできることは何かを考える。③アンケート調査。子どもの貧困を伝えるためのポスター作成④子どもの貧困は世界でも問題視されており、その解決がSDGsの目標達成に近付くと考えている。世界で起きている問題ならば日本ではどうか考え目を向けてみると様々な問題があることが分かった。その貧困の原因が何からくるかをわたしたちなりに考え、日本での子どもの貧困解決の手助けをしたいと考えている。	田中 愛琉 多田 優輝
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
futabamedia		Local Wedding		韓国と日本が仲良くなるには？	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
『去ってしまった者たちから受け継いだものはさらに『先』に進めなければならぬ!!』というわけで、SNSとWEBサイトの複合メディアを作りました。 詳細は サイトURL futabamedia.com instagram futabamedia.com	長岡嘉人 八島光 諏訪光 青田康介	①未婚化、地域の活性化②葛尾村の祝言式の主催者の方とオンラインで祝言式のことについて聞いたり、探究の相談をした。③祝言式の引き出物として広野町のバナナを使った大福が饅頭のレシピを考えて、食品製造の先生に提出し、可能だと言われたので実際に作ってみる。④地元のものを使って地元で結婚式を行い、それがSNSや式場などを通して色々な地域の方の目に入って、自分たちも地元のものを使った結婚式を地元でしたいという人が増え、未婚化が少しは解消されるかもしれない。地元の食材などを使うことで、土産を知ってもらえて、風評被害も減っていくと思う。	渡辺 初美 大井 瑠月	① 日韓の悪いイメージや偏見を少しでも無くして仲良くなって欲しい②③・早稲田大学のシンボウム・早稲田大学の助教グアンホ先生と対談・バクさんと対談・元カトリバのスタッフのおかからの紹介で韓国語講座のイベント・韓国料理④・日韓の国民同士では仲が悪いではないが政治的な面でありよりよくない状況である・韓国人は反日教育を受けていると感じていないが高齢者の方達が熱のこもった話を若い世代にするためその話を信じてしまう人がいることで誤解がうまれてしまう	山田あさか 吉田 春音

再生可能エネルギー探究ゼミ		アグリビジネスゼミ	
探究テーマ トリチウム処理水から学ぶ		探究テーマ 大熊×いちご×私	
内容 キーワード:トリチウム 地元を学ぶ 科学リテラシー 私たちは、当時報道に大きく取り上げられていた原子力発電所の処理水について考えることで、地域のつながりから学びを深められると考えた。課題追究のために、論争となっていた点の議論や、モデルに伴ったシミュレーションを実感した。また、さらにミクロ的な視点で「水」そのものについて知らなくてはと思い、地元の浅見川の水质分析や、浄水場見学を行った。再エネゼミ所属だが、科学的な視点からのアプローチを行い、そこに情報メディア面の課題も見出すことができた。	メンバー 猪狩宙 大越里輝 坂本颯太	内容 大熊町では現在新特産品「いちご」を生産している。自分達は「食べることが好き」という共通点から「食」に関する探究を行っている。そして住民が最も少ない大熊町に目を向けた。現在大熊町は町内居住者がとても少ないことから「交流が少ない」と考え、コミュニケーションの場が極めて少ないと仮説を立てた。そこで交流会を開くこととした。……	メンバー 久保木ふうか
探究テーマ 川		探究テーマ ニーハオーはばたけ広野バナナー	
内容 解決したい課題は地球温暖化問題です。解決に向けた調査アクションは、川清掃に参加、ヤマメ移送に参加、スジエビを発見、スジエビの殻には炭酸カルシウムが含まれているので脱皮した時に二酸化炭素を吸収する、よってスジエビをたくさん脱皮させれば二酸化炭素を減らすことができ地球温暖化対策になる。世界的に地球温暖化は抑えないといけない重要な課題なので私たちの探究で地球温暖化対策をすることができます。3つのキーワード 浅見川・バイオミネラリーゼーション・地球温暖化	メンバー 鈴木 蓮 坂本 侑次 坂本峻太郎 菜花 侑生	内容 ①観光客がこない→食べにくる物がない ②ロールモデル森岡。食べにくるもので観光客を増やす。 ③そもそも浜に名物がない。名物を生み出す店がない。 ④新名物をつくる。お店を変革する。 ⑤名物をつくる。 セットミールビュッフェ	メンバー 紺野空良 野口聖羅 坂本菜摘
探究テーマ リモネン		探究テーマ みんなバナナ好きだよねえ	
内容 ①広野の特産品(みかん)の皮が捨てられてしまっていて勿体無いということ。 ②みかんの皮にはリモネンという物質が含まれていてそれを使って何か出来ないかを考えた。 ③リモネンを取り出す為に水蒸気蒸留や、溶媒抽出法、ソックスレー抽出器を使って実験を行った。身近にある道具だけでも行った。 ④全国でも柑橘類の皮を捨てずに何かに使えればゴミも減るし、商品として売れることも出来ると思います。	メンバー 石崎隆盛 坂本碧性 渡邊広樹	内容 広野町にバナナがあるためこれからアクションをしようと思います。(バナナチップス、バナナカステラを使って料理します。)	メンバー 山本龍矢 白土佳楠
探究テーマ 温度差発電		探究テーマ 古着にもう一度光を	
内容 双葉郡は震災以前は原発によって栄えていたが震災以降は人口が減少し町によっては産業が少ない所もある。地域を発展させるためには新しい産業の開発が必要になる。その問題を発展途上の発電方式である温度差発電によって解決しようと考えた。温度差発電は、酸化したジエチルエーテルでタービンを回し再び液化させて循環することで発電するもので、それを作成するために実験を行った。去年は水槽で温度差を再現する実験をし、今年はソックスレー抽出機という実験器具でエーテルを循環させた。現在は発電機を作る準備を行なっている。	メンバー 青山蓮 塚越優作	内容 ①解決したい課題は、まだ使える古着、小さくなった服を捨てるという問題です。②解決に向けての調査アクションでは古着を集めている会社を探そうということをしました。古着を集めている会社や業者はたくさんありましたが同じ活動目標を持っている人を探するのは大変でした③ザ・パープルという古着などを集めてる会社に全面協力をしてもらい古着をもらいその古着からエプロンを作り地域の人に着てもらい古着でもエプロンになることができるということを知ってもらいリユースを広めていきたいです④僕が解決したい問題はsdfsの12番作る責任、使う責任ですこの活動と世界の課題は繋がっていると僕は思う	メンバー 神田 悠斗
探究テーマ 凍み天復活		探究テーマ 凍み天復活	
内容 凍み天	メンバー 藁谷 綺流	内容 凍み天	メンバー 藁谷 綺流

スポーツと健康探究ゼミ			
探究テーマ		探究テーマ	
町民楽々大作戦		カメラでパジャリ広野町	
内容 ①高齢者の認知症予防②介護老人ホームの花ぶさ苑に話を聞き、高齢者の実状やどのような認知症予防をしているのかを聞いた。ネットや本で認知症についてや、認知症をスポーツを使って予防する取り組みを考えた。③介護老人ホーム花ぶさ苑に協力してもらいリモートでの認知症予防のトレーニングを実施した。④世界的に、高齢化が進んでいる。また、コロナウイルスにより体を動かす活動や密になる活動が制限されている。自分たちが行っているリモートでの認知症予防活動が広がっていき認知症予防を続けることができ、世界で認知症の高齢者が減少していくと考えた。	メンバー 井土 峻佑 朝倉 啓期 田中 日向 太田 翔麻 鈴木 豪人 市川 龍信	内容 ①肥満度が高い、子供の体力低下②インターネット検索③カメラマンさんにアポ取り、カメラマンさんにインタビュー、動ける場所の検索SNSのアカウントの開設④世界の課題 競技スポーツの人口が少ない 解決策 競技スポーツに関する写真、動画を載せる つながらいカメラ、SNSを使って課題解決へアプローチできる。考察 健康のための生涯スポーツをする人が増えてきている。	メンバー 渡部 陽 小磯 愛斗 山田 脩斗
探究テーマ		探究テーマ	
Listen&Move 熱中症予防		町の活性化のために何ができるのか	
内容 ① 熱中症の患者が高齢者に多いと言う課題② ネットで熱中症予防やなぜ熱中症になるのかなどの知識を取り入れた。いわきFCの岩清水さん、ミツフジの池上さんに協力してもらいデバイスをお借りした。③ 広桜荘(老後施設)で熱中症予防などについて講演会を開きレクリエーション形式で体を動かし、体力作りという形で行った。④熱中症は水分補給がとても重要視されているが、世界にはまともに綺麗な水を飲める国は多くはない。そのため、水分不足で亡くなってしまっているという課題。	メンバー 小林倫太郎 荻原 聖也	内容 解決したい課題は現状を調べて町が活性化していると思い、町を活性化させたい課題です。そして解決に向けた調査アクションは町の活性化をするために、スポーツチームを設立したら活性化できると考え、いわきFCさんにスポーツチームの立ち立ちや経緯についてお話しを聞かせてもらい、自分達なりに考察しました。そして解決のためのアクションは町の現状について調べ、それを解決するために、インターネットで他県がどのような取り組みをしているのかを調べました。最後に全国や世界の課題と照らし合わせた考察について日本では過疎化が進んでおり、自分達のプロジェクトが全国で広がれば、過疎化に少し貢献できると思いました。	メンバー 吉田 翼 齋藤 広
探究テーマ		探究テーマ	
スポーツの力で世界と繋がる		TikTok ～いきいきプロジェクト～	
内容 ①さまざまな国のスポーツ環境を理解してもらい、更なる飛躍、発展に繋げる。②インターネットを使ってスポーツ問題について調べる。→日本と世界に縁がないことを知る。コロナ禍でも気軽に世界と繋がるためのツール作成。③YouTubeに動画を投稿して、世界中の誰もが視聴することができる環境作成。自分たちが情報発信者になること。④日本と世界では、スポーツに対する価値観がそもそも違うことや環境の違いなど。また、コミュニケーション能力の向上や国境を越えて繋がることが実現できる。	メンバー アスラブリゲ ネスタ ミルロイ 西間木祐太郎 渡部 拓斗 佐藤 大斗	内容 広野町の高齢者に視点を置き、基礎体力、身体機能の低下という課題を改善するため、保健センターの方やつくし会という高齢者の方々が集まる集会所の方と話し合い、協力の依頼をしました。そして、直接集会所に行き、高齢者の方々と一緒にダンスをすることが出来ました。SNSを通じて、私たちの活動を世界中に配信し、高齢者の方が運動をするきっかけになればと思います。	メンバー 小林 璃々 遠藤 佳歩
探究テーマ		探究テーマ	
障がい者スポーツの振興		貧血に悩む女性アスリートを少しでも減らそう	
内容 私たちは地域の障がい者スポーツの人口が少ないことを知り、近くの富岡支援学校を対象として障がい者スポーツの振興を課題としました。これまでに、知的障がい者のスポーツ、近くのスポーツ団体、富岡支援学校生徒の卒業後の進路について調べてきました。また、富岡支援学校の先生と話し合い、何度か質問や相談をさせていただき問題を解決する手助けとなりました。今後は実際に特別支援学校の体育の授業に参加し、体の動かし方を指導していく予定です。この探求活動を通して、世界にはスポーツを頼む文化がない国があることや施設や支える人材が少ないことがスポーツ振興が進まない要因であることを知りました。知的障がい者スポーツも共通する要因があり、この問題が解決できれば全ての人が運動を楽しむことができスポーツ振興が進んでいくのではないかと思います。	メンバー 松尾 駿 武井 凜生	内容 ①貧血に悩む女性アスリートを少しでも減らすことです。②貧血についての資料集め(ネット)、潮田玲子さんと貧血や女性の生理についてオンラインミーティング、第1回アンケート作りをやりました。③ふたば未来学園の中高生を対象に交流会を開くことです。一回の交流会を15分程度で行い、それをできたら2、3回やりたいと考えています。そして、交流会終了後参加者にアンケートをとり交流会後の変化について調べたいです。この間潮田玲子さんとオンラインミーティングをさせてもらったので、交流会に潮田さんがオンラインで参加してくれるか検討中です。④貧血が改善されて、女性アスリートのパフォーマンスが上がれば世界レベルも上がり、女性スポーツの差別や女性スポーツの禁止などの問題も減っていくと思います。過度な体重減量が原因でスポーツを辞めてしまう人もいるのでそこも貧血と関連づけて考えていきたいと思っています。	メンバー 小野 涼奈 田部 真唯 杉山 薫
探究テーマ		探究テーマ	
子どもの運動能力と向上		二ツ沼公園プロジェクト	
内容 ①子どもの運動能力の低下②いわきアスレチックアカデミーに行き指導の仕方や1つ1つの種目の目的を学んだ。スポーツテストをもとに行うため種目を行い記録測定と動画撮影。実践して撮影した動画とプロの陸上選手フォームをネットと比較した。③広野小へ確認後アクション④福島県の小学生は全国の小学生と比べて肥満率が高いことや日本の社会問題として子どもの運動する機会が少なくなるとスポーツイベントを開催する機会が減少していることから私たちが運動する楽しさを伝え、生涯にわたるスポーツに携われるようなきっかけ作りをすること。	メンバー 遠藤 春輝 須藤 颯斗 渡邊 真大	内容 まず課題として、地域の活性化、子供達の運動不足の改善に注目し、この2つの改善を目標にしようと思えました。解決に向けた調査アクションとして、まずはインターネット、学校の資料などから、地域の事を調べることから始めました。そして、二ツ沼公園さんに協力してもらいプロジェクトを進めようと思えました。解決のためのアクションとして、施設の見学、施設の関係者へのインタビューを行いました。最後に考察として、このプロジェクトは短期間では達成できないと分かりました、少しずつでもプロジェクトの規模を広げるために、次世代への引き継ぎを行おうと決めました。	メンバー 大塚 天 川俣 峻大

健康と福祉探究ゼミ					
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
コミュニケーションでつながるパト		認知症 もっと楽しく 毎日を(ゲーム編)		音楽療法で認知症対策	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
私の家族が介護の仕事をしており、高齢者とのコミュニケーションに興味を持った。広野町は孤独死が多いことを知り、調査してきた。日本の高齢化率は26.7%で広野町の高齢化率は36.54%である。広野町は高齢化率が高く、孤独死も増えると予測される。孤独死の問題の一つは亡くなって長い間発見されないことである。孤独死された方、家族にとっても辛いことである。それを予防するため、自然と繋がりをもてる環境にしていきたいと考えた。高齢者のコミュニケーションをとるため、権葉町の住宅街で実践を行った。会話をすることで自然と心が温まり、笑顔になることが分かった。交流館とカフェを合わせた場所を提案したいと考えている。	鈴木崇浩	認知症の発症により、ボーとする時間が増えるなどの生活変化によって、認知症が進行していくケースがある。このことが、世界でも課題になっており、自分の作ったゲームをその時間に使うことで、進行が抑えられると考えている。そこで、高野病院の協力を得て、二つのカードゲームを作った。「カードの大きさ」「硬度」「明らかに違う形」これら三つの新しい課題を抑えて新しい天気カードを作った。探究を進めていく上で、認知症患者に興味を持ってもらえるようにすることも大切であることが分かった。将来は、福祉系の職業に就きたいと考えている。この探究を生かして、関わっていき色々なことに興味を持ってもらえるよう行動していきたい。	矢内賢佑	私は、認知症の発症を遅らせる・予防することを目標に活動してきました。なぜ認知症予防をするきっかけになったのかあるニュースを見たからです。日本では認知症を発症する割合が年齢層が増えていくに連れて増えてきています。そこで記憶に残りやすく、不安や痛みを軽減、過去の記憶を思い出すことができる音楽の力を利用して活動してきました。今回、座りながら認知症予防を高齢者としたかったのですが、コロナの影響で断念することになり学生だけで行いました。ですがこのアクションを応用してまた挑戦してみたいと思います。	鈴木明日香
Enjoy with the elderly		aroma&refresh		高齢者の健康を支える食生活	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
2025年には「団塊の世代」が要介護者となり、現在よりもさらに要介護者の増加が予測される。高齢者になることができるに限られる。特に施設で生活している高齢者いつも同じ場所で同じことをしての繰り返しで変化が少ない。そこで高齢者の日常生活に変化をもたらしたいと思い広野町のデイサービスと一緒にレクリエーションを行ったり、入浴介助をするなど様々な実践活動を重ねた。	矢野 南夢	若者との間に壁を感じる高齢者が多く、「ハンドマッサージ」や「足浴」などのイベントを通して笑顔と健康を届けたい。今後、施設訪問やイベントに参加し、一人でも多くの人に元気になってもらいたい。「1リフレッシュをして欲しい。アロマスプレーを作っている。	阿部桃花	福島県の課題として、高齢者のQOLの低下に着目した。日本では、高齢化が進んでおり、現在高齢者の充実した生活が求められている。福島県の高齢化率は、全国平均を上回っている。また、高齢者は社会的孤立から外出する頻度も減り、生活リズムの低下から、低栄養になったり、生活の質であるQOLが低下している。高齢者にとって、質の良い食事は、楽しみや生きがいに繋がり、社会参加の意欲を向上させるなどメリットが多くある。そこで、食事の改善とQOLの向上を目指して、高齢者向けの献立を考えた。	高橋知那
ハンドケアで高齢者と交流		広野町探検隊～仲良し大作戦～		高齢者と高校生～偏見の壁をなくそう～	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
高齢者と高校生の交流する機会を増やすこと。そのためにまずは自分から向かい、高齢者の方と交流し、お互いのことを知る。広桜荘に行き実際にハンドケアを体験してもらった。高齢者と高校生お互いの印象が悪いこと。	秦 佳乃	私達は、肥満率を低下させるために、広野町を楽しく歩いて探検しながら解消させようと考えました。解消するためには、食事管理と運動が大切です。食事管理は、し過ぎると良くないし、難しいので、私達は、楽しく運動をして肥満対策をしようと考えました。広野町の広い地形や、たくさんのお土産を売って、子供たちと楽しく探検をしようと思いつきました。探検をすることで、今まで知らなかった広野町の良いところを知るとともに、たくさん歩くことで肥満予防にもなり、一石二鳥だと感じました。想定していたよりも多くの子供たちに参加していただきました。「また参加したい」という声もあって、この調子でたくさんの子供たちに広野町の良さを広めていきたいという気持ちになりました。	根本聖菜 坂本華葉 皆川叶美	私はおじいちゃん、おばあちゃんが好きです。ですが、高齢者と高校生には壁を感じることがありました。身近な人にアンケートを取ったところ、高齢者に対するイメージとして、いいところを沢山あげてもらいましたが、中には正直に好きじゃないと答えてくれた人もいました。そんな人に高齢者のいい所を伝えたいと思ったため、実際に関わり、気づいたことを伝えたいことを友達とお話をしました。	横田 琴音
Make your life in a shelter better ~これからの災害に備えて~		The challenged		高齢者に生きがいを～交換ノートで幸せ～	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
①将来自衛隊員になり、災害派遣に行ったときに被災者の不安を少しでも無くしてあげたいから。 ②夏休みの課題でコロナ対策を通じた避難所について調べた。 ・インスタグラムでアンケートを実施(1回目:投票、2回目:投票とアンケート) ・福祉避難所について調べた ・非常持ち出し袋について先生方にインタビュー ③避難所生活ははとも不便だということ、プライベートが無いということ。 ④最終的には学校全体を使った避難所体験を目標に、最初は少人数で実現させること、外国の避難所と比較して取り入れられることは取り入れること。	新妻紗玖良	前々からなぜ障がい者と聞いただけでマイナスで酷いことが思い浮かぶのか謎だった。同じ人間なのになぜ壁ができるのだろうか疑問に思っていたし、私の叔母も障害を持って生まれてきて私が幼い頃に亡くなってしまっ記憶がほとんどないが、母から叔母の話を知っていると私は叔母のことが大好きだったそう。そんなこともあり、障がい者と健常者との壁をなくそう、もし障害に対する偏見を持っていたらマイナスなことではなく、プラスなイメージに変えたいと思いついた障がいについてもっと理解してほしいと思った。	小野桃楓	現在、高齢化が進んでいると同時に少子化の影響で高齢者の方は若い世代の人達と交流する機会が減っている。そのため、私は高齢者の方と関わる機会を増やし、高齢者の方に「幸せ」や「楽しさ」を少しでも多く感じてもらうために、高齢者の方と一緒にできる手芸などを考えたが、コロナにより難しくなりました。そのため、交換ノートに変更しノートでコミュニケーションを取っている。これから、若い世代と高齢者が関わりを持つ機会を増やして欲しい。今回の探究で学んだことを生かし、高齢者のQOLを向上させられるように介護職員として頑張りたい。	桜井瑞穂
子どもロコモ改善プロジェクト					
内容	メンバー				
子供ロコモの原因は、震災後や今のコロナ禍の影響で運動不足やスマホ依存症による姿勢の悪さなどから助長されていると私は考えています。そこで、おこなった調査は日本臨床整形外科学会全国ストップザロコモ協議会の方に今の現状を伺いました。また、解決のためには広野小学校で小学4～6年生を対象に、月1回運動不足の解消で子供ロコモ改善へとつなげる活動をおこなっています。内容は楽しんで、友達とまたやってみたくて思ってもらえるような運動遊びです。最後に、子どもロコモ改善は大きな課題です。今は少人数対象ではありますが、後々全国の色々な方へ子どもロコモとこの活動を知ってもらい少しずつでも症状が改善に向かって欲しいです。	鈴木寧々				

令和3年度 6期生プロジェクト紹介一覧

原子力防災探究ゼミ					
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
絵本×震災の記憶		ゴミ×絵本×カレンダー		子供の積極的な地域社会参画で地域復興はできるのか	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
震災を知らない世代の増加や震災の記憶の風化、震災を体験した人の高齢化に伴う震災の記憶の曖昧、今もなお残る双葉郡内をはじめとする被災地への風評被害などの背景をもとに、双葉郡内の人に東日本大震災について話を聞き、その話をもとに子供から大人まで読むことができる震災に関する絵本を製作し、その絵本を読んだ人が地震が起きた時にパニックを起こさないように防災意識を高めることを目指す。	草野真優 猪狩晴日	私は今の海洋ゴミの現状を多くの人に知って欲しいと思いました。そのために子供から大人まで読める絵本にしました。でも絵本は1度読んだら終わりということが多いので絵本とカレンダーを合わせることで毎日見ることができ、楽しく海洋ゴミについて知ることができるんじゃないかなと思いました。この絵本カレンダーで多くの人がゴミに対して関心をもち一人一人が一緒に考えて行動できるきっかけにしたいと思いました。	高久明日花	小学校の時、地域復興事業に参加したことから地域に自分の声が届き実際に地域の大人が動きだしたり、笑顔になっていく様子を見て地域から求められていると感じられました。この経験から双葉郡では子供の声を行政や地域の大人たちが聞いているのか、また子供は自分の地域に対し存在意義を感じているのかという問いを持ちこの探究を始めました。これからは双葉郡の小学生が自分自身で考え子供が社会参画のできる環境・町づくりをしていきたいと思っています。	浦山夏美
どうしたら本を読んでもらえるか		再エネで広野町に彩りを		土壌・川底放射線量から考察する探究	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
中学校では必ず朝の学活の5分前に読書の時間があつたのに対し、高校では決まった時間がなく本を読む機会がなくなったことがきっかけです。そして、本校の図書室利用数(6月分)の中学と高校の貸し出し数の差を調べたところ200以上の差がありました。また10人に高校になってどれくらい読んだかアンケートをとったところほぼ全員が読んでいない結果になりました。広野町には本屋や図書館がないので本の魅力を伝えるためにこれから活動を広げたいと思っています	小野楓花 白土愛実	小水力の開発をし、作った小水力発電を使って地域のためになにかできないかと考えた再エネ班のメンバーと、小中高の通学路に街灯が少なく、夜道が危ないと感じ、自分に何ができるかを考えたメンバーで、再エネを使って広野町に街灯の代わりとなるイルミネーションをしたいと思い、協力して探究を進めることになりました。小水力と太陽光、風力(仮)を使ったイルミネーションの明かりで、広野町を明るく元気にします。	中島一葉 鈴木一真 西間木健太 貝沼秀基	具体的な概要はまだ定まっていますが、着々と方針が固まり、本格的な行動ができるように準備を進めています。他校との交流から吸収出来る有益な情報を基に計画を立てていきます。(現在は基盤がまだ完全ではないので未発展な段階です)他校との交流(例)福島高専の先生による土壌汚染に関する講座に参加しました。そこではいままでも知り得なかった貴重な情報をいただきました。先述の高専以外も参加するふたばのこれからの政策を疑似的に考える企画にも参加して、街づくりなどに関する重要なデータも手に入れました。とにかく積極的に使えそうな有益な情報は手に入れて探究に活かしています。	大谷心亮 国井太陽
地元の食材で地元を活性化させよう		高齢者と若者のコミュニケーションを作る		居心地の良い学校を ～インクルーシブ教育で障がい者と健常者の壁を無くす～	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
私たちは地元の食材に注目して探究をしています。私たち自身地元の特産品を考えた時に思いつかず悩んだことがきっかけです。そこからインターネットや施設を訪問して特産品を調べ、その食材を沢山味わえるものという事でライスパークを作ることにしました。ライスパークを作りましたがその後の活動に迷ってしまい路線を変更させることにしました。私たちは防災に目を向けて地元の食材を使った非常食のようなものを作ろうと考えているところです。	藍原さやか 高橋衣織	私の理想は、福島＝震災ではなく郷土料理などの話題も増えてほしいことと、高齢者と若者のコミュニケーションが増えて地域に賑わいがあり地域に誇りを持って居られるようになってほしいことです。それで、私はアクションとシミュレーション発表会にでて色んな方からの意見などを聞いたり、福島、双葉郡の郷土料理はどんなものがあるのか?などと調べました。これからは双葉郡に郷土料理は本当にあるのかを調査したいです。	松村美優	私は中高生の障がい者と健常者の壁をなくしたい!そんな思いから今のプロジェクトを始めました。今のふたば未来は障がい者に対する差別や偏見が多いように感じています。そこで私はインクルーシブ教育に目をつけました。インクルーシブ教育を行うことにより、障がい者も健常者も普通の学校生活を行うことができ、差別や偏見がなくなるのでは?なくなることによって、みんなで楽しく普通の学校生活ができるのではないかと、そんな優しい学校になって欲しいです。	阿部虹輝
A hidden AED		一人一人が考えられる防災		世代を超えた居場所づくり	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
私たちは、日本のAEDの設置率は世界一なのに、心肺停止になった方の20人に1人しかAEDが使用されていないことを知りました。その他いろいろ調べた結果、need will canがそろっているAEDについての探究を行うことにしました。一番の目的は、AEDの位置を誰でもわかるようにすることです。そこに、その他の応急手当、AEDのデザイン、地域とのつながりも加えたいと考えています。全国的に普及させたいものは、全国AEDマップの登録とAEDの案内表示で、双葉郡やいわきでは、そこに地域とのつながりを入れるつもりです。具体的な方法として、フォーラムやサミットなど各種のプレゼンテーションに出て、全国に広げます。地域に関しては、大人向けと中高年向けに講習会のようなものを行う予定です。	久保田明日香 児玉花心	このテーマを設定したのは、津波で流された祖母の跡地に別の人の家が立っていると聞いた私は、津波が来たことも忘れてしまうのではないかとという危機感からこのテーマにしました。そこで、防災マップに過去あった災害情報をのせたらわかりやすいのではないかと、思い、情報を調べるため、調査しました。主な調査は三つあります。一つ目は広野町史を読みました。水害、飢饉、冷害、波浪が多い一方で、津波、地震に関する記述は少なかったです。二つ目は、国土地理院 災害伝承碑より地震、津波に関する石碑を調べました。岩手、宮城など他の県は多くありましたが、福島県は東日本大震災以前の災害情報は多くありませんでした。三つ目はいわき市役所の方にお話をうかがえる機会を伺ったので災害について聞いてみました。いわき市役所の方に震災までは災害がなく過ごしやすい土地と言われていたそうです。この三つの調査から福島県浜通り地域では、津波地震の少ない地域だったことがわかりました。このことにより防災マップにのせられる情報が少ないとおもったので別の方法で探求を行いたいけれどわからなくなってしまう思今悩んでいます。	大和田蒼空	“私は双葉郡でコミュニティの再生、居場所作りが問題になっていることと、自分が昔に経験した体験から、世代を超えた居場所作りという探究を始めようと思った。双葉郡では、東日本大震災により発生した原発事故の影響によりまだまだ多くの人が避難している人もいます。そしてほとんどの人が長年住み慣れた場所を離れて住み慣れた地域の住民同士とも離れ離れになり人と人との交流が疎遠になっているという問題があった。住民の中に一人暮らしの高齢者の方も多いと聞き、それに関する問題も聞き、居場所作りという探究にしたいと思った。また居場所の問題は高齢者だけの問題じゃないと思い、高齢者に限定せず小さい子供から高齢者までの世代を超えた居場所作りをしたいと思った。”	猪狩 羽琉

原子力防災探究ゼミ					
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
しのおのみち		流木の可能性		檜葉町の特産品で商品開発	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
元々は、海洋ごみを軸に探究をすすめてきました。しかし、震災のこともきょうみを持ち始めました。おもに防災です。また内容は明確ではなかったのですが、かぼりしてきてきました。そこでも行き詰まりました。ラボや先生に相談してきました。そして私は「海と人との関係」はどのようなものがベストなのか？というになりました。これを軸としてまずは塩をつづけている私の祖父に話を聞きます。	吉田百華	ぼくは流木について発表します。流木を有効活用するために、色々考えた結果、ハスクチップやパークチップなどのウッドチップを作るかと考えました。しかし、機械が必要でできないと判断しました。いまは、アクアリウム用のりゅうや流木をインテリアとして使用できるように加工しようと考えています。インテリアにするときにライトにするなど実際に使えるようなものをつくりたいです。	大和田朝斗	初めは友達二人と私の3人で、自分たちが経験した震災のことを小学生、中学生に伝え震災のことを知ってもらおうという探究をテーマにやっていたが上手くいかなかったり個人的にやりたいことが見つかり、その探究を辞めました。今は一人で探究を進めていて20日に質問しにやな場という所へ行ってきました。現在のやな場には鮭はいないけど私のばあちゃん、その友達数人が檜葉産の、柚、さつまいも、米などを使ってお惣菜やお弁当を作って道の駅に販売しています。この前そのお手伝いをしてきました。	奥山優愛
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
補食の可能性		ふたばメディア		Let's cheer up ふたば!!	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
私は、将来管理栄養士になりたいと食に関することをテーマにしたと考えていました。自分自身、陸上部と広野駅伝チームに所属していてスポーツと食を繋げたいと思っていました。栄養教諭の先生の話聞いて補食は運動している人にとって調子をを整えることを知り、食とスポーツと補食を合わせることにしました。あと、SDGsで食品ロスに興味もあり、家庭内での残りやすいものに目をつけて補食をできないかと考えています。ここまでの調査は栄養教諭の先生の話や、本校の女子サッカー部の先生の話や聞いていました。話を聞いていて私は、補食をとることについて個人でやっているかと思いましたが、本校の女子サッカー部はご飯を食べる際例えば乳製品が足りなかったら、足りない分を先生とやりとりしながら摂取していることが分かりました。私は、少しでもいいからサポートのできることがあればやりたいと思いました。	松本安春己	ふたばメディアを継承してそれを広める手段を探究の一つとしてやろうとしたら想像以上に活動しなくて息詰まっていたやばい事と今まで行われてきた探究を振り返ってマンネリ化等の課題が起こっていないか調べてみたい。ふたばメディアに関しては今後色々話してどう改善するか考えていきたいと思っています。探究に関する考察に関しては先生から資料を買ってまとめていきたいと思っています。要するにまだ計画段階で何も進んでません。これから頑張ります。	長谷川優人	「双葉郡から双葉郡の今、応援、感謝を繋げる」小学2年生から始めたチアダンスの活動の中で出会った人々の想い、震災時たぐさんの人々に応援された経験から、今度は私が地元である富岡、双葉郡から様々なところに応援を返したいと思いプロジェクトを立ち上げた。地域イベントでのダンスパフォーマンス、フチ体験の実施の中で子どもたちの自己表現力、地域の繋がりに課題を感じ、現在は広野・檜葉・富岡の各小学校の先生方へのインタビューを経て、3町合同ワークショップを開催中。今後はこの取り組みを8町村に広げ、子どもたちの変化を調べると共に、8町村のコミュニティ作りを目指していく。	和賀葉々香

メディアコミュニケーション探究ゼミ					
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
松ぼっくりジャム		キャップアートで浮世絵を広める		生理によりそう探究	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
私の探究のテーマは「松ぼっくりジャム」です。部活どうで広野町散策を行った際に、案内をしてくださった町民の方が「広野町の松ぼっくりでなにか作れないか」と言ったのをきっかけに松ぼっくりに興味を持ち、調べてみたところ松ぼっくりジャムがあることを知り、その珍しさから広野町になにか貢献できないかと思いこのテーマにしました。また、広野町の松ぼっくりを使う際に、空間線量測定器を使って広野町の安全性も伝えられたらなと思っています。今は広野町で取った松ぼっくりを学校にある空間線量測定器で線量を測っている作業を行っています。1度ではなく何度か測り、より安全性を示せたらと考えています。そして、松ぼっくりジャムを使ってどうやって地域へ貢献できるのかを模索しています。	佐伯香音	私たちは、キャップアートで浮世絵を広めることを目標に活動しています。浮世絵は江戸時代に国民の間で人気でしたが、今となっては知られてはいませんが、興味を持っている人は多くはありません。私たちは、地域に何かできるかを考えたとき、ペットボトルのキャップが分別されていないことに注目しました。そこでキャップを使った浮世絵アートを作ることによってペットボトルとキャップの分別につながればよいと考えました。	樋水茜里 安部真利愛	私は生理の貧困を世界的な問題と捉え、まずは身近なところから解決のためのアプローチを試みています。貧困は金銭的な面だけでなく、心面でも貧しさはあります。私は生理がある人もない人も、正しい理解と平等な機会があるべきだと考えています。自分に出来るアプローチはまだわずかですが、まずは自校の生徒からの声聞き、具体的にはトイレにナプキンの設置・生体睡眠の取得を試みています。最終目標としては、世界から生理に対する過剰な差別がなくなり、不便な思いが減ることです。	川名春香
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
殺処分について(仮)		非常食の準備を当たり前に		不自由なく過ごすとは？	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
そもそも殺処分というのがあることには何らかの要因があると考えます。思っていたよりお世話が大変・費用がかかる、懐いてくれない、うるさい、など小さなことで命を育てるということを放棄し、一時的な感情で無責任に尊い命を捨てていく人もいます。そのような勝手な理由で動物たちの命を奪われたくないと思ひ、まずその要因に私たちが寄り添っていくことと考えました。探究活動で私たちにできることは限られていますが、内容としては、まず広野町のペットを飼っている方々に直接コミュニケーションを取りながら調査し、何か悩みや問題がないか聞き出したと思います(アクション1)。そして、広野町の方から出てきた課題を元に私たちができることを考えて実行しようと思います(アクション2)。その際、アクションを起こす前に、あがりそうな課題や悩みを私たちがでも予想してみても、実際はどうか比べてみようと思います。そして、命を育てるうえで大切だと思うことや責任の大きさを、実際にペットを飼っている私たちなりにまとめ、聞いてくださる方に少しでも伝えられればと思います。	林日菜 吉田瑠佳	避難所での避難生活は心身にストレスを感じるものだと思ひ、読んでいたことと違う。非常食や避難所でのストレスなく過ごすためにはどうしたらいいか考え、食事であれば個人でできることがあると思ひました。備蓄する非常食の量や備えておかなければならないものの情報をまとめて発信したいと思ひている。家で作れる非常食の紹介などもやっていきたいと考えている。多くの人が防災の意識を持ち、これから起こると想定されている南海トラフ地震や富士山噴火のときに自分やまわりの人の命を守り、幸せを感じながら過ごせるような社会になったらいいと考えている。	大和田紗希	私の探究のキーワードは、「バリアフリー」「障がい」「不自由を少なく」です。なぜこの探究のキーワードにしたかという、ふたば未来学園の生徒さん、私も含めてですが、大きな怪我をして不自由な生活をおくっている人、町民の方や広野町に訪れた体の不自由な人がいると思ひます。その人たちがどうやって不自由なく暮らせるかを考えた時に、広野駅のことを思ひ出しました。広野駅はどちらかと言えば駅自体も小さめで、エレベーターやエスカレーターなどありません。私自身怪我をするまで不自由を感じませんでした。怪我をしたときや、怪我をしている友達の手助けをしたときに「あれ？もしかしたら私が感じていた不自由ない暮らしは、他に障がいを持っている人からしたら、不自由ある暮らしなのでは？」と感じました。その時にこの三つのキーワードを見つけて、今回の探究キーワードにしました。	坂本涼

メディアコミュニケーション探究ゼミ					
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
絵本で東日本大震災を伝える		子どもの貧困を増やさないためには		福島を海外の人たちに伝える	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
東日本大震災についての絵本を作り、多くの人たちに正しい知識を持ってもらい、震災を知らない子供たちにも東日本大震災について、また、正しい知識を伝える。そして、また同じような大災害がおきた時、命を落とさないよう、知識を持って行動できる人が増えるようにしていきたい。絵本を通して、命の大切さや災害の怖さなども知ってもらい、当たり前のように生活できることへのありがたさや他人事ではなく、自分にも起こりうることだと自覚をもってもらう。	館尾亜里紗 高橋明日花	私の、研究テーマは子供たちの貧困を増やさないためにはどのようなことが出来るかを元に活動しています。今現在問題になっている虐待や育児放棄など様々な問題が挙げられます。そこで、寄付里親という言葉を見つけました。寄付里親とは社会全体で子供たちを支援するという取り組みです。アクションとして寄付里親のとらきみをしている大阪の人とズームで繋がりが詳しく聞きたいと思っています。	高崎菜々美	自分たちの実体験から、海外の人たちから福島は良くない印象のまま10年が経っているのではと感じた。中国と韓国に興味がある私たちは、その二つの国の人たちをメインに、双葉郡の自然や郷土料理などの魅力的なところについて発信していこうと思った。動画作りや外国の人との交流を考えている。そこで、発信方法や伝え方、対象を絞ったのでこれからアクションにうつりたいと思う。	渡邊光季 吉田優美
発達障がいに対する取り組み		ふるさとの記憶を伝えよう		福島と世界	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
発達障がいの子どもが増えている中で、日本では学校生活では補えない療育ができる施設が少ない。あったとしても、療育が行き届いているかわからない。その中で、私は、今の日本の現状や福島県内の現状をしていわき市での現状を調べ、比べてみる。実際に、小学校で支援学級に入っている子どもの親へのインタビューや、療育施設に通う子どもの親御さんの声を聞こうと思っている。将来私は、医療と連携した療育施設を立ち上げたいと考えている。	蛭田萌々花	この探求を通して私は、私たちより下の年代の人にも、自然豊かで教育熱心で魅力が沢山ある自分のふるさと、大熊町を知って欲しいと思っています。そして、自分たちのふるさとに誇りを持って欲しいと思っています。そこで、私は海外と教育に興味があるため、小さい子たちに英語を混ぜてふるさとを伝えていきたいと考えています。伝えることで自分の故郷を伝えられると共に小さい子たちと関わり新しい気づきを得ていきたいです。	新田 萌	オリンピックなどで、福島の食材が色々と言われてまわってそれを聞いた時に、正しい知識がないからこのようなことを言っているのでは無いかという疑問が生まれました。そこで、僕は元々Instagramなどで外国の方との交流などが多くあったので、少しでも多くの人に伝えれば、その人も周りの人に伝えられるのではないかと思います。Instagram、Twitterなどを通して、多くの知識や、情報などを発信しようというふうに考え、今回の探求をやらせていただきました。探求内容は主に、Instagramなどで、外国の方々と話をして、印象を聞き、これを改善するために、TwitterやInstagramで情報を流すという活動(?)を行っています。	堀川優斗
音楽から		Enjoy園歌		浜通り×聖地巡礼	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
私は、音楽を制作しにかかっている。音楽制作は、具体的に町の歌を作りたいと考えている。そしていまはコロナ化だが、音楽の発表を様々なところで行いたいと考えている。そして、コミュニケーションや、音楽のヒーリングで、様々な人の心を癒すことができるように思う思いを込めて探求に取り組んでいる。私は音楽はかかせないとおもう。誰しも音楽は聴くものだ。それを最大限活かす、なおかつ地域にあった誰でも口ずさめるような音楽を作成していきたいと思う	齋藤康洋	「震災前の園歌の覚え方は今も受け継がれているのだろうか？」という探求テーマで進めています。この探求をしようと思ったきっかけは、子どもが好きだからです。あとは、やりたい事がなかった自分の好きな分野でやってみようと思い、この探求になりました。まだ、明確ではないのですがやりたいアクションとして、旧幼稚園を使ってなにかやりたいなと思いました。もっと頑張りたいです！	八巻希美	「浜通りについてあまり知らなかった」「こんないい所があるのに、今まで気づかなかった」以前、浜通りの外(県内)に住む友人にこう言われました。この事があって、浜通りの魅力を外の人達にもっと知って欲しい、震災前以上に観光客を呼び込みたいと思い、このプロジェクトを発案しました。キーワードは「楽しい情報」と「聖地巡礼」。きっかけは楽しい物がいいな、という願いを込めています。	村山空留実 村上翔悟
風評被害と心理		郷土料理を広める		男性も保育の仕事を目指しやすい社会にするためには	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
私は風評被害と心理について探究しています。まず、私がなぜこの探求テーマにしたかという点、双葉郡の課題の中で興味がある課題は風評被害についてでした。私自身も父が単身赴任先で風評被害を受けたのがきっかけで興味がありました。それと私が大学に進学して心理学を学びたいと思っているのでこのふたつをうまく組み合わせられないかと思いこの探求テーマにしました。まず、福島に対する偏見、差別はこのようなものが挙げられます。被害にあったのに確信の無い情報のせいで風評被害に苦しめられています。風評被害はなぜおこるのかという点と日本政府の誤解を招くような発表が理由としてあげられます。その偏見、差別が福島の人々に及ぼした影響はこのようなものです。そこで思ったことはこのふたつを上手く組み合わせることで探究出来ないかということです。	鈴木麻友	「今の若い人は郷土料理を知らなかったり知っているけど食べたことがないことがほとんどで自分たちもそうだと感じ自分たちでも郷土料理を勉強しながら若い人達に広めていこうと考えました。まず自分たちでできることを考え郷土料理を作ってみることにしました。最初は個人で夏休み中に福島の郷土料理の味噌かんづらを作り夏休み明けの探求の授業で豆みそを作りました。まだここまでしか活動はできていませんが、これからは他にも少し郷土料理を作れるようになって人に教えられるレベルになったら郷土料理をみんなで作るワークショップなどを開いていきたいと考えています。	鈴木杏 石井楓恋 渡辺咲枝里	このテーマに取り組んできて、まず初めに今の保育でどのような問題があるのかと考えました。保育問題について考えたいと思い、いくつか問題を挙げてその中で保育士不足について調べようと思いインタビューを行いました。インタビューを行ってきて教育実習生の大学生二人の話が特に気になりました。大まかにまとめると、男性が保育の仕事を目指しにくい社会があるのではないかとということです。これから取り組もうとしていることは、これから保育の道に進む男性にインタビューすること、低い年齢の人たちに向けて保育の魅力を発信するという事です。	青木康汰
古着リサイクル		双葉郡を海外へ		果物の砂糖で情報発信	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
古着リサイクル(リメイク)によって、古着の捨てられる数を減らし、環境に貢献する。古着をリサイクルし、タオルやハンカチ、ぞうきんなどにする事で使えなくなった洋服でも寿命を伸ばし、資源の長期化を図りたい。洋服のリメイクをすることで、男女どちらでも着やすい服や、どんな世代でも着れそうなファッションを作ってみよう。国内だけでなく国外への洋服の足りない国へ支援することで世界的にも古着の重要性を知らせたい。	下河邊 望来	私のプロジェクト内容は、海外の高校生とオンライン交流会をして双葉郡を知ってもらうことです。内容としては、震災を経験したことのある人から経験談を詳しく聞きその話を海外の高校生に教えたり、その人と呼んで話してもらったり交流の場を主催する予定です。交流する前に、福島の印象を聞いて5段階評価してもらい、紹介した後も5段階評価をしてもらい知る前と後で変化をはっきりさせたいと思いました。	小野寺真白	双葉郡の果物を使って砂糖を作り、その砂糖でジャムを作る。そこから地域活性化を目指す。果物から砂糖を作る方法、双葉郡で作る果物達、ドライ柿の作り方、ドライ柿のいい所、果物から作る砂糖のメリット(普通の砂糖と何が違うのか)	穂積琴音 橋本樽子 馬目逸希

再生可能エネルギー探究ゼミ					
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
風(風力)の研究 (仮)		再エネで広野町に彩りを		土壌	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
調べること 風力発電の仕組み。今ある3つの風力発電(一般的なもの、洋上風力発電、マグナス式風力発電)を分析する。(メリット・デメリット、設置・稼働時における事故、材質、重量等) 風が吹くのはどんな条件がそろった時なのか。対角線上にある窓を開けると風が通るのはなぜか? 風力発電を設置するのに適した場所の条件とその条件に合致する場所。広野町の風向、風速など(アメダス観測)。 やってみたいこと(できるかどうかはわからない)は人工的な風の発生。弱い風でも発電できる風力発電装置の製作	渡辺彩夏	小水力の開発をし、作った小水力発電を使って地域のためになにかできないかと考えた原子力防災のひとつはさんと一緒に、小中高の通学路に街灯が少なく、夜道が危ないと感じ、自分に何ができるかを考えたひとはさんとで、再エネを使って広野町に街灯の代わりとなるイルミネーションをしたいと思います、協力して探究を進めることになりました。小水力と太陽光、風力(仮)を使ったイルミネーションの明かりで、広野町を明るく元気にします。	貝沼秀基 鈴木一真 西間木健太 中島一葉	概要としては現在中間貯蔵施設に貯蔵してある約808.3万m ³ の土壌から最終処分量を低減するための再生利用が鍵とされており、その貯蔵されている汚染土壌の中から再生利用可能濃度の土壌を異物除去、濃度分別、品質調整を行い、公共工事等で管理した上で、やっと再生利用が可能状態です。このような過程をこなせるのは高校生の僕達では無理と判断し、もっと他の方法で簡易的にある程度濃度が低い汚染された土壌を再生利用をし、地域や社会に福島安全性をもっと理解出来たらいいなと思いこのプロジェクトを実行しようと考えました。	遠藤聖太 小松藍人
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
二酸化炭素削減		「水素」について広める			
内容	メンバー	内容	メンバー		
二酸化炭素と、地球温暖化の問題を繋げて二酸化炭素と温室効果ガスの違いや、二酸化炭素を削減するメリットや、取り組み、それら取り組みによってそれぞれどの程度二酸化炭素を削減できるのかをまとめました。また、二酸化炭素排出率の現状や企業や国の取り組み、実際に私たちにできる省エネや水の節約など簡単に二酸化炭素削減に貢献できる方法などをまとめました。聞き手が見やすいようにまとめました	平田遥翔 佐藤翔	わたしたちの探究テーマは水素についての知識を地域の人たちに広める活動です。この探究をやろうと思った理由は、双葉郡には福島水素エネルギー研究フィールド(FH2R)があるが地域の人たちはどのくらい水素についての知識があるかを調べ伝えるためにこの探究をしようと思いました。まず自分たちは、水素についての知識が浅いので、人に教えられるくらいの知識を身に着けるとそこから始めました。これからは、学校や地域の人たちに伝える活動をしていきたいと思います。	門馬新 鈴木博士 横山海斗 渡部拓斗		

アグリビジネス探究ゼミ					
双葉郡の魅力伝える化粧品開発			ふたばの新土産 せっけんせっけん		
内容	メンバー	内容	メンバー		
私がこのプロジェクトを始めた理由は、少子高齢化・過疎化や双葉郡の魅力が知らないことが気になったからです。なので商業で学んだことと、自分が興味を持っている美容を組み合わせたいと思いました。双葉郡産の果物を使った化粧品を開発し、それを使って魅力を発信して双葉郡に興味を持ってもらいたいと考えています。また、双葉郡産の果物を使用することで風評被害の削減にも繋がったらいなと思いました。	山内菜々	双葉には八町村があって、それぞれの特産物はいっぱいあるけど、双葉郡を代表する特産物は少ないと思いました。今コロナで頻繁に手を洗う際に使われる石けんにそれぞれの代表的なものを入れていきたい。例えば、川内の蛙、櫛葉藍染め、富岡の桜、浪江の焼きそば、広野のみかんやバナナ、大熊のいちご、葛尾村のヤギ、双葉だるまをイメージした石鹸を作りたいと思います。これをきっかけ、県内外も、話題となり、もっと興味を持ってくださる人が増えたら、嬉しいです。	佐川生華		

健康と福祉探究ゼミ					
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
交流で心もからだも健康に。		地域リング		介護士増員計画 ～NEXT GENERATION MEMBER～	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
私は震災前、檜葉町に住んでいました。そして震災後、いわきに避難して高校入学と同時に戻ってきました。その時まず感じたのが、震災前と比べると地域の人との交流の場がなくなってしまった、減ってしまった、悲しいということでした。知り合いからも同じような話を何度も聞いて、以前のような活発な交流を復活させたい、地域の人・高齢者の方にもっと元気になってもらいたい、そう思いこれまで探求を進めてきました。今は大きなアクションを起こしてはいませんが、これからイベントを開いたり、zoomで交流をしたりしたいと思っています。興味のある人はぜひ参加してみてください!	松本 花	探究テーマは「地域リング」で、目的は子供と高齢者と障がい者の交流を増やすことです。この探究をやろうと思ったきっかけは、元々運動を通して子供が高齢者と障がい者の別々の探究をやっていました。ですが、運動を通して交流することが共通点だったこともあり、子供と高齢者と障がい者のみんなで交流をするということにしても面白いのではないかと、と思い、この探究を始めました。私たちの最終的な目標は、運動を通して地域の交流を増やし、互いに助け合える活発な地域を作ることです。	有賀菜月 村上舞	私の探究の目的は、福祉科で生活援助従事者研修というものを行っている、今後高齢者が増えていき、介護士が少なくなっていくということを知ったからです。介護というものは誰にとっても、決して遠い存在ではなく、家族やお友達などのお世話をすると共に役立つものです。なので、介護職に興味がある人でも、介護職に興味がない人でも、介護職に興味はあるけど大変そう…辛そう…などと思っている人に少しでもいいから、仕事内容を知ってほしいと思いました。	大山未来
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
幼児と音楽・幼児と運動		障害者の避難について			
内容	メンバー	内容	メンバー		
私たちは、「幼児と音楽」「幼児と運動」をテーマに探究活動を行っています。また、コロナの影響でなかなか交流する機会が少なくなっている現状を感じ、子供たちの笑顔を増やしたいと思いました。そのことと、自分たちの好きなことである音楽や運動を結びつけたテーマにしました。これからの時代の中心となる子どもたちが、もっと元気に楽しく過ごせる状況が増えていくために、今ある施設や何かをいかしていきたいと考えています!	片山希良里 大川原菜々海	“東日本大震災の津波によって障害者の多くは津波から逃げきれずに死亡してしまったり集団での避難生活で辛い思いをしました。その多くが、地域住民の声掛けで助かったかもしれない命もありました。避難所ではハイリャフリーが整っていない、自分から障害について発信出来ずにいる人がいました。障害を持っている人が地域との関わりを持って災害時に安全に避難やその後の生活に少しでも不安をなくしたいです。”	三村咲綾		

健康と福祉探究ゼミ					
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
LGBTを理解する		中高生が将来にわたって、役立つ正しい食生活をみにつけるには？		DANCEでたくさんのSMILEを！	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
まずは全体(日本だけでなく全国)を通してLGBTがどういうものなのかを何んとなくだけではなく詳しく正しく理解してもらい、理解したうえで自分の身近な地域から濃くひろめていくと共にLGBTの人が生きやすく、住みやすい街、地域を目指すことです。そのために自分で決めたアイディアは、自分がLGBTを理解するというテーマにするきっかけとなった動画をみせること。これは、自分がどれだけ真剣に取り組んでいるかがわかると思っています。そして、広告を作って差別の深刻さを知ってもらう、他人事ではなく、ひとりひとりが自分のことのように考えてもらうこと。これは、少しでも差別や偏見の目をなくすように努力するためのです。	あゆちゃん	自分は、中高生が将来にわたって、役立つ正しい食生活をみにつけるには？を問いに活動しています。まず、福島で問題になっているのが生活習慣病です。しかも、福島県でメタボ率がワースト4位なんです。その原因のひとつが食生活です。これをきっかけに私はどうすれば、健康な食生活を送れるのかを調べることになりました。今のところネットで調べたのでは、肥満や高塩分摂取の要因となる食行動をしています。例えば、朝食欠食、味がとても濃い食事ばかり。野菜を食べる頻度は毎日1回未満、と言った結果が見られました。本当に残念でした。なので私は将来がある中高生を対象にアンケートを取ろうことになりました。結果はまだです。その結果を元に、また色んなことを調べていきたいと思っています。	吉田な	私たちは、今コロナなどでなかなか外出できない地元や地域の子どものために私たちができることはどんなことをテーマにして探求活動しています。なぜこの探求活動をやるのかと思ったかという、まずコロナで自由に出歩けないことによりストレスが溜まってしまっている現状に着目しました。そこで私たちに共通している体を動かしたりすることが好き、人と関わる仕事が好きという共通点から、ダンスで体を動かし人と関わりながら何か出来るのではないかと考えました。またダンスには身体や心を活性化させたりする効果があります。このような効果からコロナによるストレスを軽減し、笑顔になれる日を増やすことができるのではないかと考えました。	大柿 百加 星涼乃

スポーツと健康探究ゼミ					
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
健康を通して肥満を減らそう		コロナ禍でもスポーツ観客数を増やそう		スポーツを通して広野町を健康で活気のある町にするためには？	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
“私たちは健康を通して肥満を減らそうというテーマで活動しています。そこで私たちは私たちの一週間の食事の栄養素を調べ何が足りているのかまた何が足りないのか、取りすぎているのは何かを調査しました。それで私たちは炭水化物や糖質を取りすぎていることがわかりました。また、逆にビタミンやタンパク質が足りないこともわかりました。そこで私たちは1日必要なカロリーや栄養などについて調べ、必要な栄養を取れる食べ物を作ることになりました。それを完成させたらそれを皆さんに広め健康で生活習慣の整った社会を目指します。”	柳沢紅芽 門馬洋平 平子朝陽	“まずはスポーツ観戦をするために、どのようなコロナ対策をしているか、色んな人に連絡を取りました。まずは、高校野球連盟の鈴木様に連絡させていただきました。鈴木様には、夏の高校野球のコロナ対策について聞きました。そうすると、コロナで運営する側の人数を減らすことはできるがその分人手不足になってしまふ。ということがわかりました。そして次は観戦者の立場になって見ました。そこでは、ビール販売、飲食、席はあまり開けてないなどがわかりました。しかし、マスク、計温、消毒は徹底的にやりました。そして、まん延防止が解除後と帽子の時の対策などは違うのかと聞きたく、いわきFCさんにお話を聞く予定です”	横田慶太	肥満度が高い福島県、そこから運動不足が課題だと感じて運動で広野町を活気のある町にしようとおもった。活気のある町にするために、小学校低学年、高齢者向けにスポーツイベントを行いたいと考えた。理由は低学年の子たちに運動や体を動かすことの楽しさをしってもらうれば、成長していくにつれ活気のある町になっていくとおもったからだ。また高齢者を対象にした理由は少子高齢化が進んでいて高齢者が多いので運動や体を動かすことの楽しさをしってもらうれば人数が多いので広野町が健康で活気のある町になると思ったから。実際に小学校低学年向けにイベントを行った。すぐ夢中になって楽しんでくれた。先生方にもほめていただいた。またやりたい、楽しかった、好きになった、という声がたくさん聞けた。目指す町に近づけたと思う。これからは活気のある町にするためにスポーツイベントなどをもっと行って体を動かすことを好きになってもらえるようにしたい。	山口龍之介 さとうれお 遠宮こうせい かんのたくみ しおたりく 磯上ゆうた 高橋じゆうさ
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
スポGOMIで町をきれいにする		スポーツをする人のけがをしなない体作りを支える			
内容	メンバー	内容	メンバー		
私のプロジェクトは、スポGOMIというスポーツを取り入れたゴミ拾いを、探究として取り組めるよう少しオリジナルを入れて開催し、自分たちがお世話になっている広野町をきれいにするというものです。ですが、ただ町をきれいにするだけでなく、町をきれいに保つ意識、ゴミを捨てるべき場所に捨てるという意識を町民の皆さんに持ってもらうことを目標に取り組んでいます。イベントを通してただただ町をきれいにするだけでは継続的に町をきれいにできないと思います。ですので、きれいにするというところに視点を置くのではなく、どのようにすれば町民の皆さんに町をきれいに保つという意識を持ってもらえるのか、ということを大切にしています。	梅津心	私たちの班は、マイキーワード『スポーツ』という共通点を持った野球部とサッカー部計四人で集まりました。私たちの探究テーマはスポーツをする人の、けがをしなないからだづりを支える。です。けがで、スポーツをやめるひとをなくしたいということで、このテーマにしました。まず、ケガをしなないからだを作るには、と、考えたときプロテインを飲み体を作ろうと考えました。そのために皆さんにプロテインに関するアンケートに答えていただきました。しかし、管理栄養士の水口さんにお話を聞き、アドバイスを頂いたところケガをしなない体を作るには、炭水化物を摂取しない限り効率よく疲労回復や栄養を吸収しないとおっしゃっていました。そこで僕たちはそのアドバイスをもとに、現在試行錯誤を繰り返しています。今はプロテインを手軽に、苦手な人も食べれるようにアイスにするプロテインアイスプロジェクトと、ケガについてのプロジェクトをしています。	吉田翔 添田心斗 大矢聖聖 佐藤哉汰		

スポーツと健康探究ゼミ					
探究テーマ		探究テーマ		探究テーマ	
バドミントンで地域活性化		肥満児を減らそう		運動しながらゴミ拾い	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
<p>“みかんクラブに行った時にバドミントン競技者が少なかったため、バドミントンに力を入れている私たちが自分たちの経験を活かしてバドミントン競技者を増やす。</p> <p>みかんクラブに行き、小学生対象のバドミントン教室に見学して感染対策や、小学生への対応、練習内容など、色々なところを見て学んで、実際に自分たちが小学生対象でバドミントンを開く。そこで学んだこと、大切なことを実行していく。</p> <p>小学生や広野町にバドミントンのたのしさを伝える。”</p>	岩野滉也 齋藤駿 崎野翔太 藤田真亨 松本雛 渡邊愛夕	<p>私たちは、肥満児を減らそうというテーマでやっています。駅を歩いている時や街を歩いている時に小学生とすれ違うと肥満体型の人が多くなると感じ、このテーマでやっています。気になって調べた時に福島県は肥満児が多いというデータが出たので気になって調べたいと思いました。まずは広野小学校でアンケートや運動をして、小学生に運動する楽しさを教えてあげたいと思っています。探究の終わりに小学生に運動の楽しさを知らせていきたいと思っています。</p>	持館大晟 比佐優津希 半谷洋凱 坂本羅太	<p>“広野町からゴミ捨て場やゴミが落ちていないとても綺麗な町を作るために効率よく、そして自分達の好きなスポーツを関連させてゴミ拾いが出来ないか？</p> <p>ここからスポーツをどのように関連付けるかも難しいところですが、しかし、まずは広野町を知るための行動を起こす必要があると思う。</p> <p>この広野町に住んでいる人、何かの縁でこの町に関連がある人に、自慢出来るような町にできるように活動する。”</p>	遠藤悠斗 吉田 涼
パークゴルフ		運動不足を無くして行こう		FMGS	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
<p>自分たちは肥満率を低下させることを目標として立てました。だがどうやって低下せよと考えた時に、先輩のパークゴルフという探究があり、もしかしたらパークゴルフで肥満率を低下させること出来るんじゃないかと思いき、パークゴルフの探究を引き継ぐことになりました。</p> <p>まず動きとしては、高校生を対象とした肥満率のアンケートを取りました。次の動きとしては自分達が実際にパークゴルフを体験しに行き、ルールやコツなどを知ることから初めていきます。できれば、広野町の人を集めてイベントなどの開催を目標としています。</p>	奈良原志道 庭瀬宙太	<p>“自分が行っているプロジェクトは運動不足を無くして行こうです。</p> <p>このプロジェクトは地域の人の運動不足を無くし地域の活性化をはかっていこうというものです。</p> <p>まず自分がこのプロジェクトを通して行きたいことは運動というものの大切さを年齢問わず伝えていきたいということです。今のご時世、外へ出かける事が少ない中で運動不足にならないためにどうすればいいのかという考えが大事になってくると思います。そのような情報を自分が地域の人に発信していきたいと思っています。そして最終的には地域の人と運動を通して交流をはかって少しでも運動不足の人を無くしていこうというプロジェクトです。”</p>	高橋和暉	<p>女子サッカーの人口を増やすにはどうしたらいいかを考え、まずはサッカーに関わる人は女子サッカーについてどう考えているのか、どのように思っているのかを質問しそこで回答を元にどうすれば女子サッカーを様々な人に知ってもらえるようになるかと考え、Instagramの開設をして女子サッカーの動画や写真を載せました。少しでもInstagramを見た人が女子サッカーについて興味をもってもらうように女子サッカーをやりたいとおもって貰えるような投稿にしたいです。これからはイベントの開催、様々なSNSの開設・更新をしていきたいです。</p>	福富心春 戸崎良有子
野球人口を増やす		Easy Sportsでnotニガテ		動いて話して伝えよう	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
<p>私たちがなぜこの探究テーマにしたかと言うと、自分らは野球をやっており、野球人口が減っていると聞いたこと。また、広野町の運動不足を解消するため、双葉郡は昔、野球が盛んな地域だったので、なんで野球が減少しているかをインターネットで調べたところ、野球に対する悪いイメージを持っている人が多く、良いイメージもあるが良いイメージより悪いイメージが強く興味をもってもらえないのが今の現状です。</p>	岩佐翔多郎 安孫子恵太	<p>これまでに2学年全体に向けてスポーツに対してのアンケートをとり、運動が苦手や嫌いな理由は幼い頃からスポーツをやっているかやっていないかが関係すると思ったので小学生の低学年向けにスポーツの楽しさを伝え、多くの子供たちにスポーツに興味を持って貰えるようなスポーツを自分達で考え、そのオリジナルスポーツを広め、たくさんの人に知ってもらい、実行してもらえようとする。</p>	緑川然 渡部羽孔	<p>私たちは、体育館に高齢者、幼い子どもなど幅広い年代の人を集め、高齢者が今の子供に昔の遊びなどを教えて、交流を増やす。また、今の子供はゲームばかりしているので、体を動かして、ゲーム以外のことに興味を持って欲しいと思いき、このようなプロジェクトを考えました。このプロジェクトをすることで、小さい子供も高齢者も健康に繋がると思っています！</p>	齋藤久遠 柴田 千帆
サッカー部で広野町をげんきにさせる		怪我をなくして笑顔広がる世界を創る		外遊び減少解決	
内容	メンバー	内容	メンバー	内容	メンバー
<p>自分たちの探究テーマはサッカー部を通して原町を元気にするです。探究テーマを決めた理由は先生にサッカー部を通して何か活動すれば良いんじゃないかと言われる、一番身近な広野町の、町民の方々がサッカースポーツに興味を持ちサッカー部の試合を見ることを楽しみにしてくれるような活気のある街にしたいと思ったからです。そこで今、自分たちは、スポーツに興味があるか、生活している中で楽しみにしていることはあるかと言うアンケートを役所に出そうとしています。また富岡高校の元校長先生の青木先生にどうして富岡高校のサッカー部は地域の方々に応援されるチームだったのかお話を聞くアポをとり、お話を聞きたいと思っています。これが僕たちの現状です。</p>	足立賢彦 村上真斗 山澤優和	<p>僕たちは、主に二つのあるべき姿を探究していきます。1.スポーツ選手が怪我に対する正しい知識をもって、安心に全力でスポーツができるようになるというものです。まずは自分たちが正しい知識を学びそれをスポーツをやりたくても怪我で悩んでいる人たちに発信して少しでも力になりたいからです。具体的にはYouTubeやサイトなどを使い伝えていきます。</p> <p>2.地域の人が正しい知識をもって安心して生活できるようになるというものです。自分たちの探究で地域の活性化に繋がってほしいと思ったからです。具体的には実際に講習会を行ったり、ポスターを作ったりして伝えていきます。</p>	遠藤太勇 松崎元輝	<p>まずは、この町では外で遊んだりしている子をあまり見たりしないので、ぼくたち二人でみかんクラブさんに協力をお願いして、町の子供達に外で遊ぶ楽しさを知ってもらうことから始めます！そして、数人がはじめることで、周りの友達も一緒にやり始めてくれればこの町の外遊び減少解決に近づいていけると思います。次に、小学生にアンケートをとり、どのくらい外で遊んでいるのかと言う割合を調べることで、この町の子供達の割合を調べる人とならない人の共通点を把握し、遊んでいる子はそのまま継続してもらい、遊ばない人は、僕たちと一緒に動いたりして、外遊びの楽しさに気づいていってもらえたらいいなと思います。最後に外遊び減少を解決して、子供達が元気に遊ぶことによって町が活性化されて行くように活動を進めて行きたいと思っています</p>	草野彰仁 井堀優陽

大熊産イチゴのパンを特産品に

ふたば未来学園高 久保木さんが試作



試作品のパンを見せる久保木さん

ふたば未来学園高三年の久保木ふうかさん（モ）いわき市は大熊町産のイチゴを使ったパンを試作した。九月までに完成させる予定。完成後は大熊町のイベントで配布したり町内の店舗で販売したりして新たな町の特産品の一つとして発信する。

UFOのような形特徴



パンを試食する参加者

久保木さんは地域の課題を見つけて解決策を考案する同校の授業「未来創造探求」で食と関わりのある取り組みができないと生産している点に

注目した。

久保木さんはデザイン提案やパンの製作などに取り組んできた。完成した試作品のパンはUFOのような形をしている。東日本大震災前に町内で人気があり、町民に親しまれていた「UFOパン」を参考にした。ネクサスファームのおおくまが生産したイチゴを乾燥させて生地に加えた。

二十一日、大熊町役場でパンの試食会が開かれた。町やおおくままちづくり公社の職員らが参加した。久保木さんは「パンを通して町民のコミュニケーションが生まれたらうれしい」と話した。

福島民報 2021年7月24日(土)



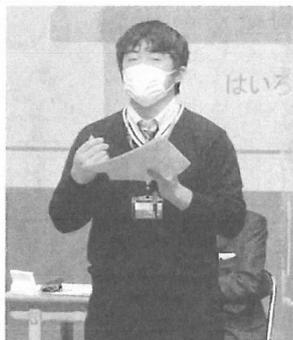
多様性踏まえ情報発信を

浪江で廃炉国際フォーラム

東京電力福島第一原発の廃炉に向けた課題に理解を促す「第五回福島第一廃炉国際フォーラム」は三十一日、浪江町地域スポーツセンターで始まった。初日は地元住民や有識者らによるパネルディスカッションを開催。廃炉作業に関し、地域や年代など多様性を踏まえた情報発信の重要性について認識を共有した。

東日本大震災・原子力災害伝承館の高村昇館長が司会を務めた。浪江町の任意団体「なみとも」の小林奈保子代表は、廃炉や放射性

物質トリチウムを含んだ処理水の海洋放出方針などに関する情報発信について、現状ではターゲットが不明確と指摘。「情報を届けた相手に応じた発信が必要だ」と訴えた。原子力損害賠償・廃炉等支援機構（NDF）の山名元（はじめ）理事長は「情報がしっかりと伝わるよう努力をしていく」と語った。フォーラムはNDFの主催。開沼博東京大大学院情報学環准教授（いわき市出身）が総合プロデューサーを務め、約二百人が来場した。昨年、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止したため、二年ぶりの開催。最終日の一日はいわき市のアリオスで開く。



廃炉などに関する意見を発表する高校生

廃炉と古里の復興 県内高校生が意見

フォーラムでは、NDFなどが事前に催したワークショップに参加したワークショップに参加した高校生が、廃炉の在り方や地域復興について発表した。

会津学鳳高、日大東北高、ふたば未来学園高、福島高専の四校から計六人が登壇した。生徒らは「若者に廃炉を自分事として捉えてもらうような取り組みが必要」「双葉郡に足を運んでもらう機会を増やすべき」など、古里復興に向けた自身の意見を述べた。有識者らは生徒の発表に熱心に聞き入っていた。



君が学ぶと
世界が変わる

77

ふくしま学びの
ネットワーク
事務局長
前川 直哉

まえかわ・なおや 兵庫県尼崎市出身。灘高に在学中、阪神大震災を経験。東京大教育学部卒、京都大大学院人間・環境学研究科単位取得退学。灘中・高の社会科教師を務めていたが、東日本大震災発生後、「教育を通じて復興を支えたい」と退職して福島市に移住した。2014（平成26）年4月、ふくしま学びのネットワークを設立し、事務局長として県内の学習支援活動に取り組んでいる。現在は、福島大教育推進機構特任准教授も務めている。44歳。

活動とPDCA

十月三日、福島市の自治会館を審査会場に「ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト」が開催されました。福島県教育委員会とふくしま学びのネットワークの主催、福島大学アドミッションセンターの共催で、前身の「社会活動コンテスト」から数えて八回目となります。

今年度の本選には県内各地から、予選書類審査を通過した十二グループが出場しました。本選は新型コロナウイルス流行の影響でオンライン開催となり、各グループと審査会場をWeb会議システムでつないで行われました。どのグループも活動内容を魅力的に発表し、レベルの高さに審査員の先生方も皆さん驚いておられました。

今年度の最優秀賞は、白河市で活動する学校を超えたグループ「チームしゅわしゅわ」が受賞しました。地域のカフェを貸し切り、手話で接客するカフェを高校生で運営するという活動です。「全ての人を楽しめるコミュニケーションをとれる社

高校生のエネルギーに驚き



10月に行われた「ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト」本選。Web会議システムを利用して開催された

会を目標に、手話に気軽に触れ合える場所をつくり、ふだん手話にあまり関心のない人にも手話と接してもらおうという取り組みです。六月に行われた手話カフェには五十名が参加したそうです。

優秀賞には、白河市東地域でまちおこしを行う「白河高校Smile More ひがしプロジェクト」、今と未来をつなぐ語り部活動を主軸として活動する「ふたば未来学園高校

社会起業部」、そしてWebサイト「ふたばメディア」を立ち上げ、自分たちの高校の盛んな探究活動を整理・発信している「ふたば未来学園高校メディアコミュニケーションゼミ」ふたばメディアグループの三グループが選ばれました。他のグループも生徒たちの主体的・自発的な活動がそろう、柔軟なアイデアを実際に行動に移す福島高校生のエネルギーに私自身も驚かされました。

審査委員長の佐野孝治先生（福島大学副学長）は、各グループの発表を聴いた後、「PDCAサイクルをしっかりと実施している活動が多い」と高く評価しておられました。PDCAサイクルとは、Plan（計画）、Do（実行）、Check（評価）、Action（改善）の頭文字をとったもので、ただ単に活動をするのではなく、事前に計画を立て、活動を実施した後には反省点を振り返り、改善して次の活動につなげる一連の流れのことです。

確かに今年度のコンテストでは、「やりっぱなし」の活動ではなく、来場者や参加者に対してアンケートを実施し、自らの活動を客観的に振り返り、反省点を洗い出したうえで、しっかりと改善を加えて次の活動につなげているものが目立ちました。

頭の中の計画だけでなく、実際に行動することで見えるものが増えています。毎年、進化している福島の高校生たちの社会活動。来年はどんな発表が見られるか、今からとても楽しみです。

ふくしま学びのネットワークは本県から新しい教育と学びの在り方を創造・発信する非営利団体で、学習法の指導や進路相談などを行っている。ホームページや公式ブログで活動を紹介している。

福島民報 2021年11月7日（日）

オリジナルのエコバッグを完成させた生徒



校章エコバッグ製作

ふたば未来
学園 高校生

原発事故で休校 続く5校を発信

広野町のふたば未来学園高の生徒は、東京電力福島第一原発事故で休校が続く浪江高、浪江高津島校、双葉高、双葉翔陽高、富岡高の五校について発信しようとして、校章や校名をあらわしたエコバッグを製作した。一日から楢



小野さん(右)の指導を受け、エコバッグを製作する生徒

葉町の道の駅ならはなどで販売している。同校はこれまで五校の校章をかたどったピンバッジや校名を焼き印した鉛筆を製作してきた。スペシャリスト系列商業の三年生九人が新たな商品としてエコバッグの製作を企画。富岡町のおたがいさま工房代表の小野耕一さんの指導を受け、藍染めのエコバッグ作りに取り組んだ。生徒は各校の校章や双葉郡の地図が入った型紙を使って、藍染めのエコバッグに藍の色を抜く特殊なものを塗った。最後にのりを洗い流し、エコバッグに白の校章や地図、校名を浮かび上がらせた。価格は千五百円(税

込み)で、道の駅ならはのほかに富岡町のふたばいんふおなどで販売している。長谷川優貴さん(三年)は「難しいけど、いきたい」と語った。

双葉町内を歩く学生ら

双葉歩いて現状学ぶ

神田外語大生が探求学習



東京都の神田外語大生が運営する大栄村のフリティッシュヒルズは十一月二十六日から同二十八日まで、同グループの神田外語大の学生が双葉町を歩き、復興の現状や課題を話し合う探求学習を催した。

葛尾村野行地区に約100年前から伝わる伝統芸能「宝財踊り」が東京電力福島第一原発事故による中断を経て、ふたば未来学園の高校生らの手でよみがえることになった。中心となったのは地区出身で、現在はいわき市に住む同高3年の半沢詩菜さん(18)。「古里の伝統を取り戻し、双葉郡を元気にしたい」と、所属する演劇部員らに呼び掛け、踊り手を確保した。葛尾の大人たちもサポートする「復活上演」は2月20日を予定している。

「ホーホー。ソーレー」。復活上演まで2カ月となった昨年12月20日、部員らは踊りの練習に励んでいた。宝財踊りは、住民が「棒振り」や「博徒」などの役に扮して舞い、地区の繁栄を祝う行事だ。部員らは、役に応じた道具を持ち、右足を上げては3歩進む独特の踊りを繰り返した。

野行地区では毎年10月の第4日曜日、住民らが集会所に集って踊りを楽しんだ。踊りは、集落の人々の絆を結び付ける役割を担っていた。しかし、原発事故による避難で住民は散り散りに。地区そのものも帰還困難区域になったため、踊りは後継者の不在による消滅の危機に立たされていた。

そのような中、詩菜さんは高校の教育プログラムの

野行の宝財踊り

高校生「取り戻す」

原発事故で消滅危機



「野行の宝財踊り」の復活に向け練習に励む詩菜さん(右)ら。ふたば未来学園高演劇部員たち＝昨年12月20日、広野町

葛尾村民ら助言、来月上演

一環で故郷について学んでいくうちに「古里を活性化させたい」と宝財踊りの復活を志し、仲間を募った。郡山市に避難する保存会長の半沢宣雄さん(68)も協力した。昨年10月、演劇部員らと会った宣雄さんは「若い感性で宝財踊りを生まれ変わらせてほしい」と呼び掛けた。伸び伸びと、詩菜さんは勇気づけられたという。

支援の輪も広がった。踊りの復活の場は、村の再興に取り組んでいる一般社団法人葛力創造舎が整えた。「若い人が踊りを復活させるなら」と、部員たちが江戸時代から現代に至る村民

Q 野行の宝財踊り 1915(大正4)年、野行地区を開墾した住民らにより始まった。昭和初期に最盛期を迎え、一時は途絶したが、有志が83年に保存会を設立して復活した。着物やわらじなどを身につけた10人の踊り手と2人の笛方で構成し、円を描くように1列となって踊る。葛尾村の無形民俗文化財となっている。

の暮らした文化を村内各地で演じ、最後に宝財踊りを披露する劇仕立てにしたかどうかとアドバイスした。劇の名前は踊りの掛け声に合わせ、「宝宝宝」とした。演出はタイ・バンコクを拠点に活動する演出家篠田千明さんが担当することが決まり、2月20日の本番に向け着実に準備が進められている。

野行地区は震災から11年を迎える今春、特定復興再生拠点区域で避難指示が解除され、ようやく復興のスタートラインに立つ。同法人の下枝浩徳代表理事(36)は「葛尾の記憶を後世につないでいきたい」と力を込める。詩菜さんは「楽しんで踊りたい。多くの人に見てほしい」と期待に目を輝かせる。(渡辺晃平)

福島民友 2022年1月6日(木)

ふたば未来学園高 日本語、英語で金賞

全国グローバル探究発表会

全国の高校生が地域課題解決の取り組みを紹介する「全国高校グローバル探究オンライン発表会」が開かれ、広野町のふたば未来学園高のグループが日本語発表、英語発表の両部門で金賞に輝いた。

全国の文部科学省指定グローバル型地域協働推進校などから三十校が参加し、日本語発表、英語発表各部門で



日本語発表部門で金賞に輝いた木田さん（右）と宮迫さん

各校の代表が成果を発表した。一般社団法人 Global Academy of the 21st Centuryの岡本尚也代表理事らが、事前に各

校から提出された動画を審査し、部門ごとに金賞などを決めた。日本語発表部門では三年の木田晏奈さん



英語発表部門で金賞の（左から）菅波さん、渡辺さん、山内さん、森さん

（も）と宮迫柚果さん（ひ）のグループが金賞に入った。鉄不足によって生じる鉄欠乏性貧血

から「鉄たまごの可能性」に迫り、緻密な実験や具体的な提案を行ったことが評価された。

英語発表部門では三年の渡辺快さん（も）と菅波竜人さん（ひ）、森俊輔さん（も）、山内直さん（ひ）のグループが金賞・探究成果発表委員会特別賞を獲得した。若者に人気のゲーム「マイクラフト」を使い、将来の双葉郡の構想を3D空間上に表現した手法が面白いと評価された。

同校は昨年の日本語発表部門の金賞・文部科学省初中等教育局長賞の受賞に続き二年連続の金賞受賞。両部門で金賞を獲得したのは同校と山形東高の二校のみだった。

復興の課題 若者と共有



副読本の完成を報告する（右から）渡辺さん、佐川さん、吉田さん、斎藤さん

広野の高校生ら副読本

広野町のNPO法人ハッピに参加した高校生らが、原
子力ネットワークの本年度 発から出る放射性廃棄物の
復興を担う人材育成事業 処分の行方など本県復興の

核のごみ、廃炉問題の学び伝える

課題を題材にした副読本だ。「Shirumanabu 副読本では、最終処分場（知る学ぶ）」を作成した。の選定を巡り調査反対派の生徒たちは10日、同町で完 住民との向き合い方をテ
成報告会を開き「同じ世代 マに寿都町の片岡春雄町長
の仲間と学びの成果を共有 と対談した内容を掲載。高
校生の目線でも東京電力福島 第1、第2原発の現状や
副読本はB5判計36頁 今後の廃炉の課題について
冊を発行し、英訳版も約2 冊も解説している。
で、同NPOが約1万9千 完成報告会には、広野町
千冊作成した。今後、県内 のふたは未来学園高の渡辺
外の高校や海外の教育機関 空さん(18)、佐川生華さん
に配布し、授業などで活用 される予定。
人材育成事業は昨年7月 藤康洋さん(17)が参加。佐
から11月にかけて行われ、 川さんは一現地を訪れな
主に浜通りの高校生11人と れば分からない経験を副読
指導役を務めた本県ゆかり 本を通して伝えた」、斎
の大学生4人が参加。原発 藤さんは「復興について正
から出る高レベル放射性廃 しい知識を知ってもらっ
棄物(核のごみ)の最終処 つけになればと話した。
分場選定で第1段階の調査 副読本は、同NPOが2
を受け入れた北海道寿都町 017(平成29)年度から
や、国策の核燃料サイクル 5カ年計画で始めた人材育
政策を担う日本原燃(青森 成事業の各年度の参加生徒
県六ヶ所村)などを訪問し、 と共に毎年発行しており、
本県復興と深く関わるエネ 今回発行の第5号が最終号
ルギー政策について学ん となる。

福島民友 2022年2月11日(金)

国際高校生放射線防護ワークショップ 2021 Radiation Protection Workshop in Fukushima

福島の高校生が

1/23 福島市 キョウウグループ テルサホール(福島テルサ) 発表会

安積高 「国際高校生放射線防護ワークショップ」

研修の中で感じた多くの方々に伝えたい活動を紹介する。近郊の地域づくりに取り組むNPO法人「ハッピーロードネット」。東日本大震災後、子どもたちに放射線教育を肌で感じてもらいたいとチェルノブイリ原発事故の被害を受けたウクライナやペラルーンなど海外研修を実施した。震災前から高校生たちの意見が始まった、30年後の故郷に遊ぶふくしま浜街遊覧プロジェクトも進めている。2021年3月までに浜通りを縦断する国道6号線沿いに約12,000本の桜の木を植樹。地域を良くしたいと活動する人たちのあがきで福島県は奇実に復興し、魅力ある県になっている。

震災後の活動が特徴的だった飯沼村。どの自治体も難色を示していた。除染こみを模倣する「災害-除染廃棄物処理施設」の設置と「除去土壌の再生利用実証事業」の実施を促した。近隣自治体に対する震災での避難受け入れへの感謝、復興全体への関与が根拠にあった。村の理念「ままでの心」は震災復興、今後の災害対応への参考になる。

ふたば未来学園高 「高校生という視点、ふたば未来学園生という視点から」

震災と深いつながりを持つふたば未来学園高の生徒が福島県内についてどのような知識を持っているか、2年生を対象にアンケートを実施した。処理水の「安全性」「海洋放出」や「風評被害」などの項目について「ニュースなどで聞いたことがあるが詳しくは知らない」割合が高く、学校は社会の縮図と考えたと福島県の問題の知識や関心のなさは思った以上に深刻な状況だと感じた。

合わせて、2年生(2016年度入学)から5年生(2019年度入学)までの課題意識をテキストマイニングで分析した。文字が大きいほどその言葉の出現率が多いことが分り、重要性を図ることができる。2年生は「東日本大震災」「災害」に関するワードが多かったが、5年生には見られなくなった。学業の盛り立ちや独立した意識を知る機会が段々と少なくなってきたのではないかと、ワークショップを通して情報発信の大切さを強く実感した。正しいという観念の払拭、分かりやすい情報の提示を意識していきたい。



発表会に参加した生徒

1/5 宮岡町 大熊町 双葉町 東京電力廃炉資料館、東京電力福島第一原子力発電所 廃炉作業進む 東電福島第一原発見学

宮岡町、大熊町、双葉町、高野町の学生が、東京電力福島第一原子力発電所を見学し、廃炉作業の進捗を確認した。

1/23 福島市 キョウウグループ テルサホール(福島テルサ) 発表会

安積高 「国際高校生放射線防護ワークショップ」

研修の中で感じた多くの方々に伝えたい活動を紹介する。近郊の地域づくりに取り組むNPO法人「ハッピーロードネット」。東日本大震災後、子どもたちに放射線教育を肌で感じてもらいたいとチェルノブイリ原発事故の被害を受けたウクライナやペラルーンなど海外研修を実施した。震災前から高校生たちの意見が始まった、30年後の故郷に遊ぶふくしま浜街遊覧プロジェクトも進めている。2021年3月までに浜通りを縦断する国道6号線沿いに約12,000本の桜の木を植樹。地域を良くしたいと活動する人たちのあがきで福島県は奇実に復興し、魅力ある県になっている。

震災後の活動が特徴的だった飯沼村。どの自治体も難色を示していた。除染こみを模倣する「災害-除染廃棄物処理施設」の設置と「除去土壌の再生利用実証事業」の実施を促した。近隣自治体に対する震災での避難受け入れへの感謝、復興全体への関与が根拠にあった。村の理念「ままでの心」は震災復興、今後の災害対応への参考になる。

ふたば未来学園高 「高校生という視点、ふたば未来学園生という視点から」

震災と深いつながりを持つふたば未来学園高の生徒が福島県内についてどのような知識を持っているか、2年生を対象にアンケートを実施した。処理水の「安全性」「海洋放出」や「風評被害」などの項目について「ニュースなどで聞いたことがあるが詳しくは知らない」割合が高く、学校は社会の縮図と考えたと福島県の問題の知識や関心のなさは思った以上に深刻な状況だと感じた。

合わせて、2年生(2016年度入学)から5年生(2019年度入学)までの課題意識をテキストマイニングで分析した。文字が大きいほどその言葉の出現率が多いことが分り、重要性を図ることができる。2年生は「東日本大震災」「災害」に関するワードが多かったが、5年生には見られなくなった。学業の盛り立ちや独立した意識を知る機会が段々と少なくなってきたのではないかと、ワークショップを通して情報発信の大切さを強く実感した。正しいという観念の払拭、分かりやすい情報の提示を意識していきたい。

高校生が広野に光



町内に設置したイルミネーションを囲みながら談笑する
(左から)鈴木さん、西間木さん、貝沼さん、中島さん

「どうしたら取り組みを知ってもらえるかな」「回覧板にアンケート入れてみたらどうだろう」。2月下旬の休日、広野町のふたば未来学園高を訪れると、熱い議論を交わす生徒たちの姿があった。議論の中心にいるのは、生徒会長の中島一葉さん(17)だ。東日本大震災から間もなく11年となるが、まだ町内の街灯は少ない。中島さんは「町と住民の心を明るくしたい」と考え、通学路にイルミネーションを設置するプロジェクトを考えた。その思いに賛同した

2年の鈴木真さん(17)、貝沼秀基さん(17)、西間木健太さん(17)とともに、1月末から実際に点灯を始めた。

4人は取材した時、2月末まで点灯期間をさらに延長し、より良いものにしてと意見を交わしていた。ホワイトボードに課題を次々と書き出す。「イルミネーションのそばに看板も設置したいよね。ふたば未来の生徒がやって分かるように」「せっかくだったら新入生にも見てほしいよね」。2時間経っても、アイデア

ふたば未来生 熱い議論

が尽きることはなかった。

ふたば未来学園高には、原子力防災や再生可能エネルギーなど興味があるテーマを選び、自分たちで地域課題の解決を考える「探究ゼミ」の時間がある。生徒たちはゼミで学んだことを生かし、イルミネーションに太陽光発電を活用するなど、環境に配慮した取り組みにこだわった。「再エネで広野町に彩りを」がテーマになっている。

話し合いが一段落すると、イルミネーションの設置場所まで案内してくれた。ハートの形や円すいの置物に電飾を巻き付けて作ったという。「これ全部です」と、イルミネーションを指さし、興奮気味に話す。

生徒たちの情熱を感じるとともに、ふと考えた。自分の高校生活を振り返ると、これまで地域のことを考えて行動したことは、ついぞなかった。生徒たちに理由を聞いてみた。中島さんは「せっかくだここに入学したのですから。地域を巻き込んで何か成し遂げたいんです」と目を輝かせて答えた。「自分もすっかりしなければ」と刺激を受けた。

帰りの道、浜通りを南北につなぐ国道6号を車で走りながら、復興途上の街並みを眺めた。「変革者たれ」という教育方針で学んだ生徒たちが、大人たちに続き前例のない分野が多い本県の復興を築いていくと確信した。

(相双支社・斎藤駿)

ゼミから広がる課題解決

福島民友 2022年3月5日(金)

双葉の6号国道に花植栽

ハッピーロードネット 高校生らが協力

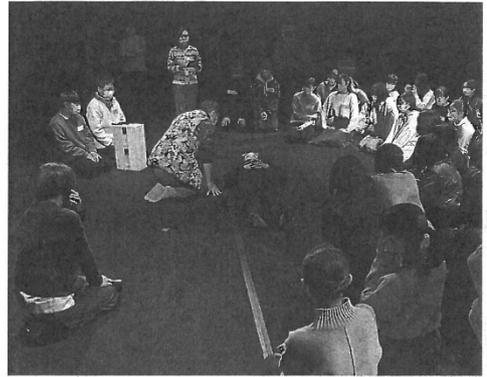


花壇にヒオオろを植栽する生徒

広野町のNPO法人ハッピーロードネットは十八日、東京電力福島第一原発事故で全町避難が続く双葉町の六号国道沿いの花壇で植栽活動を行った。南相馬市の相馬農高と広野町のふたば未来学園高校の生徒らが参加し、地域を明るくしようと協力をこめて汗を流した。

花壇は双葉厚生病院入り口交差点にあり、原発事故発生前は双葉高生が花苗を植えていた。町民を元気づけた。同法人が二〇一七(平成二十九)年に植栽を再開した。植栽には両校の生徒と前田建設工業の社員ら合わせて約六十人が参加した。相馬農高の生徒が今年七月から育ててきたヒオオろの苗約四千株を植えた。生徒は、六号国道を通る人に喜んでもらうようと、笑顔のマークができるように苗を配置し、丁寧に土を掛けしていた。

福島民報 2021年10月21日(木)



演劇を通して交流した両校の生徒ら

埼玉の高校生と演劇

ふたば未来学園 高校生

埼玉県加須市の不動岡高のスタディーツア「ふくしま学宿」は二十六、二十七の両日、双葉郡内で開かれ、広野町のふたば未来学園高演劇部の生徒らとの交流を楽しんだ。東日本大震災と東京電力福島第一原発事故

の被災地の現状に理解を深めようと毎年実施している。一、二年生二十七人が参加した。生徒は二十六日、双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館などを見て回った。二十七日には、ふたば未来学園高を訪れ、研修の成

果を五分間の劇にまとめて発表した。発表では、不動岡高の生徒が七つの班に分かれ、演劇部の生徒と意見を出し合いながら劇にまとめた。生徒はコミュニケーションの大切さや復興の光と影など、研修を通して印象に残ったことをステージで掌々と表現していた。研修には、いわき市で地域包括ケアに取り

組む「igoku(いごく)」が協力した。若松のNPOにパソコンを寄贈 県信用組合協会 県信用組合協会(江尻次郎会長)は二十二日、障書見の「放課後等デイサービス事業」を行っている会津若松市のNPO法人ハッピーロードに、パソコン

福島民報 2021年12月30日(木)

ふたば未来高と北海道、高知の高校 コラボで特産品紹介

道の駅ならはで販売会

広野町のふたば未来学園高は二十三日、福島県道の駅ならはで、北海道や高知県の



来店者から求められる商品をPRした。右の画面では生徒がオンラインで商品をPRした。

高校と連携した三道県コラボ特産品販売会を開いた。県外の

各高校と道の駅ならはをオンラインで結び、生徒が画面越しに商品を紹介しながら特産品を販売した。販売会はコロナ禍の中で、各高校が連携してそれぞれの地域を盛り上げようと企画した。ふたば未来学園高と、北海道の浦河高、斜里高、高知県の佐川高の計四校が参加した。ふたば未来学園高の

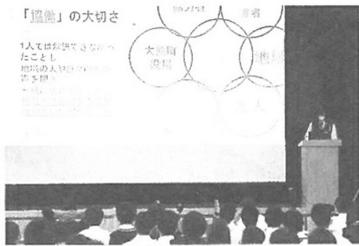
スペインリスト系列菓業の生徒四人が販売を担当。広野町産ミカンを使ったどら焼きや北海道産イチゴのパウンドケーキ、高知県産ユズの飲料など四高校が開発した商品を売り場に並べた。来店者は、売り場に設置された画面を通してお薦めの特産品を聞きながら、次々に商品を買って求めた。

福島民報 2021年 月 日()

広野

地域課題を研究 ふたば未来 成果発表会

「協働」の大切さ



未来創造探究の学びの
成果を紹介した発表会

分科会に続いて全体会を開き、全校生徒と教職員が出席した。大学教授や復興支援団体の代表者を審査員に迎え、選考を勝ち抜いた八つのプロジェクトの発表を行った。

生徒は大熊町のイチゴを使ったパン作りや、広野町特産のバナナの包装を削減する取り組みなど、実践を通して得られた成果を紹介。審査員からの質問に堂々と答えていた。

同校は独自の授業として「未来創造探究」を実施し、原子力防災探究やメディア・コミュニケーション探究など六つのゼミに分かれて活動している。高校三年生が個人やグループで一年余り研究を進めてきた成果発表の場として開いた。

広野町のふたば未来学園中・高の「未来創造探究」生徒研究発表会は二十五日、同校で開かれ、生徒が地域の課題解決に取り組んできた成果を発表した。

福島民報 2021年9月28日(火)

い 確 実 で 1 週 間

門馬氏、立民系市議らが桜井氏をそれぞれ支持する。

原発事故に伴う住民避難を考慮して前回に続き、告示から投票前日までの選挙期間を10日間に延長して行われる。

昨年12月1日現在の南相馬市の有権者数は5万1392人(男性2万5702人、女性2万5690人)。

風評被害防止へアイデア

県内高校生ワークショップ



処理水に対する疑問や風評被害を防ぐアイデアなどを話し合う生徒

福島、安積、ふたば未来学園の3高校の生徒と教職員は5日、東京電力福島第

1原発を訪れ、廃炉作業の現場などを見学した。見学後に「国際高校生放射線防

護ワークショップを開き、廃炉や処理水に関する疑問を整理して風評被害を防ぐアイデアなどを話し合った。

一行は東京電力廃炉資料館を見学し、資源エネルギー庁で廃炉や処理水対策を担う木野正登参事官の講話を聞いた。その後、第1原発構内の高台から、廃炉作業が進む1、4号機を眺めた。

ワークショップには生徒や木野氏ら約30人が参加。各グループに分かれて意見を交わした。生徒は「全ての処理水の放出にかかる期間」について木野氏に質問したり「義務教育に放射線学習を取り入れる」など風評対策を発表したりした。

安積高2年の高津未彩さん(17)は「初めて第1原発を見学した。事故当時のイメージのままでしたが、現状を知ることができて良かった」と話した。生徒らは今後、23日に福島市で今回

の成果をまとめる。5月にはオンラインで、フランス

今年の飛躍誓う

いわきで新春交歓会

いわき市といわき商工会議所の実行委員会は5日、同市で新春市民交歓会を開き、今年の飛躍を誓った。

2年ぶりの開催で約350人が出席。内田広之市長が「市民と課題を共有しながら市勢発展に尽くす」、小野栄重会頭が「行政と連



新春市民交歓会で話聞きを行う内田市長(右から2人目)

の高校生らへ廃炉作業の現状などを発表する。

携しながら地域一体となってコロナを乗り越える」とそれぞれあいさつした。

森雅子参院議員、内堀雅雄知事が祝辞を述べ、サツカ1J3に参入するいわきFCの八百智社長と村主博正新監督が今季の応援を呼び掛けた。内田市長や小野会頭、遠藤智広野町長、大宰堂之市議会議長らが鏡開きを行った。

新型コロナウイルス感染防止対策のため、参加は1事業所2人とし、事前申し込みに限った。

働きやすい職場へ

県労働福祉協、連合福島

県労働福祉協議会と連合福島は5日、福島市で新春交歓会を開き、労働者が働きやすい職場づくりに向けた決意を新たにした。

県労働協・連合福島の今野幸夫会長が主催者あいさつ

但馬日記

第33回 「普通の町」幻想を 超えて

— 福島の矛盾、豊岡の苦悩 —

平田オリザ

ひらた・おとさ 劇作家・演出家
劇団「豊田」主宰
一九六〇年 東京生まれ

ふたば未来学園高校の演劇学習成果発表会。
撮影＝齋藤夏菜子

連載

「年内には一度降って、それが溶けて、一月から本格的な冬が来る」と毎年のように聞かされ、やはり今年この原稿を書いているのは二月の中旬も同じようになった。二月十七日は朝から雷まじりのみぞれと強風で、夕刻か

に寸劇を創り、クラス代表、学年代表を選んできて、さらにそれを英語劇にして国連で福島のいまを伝えるような試みもしてきた。

当初は私が直接授業を受け持っていたが、いまは私の後輩たちがその指導に当たっている。もちろん「復興パンザイ」福島は頑張っている」といった作品を創るわけではない。福島が抱える苦悩、矛盾を率直にあらわす作品が並ぶ。

■ 演劇で災禍の記憶を繋ぐ

開学してからの一、二年は震災の記憶が生々しく、それを演劇にすること、フィクションとして表現することに抵抗を示す生徒もいた。それでも福島を見つめ、それを伝えることの意味とともに考える日々だった。

ここ数年の課題は、震災の体験や記憶がまだら状になってきたことだ。避難生活がまだまだ深い心の傷となつて残っている生徒もいれば、あまり記憶

にはない、あるいは実際に避難期間が短かった生徒もいる。さらに各地にバラバラになっていたトップアスリートコースが三年前の新校舎の完成とともに集約され、福島とは縁もゆかりもない生徒たちが一定数入学するようになった。

■ 福島県立ふたば未来学園を再訪

久しぶりに福島を訪れた。県内の大

にはない、あるいは実際に避難期間が短かった生徒もいる。さらに各地にバラバラになっていたトップアスリートコースが三年前の新校舎の完成とともに集約され、福島とは縁もゆかりもない生徒たちが一定数入学するようになった。

ふたば未来学園は双葉郡にあった五つの高校（そのほとんどが風向きの関係で放射線量の高い地域にあり休校を余儀なくされた）を統合する形でできた新設校だ。そのかつての五校の中には、バドミントンの桃田選手の母校富岡高校もあり、いまも伝統を受け継ぐ形で全国から日本代表クラスの生徒たちが集まっている。

そして、いよいよ震災の記憶がほとんどない世代が入学してくる。大人の一〇年と、一五歳にとつての一〇年は大きく異なる。震災の記憶のないあるいは薄い高校生たちにとって、原発事故とその後の廃炉処理は文字通りの

きな期待と、見せかけの復興のシンボルにされるのではないかという疑心暗鬼の中でスタートした県立ふたば未来学園も、開学から七年目を迎えた。

関西に居を移したことは自分の仕事上のことだから仕方ないのだが、一つだけ後悔があるとすれば東北から距離が遠くなってしまった点だ。震災後、多い年はほぼ毎月福島に通っていたのだが、いまはそれも難しい。今回も、大学の仕事が終わってから午後六時に但馬空港を出る便で東京に入り、さらに翌日早朝に列車で福島へと向かった。一日中、高校生たちの演劇発表を見て、今度は五時台の列車で（常磐線が全通となり一部の特急が広野町に停車するようになった）東京に戻る。翌朝の飛行機でまた但馬に帰って、その足で大学に出勤した。要するに二泊三日の行程だ。

ふたば未来学園では、高校一年生が全員、インタビューを元に地域課題を演劇にする授業を行っている。班ごと

不条理であり、しかし彼らは否が応でも、そこと向き合っていかなければならない。指導する教員は、また新たな苦勞を抱える。

■ 「処理水」がもたらす苦悩

さらに、政府の目論見通りなら、今年入学してきた新入生が三年になったときに、ALPS処理水の海洋放出が始まる。福島は再度、苦渋の選択を迫られている。

今年の演劇発表でも、この処理水放出問題を扱った班がいくつかあった。例えばある班は東電の实在の広報担当の方の話を軸に展開する。その女性は震災の時に高校三年生で東電への就職が決まっていた。「被災者が加害者になる」（本人の言葉）と迷った末に、やはりそのまま就職をして現在は福島復興本社に勤務し、海洋放出について地元理解を求めめるための仕事を進めている。

もちろん高校生たちは、処理水の海洋放出問題について、賛成、反対双方

世界 SEKAI / 2022.2

の主張を取材して劇を創る。その矛盾、その不条理を、どこまで解像度を上げて演劇にできるかが問われる。

■「普通の町」が目標でいいのか

思いのほか、福島についての記述が長くなってしまった。二〇二二年四月の豊岡市長選の顛末の続きを書こう。

市長選挙の最中、候補者の公開討論会において、司会者からの「豊岡をどんな町にしたいですか?」という問いかけに、関根現市長は「普通の町」と答えた。この言葉は豊岡財界の若手経営者たちをもっとも落胆させた。

しかし一方で、この言葉はもしかすると多くの人の共感を生んだかもしれない。「演劇の町」なんてなくていい。「コノトリの町」でさえなくていい。日々の生活を守ってほしい。その願いはまっとうで切実なものだろう。

ただ、いまの日本で「普通の町」を屈指することは、そのまま衰退を意味してしまう。

この点は、実はきわめて本質的な問題だ。

安倍政権が提唱した地方創生政策の根幹は地域間の競争だった。地方自治体に人口減少対策のアイデアを出させ、それを競わせることで補助金の配分を決める。全国一律の救済ではなく、努力した自治体だけが生き残る、まさに「自助」を中心としたシステムだ。

豊岡市はその地方創生政策の優等生として、コノトリの再生に象徴される環境政策、演劇を中心とした文化政策、城崎温泉を中心とした観光政策、さらにジェンターギャップの解消などを旗印に多くの予算を獲得してきた。

当然、この地方創生政策自体に批判はあるだろう。地方自治体を競わせたところで結局はゼロサムゲーム、あるいは若者世代の取り合いになるだけで、国家全体としての人口減少対策にはならないのではないかという説もある。あるいは「誰もが豊岡になれるわけ

はない」という、消極的だが現実的な見方も根強い。

だが少なくとも、各自治体が少子化対策や新しいまちづくりのアイデアを出し合うこと自体は間違っていないだろう。またそこに、それなりの補助金を付けることも、国家の政策として大きな誤りとは言えないのではないか。人間はそれほど賢くはなく、平等、一律の「補助」は意情を招くのも事実だろうから。

これまでの連載で見えてきたように、昨年四月の豊岡市長選挙の結果は、はからずも日本の地方自治政策が抱える矛盾や混沌を浮き彫りにするものとなった。本気で地方創生に取り組み、それが成功の兆しを見せ、若い世代やアーティストたちの移住が始まった途端に地域が拒否反応を見せた。

しかしその拒否反応は、市全体のものではない。一五〇〇票差という微妙な数字だけが残った。

令和2年度指定
地域との協働による高等学校教育改革推進事業
【グローバル型】
研究開発実施報告書
第2年次

令和4年3月31日

編集・発行 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
校長名 柳沼英樹
住所 〒979-0408
福島県双葉郡広野町中央台1丁目6番地3
電話番号 0240-23-6825
FAX番号 0240-23-6828

印刷・製本 八幡印刷株式会社
住所 〒970-8026
福島県いわき市平字田町82-13
電話番号 0246-23-1471
FAX番号 0246-23-1473